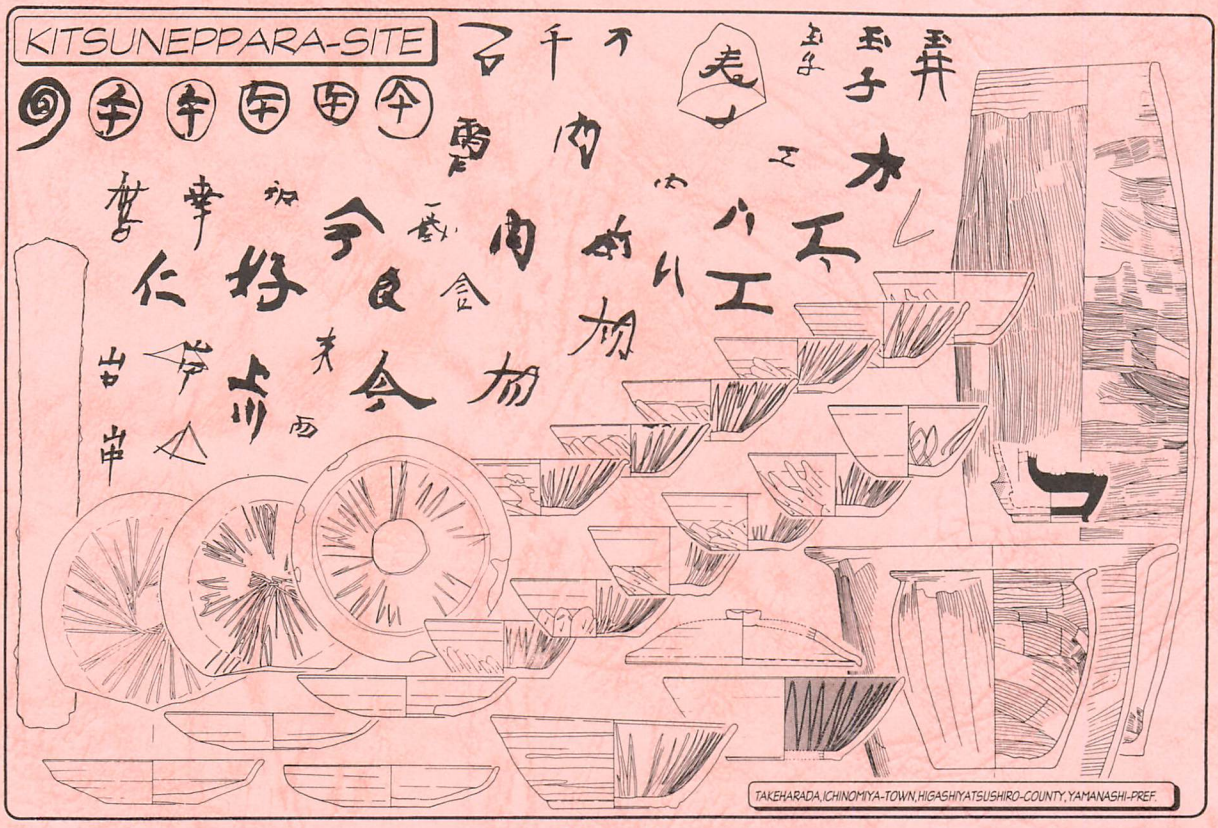
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第120集



狐原遺跡

―山梨県森林公園 金川の森建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書―

1996.3

山梨県教育委員会
山梨県林務部

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第120集

狐原遺跡

ー山梨県森林公園 金川の森建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書ー

1996.3

山梨県教育委員会
山梨県林務部

狐原遺跡出土の墨書土器・刻書土器

狐原遺跡　調査終了後全景【北西→】

序

本書は、山梨県林務部による「山梨県森林公園　金川の森」の建設のために移転された県立園芸高等学校農業機械実習場の建設に伴い発掘調査が実施された狐原遺跡の調査成果をまとめたものであります。

本遺跡の所在する山梨県東八代郡一宮町は、甲府盆地の東端部に位置しており金川扇状地を中心に古くから遺跡分布の濃密な地域であることが知られております。特にそれらの遺跡のうちでも、古墳時代から平安時代にかけての遺跡には山梨県を代表するようなものも多く、県内有数の後期群集墳である四ッ塚古墳群や奈良・平安期の甲斐国分寺・国分尼寺などを挙げることができます。

このような地域で行なわれた狐原遺跡の発掘調査は1994年4月27日から同年10月31日までの約6ヶ月間を要し、約8,000㎡におよぶ面積を全面調査いたしました。この発掘調査の成果はその後の整理調査期間を経ましてここに報告されるわけですが、その概要は以下のとおりであります。

調査区内から検出された遺構は平安時代の竪穴住居址15軒・土坑25基・墓壙2基・溝1条・炭化物集中1箇所・単独出土の壺1箇所であり、短期間に営まれた小規模な集落のほぼ全域を調査することができました。また、この集落の人々の暮らしの中で用いられた遺物も多数検出することができました。これらの遺構・遺物のうちでも注目されますのは、墨書土器の豊富さとその内容であります。特に平安時代の第9号竪穴住居址から検出されました「玉井」の墨書につきましては、甲斐国の古代郷名であります「山梨東郡玉井郷」を表していることはほぼ間違いなく、近隣の一宮町大原遺跡・松原遺跡出土の事例と併せまして、今後の古代郷配置研究等に資するところが大きいものと思われます。墨書にはこの他に「玉子」「好」「関」「午」「山中」「上川」「末」「今」「金」「千」「万」「内」「加」「鷹」「工」「有」「仁」「幸」「夷」「西」などがあり、その他にも判読不明・破片資料・線刻土器などを合わせますと222点が一遺跡から検出されたこととなります。破片資料も1点として計上しておりますので、実際の個体数222点より少ないものとは考えられますが、それにしましても15軒という竪穴住居址数の集落規模に比較して墨書土器の多さが目立つ事例となりました。今後の墨書土器あるいは平安時代集落等の研究に資するところはまた大きいものと思われます。

また、この他にも平安時代の所産が推測される墓壙、「墓誌状鉄製品」の類似資料を伴う炭化物集中など山梨県内では稀有な事例も多々含む遺跡内容となっております。

また、本書には充分にその成果が生かしきれていない観もありますが、本遺跡から出土しました総数41,368点（遺構内6,988点・遺構外34,380点）の遺物はそのほぼ全てについての出土位置データ（平面分布・垂直分布）を記録しております。この点についても今後の調査研究に活用されることが期待されます。

以上のように、様々な内容を包括する狐原遺跡でありますが、今後に残されまた提起される研究課題も数多くあります。本報告書を多くの方々に調査研究資料として、あるいは地域の歴史を探る手掛かりとしてご活用いただければ、これに勝る喜びはありません。

文末ではありますが、発掘調査から報告書刊行に至るまでご支援・ご協力を賜りました関係機関各位、並びに調査に従事していただいた皆様に厚く御礼申し上げ、序とさせていただきます。

1996年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　　大　塚　初　重

例　言

1．本書は、山梨県東八代郡一宮町字竹原田1070番地他に所在する狐原遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は山梨県林務部による「山梨県森林公園　金川の森」の建設のために移転された県立園芸高等学校農業機械実習場の建設に伴うものであり、山梨県教育委員会が委託を受けて実施したものである。
3．発掘調査および整理調査は山梨県埋蔵文化財センター（東八代郡中道町所在）が担当した。
4．本遺跡に隣接する東八代郡石和町中川にも同一名称の「狐原遺跡」が所在する（石和町教育委員会が1990年に調査）。混同を避けるべく石和町側を「中川狐原遺跡」と呼称し、本遺跡を「竹原田狐原遺跡」と呼称する場合もあるが、本書では「狐原遺跡」として記述した。
5．本書の編集および付編以外の執筆は森原明廣・宮里学が担当した。執筆分担は第Ⅰ～Ⅲ章が宮里、第Ⅳ～Ⅵ章が森原である。
6．写真撮影は発掘調査（遺構）では森原・宮里が、整理調査（遺物）では森原が担当した。
7．発掘調査時の基準点測量（国土座標測量）は（株）サンポー・コンサルに委託した。
8．出土した遺物についての分析業務を下記の方々に委託し、その成果として玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。
・第２号竪穴住居址出土の土師器（甲斐型土器の坏および甕）の胎土分析業務
「狐原遺跡出土甲斐型土器の胎土分析」　河西学氏（帝京大学山梨文化財研究所）
・第１・２号墓壙出土の人骨資料の分析業務
「狐原遺跡出土の人骨」　茂原信生氏（京都大学霊長類研究所）
9．狐原遺跡の資料（遺物・図面・写真等の諸記録）は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管している。
10．発掘調査・整理調査に際して、下記の方々からご協力・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
一宮町役場、一宮町教育委員会、帝京大学山梨文化財研究所、山梨県立園芸高等学校、山梨県考古学協会、甲斐丘陵考古学研究会、磯貝正義（山梨大学名誉教授）・鈴木靖民（國學院大學）・平川南（国立歴史民俗博物館）・猪股喜彦・瀬田正明（一宮町教育委員会）、小淵忠秋（石和町教育委員会）・山下孝司（韮崎市教育委員会）、林部光（中道町教育委員会）、望月和幸（御坂町教育委員会）・谷口一夫・萩原三雄・鈴木稔・畑大介・宮澤公雄・平野修・櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）、原正人（駿台甲府高等学校）・田尾誠敏（東海大学）

（順不同・敬称略）

11．狐原遺跡の発掘調査・整理調査に関わる組織は下記のとおりである。
調査主体　山梨県教育委員会
調査担当　山梨県埋蔵文化財センター（文化財主事　森原明廣・文化財主事　宮里学）
調査員　森本陽二郎（奈良大学卒）
作業員（発掘調査）
須田勝、須田重則、嶋田礼子、松永勇、志茂博、竹内孝治郎、赤岡敦、杉山秀樹、山下薫、山下いよ子、小池孝男、小池昭江、斉藤重信、古屋栄子、西脇誠、谷三智代、赤尾邦夫、赤尾とら子、宮川とも゛、下倉茂雄、杉原武幸、窪田園江、小林祐子、功刀進、上嶋十郎、外川美枝、高橋季弥栄、武田きく江、関口愛子、山下哲、花形正男、庄司恵子、桑原をぎん、向井袈裟春、芦沢津屋子、河野義雄、卯月秋子、斉藤多喜子、長谷川紀子、佐野由美子、池谷和代子、山崎せいか、宮久保朝乃、北村春美、石山伝次、佐藤たか子、高橋孝子、手塚房子、古屋栄子、菊島幸男、杉本義一、網野晴仁、佐野賢三、一瀬正樹、宮川和利、小林寛明、塩島理恵、小林武、永田勤昭、斉藤多喜子、小林チエ子、小林正和、赤尾文子、橘田佳仁、駒田雄飛、長田淳、駒田史織、深沢江美、丸山み奈、宮川とも子、斉藤美樹、小林由美子、武井政行、山本高行、広瀬幸子、横森勲、小林進、飯窪渉、鷹野通男、宮崎総子、吉田、森下京子、石山礼子、中村敏雄、原君子、川村信吾
作業員（発掘調査および整理調査）
中川美千子、市川祥子、岩崎満佐子、林紀子、熊谷真樹子、浅野由美子、菊島慶子、北村さつき、小林美紀
作業員（整理調査）
長田久江、長田てる美、山崎聖子、石原沙織、内藤由紀子、塩島冨美子、古屋茂子、森本通久、長田富子、渡辺礼子、小林としみ、長田奈代子、村松重夫、中込志ず江、小林愉

（順不同・敬称略）

凡例

1．遺構番号は発見順に付したものであり、時期・位置等とは無関係である。
　なお、発掘調査時の呼称・遺物等の注記は合致するが、遺物の報告ナンバーは異なるため「出土遺物監査表（Tab.1～10)」内に示してある。

2．遺構図中のスクリーントーンの用例は下記のとおりである。
　竪穴住居址セクション図中のスクリーントーン・・・・・貼床を示す。
　竪穴住居址セクション・平面図中のスクリーントーン・・・・・砂礫層を示す。
　竪穴住居址セクション・平面図中のスクリーントーン・・・・・地山層を示す。
　竪穴住居址カマド平面図中のスクリーントーン・・・・・焼土の範囲を示す。
　その他のスクリーントーン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図中に用例を示したとおりである。

3．遺構図（遺物出土状況図）中のドットマークにお用例は下記のとおりである。
　竪穴住居址平面用のマーク●・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・坏の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク△・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・皿の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク▲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・蓋の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク◎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・台付坏の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク■・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・甕の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク□・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・置カマドの出土点
　竪穴住居址平面用のマーク□・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・壺の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク△・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土師器・鉢の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク☆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・須恵器の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク★・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・灰釉陶器の出土点
　竪穴住居址平面用のマーク◆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・鉄器の出土点

4．遺構図中の断面図脇等にある数値は標高を示す。

5．遺構図・全体図などに示した方位（N）は国土座標による真北である。

6．遺構図の縮尺は下記のとおりである。

竪穴住居址・・・・・・・1／60	竪穴住居址遺物出土状況図・・・1／60	カマド・・・・・・・1／30
土坑・・・・・・・・・・1／60	墓壙・一部の土坑・・・・・・・1／30	溝・・・・・・・・・1／250
溝（遺物出土状況）・・・1／60	炭化物集中・・・・・・・・・・1／30	O－14壺・・・・・・1／15

7．遺物図中のスクリーントーンの用例は下記のとおりである。
　スクリーントーン・・・・内面黒色処理を示す。
　スクリーントーン・・・・須恵器の断面を示す。
　スクリーントーン・・・・釉の掛かる範囲を示す。
　スクリーントーン・・・・灰釉陶器の断面を示す。

8．遺物図の縮尺はすべて1／3に統一した。

9．土器の実測図は断面を右側に、正面を左側に示した。なお、図中の矢印（→）は削りの方向を示す。

10．土器の断面図・拓本図は基本的に左側に正面を開いた示した。なお、底部外側は下側に、底部内面は上側に示し、蓋などもそれに準じた。

11．土色（覆土・土器胎土等）の説明には『標準土色帖（1990年版)』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所票監修）に基づいて記述した。特に「出土遺物観察表（Tab.1～10)」中の色調欄の記号はこの『標準土色帖』の記載に合致させている。

12．その他の図版等に用いたスクリーントーン・ドットマーク等の用例は図中に示したとおりである。

13．「出土遺物観察表（Tab.1～10)」中の表記方法は欄外に示したとおりであるが、墨書等の記載欄については、判読できた文字・記号は活字等で表したが、明確でないものについては「○か」として可能性を示した。また、判読不明なものについては1文字単位で「□」で表わした。

14．第Ⅳ章第1節中に示した「竪穴住居址データ」についての注意点は下記のとおりである。

・面積の表記については遺構面積（上端面積）を計算により算出したものである。なお、遺構全体が検出できなかったものや重複により算出できなかったものについては、（　）内に推定の数値を示した。

・遺物点数の表記については、大小に関わらない破片点数を示した。なお、煮炊系としたものは甕・置カマド・便宜的に含めた壺であり、供膳系としたものは坏・台付坏・皿・鉢・蓋である。

・重量の表記については、各々の総重量を示し、図示できなかった資料も含めた。各器種の平均的な器体重量のデータと照らし合わすことによって、出土土器のおよその個体数が換算できるものと思われ示したものである。

本文目次

序　文
例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・1 p
　第1節　経緯・・・・・・・・・・・・・・1 p
　第2節　調査の組織・・・・・・・・・・・1 p

第Ⅱ章　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・2 p
　第1節　自然的環境・・・・・・・・・・・2 p
　第2節　歴史的環境・・・・・・・・・・・3 p

第Ⅲ章　調査の方法と基本層位・・・・・・・・4 p
　第1節　試掘調査・・・・・・・・・・・・4 p
　第2節　Gridの設定と国土座標・・・・・5 p
　第3節　遺構調査の方法・・・・・・・・・5 p
　第4節　遺物の取り上げ方法・・・・・・6 p
　第5節　基本層位・・・・・・・・・・・・6 p

第Ⅳ章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・7 p
　第1節　遺構および遺構内出土遺物・・・7 p
　（1）竪穴住居址・・・・・・・・・・・・7 p
　　第1号竪穴住居址・・・・・・・・・7 p
　　第2号竪穴住居址・・・・・・・・・7 p
　　第3号竪穴住居址・・・・・・・・・8 p
　　第4号竪穴住居址・・・・・・・・・8 p
　　第5号竪穴住居址・・・・・・・・・9 p
　　第6号竪穴住居址・・・・・・・・・9 p
　　第7号竪穴住居址・・・・・・・・・10 p
　　第8号竪穴住居址・・・・・・・・・10 p
　　第9号竪穴住居址・・・・・・・・・11 p
　　第10号竪穴住居址・・・・・・・・・11 p
　　第11号竪穴住居址・・・・・・・・・12 p
　　第12号竪穴住居址・・・・・・・・・12 p
　　第13号竪穴住居址・・・・・・・・・12 p
　　第14号竪穴住居址・・・・・・・・・13 p
　　第15号竪穴住居址・・・・・・・・・13 p
　（2）土坑・・・・・・・・・・・・・・・14 p
　　第1号土坑～第25号土坑・・・・・14 p
　（3）墓壙・・・・・・・・・・・・・・・15 p
　　第1号墓壙・第2号墓壙・・・・・15 p
　（4）溝・・・・・・・・・・・・・・・・16 p
　　第1号溝・・・・・・・・・・・・・16 p
　（5）炭化物集中・・・・・・・・・・・16 p
　　J－7炭化物集中・・・・・・・・・15 p
　（6）単独出土の壺・・・・・・・・・・17 p
　　O－14壺・・・・・・・・・・・・・17 p
　第2節　遺構外出土の遺物・・・・・・・17 p
　（1）古墳時代・・・・・・・・・・・・17 p
　（2）平安時代・・・・・・・・・・・・17 p
　（3）その他・・・・・・・・・・・・・19 p

第Ⅴ章　若干の考察・・・・・・・・・・・・81 p
　第1節　遺物について・・・・・・・・・81 p
　（1）出土土器の年代的位置付け・・・・91 p
　　1）器種・・・・・・・・・・・・・81 p
　　2）坏・皿の検討・・・・・・・・・81 p
　　3）年代観について・・・・・・・・81 p
　（2）墨書土器について・・・・・・・・83 p
　　1）墨書される土器とその部位について・・・・・83 p
　　2）墨書土器の内容について・・・83 p
　第2節　遺構について・・・・・・・・・85 p
　（1）竪穴住居址の時期・変遷について・85 p
　　1）竪穴住居址の時期について・・85 p
　　2）遺構配置等を併せ見た集落構成の変遷について・・・86 p
　（2）その他の遺構について・・・・・・86 p
　　1）墓壙について・・・・・・・・86 p
　　2）鉄製品等を伴う炭化物集中について・・・・・86 p
　（3）狐原遺跡の総合的な変遷について・87 p
　（4）遺構分布と遺物分布の関係について87 p

第Ⅵ章　結語にかえて・・・・・・・・・・・・88 p

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・88 p

付編Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91 p

狐原遺跡出土甲斐型土器の胎土分析
河西　学（帝京大学山梨文化財研究所）

付編Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94 p
狐原遺跡出土の人骨
茂原信生（京都大学霊長類研究所）

図版（Fig.）目次

第Ⅱ章 遺跡の環境
Fig. 1　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・3 p
Fig. 2　旧土地利用図・・・・・・・・・・・・・4 p

第Ⅲ章 調査の方法と基本層位
Fig. 3　Grid配置図　・・・・・・・・・・・・・5 p
Fig. 4　基本層位図・・・・・・・・・・・・・・6 p

第Ⅳ章 発見された遺構と遺物【遺構】
Fig. 5　狐原遺跡全体図・・・・・・・・・・・20 p
Fig. 6　第1号・第2号竪穴住居址・・・・・・21 p
Fig. 7　第2号竪穴住居址・・・・・・・・・・22 p
Fig. 8　第3号竪穴住居址・・・・・・・・・・23 p
Fig. 9　第4号竪穴住居址・・・・・・・・・・24 p
Fig.10　第5号竪穴住居址・・・・・・・・・・25 p
Fig.11　第6号竪穴住居址・・・・・・・・・・26 p
Fig.12　第7号竪穴住居址・・・・・・・・・・27 p
Fig.13　第8号竪穴住居址・・・・・・・・・・28 p
Fig.14　第9号・第10号竪穴住居址・・・・・・29 p
Fig.15　第9号・第10号竪穴住居址・・・・・・30 p
Fig.16　第11号竪穴住居址・・・・・・・・・・31 p
Fig.17　第12号竪穴住居址・・・・・・・・・・32 p
Fig.18　第13号竪穴住居址・・・・・・・・・・33 p
Fig.19　第14号竪穴住居址・・・・・・・・・・34 p
Fig.20　第13号・第14号竪穴住居址・・・・・・35 p
Fig.21　第15号竪穴住居址・・・・・・・・・・36 p
Fig.22　第1～5・9・10・17・18号土坑・・・37 p

Fig.23　第12～16・19・21・22号土坑・・・・・38 p
Fig.24　第6～9・11・20号土坑・・・・・・・・39 p
Fig.25　第23～25号土坑／第1・2号墓壙・・・40 p
Fig.26　第1号溝・・・・・・・・・・・・・・・41 p
Fig.27　J－7炭化物集中・・・・・・・・・・・42 p
Fig.28　O－14壺・・・・・・・・・・・・・・・43 p

第Ⅳ章 発見された遺構と遺物【遺物】
Fig.29　遺構外出土遺物の分布状況1（坏・皿）・・・・・・44 p
Fig.30　遺構外出土遺物の分布状況2(甕ほか)・・・・・・44 p
Fig.31　第1号・第2号竪穴住居址出土遺物・・・45 p
Fig.32　第3号竪穴住居址出土遺物・・・・・・・46 p
Fig.33　第4号・第5号竪穴住居址出土遺物・・・47 p
Fig.34　第5号竪穴住居址出土遺物・・・・・・・48 p
Fig.35　第5号竪穴住居址出土遺物・・・・・・・49 p
Fig.36　第6号・第7号竪穴住居址出土遺物・・・50 p
Fig.37　第7号・第8号竪穴住居址出土遺物・・・51 p
Fig.38　第9号竪穴住居址出土遺物・・・・・・・52 p
Fig.39　第10～13号竪穴住居址出土遺物・・・・53 p
Fig.40　第13号竪穴住居址出土遺物・・・・・・・54 p
Fig.41　第14号竪穴住居址出土遺物・・・・・・・55 p
Fig.42　第14号・第15号竪穴住居址出土遺物・・56 p
Fig.43　第15号竪穴住居址／第1号溝出土遺物・・57 p
Fig.44　第1号溝／J－7炭化物集中出土遺物・・58 p
Fig.45　O－14壺出土遺物／遺構外出土遺物1・・59 p
Fig.46　遺構外出土遺物2・・・・・・・・・・・60 p
Fig.47　遺構外出土遺物3・・・・・・・・・・・61 p
Fig.48　遺構外出土遺物4・・・・・・・・・・・62 p
Fig.49　遺構外出土遺物5・・・・・・・・・・・63 p
Fig.50　遺構外出土遺物6・・・・・・・・・・・64 p
Fig.51　遺構外出土遺物7・・・・・・・・・・・65 p
Fig.52　遺構外出土遺物8・・・・・・・・・・・66 p
Fig.53　遺構外出土遺物9・・・・・・・・・・・67 p
Fig.54　遺構外出土遺物10・・・・・・・・・・・68 p
Fig.55　遺構外出土遺物11・・・・・・・・・・・69 p
Fig.56　遺構外出土遺物12・・・・・・・・・・・70 p

第Ⅴ章　若干の考察
Fig.57　坏・皿の変遷の概略・・・・・・・・・・81 p
Fig.58　土器編年案対比表・・・・・・・・・・・82 p
Fig.59　甲斐国の政・祀・道と狐原遺跡の位置関係・・・・・・・・・・・83 p
Fig.60　狐原遺跡における墨書土器・線刻土器の分布状況・・・・・85 p
Fig.61　狐原遺跡の変遷　・・・・・・・・・・・87 p

表（Tab.）目次

第Ⅳ章 発見された遺構と遺物【遺物】
Tab.1　出土遺物観察表1【1住-1～5住-15】・・・71 p
Tab.2　出土遺物観察表2【5住-16～9住-3】・・・72 p
Tab.3　出土遺物観察表3【9住-4～13住-25】・・73 p
Tab.4　出土遺物観察表4【14住-1～外-6】・・・74 p
Tab.5　出土遺物観察表5【外-7～外-56】・・・・75 p
Tab.6　出土遺物観察表6【外-57～外-106】・・・76 p
Tab.7　出土遺物観察表7【外-107～外-156】・・・77 p
Tab.8　出土遺物観察表8【外-157～外-206】・・・78 p
Tab.9　出土遺物観察表9【外-207～外-256】・・・79 p
Tab.10　出土遺物観察表10【外-257～外-270】・・80 p
Tab.11　狐原遺跡出土の遺物量・・・・・・・・・19 p
第Ⅴ章　若干の考察
Tab.12　墨書・線刻される器種とその部位・・・・19 p

写真図版（Pl.）目次

第Ⅳ章 発見された遺構と遺物【遺構】
Pl.1　第1～4号竪穴住居址・・・・・・・・・・99 p
Pl.2　第5～9号竪穴住居址・・・・・・・・・100 p
Pl.3　第10～14号竪穴住居址・・・・・・・・　101 p
Pl.4　第15号竪穴住居址
第1～8号・11～22号土坑
土坑群・・・・・・・・・・・・・・・・・102 p
Pl.5　第1・2号墓壙
第1号溝
J-7炭化物集中
狐原遺跡全景・・・・・・・・・・・・・103 p

第Ⅳ章 発見された遺構と遺物【遺構】
Pl.6　第1～5号竪穴住居址出土遺物・・・・・104 p
Pl.7　第5～7号竪穴住居址出土遺物・・・・・105 p
Pl.8　第7～12号竪穴住居址出土遺物・・・・106 p
Pl.9　第12～14号竪穴住居址出土遺物・・・・107 p
Pl.10 第14～遺構外出土遺物【外-15】・・・・・108 p
Pl.11 遺構外出土遺物【外-16～外-163】・・・・109 p
Pl.12 遺構外出土遺物【外-165～外-219】・・・・110 p
Pl.13 遺構外出土遺物【外-220～外-254】・・・・111 p
Pl.14 遺構外出土遺物【外-255～外-270】
遺構出土の墨書・刻書土器
【第1～6号竪穴住居址】
・・・・・・・・・・・・112 p
Pl.15 遺構出土の墨書・刻書土器
【第7～15号竪穴住居址・第1号溝】
・・・・・・・・・・・・113 p
Pl.16 遺構外出土の墨書・刻書土器【外-37～外-86】
・・・・・・・・・・・・114 p

Pl.17 遺構外出土の墨書・刻書土器【外-87～外-136】
・・・・・・・・・・・・115 p
Pl.18 遺構外出土の墨書・刻書土器【外-137～外-243】
・・・・・・・・・・・・116 p

Pl.19 狐原遺跡の発掘調査記録-1・・・・・・・117 p
【調査前の風景・試掘調査・表土除去・
プラン確認作業・掘り下げ作業他】
Pl.20 狐原遺跡の発掘調査記録-2・・・・・・・118 p
【掘り下げ作業・遺物取り上げ作業・
測量記録・作業説明・発掘教室・他】

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第Ⅰ節　経緯

今回の調査は、山梨県土木部の「山梨県森林公園　金川の森」の建設により移転することとなった県立園芸高等学校の大型機械研修農場の建設に先立つ埋蔵文化財の調査である。

山梨県土木部では、新規に「山梨県森林公園　金川の森」を建設することとなった。しかし、その建設予定地内に県立園芸高等学校の大型機械研修農場の敷地が存在し、この移転の必要性が発生した。そのため、県教育委員会学術文化課および山梨県埋蔵文化財センターは県土木部と協議の上、平成６年２月に移転先予定地内の埋蔵文化財試掘調査を実施し、その一部に埋蔵文化財の存在を確認した。

この試掘調査結果を受けて、県土木部・県教育委員会学術文化課・山梨県埋蔵文化財センターの３者は関連事業を含めて具体的な発掘調査に向けての協議・調整を行ない 発掘調査を実施することとなった。発掘調査は同年４月27日より同年10月31日まで約６カ月を要し実施した。

整理作業については発掘調査終了後から同年１２月末まで県埋蔵文化財センター内で行なった。以下、調査事務について記述しておく。

平成６年４月　　文化庁長官宛てに発掘通知を提出する。
同年４月27日　　発掘調査を開始する。
同年11月15日　石和警察署長宛てに埋蔵文化財発見届を提出する。
同年３月末日　　発掘調査報告書を刊行する。

第Ⅱ節　調査の組織

例言詳述

第Ⅱ章

第１節　地理的環境

一宮町は、甲斐国分寺をはじめ古代には頻繁な土地利用が行なわれ、結果県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地であることは周知のことである。従って、刊行された報告書や関連論文は多く、最近は『竜ノ木遺跡』などが見られる。この様な状況から、本遺跡周辺の地理的環境を報文に記述することは、単なる記述の重複に過ぎず、むしろ参考文献にある一宮町関係の報告書・関連論文に役割を譲りここでは遺跡を取り巻く局地的な地理的環境のみを記述しておく。

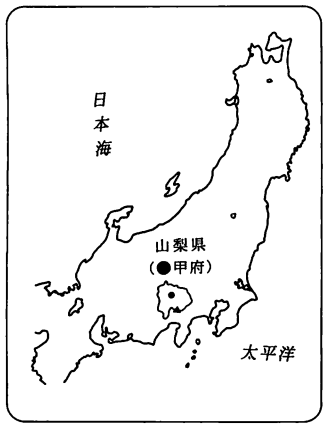
本遺跡の立地する地点は、東八代郡一宮町竹原田1070番地他で、笛吹川の支流金川を起因とした扇状地の扇央部ある。金川は、甲府盆地の南縁を形成する御坂山地から北に向かって流れており、笛吹川に合流するまでおよそ18Kmの流路をもつ。また、周辺には同じく御坂山地から流れ出た大石川や御手洗川が扇状地を形成しており、複合扇状地を作っている。

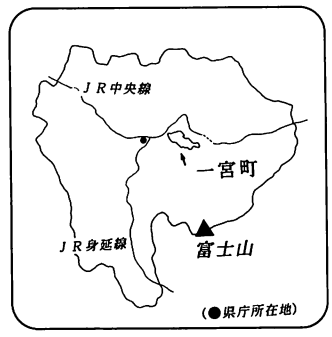
この金川扇状地上には、国分寺を中心に関連遺跡が高密集し、主に弥生時代から継続的な土地利用がなされてきたことが調査事例を踏まえて解明されてきた。

今回の調査地点は、山梨県立園芸高等学校の北に位置し、金川扇状地上の標高318ｍ前後を測る所である。調査地点の最も新しい土地利用は桃の果樹栽培地であり、耕作と土地区画により凹凸があったが、現況の地形観察では微高地を形成していることが目視できた。微高地は東西方向に向かって観察でき、西・南・北方向は標高が若干低く、東は国道137号線と金川護岸により状況を把握できない。

また、調査により調査区の南北は砂礫が堆積していることが判明した。この砂礫の堆積は、金川の氾濫か流路移動に起因するものと考えらる。堆積の時期については、本文記載の３号竪穴住居址の平面図並びに土層断面図を参照してもらいたいが、観察の結果住居址の北壁を砂礫層が破壊していることから砂礫層の堆積の方が時間的には新しいと判断できる。この砂礫は調査区の南北を完全に覆い、西に向かうほど調査区は狭くなる傾向にある。

さらに、周辺の航空写真を見ると、現地では確認しにくいが調査地点から北西に建設されたホテル街に向かって形成された旧流路が確認できた。





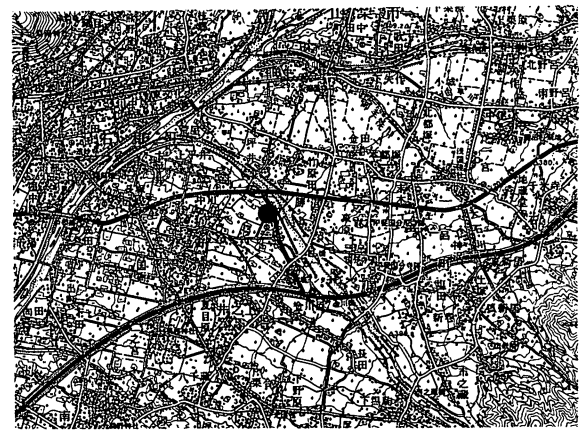
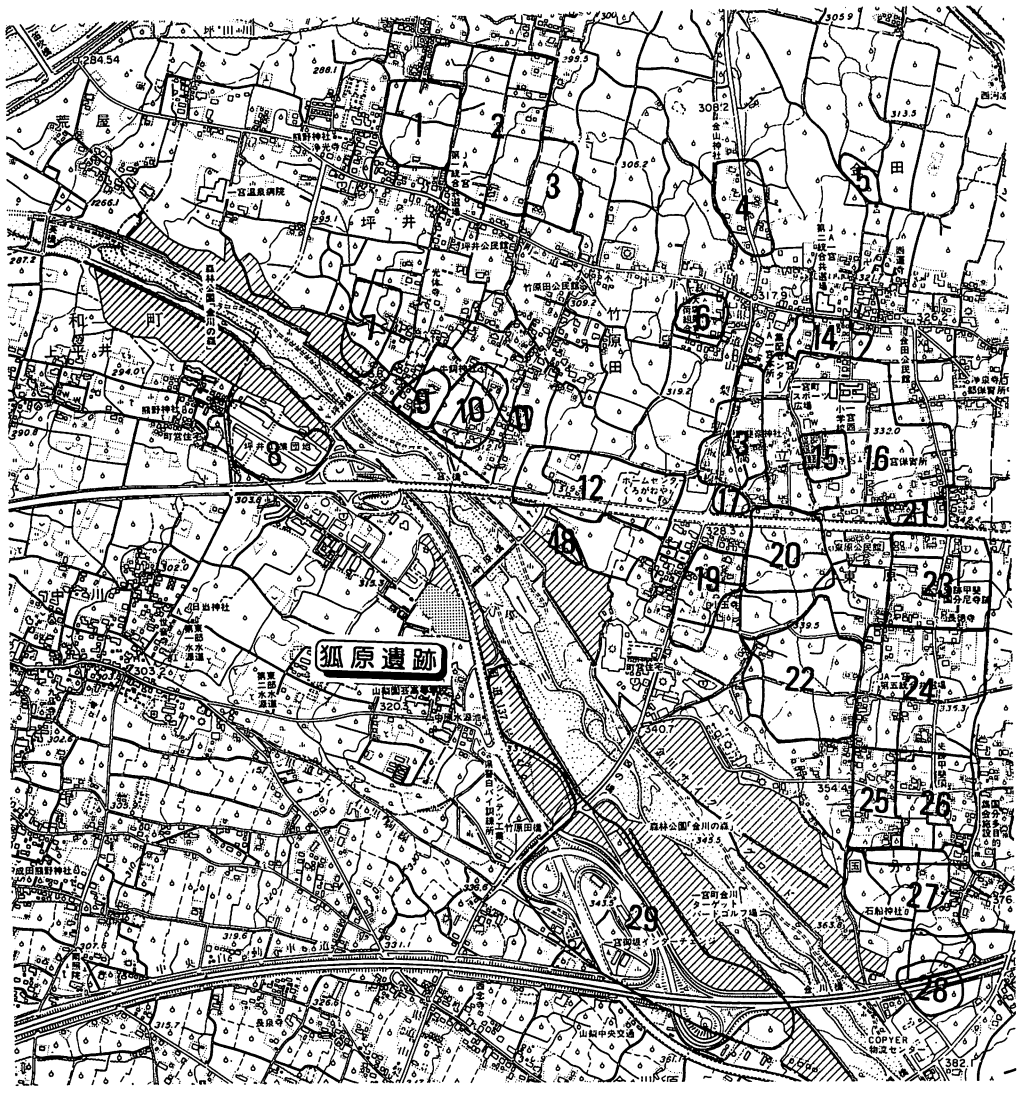


Fig. 1　位置図



1 北腰巻遺跡（散－平）
2 坪井条里（条－奈平）
3 後田遺跡（散－平）
4 金田遺跡（散－奈～平）
5 上深田遺跡（生－近）
6 多雨田遺跡
（散－古奈平）
7 南西田遺跡（散－平）
8 大原遺跡（集－奈平）
9 西前田遺跡（散－平）
10 東前田遺跡（散－弥）
11 満願寺跡（寺－平中近）
12 西田町遺跡
（集/館－奈平中）
13 橋立遺跡
（散－奈平中近）
14 筑前原北遺跡
（集－弥奈平）
15 筑前原墓跡
（館/集－弥～近）
16 筑前原遺跡
（集/墓/道－弥～近）
17 鷲堂遺跡（散－平）
18 西田町南遺跡（包－平）
19 北大内遺跡（集－平）
20 桜畑遺跡（集/道－奈平）
21 甲斐国分尼寺跡北遺跡
（散－奈～中）
22 矢倉遺跡（集－古～中）
23 甲斐国分尼寺跡
（寺－奈～中）
24 松原遺跡
（集/道－古～中）
25 甲斐国分寺西遺跡
（集－縄奈平）
26 甲斐国分寺跡
（寺－奈平中）
27 甲斐国分寺南遺跡
（散－縄奈～中）
28 豆塚遺跡（散－縄古平）
29 四ツ塚古墳群（古－古）

Fig. 2　周辺の遺跡　　（S＝1/20,000）

（○－●）
○種　別　散＝散布地　集＝集落跡　古＝古墳　寺＝寺院跡　館＝館跡　墓＝墓地　道＝道路　条＝条里　生＝生産
●時　代　縄＝縄文　弥＝弥生　古＝古墳　奈＝奈良　平＝平安　中＝中世　近＝近世

これらを踏まえて、調査地点の地理的環境を見てみると、狐原遺跡は狐原遺跡第２段階（甲斐編年Ⅷ～ＩＸ）の期間を主体に継続的な居住が行なわれ、集落として土地利用されてきた。しかし、狐原遺跡第２－２段階（甲斐編年Ⅷ～ＩＸ）つまり３号竪穴住居址の居住期間中あるいはそれ以降に氾濫等の自然災害に遭遇したことが考えられる。そして、集落としての土地利用は、狐原遺跡第２－４段階（甲斐編年ＩＸ）まで継続されたことが確認されている。

狐原遺跡の本来の集落域は、調査で判明した範囲よりも微高地という地形を中心に一定の広さの中で集落が展開していた可能性は当然あるが、結果としては、氾濫等の自然災害から難を免れた微高地上の最も標高の高い部分の集落域が発見され、調査されたということになる。

第２節　歴史的環境

一宮町並びに扇状地地域が古代を中心に非常に高い遺跡密集地の様相を持っていることについては先述したとおりである。

旧石器時代から縄文時代にかけては御坂山地・各河川の扇頂部を中心に集落跡が調査され、京戸川扇状地上には釈迦堂遺跡群が確認されている。弥生時代以降の遺跡の分布は、扇端部方向に向かって展開されていく傾向にあり、古墳時代の後期には本遺跡南西（一宮・御坂インターチェンジ周辺）の地点に四ツ塚古墳群が構築され、周辺の後期古墳群及び集落跡を含めた土地利用が確認されている。しかし、周辺地域で爆発的に遺跡の分布が増えるのは奈良・平安以降のことである。

特に高密度で分布している地域は、金川以東から京戸川に至る扇状地上の地域で、甲斐国分寺・尼寺を中心に奈良・平安時代の遺跡が高密度に分布している。甲斐国分寺・尼寺を中心として周辺に該当期の集落址等が集中するのは、寺院造成や諸役の担い手の必要性など国分寺関連で動員と関連性を持ち、局地的な地域性として当然といえる。

ただし、遺跡の分布範囲が甲斐国分寺・尼寺を中心に一定の標高差の中に集中して確認されていることは興味深い傾向といえる。

次いで遺跡が集中して分布する地域としては、金川以西で時期が古くなる遺跡も存在するが中央自動車道建設の際に調査された二之宮遺跡・姥塚遺跡を中心とした地域と、工場団地の建設の際に調査された大原遺跡を中心とした地域が確認されている。

なかでも本遺跡と大原遺跡との関わりについて詳述しておく。大原遺跡は、調査の結果それまで不明とされていた古代甲斐国の玉井郷の所在を推定させる資料となった「玉井郷長」と書かれた墨書が出土しており、遺跡の規模からも玉井郷の所在地であることがほぼ確定的となった。

本遺跡は、この大原遺跡の北500ｍの地点に存在し、立地的には大原遺跡を中心とした範囲に含まれると考えられる。さらに、本遺跡の９号竪穴住居址からも「玉井」と書かれた墨書土器が出土していることから大原遺跡に極めて近い関係あるいは一部であったことも想像される。

この様に、本遺跡を含む周辺の歴史は、古代甲斐国の中心地であった国分寺・尼寺を取り囲み多くの集落跡が認められる局地的な密集分布に対して、狐原遺跡はやや距離をおいた存在で、むしろ地環境並びに出土遺物の要素からは大原遺跡との関連性を想像させるものである。本遺跡の集落跡としての位置付けは、今後周辺遺跡の調査成果を踏まえて更に解明されいくであろう。

第Ⅲ章　調査の方法と基本層位

第１節　試掘調査

県立園芸高等学校実習場建設予定地は、表面採集・地形環境・周辺の遺跡分布の視点から、埋蔵文化財の包蔵地である可能性が指摘され、その確認作業が要望された。

県埋蔵文化財センターでは、建設予定範囲である15.000㎡を対象に、時代・遺構分布密度並びに範囲の確定などその他本調査に関わる必要情報の収集を目的とした試掘調査を実施した。

試掘調査は、1994年（平成５年）２月16日から２月24日まで延べ７日間行った。

試掘調査方法は、一部未買収地を除き、建設予定範囲の任意の箇所に合計37本（内２本は深度３m以上の深堀を実施）の幅１m、長さ10m前後の試掘坑を設定した。掘削は、小型重機と人力により行なった。

得られたデータは紙面および写真記録を行なった。、各試掘坑ごとに出土した土器片は出土状況を記録のうえ取上げ、完形に近い土器については現状を維持させた。遺構については、略式全体図を作成し地点を落とし記録した。土層断面についても略式の観察図を作成し記録した。

試掘調査の結果、建設予定地の南・北では、地表直下から砂又は砂礫の堆積が２m以上にわたり確認され、また一部では客土の搬入が認められる状況から遺構・遺物の存在を確認することはできなかった。この範囲を除いた所では、地表下40～60cmの範囲で、平安時代の土器片をはじめ、炭化材、焼土、住居址、溝状遺構が平面又は断面で確認され、平安時代に属する集落跡の存在を確定するに至った。

調査対象範囲は、上記の結果から砂又は砂礫並びに客土堆積を除いた部分の面積8.000㎡となり、遺跡の性格としては平安時代のみの集落跡であることが判明し、結果報告を行なった。

第２節　Gridの設定と国土座標

本遺跡の所在地する東八代郡一宮町は、甲斐国分寺をはじめ、古墳時代後期の群集墳や大原遺跡に代表される平安時代の集落跡が高密度に分布していることで著名であり、古代の山梨ではかなり頻繁な土地の開発と利用がなされてきた地点である。従って、近年の中央自動車道インターチェンジの開設や国道20号バイパスの整備と、これに付随した宅地・商業などの諸開発により、発掘調査件数の増加が目立っている。この様な状況下で、一宮町教育委員会では、発掘調査増加のと歴史的環境を考慮して、体系的な調査を実施しており、その方法の一環として国土座標の導入を図っている。

今回の本遺跡の調査でも、遺跡の位置をはじめ遺構・遺物の出土地点を記録するために一宮町にならい国土座標を導入し用いた。

幸い、本遺跡周辺には建設用にトラバースが組まれていたため、調査区内の座標点に基準杭を３地点設定し、これから光波測量器を用いて調査区内全体を５m四方の碁盤目状に区切り、Grid杭を設定した。

国土座標については、基準杭となった３地点のみをここでは明記しておく。明記した３地点の基準杭の数値は単位をmとしてあり、平面直角座標Ⅷ系原点からの距離を示した。

設定したGrid杭には、それぞれ名称に名称をつけて遺構・遺物の取上げの基準にした。名称は、北から南に向かって進む列にAから始まるアルファベットの大文字でSまでふり、Aより北よりに追加で-Y・－Zをつけた。これに対して東西は、西から東むかって１からはじまる算用数字を21までふった。但し、調査区関係上１・２は存在しない。Grid を呼称する場合には、Grid の中央に立ち北東隅に存在する杭のアルファベットと算用数字の組み合わせ（B－１・B－２等）を使った。

	X座標	Y座標	標高
I－８Grid杭	39930	15600	318.639m
I－10Grid杭	39930	15610	318.887m
K－10Grid杭	39940	15610	319.066m

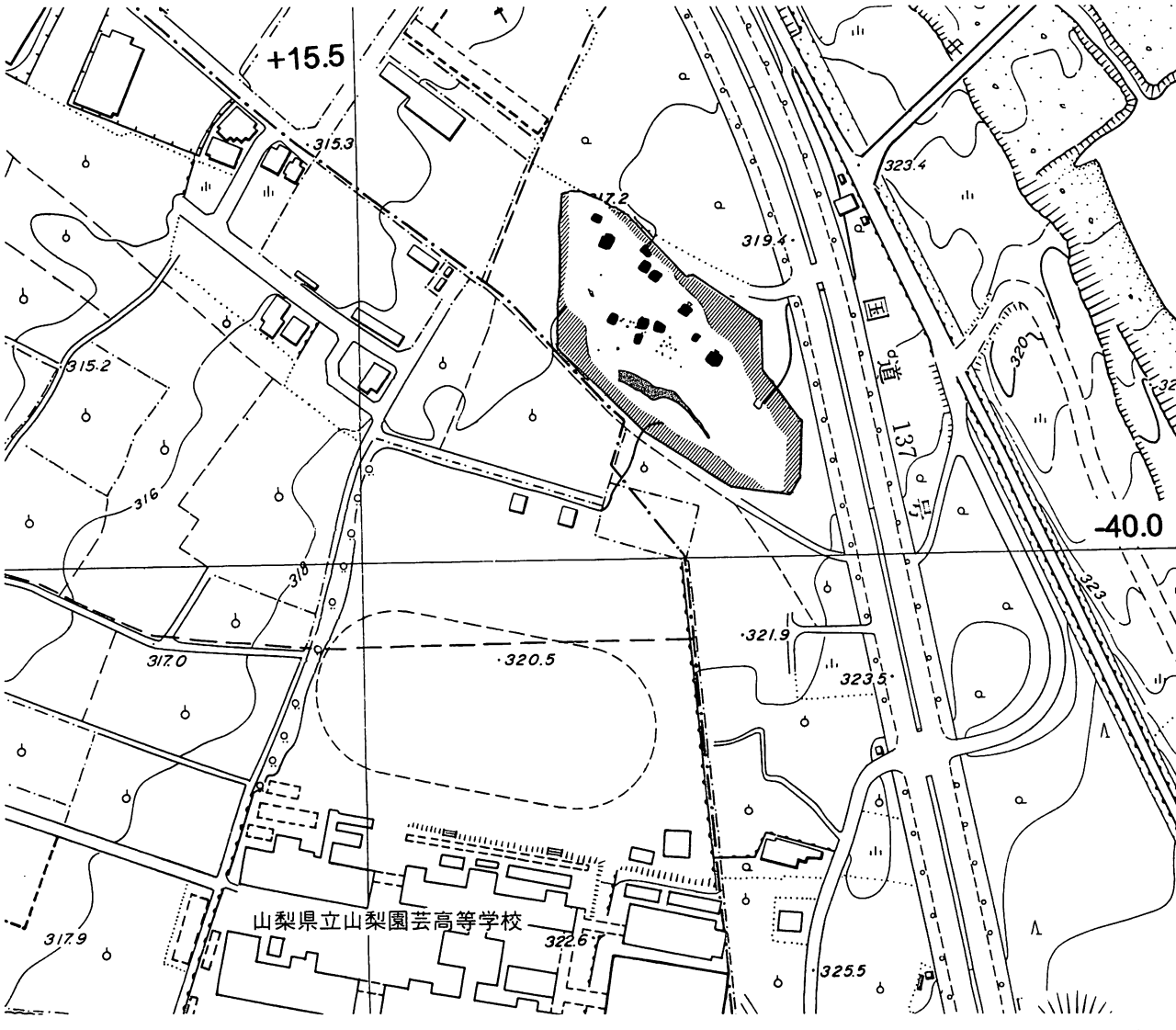


Fig. 3　遺跡位置と土地利用状況　（S=1/2,500）

第３節　遺構調査の方法

重機による表土剥ぎは、遺物包含層の直上まで行なった。包含層直上から下層の掘り下げは人力で行ない、遺構・遺物の確認と検出作業を進行させた。

遺構確認のため掘り下げは、遺構の確認は面的確認とともに、断面の観察を行ないながら留意して調査を進行させるため、全てのGridLineを軸とした約50cm幅の土層断面観察ベルト（以下、ベルト）を設定し、調査区全体を升目掘りをして断面観察しつつ行なった。ベルトは必要に応じて除去した。

調査方法は、遺構が確認された段階で、住居址ではかく辺から、中心で直交する２本のベルトを設定し、断面を観察しつつ掘り下げを行なった。住居址以外の遺構で、土坑は半裁、溝は任意の箇所にベルトを設定して調査した。

掘り下げは、住居址床面と認めた段階で一時停止し、平面図・海抜測定・堆積状況・断面図・出土状況を図化・記録し、写真撮影を行なったのちにベルトを除去した。住居址内の付属施設（竈・柱穴・土坑）、貼床等の確認は、床面が検出された段階で行なったが、認められない場合には、床面を除去して更に掘り下げ、再度確認をする方法を採った。

また、遺構として面的に明確な確認ができなくとも、遺物や炭化物（材）の集中的な出土状況が見られた場合や焼土は、状況に応じたベルトを設定し調査を行なった。住居址内の竈は、長軸に直交してベルトを設定、４または６に分割して記録・図化し、工程に合わせて加筆した。

覆土中から出土した遺物については、第４節で記した方法で対処し、住居址の時期決定となる資料や完形又は完形に近い土器については、遺構と遺物の相関性の把握のため、出土位置を保ち、記録化ののち取上げを行なった。

第４節　遺物の取上げ方法

遺物の取上げに付いては、様々な議論の余地がある。しかし、今回の調査では、当初より出土遺物から、遺跡の性格が集落跡であるということと、土地利用の時期的位置付けが平安時代の限定された期間であることが推測された。そこで、限定された地域（第Ⅱ章第１節詳述）と時期のという条件は、時間的間隔をもって複数に重複しあう集落跡という性格と比較した場合、遺物移動の起因は、複雑な構造の中よりむしろ具体的な遺物の動きを捕らえやすいのではないかという視点に立ち全ての遺物の出土位置を記録することとした。

出土遺物の取り扱いについては、出土するとその地点を保持し、Grid杭を基準とし、平板を用いて出土地点・海抜を記録し1/20の「遺物取上げ図」として図化した。基本的には出土した全ての土器・石器・鉄器・骨片、場合により炭化物（材）を取上げの対象とした。但し、土器については基準を設けて大きさが４cm四方以下の場合はGrid一括という名称で取上げた。

また、遺構外より出土した遺物は、全ての遺物を対象に１から始まる通し番号を付けて、平板を用いて出土位置と海抜を記録して取上げた。

住居址・土坑等各種遺構から出土した遺物は、それぞれの遺構ことに１から始まる通し番号を付けて、平板を用いて出土位置と海抜を記録して取上げた。また、記録時には土器・石器・鉄器等の属性を記載して処理をした。

出土状況等の写真撮影は、必要と認められた場合により行なった。

第５節　基本層位

第４図に示した標準柱状図は、試掘調査を実施した際に調査区内で最も深い深度まで掘削した試掘坑断面での堆積状況図である。調査区内での土壌の堆積は安定した状況もので、北と南の砂・砂礫層以外での変化は微弱なものである。

なお、遺構・遺物出土範囲と砂・砂礫層の境界は面的にまたは断面でも明確に認めることができ、調査区北側の３号住居址は北東側の一部か砂礫により消失していることから砂・砂礫層の堆積は、本遺跡での居住期間中から居住期間終了後の短い期間の内に発生した自然災害的堆積であると認識している。

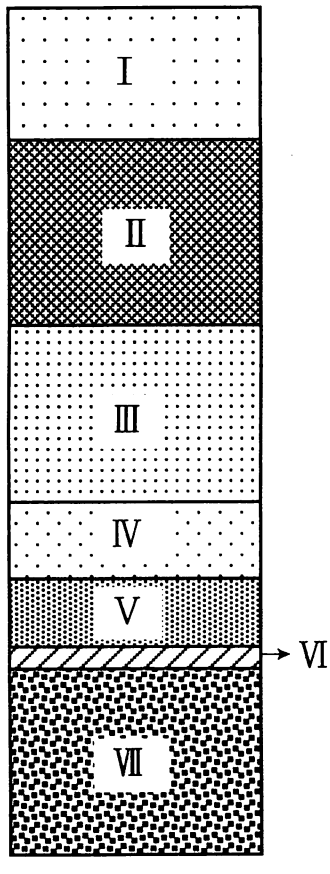


Fig.4　土層柱状図

（Ⅰ層）　表土層30～40cmの堆積で、調査以前の土地は果樹栽培地として利用されていた。

（Ⅱ層）　暗褐色土　平安時代の遺物包含層。調査区全体で認められ、平均30～40cm堆積厚で、炭化・赤色の粒子が観察される。遺物はⅡ層下部から主体的に出土する。

（Ⅲ層）　黄色砂質土　平安時代の遺構確認面。平均25cmの堆積厚。ごく微量の遺物が上部に包含される。

（Ⅳ層）　黄色砂質土　Ⅲ～Ⅴ層の漸位層。平均10cmの堆積厚。遺構・遺物は認められない。

（Ⅴ層）　暗褐色土　平均10cmの堆積厚。遺構・遺物は認められない。

（Ⅵ層）　黄色砂質土　極めて薄い堆積厚。遺構・遺物は認められない。

（Ⅶ層）　砂礫層　中礫～大礫で構成される。下部では砂層になる。

第Ⅳ章　発見された遺構と遺物

狐原遺跡の発掘調査において確認された遺構は竪穴住居址15軒（平安時代）、土坑25基（平安時代）、墓壙2基（平安時代）、溝址（平安時代）1条、炭化物集中区（平安時代）1箇所、単独出土の壺（平安時代）1箇所である。

また、発見された遺物は遺構内出土6,988点（竪穴住居址6,755点・土坑5点・墓壙3点・溝224点・壷1点）、遺構外出土34,380点の合計41,368点である。遺物の出土量は重量データを章末に図表化して示した(Tab.11)ので参照されたい。

なお、遺構・遺物の時期等については山梨県内における土器編年案を参考にしつつ記述したものであり、今後の調査・研究の進展により変動する可能性も大いにあり得る点をお断りしておく。

註）本文中に記述した時期名称は下記文献に各々拠る。

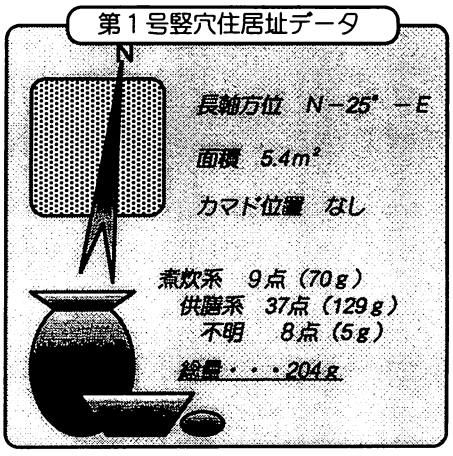
甲斐型土器編年●期：山梨県考古学協会　甲斐型土器研究グループ『甲斐型土器－その編年と年代観－』1992年

古代末期土器編年第●期：森原明廣「山梨県地域における古代末期の土器様相」『丘陵』第14号　1994年

第1節　遺構および遺構内出土遺物

（1）竪穴住居址

第1号竪穴住居址（遺構：Fig. 6・Pl. 1　遺物：Fig.31・Pl.14・Tab. 1）



（位置） 調査区の北東側、H－13・I－13Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はない。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸2.5m×短軸2.2m、確認面から床面までの深さ0.95mを測る。

（床面） 貼床等は確認できず、硬化面も確認されてない。

（壁溝） なし。（柱穴）　確認されていない。（施設）　なし。

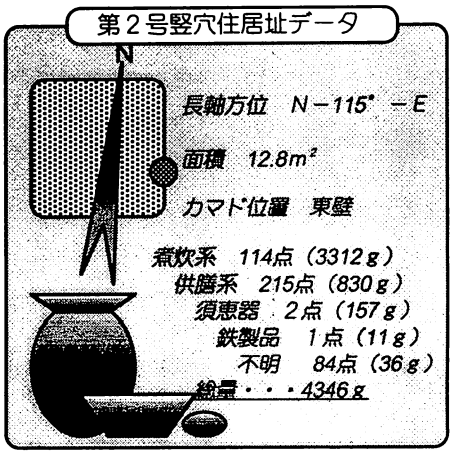
（遺物） 出土点数は54点、全て土師器で内訳は坏35点・甕9点・蓋2点、不明8点である。このうち、図示できた遺物は墨書痕跡のある坏底部の破片1のみである。

（時期） 9世紀第2～第3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ期～Ⅸ期）の所産が考えられるが確定は難しい。

（補足） 1）本遺構の覆土中には30cm～50cm大の礫が多量に混入していた。これらが人為的か否かは不明であるが、本遺跡内にみる他の遺構の埋没状況と異質である。

2）第1号竪穴住居址は「竪穴住居址」として取り扱ったが、小規模であることやカマド等の住居的要素が欠落することなどから「住居址」と確定しがたい面もある。

第2号竪穴住居址（遺構：Fig. 6～7・Pl. 1　遺物：Fig.31・Pl.6／14・Tab. 1）



（位置） 調査区の北側、C－9・D－9・C－8・D－8 Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、東側に4号竪穴住居址、北側に3号竪穴住居址が近接する。

（形状） ほぼ正方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸3.7m×短軸3.5、確認面から床面までの深さ0.95mを測る。

（床面） 黄色粘質土を主体的に用いた貼床が床面のほぼ全域において確認され、特に住居の北側部分に厚く施されている傾向が指摘できる。硬化面はカマド前にやや締まる部分が認められる。

（壁溝） なし。（柱穴）　確認されていない。

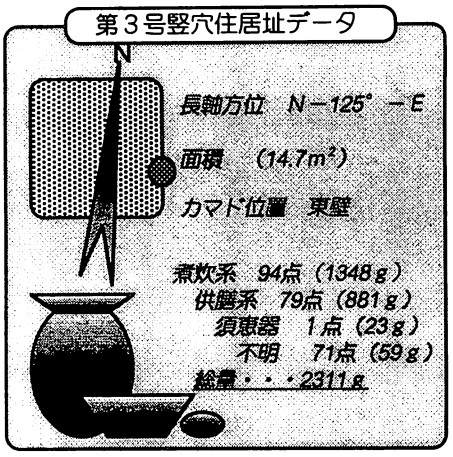
（施設） カマドは南東壁の壁面中央よりやや南側へ寄った位置に付設される。袖部の両端の一部にに礫を用いているが、袖部・天井部とも崩落が著しく、その構造は明らかではない。ただし、燃焼部の掘り込み周辺には焼土化した粘質土が多量に堆積していることから、礫を芯材とした粘土構築のカマドであった可能性が高い。貯蔵穴ほかの施設も皆無であ

る。ただし、カマド脇に扁平な礫（30cm大）が据えられており、「作業台」的な用途が推測される。

（遺物） 出土点数は416点、うち土師器が413点（坏189点・皿26点・甕113点・小形壷1点・不明84点）、須恵器が2点、鉄製刀子が1点である。このうち、図示できた資料は13点である。特に口縁部が垂直に立ち上がる甕形土器（12・11？）は山梨県内の該期には類例を見ない資料である。形態はカマド芯材に用いられることのある、いわゆる「円筒型土製品」に類似するが本資料は器厚が薄く、通常の甕形土器と同様に煮炊具として使用されたことが推測される。また、カマド前から出土した鉄製刀子は中央で人為的に折られており、カマド祭祀等に関わる遺物である可能性も指摘できる。そのほか、墨書土器（「幸」など）や線刻土器も出土している。

（時期） 9世紀第2四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ期）の所産が考えられる。

（補足） 第2号竪穴住居址出土の遺物の一部について、（財）山梨文化財研究所の河西学氏に胎土分析を委託し、玉稿を賜った。付編1「狐原遺跡出土甲斐型土器の胎土分析」を参照されたい。この分析については、視点として「甲斐型土器」のうち坏と甕にいかなる胎土差があるのか、ひいては生産地の差異はあるのかとの課題から実施したものである。



第3号竪穴住居址（遺構：Fig.10・Pl. 1　遺物：Fig.32・Pl.6／14・Tab. 1）

（位置） 調査区の北側、B－9・C－9・B－8・C－8 Grid に位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、南側に2号竪穴住居址、南東側に3号竪穴住居址が存在する。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸4.3m×短軸3.5m、確認面から床面までの深さ0.23mを測る。

（床面） 黄色粘質土を主体的に用いた貼床が床面のほぼ全域において確認された。硬化面については確認されていない。

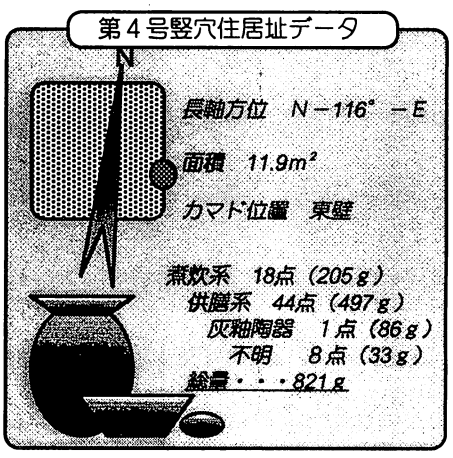
（壁溝） なし。（柱穴） 確認されていない。

（施設） カマドは東壁の壁面中央部よりやや南側へ寄った位置に付設される。両袖部は地山層を掘り残し、補強として礫を用いる方法で構築されている。浅く掘り込まれた燃焼部から煙道部には焼土化や焼土の堆積が認められた。

（遺物） 出土点数は245点、うち土師器が243点（坏76点・皿2点・鉢1点・甕94点・不明71点）、須恵器が1点である。このうち、図示できた遺物は13点である。特に墨書土器が多く、「仁」（1）・「工」（6）・「末」（7）などがある。

（時期） 9世紀第2～3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）の所産が考えられる。

（補足） 住居北東側の一部は洪水災害等に起因する砂礫層により削り取られていることが土層観察により確認された。砂礫層は南東から北西方向へ流れたと推測され、遺跡東側を北流する金川からの影響を考えるのが妥当であろう。この洪水災害等の時期確定はできないが、調査区内の砂礫層中からは平安時代（9世紀代）の遺物のみが発見されており、「住居」として機能していた時期に被災した可能性も強ち比定できない。



第4号竪穴住居址（遺構：Fig. 9・Pl. 1　遺物：Fig.33・Pl.6／14・Tab. 1）

（位置） 調査区の北側、D－10・E－10・D－9 Grid に位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、北西側に2号竪穴住居址・3号竪穴住居址が存在する。

（形状） ほぼ正方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

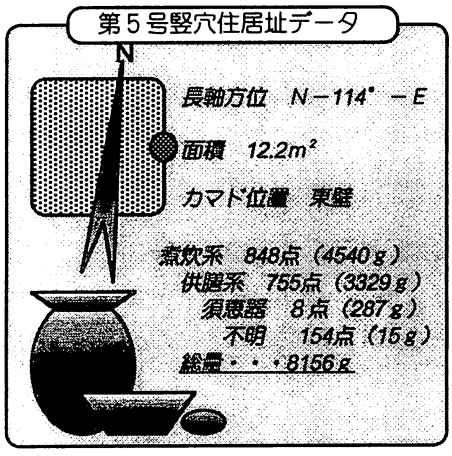
（規模） 長軸3.8m×短軸3.4m、確認面から床面までの深さ0.34mを測る。

（床面） 黄色粘質土を主体的に用いた貼床が床面のほぼ全域において確認され、特にカマドが付設される南東壁側に重点的に施される傾向を指摘できる。硬化面については確認されていない。

（壁溝） なし。**（柱穴）** 確認されていない。

（施設） カマドは南東壁の壁面のほぼ中央部に付設される。両袖部は地山層を掘り残す方法で構築されているが、天井部の構造は不明である。浅く掘り込まれた燃焼部から煙道部には僅かに焼土の堆積が認められた。全体的に小規模かつ残存状況の不良なカマドである。

（遺物） 出土点数は71点である。そのうち土師器が71点（坏30点・皿14点・甕17点・置カマド1点・不明8点）、灰釉陶器1点である。このうち、図示できた遺物は8点である。「鷹」の墨書（1）・線刻「V」（2）などがある。なお、坏（2）は線刻が焼成以前であることや体部内面の暗文が坏には稀有な「花弁状」であることなど見るべき点が多い。



（時期） 9世紀第2四半期頃（甲斐型土器編年Ⅷ期）の所産が考えられる。

第5号竪穴住居址

（遺構：Fig.10・Pl. 2　遺物：Fig.33～35・Pl.6/7/14・Tab. 1～2）

（位置） 調査区の中央部、H－11・G－10・H－10Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、やや離れた西側に7号竪穴住居址が存在する。また、南側から南東側に土坑（1号土坑ほか）が集中して存在する。

（形状） 変則的な長方形（台形）の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸4.2m×短軸2.6m～3.4m、床面までの深さ0.7mを測る。

（床面） 黄色粘質土が住居址の中央部に存在するが、極めて狭い範囲（2m×1m程度）であり、貼床とは異質である。

（壁溝） なし。（柱穴）　確認されていない。

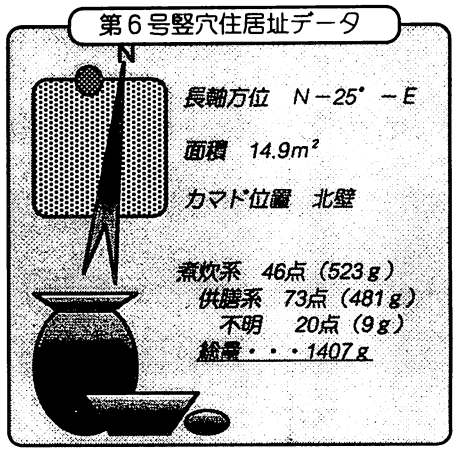
（施設） カマドは東壁壁面のほぼ中央部に付設される。壁高が良好に残存していたにも関わらずカマドは両袖部の基部から煙道部がが残る程度であり、人為的な破壊行為をも想起させる状況である。袖部の基部は地山層を掘り残す方法で構築されているが、周辺に火熱を受けた礫が散乱していることから、礫を補助的に用いたカマド構築がなされていたと推測される。天井部の構造は不明であるが、燃焼部の奥から煙道部には焼土化あるいは焼土の堆積が認められた。なお、底部に焼成後穿孔が施される稀有な皿形土器（10）がカマド右袖上に伏せ置かれる状態で出土しており、カマド廃棄に伴う祭祀に関わる遺物である可能性もあろう。

（遺物） 出土点数は1765点と多量である。このうち土師器が1757点（坏725点・高台付5点・皿18点・蓋7点・甕837点・小形甕10点・置カマド1点・不明154点）、須恵器8点である。このうち、図示できた遺物は30点である。特に底部穿孔が施される皿（10）は、穿孔前に6条の平行線状線刻も施された特異な遺物である。また、他に墨書土器「内」（11）・「和」（13）・「山中」（14）がある。なお、住居内から置カマド（30）の破片も出土した。

（時期） 9世紀第2～第3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）の所産が考えられる。

（補足）　1）5号住居址の床面には段差が認められた。このは段差平面的には西壁側から南壁側にかけてのL字形の高まりとして観察できる。この段差あるいは高まりの意味は明らかでないが、住居の建替に伴う段差である可能性、あるいはいわゆる「ベッド状施設」としての高まりである可能性もある。

2）5号竪穴住居址からは1765点の遺物が出土している。特に住居中央部の覆土第3層には遺物が多く含まれていたが、ここでは本竪穴住居址に帰属する遺物として扱った。この点については、後日の細かい検討を期したい。



第6号竪穴住居址（遺構：Fig.11・Pl.2　遺物：Fig.36・Pl.7/14・Tab. 2）

（位置） 調査区の北東側、F－12・G－12Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はなく、単独的に存在する。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸4.2m×短軸3.6m、確認面から床面までの深さ0.2mを測る。

（床面） 貼床は全く確認されていない。遺構自体が礫層中に構築されており、

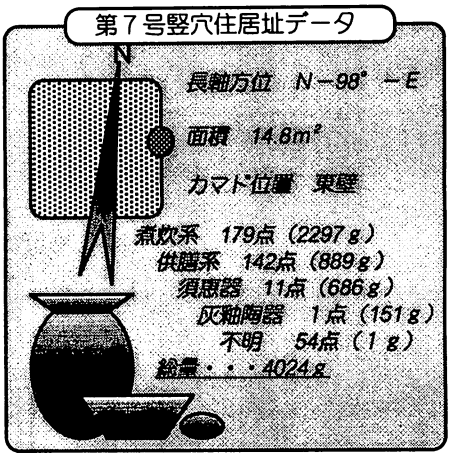
床面には礫が路頭するような状況である。

（壁溝） なし。（柱穴） 確認されていない。

（施設） カマドは北東壁壁面の中央部からやや北寄りに付設される。礫層中への構築であり、カマド周辺の礫が地山の礫をそのまま利用したものなのか、移動させたものなのか判別できなかった。カマドの残存状況は不良である。

（遺物） 出土点数は139点、全て土師器で内訳は坏60点、高台付坏1点・高台付鉢1点・皿7点・蓋4点・甕46点・不明20点）である。このうち、図示できた遺物は10点である。特にカマド内から出土した坏（1）は口縁部端部にタール状の付着物が認められ、灯明皿としての用途が推測される。また、高台付の鉢（6）には「万」の墨書が見られる。

（時期） 9世紀第3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅸ期）の所産が考えられる。



第7号竪穴住居址

（遺構：Fig.12・Pl.2 遺物：Fig.36～37・Pl.7/8/14・Tab. 2）

（位置） 調査区の中央部、G－9・H－9 Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、南側に8号竪穴住居址、やや離れた東側に5号竪穴住居址が存在する。また、南西側に土坑（14号土坑ほか）が集中的に存在する。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸4.2m×短軸3.6mを測る。床面までの深さ0.6mを測る。

（床面） 貼床・硬化面は全く確認されていない。**（壁溝）** なし。

（柱穴） 確認されていない。

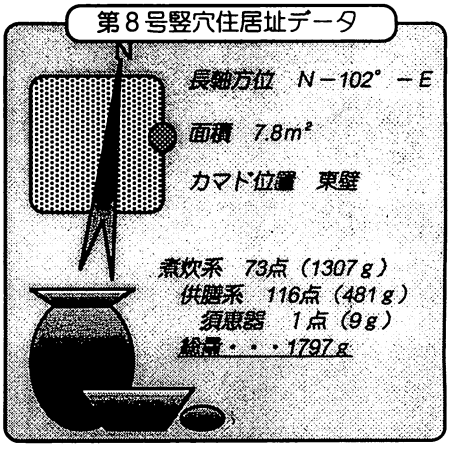
（施設） カマドは東壁壁面の中央部に付設される。袖部は基部から黄白色粘質土を用いて構築されている。奥壁面に扁平な礫が1点残る。他には礫は認められず、礫を構築材としないカマドであった可能性もある。天井部の構造は不明であり、焼土化あるいは焼土の堆積も極めて薄く弱い。

（遺物） 出土点数は387点である。このうち土師器が375点（坏125点・高台付坏4点・皿2点・蓋11点・甕179点、不明54点）、須恵器11点、灰釉陶器1点である。このうち、図示できた遺物は18点である。特に墨書土器が豊富であり、竪穴住居址南側から南東側の床面近くから集中的に出土している。特に特徴的な墨書である「午」が記された坏は3点（1・2・3）がまとまって出土しており注目される。その他の墨書土器には「千」（4）「仁」（10）・「（渦巻状記号）」（11）などもある。なお、「仁」の墨書土器は北側の第3号竪穴住居址から、渦巻状記号の墨書土器は南側にある第8号竪穴住居址から各々同様の資料が出土しており、関係が注目される。

（時期） 9世紀第2四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ期）の所産が考えられる。

（補足） 「千」墨書の坏形土器（4）はほぼ完形に近い残存状況であるが、口縁端部の剥落など傷みが著しい点が特徴的であり、比較的長い使用期間や頻繁な使用が推測される。

第8号竪穴住居址（遺構：Fig.13・Pl.2 遺物：Fig.37・Pl.8/15・Tab. 2）



（位置） 調査区の中央部やや南寄り、I－9・I－8 Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、北側に7号竪穴住居址、北西側に土坑（19号土坑ほか）が集中的に存在する。

（形状） 変則的な長方形（台形）の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸3.3m×短軸2.2～2.9m、床面までの深さ0.55mを測る。

（床面） 貼床・硬化面は全く確認されていない。**（壁溝）** なし。

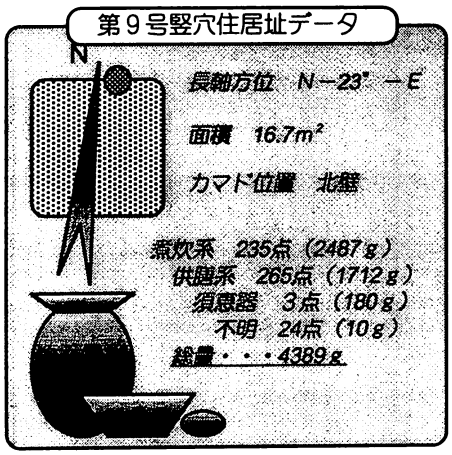
（柱穴） 確認されていない。

（施設） カマドは東壁壁面の中央部から南寄りに付設される。袖部は地山を掘り残す構築方法が推測される程度のみ残存する。燃焼部は明

瞭な掘り込みは確認されず、焼土化した地山層と焼土の堆積が認められる程度である。カマド内および周辺には火熱を受けた礫が散乱しており、礫を構築材に用いたカマドであったことも推測される。

（遺物） 出土点数は190点である。このうち土師器が189点（坏104点・皿10点・蓋2点・甕73点）、須恵器1点である。このうち、図示できた遺物は4点である。カマド内部およびその周辺からは甕形土器がまとまって出土しており、本住居址で使用されていたものと考えられる。また、第7号竪穴住居址に類似例のある墨書土器「（渦巻状記号）」（1）もある。

（時期） 9世紀第2四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ期）の所産が考えられる。



第9号竪穴住居址

（遺構：Fig.14～15・Pl.2　遺物：Fig.38・Pl.8/15・Tab. 2～3）

（位置） 調査区の北西側、B－6・B－5 Gridに位置する。

（重複） 第10号竪穴住居址と重複し、関係は（旧）10号→9号（新）である。やや離れた北西側に第12号竪穴住居址がある。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸4.5m×短軸3.7m、確認面から床面までの深さ0.15mを測る。

（床面） 貼床なし。（壁溝）　なし。（柱穴）　確認されていない。

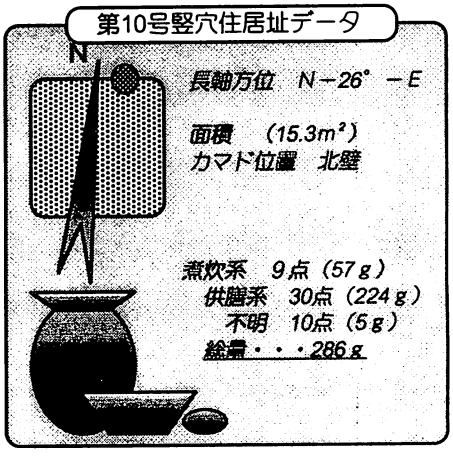
（施設） カマド1は東壁壁面の中央部から東寄りに付設される。両袖部は扁平な礫を立て並べており、燃焼部内面側は火熱を受けたように赤化している。ただし、周辺には黄白色粘質土も存在しており、礫＋粘質土により構築されたカマドの可能性が高い。また、奥壁部の焼土化も著しい。カマド2は平行に扁平な礫を立て並べた内側に若干の掘り込みおよび焼土が堆積することから「カマド」と捉えたが、カマドとしてよいかどうかも不明確な施設である。

（遺物） 出土点数は527点である。このうち土師器が524点（坏242点・皿20点・蓋3点・甕235点・不明24点）、須恵器3点である。このうち、図示できた遺物は17点である。墨書土器が多いが、特に注目されるのは「玉井」の墨書がある皿（11）である。「玉井」は古代甲斐国の郷名の一つである「山梨東郡玉井郷」を表すものと考えられ、貴重な出土事例となった。また、水滴に使われる事例の多い小形の平瓶（4）も出土しており、この竪穴住居址の異質な性格を示唆している。ただし、硯（転用硯含む）の出土はない。

（時期） 9世紀第3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅸ期）の所産が考えられる。

（補足）1）「玉井」の墨書土器は他に2例が確認されている。1つは本遺跡の北方500mにある大原遺跡の出土事例（「山梨(郡)玉井郷長…」）であり、内容からも大原遺跡周辺が玉井郷に属していた可能性は高いものと考えられている。しかし、もう1例は東方1,200mと比較的離れた松原遺跡からの出土事例（「玉井」）であり、本遺跡の事例も含めて、墨書土器の少数出土のみでその遺跡の所属郷名を比定をすることに慎重にならざるを得ない。ある郷から別の郷へ運ばれた土器（墨書）もあったことが推測されるからである。

2）カマド2はカマド1を付設する9号竪穴住居址より新しい遺構の施設として捉えるのが相応しいかもしれない。しかし、調査時にはカマド2に伴うプランは確認できなかったため、同一遺構内の施設として報告するものである。



第10号竪穴住居址

（遺構：Fig.14～15・Pl.3　遺物：Fig.39・Pl.8/15・Tab. 3）

（位置） 北西側、A－6・B－6 Gridに位置する。

（重複） 第9号竪穴住居址と重複し、関係は（旧）10号→9号（新）である。やや離れた北西側に第12号竪穴住居址がある。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸4.2m×短軸3.6mを測る。床面までの深さ0.6mを測る。

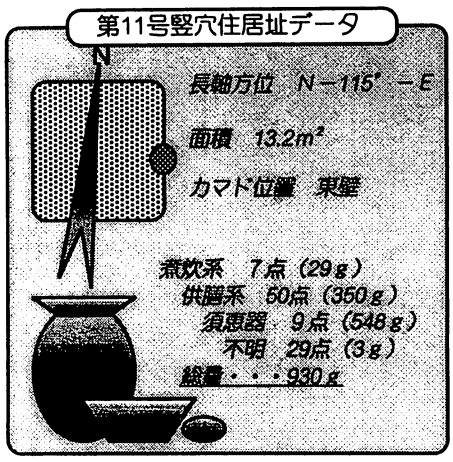
（床面） 貼床・硬化面は確認されていない。**（壁溝）** なし。**（柱穴）** 確認されていない。

（施設） カマドは北壁の東寄り、コーナー付近に付設される。袖部は地山を掘り残す方法で構築されている。燃焼部内には火熱を受けた礫が堆積しているが、小礫が多く構築材であったかどうか不明である。残存状況が不良であり、煙道部・天井部の状況は全く不明である。

（遺物） 出土点数は49点、全て土師器で内訳は坏20点・皿6点・甕9点・蓋4点・不明10点である。このうち、図示できた遺物は3点である。小片が多く時期も不明瞭である。

（時期） 9世紀第2～3四半期（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）の所産が考えられる。

第11号竪穴住居址（遺構：Fig.16・Pl.3　遺物：Fig.39・Pl.8/15・Tab. 3）



（位置） 調査区の中央部西寄り、G－7・H－7・G－6・H－6 Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、東側に土坑（16号土坑他）が集中して存在する。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸4.0m×短軸3.5m、床面までの深さ0.35mを測る。

（床面） 貼床・硬化面は全く確認されていない。

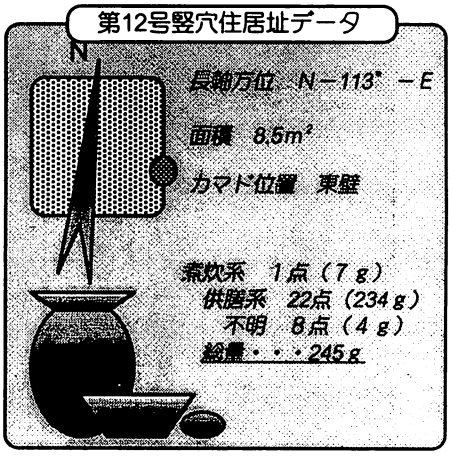
（壁溝） なし。**（柱穴）** 確認されていない。

（施設） カマドは東壁の中央部から南寄りに付設される。袖部構造は不明であるが、右袖側にあり住居内へ張り出して存在する大礫の側面を袖部に利用していたことのみ確認された。また、燃焼部底面から煙道部に焼土の堆積が認められている。

（遺物） 出土点数は95点である。このうち土師器が86点（坏50点・甕7点・不明29点）、須恵器9点である。このうち、図示できた遺物は4点である。

（時期） 9世紀第2四半期（甲斐型土器編年Ⅷ期）の所産が考えられる。

第12号竪穴住居址（遺構：Fig.17・Pl.3　遺物：Fig.39・Pl.8/9・Tab. 3）



（位置） 調査区の北東端、－Z－5・A－5・－Z－4 Gridに位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、南東側に第9・10号竪穴住居址がある。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。

（規模） 長軸3.5m×短軸3.1m、床面までの深さ0.1mを測る。

（床面） 貼床・硬化面は全く確認されていない。

（壁溝） なし。（柱穴）　確認されていない。

（施設） カマドは東壁壁面の中央部から南寄りに付設される。全体的な構造は全く不明であり、燃焼部の痕跡らしき壁際の僅かな掘り込みと焼土の堆積が確認されたに過ぎない。

（遺物） 出土点数は31点、全て土師器で内訳は坏19点・皿2点・蓋1点・甕1点・不明8点）である。このうち、図示できた遺物は4点である。遺物はカマド正面から住居南東コーナー部に集中して分布している。

（時期） 9世紀第2～3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）の所産が考えられる。

第13号竪穴住居址

（遺構：Fig.18～20・Pl.3　遺物：Fig.39～40・Pl.9/15・Tab. 3）

（位置） 調査区の東部、I－15・J－15・I－14・J－14Gridに位置する。

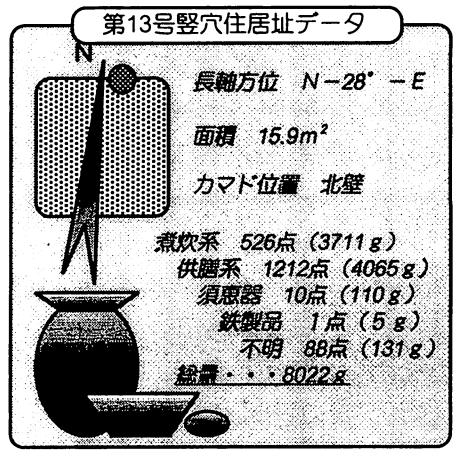
（重複） 第14号竪穴住居址と重複し、関係は（旧）14号→13号（新）である。

（形状） 長方形の平面形を呈し、断面形状は箱形を呈す。**（規模）** 長軸4.4m×短軸4.2m、床面までの深さ0.6mを測る。

（床面） 貼床は確認されていない。硬化面はカマド前面から東側にかけてやや硬化する面がある。

（壁溝） なし。**（柱穴）** 確認されていない。

（施設） カマドは北壁の中央部から東寄りに付設される。袖部は黄褐色の粘質土を用いて構築されている。カマド内や周辺に散在する扁平な礫も一部に火熱を受けていることから、袖部から天井部にかけて礫＋粘質土で構築されたカマドであったことが推測される。また、煙道部は燃焼部奥壁から段差を経て住居外方へ延びており、その側面も礫により構築されている。また、煙道部内に扁平な礫が落ち込むことから、煙道部の天井部分にも礫を用いていた可能性がある。



（遺物） 出土点数は1837点である。このうち土師器が1826点（坏1150点・高台付坏5点・皿50点・蓋7点・甕526点・不明88点）、須恵器が10点、鉄製品が1点である。このうち、図示できた遺物は25点である。多量に出土した遺物は住居内に全体的に分布しているが、特にカマド前面と住居北東部コーナー周辺の遺物分布が著しかった。遺物中には墨書土器が多く見られるが、特に「玉子」の墨書が坏（1）および皿（8）の2点出土している点が注目される。他にも「金」（10）・「関？」（11）などの墨書土器も出土遺物している。また、（15）の土師器は類似例が乏しく、器種が明確ではない。あるいは小形の壺形土器の底部であるかも知れない。

（時期） 9世紀第3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅸ期）の所産が考えられる。

（補足） 「玉子」の墨書土器（1・8）については、第9号竪穴住居址で出土している「玉井」の土器との関連性が注目される。仮に「子」という文字の意味に「従属的なもの」を選択したならば、「玉子」を「玉井郷の一員」的な意味に受け取ることも可能ではないだろうか。

第14号竪穴住居址

（遺構：Fig.19～20・Pl.3　遺物：Fig.41～42・Pl.9/10/15・Tab. 4）

（位置） 調査区の東部、Ⅰ－15・J－15・J－14Grid に位置する。

（重複） 第13号竪穴住居址と重複し、関係は（旧）14号→13号（新）である。やや離れた北西側に第12号竪穴住居址がある。

（形状） 平面形は長方形を呈す。断面形状は箱形を呈す。

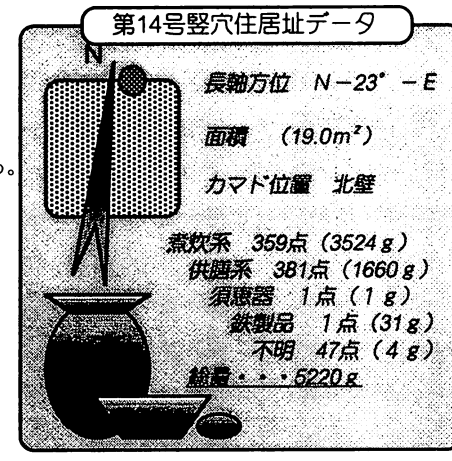
（規模） 長軸4.5m×短軸4.3m、床面までの深さ0.4mを測る。

（床面） 貼床・硬化面はない。**（壁溝）** なし。

（柱穴） 確認されていない。

（施設） カマドは北壁の中央部からやや東寄りに付設される。全体的な構造は不明であるが、袖部は黄褐色土を用いて構築されることが、僅かに残る右袖部から確認されている。周辺に礫は存在しないが、元からなかったかどうかは不明である。また、道部は燃焼部奥壁からなだらかに立ち上がり、住居外へ細く延びるタイプである。

一部に火熱を受けていることから、袖部から天井部にかけて礫＋粘質土で構築されたカマドであったことが推測される。また、煙道部は燃焼部奥壁から段差を経て住居外方へ延びており、その側面も礫により構築されている。また、煙道部内に扁平な礫が落ち込むことから、煙道部の天井部分にも礫を用いていた可能性がある。



（遺物） 出土点数は789点である。このうち土師器が789点（坏364点・皿15点・蓋2点・甕350点・小形甕9点・不明47点）、須恵器が1点、鉄製品が1点である。このうち、図示できた遺物は20点である。出土した遺物は住居内に全体的に分布するが、第13号竪穴住居址との帰属関係が困難だったものも一部ある。遺物中、特に住居北東端部から「有」の墨書がある坏（1・6・7）が集中的に出土した点が注目される。

（時期） 9世紀第2～3四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）の所産が考えられる。

第15号竪穴住居址（遺構：Fig.21・Pl.4　遺物：Fig.42～43・Pl.10/15・Tab. 4）

（位置）　調査区の東部端、L－18・M－18Gridに位置する。

（重複）　他の遺構との重複関係はなく、単独で存在する。

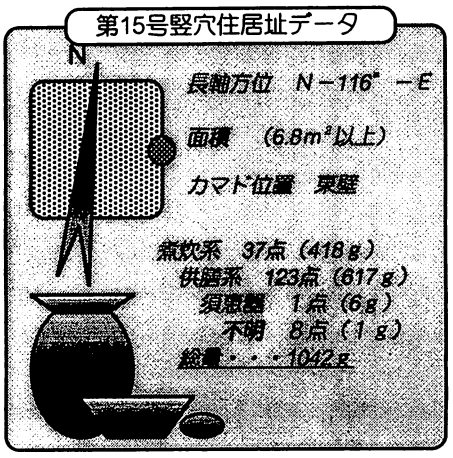
（形状）　損なわれた部分が多く不明瞭だが、平面形はおそらく長方形を呈す。断面形状は箱形を呈す。

（規模）　長軸2.7ｍ以上×短軸2.5ｍ、床面までの深さ0.4ｍを測る。

（床面）　貼床・硬化面は確認されていない。（壁溝）　なし。

（柱穴）　確認されていない。

（施設）　カマドは東壁壁面に付設される。袖部と天井部に礫を芯材に用いて構築されており、崩落した礫がカマド周辺に存在する。燃焼部は浅く掘り込まれ、焼土が堆積する。煙道部は砂礫層により損なわれ構造は不明である。



（遺物）　出土点数は170点で、土師器が169点（坏118点・高台付坏１点・皿２点・蓋１点・鉢１点・甕37点・不明８点）、須恵器が１点である。このうち、図示できた遺物は５点である。特に「工」の墨書がある坏が２点（３・４）出土した点が注目される。なお、遺物は北側の砂礫層中にも分布しており、帰属が不明であったがここでは第15号竪穴住居址出土として扱った。

（時期）　９世紀第２～３四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）の所産時期が考えられる。

（補足）　住居址北側部分および東側部分は洪水災害等に起因する砂礫層により削り取られていることが土層観察により確認された。その状況等については第３号竪穴住居址の項に記したとおりである。

（２）土坑

狐原遺跡で検出された土坑は25基であり、いずれも平安時代あるいはそれ以前のものである可能性が高い。しかし、遺構の性格が明瞭なものはなく、ここでは位置および形状・規模についてのみ記述する。

第１号土坑　*（遺構：Fig.22・Pl.4）*	（位置）　Ｉ－11Grid	（形状・規模）	円形、長軸0.6ｍ×短軸0.5ｍ
第２号土坑　*（遺構：Fig.22・Pl.4）*	（位置）　Ｊ－11Grid	（形状・規模）	不整円形、長軸1.0ｍ×短軸0.4～0.55ｍ
第３号土坑　*（遺構：Fig.22・Pl.4）*	（位置）　Ｊ－10Grid	（形状・規模）	円形、直径0.6ｍ
第４号土坑　*（遺構：Fig.22・Pl.4）*	（位置）　Ｉ－11Grid	（形状・規模）	不整円形、長軸0.8ｍ×短軸0.7ｍ
第５号土坑　*（遺構：Fig.22・Pl.4）*	（位置）　Ｉ－11Grid	（形状・規模）	不整円形、長軸0.9ｍ×短軸0.7ｍ
第６号土坑　*（遺構：Fig.24・Pl.4）*	（位置）　Ｋ－12Grid	（形状・規模）	不整円形、長軸0.6ｍ×短軸0.5ｍ
第７号土坑　*（遺構：Fig.24・Pl.4）*	（位置）　Ｋ－12Grid	（形状・規模）	不整円形、長軸0.65ｍ×短軸0.5ｍ
第８号土坑　*（遺構：Fig.24・Pl.4）*	（位置）　Ｌ－12Grid	（形状・規模）	円形、長軸0.8ｍ×短軸0.6ｍ
第９号土坑　*（遺構：Fig.22）*	（位置）　Ｊ－11Grid	（形状・規模）	円形、直径0.65ｍ
第10号土坑　*（遺構：Fig.22）*	（位置）　Ｉ．Ｊ－11・12Grid	（形状・規模）	楕円形、長軸1.2ｍ×短軸1.1ｍ
第11号土坑　*（遺構：Fig.24・Pl.4）*	（位置）　Ｊ－6 Grid	（形状・規模）	楕円形、長軸0.75ｍ×短軸0.45ｍ
第12号土坑　*（遺構：Fig.23・Pl.4）*	（位置）　Ｈ－8 Grid	（形状・規模）	円形、直径0.65ｍ
第13号土坑　*（遺構：Fig.23・Pl.4）*	（位置）　Ｈ－8Grid	（形状・規模）	不整円形、長軸1.1ｍ×短軸0.85ｍ
第14号土坑　*（遺構：Fig.23・Pl.4）*	（位置）　Ｈ－8 Grid	（形状・規模）	不整形、長軸0.6ｍ×短軸0.4ｍ
第15号土坑　*（遺構：Fig.23・Pl.4）*	（位置）　Ｈ－8 Grid	（形状・規模）	不整円形、長軸1.25×短軸1.1ｍ
第16号土坑　*（遺構：Fig.23・Pl.4）*	（位置）　Ｇ.Ｈ－8・Ｇ.Ｈ－7 Grid	（形状・規模）	円形、直径0.65ｍ
第17号土坑　*（遺構：Fig.22・Pl.4）*	（位置）　Ｉ－11Grid	（形状・規模）	円形、直径0.9ｍ
第18号土坑　*（遺構：Fig.22・Pl.4）*	（位置）　Ｉ－10・Ｉ－11Grid	（形状・規模）	楕円形、長軸0.95ｍ×短軸0.654

第19号土坑（遺構：Fig.23・Pl.4）（位置） Ｈ－９ Grid **（形状・規模）**円形、直径0.4ｍ

第20号土坑（遺構：Fig.24・Pl.4）（位置） Ｄ．Ｅ－６・Ｄ．Ｅ－５ Grid**（形状・規模）** 円形、直径0.55ｍ

第21号土坑（遺構：Fig.23・Pl.4）（位置） Ｈ－９ Grid **（形状・規模）** 円形、直径0.3ｍ

第22号土坑（遺構：Fig.23・Pl.4）（位置） Ｈ－９ Grid **（形状・規模）** 円形、直径0.3ｍ

第23号土坑（遺構：Fig.25）（位置） Ｆ－５ Grid **（形状・規模）**楕円形（隅丸方形？）、長軸0.8ｍ×短軸0.7ｍ

第24号土坑（遺構：Fig.25）（位置） Ｆ－５ Grid **（形状・規模）** 不整形、長軸0.5ｍ以上×短軸0.4ｍ

第25号土坑（遺構：Fig.25・Pl.5）（位置） Ｆ－５ Grid **（形状・規模）** 円形、直径0.8ｍ

（３）墓壙

第１号墓壙（遺構：Fig.25・Pl.5）

（位置） 調査区の西側、Ｆ－５ Grid に位置し、他の住居址群などから孤立して存在する。

（重複） 東側の第２号墓壙および西側の第23号土坑と重複し、近接する第24・25号土坑も一群的に存在する。それらも含めた切り合い関係は（旧）第24号土坑・第23号土坑→第23号土坑・第２号墓壙→第１号墓壙（新）である。

（形状） 掘り込みの平面形は隅丸方形を呈し、断面形状は箱形を呈す。掘り込み内には配石（礫を底から側面の順に配り置く方法）により、石室状の空間を作り出している。この空間も掘り込みと同様の形状である。

（規模） 掘り込みは長軸1.52ｍ×短軸1.0ｍ、底面までの深さ0.35ｍを測る。また、配石内は長軸約0.9ｍ×短軸約0.6ｍ、底面（床面の礫上面）までの深さ0.3ｍを測る。

（人骨） 人骨が１体出土している。出土したのは頭部・顎部（歯含む）・脚部のみであり、いずれも残存状況の不良な断片資料である。ただし、それらの墓壙内における分布状況からある程度の埋葬形態が把握できた。人骨は墓壙の長軸方向に沿って、頭部を北東側に置き埋葬されたことが推測される。また、頭部骨・顎部骨の方向から、その姿勢は西向きに横臥する形態であり、脚部骨が主軸方向に対して斜めになることから、膝を折り曲げた姿勢であることも推測される。まとめるならば、「横臥屈葬」の形態とみることができよう。

（遺物） 墓壙内からは副葬品的な遺物の出土はない。ただし、覆土中に３片の土師器小片が混入しており、いずれも９世紀第２～３四半期頃（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）の所産時期が求められる資料である。

（時期） 遺構の時期は出土遺物の年代あるいは層位から平安時代（９世紀第２～３四半期頃）と推測される。ただし、確実な副葬品等からの年代観ではなく未確定ではある。

（補足） １）墓壙内の配石は底面に扁平な礫を敷き詰めた後、側面の礫を数段積み上げたことが確認されている。

２）配石のうち、主軸方向の北東端部は他の礫より群を抜いて大きい礫１点主体で構築されている。

３）頭部骨および顎骨がのるように検出された礫は他の配石構築用の礫とは性格的に異質である。おそらく「石」として、遺体頭部を支えるために置かれたものと推測される。

４）出土した人骨資料については茂原信生氏（京都大学霊長類研究所）に分析を委託し、玉稿を賜った。
付編２「狐原遺跡出土の人骨」を参照されたい。

第２号墓壙（遺構：Fig.25・Pl.5）

（位置） 調査区の西側、Ｆ－５ Grid に位置し、他の住居址群などから孤立して存在する。

（重複） 西側の第１号墓壙および東側の第25号土坑と重複し、近接する第23・24号土坑も一群的に存在する。切り合い関係は第１号墓壙の項に記述したとおりである。

（形状） 平面形は楕円形を呈し、断面形状は皿形を呈す。

（規模） 長軸（南北）1.3ｍ×短軸（東西）1.1ｍ、底面までの深さ0.2ｍを測る。

（人骨） 人骨が１体出土している。出土したのは頭部（歯含む）・脚部のみであり、いずれも残存状況の不良な断片資料である。ただし、それらの墓壙内における分布状況からある程度の埋葬形態が把握できた。人骨は墓壙の長軸方向に沿って、頭部を北東側に置き埋葬されたことが推測される。また、頭部骨と脚部骨の位置関係方向から姿勢は横臥（西向きか？）する形態であり、同理由から膝を折り曲げた姿勢であることも推測される。第１号墓壙同様に「横臥屈

葬」の形態とみることができよう。

（遺物） 墓壙内からは副葬品的な遺物の出土はなく、他の出土遺物も全くない。

（時期） 遺構の時期は切り合い関係のある第１号墓壙の年代より古い時期であることまでしか確認できない。ただし、遺構の性格および埋葬形態の類似性から、それほど時間差のない時期（あるいは第１号墓壙の構築者が第２号墓壙の存在を認識している程度の時間差）の所産であることが推測される。

（補足） １）出土した人骨資料については茂原信生氏（京都大学霊長類研究所）に分析を委託し、玉稿を賜った。
付編２「狐原遺跡出土の人骨」を参照されたい。

（４）溝

第１号溝（遺構：Fig.26・Pl.5　遺物：Fig.43～44・Pl.10/１５・Tab. ４）

（位置） 調査区の南端、Ｏ．Ｐ－15・Ｎ．Ｏ．Ｐ－14・Ｍ．Ｎ－13・Ｌ．Ｍ－12・Ｌ．Ｍ－11・Ｌ．Ｍ－10・Ｋ．Ｌ．Ｍ－９・Ｋ．Ｌ－８ Grid に位置する。本遺跡における集落の南端部に横たわるかのような位置である。

（重複） 他の遺構との重複関係はないが、Ｏ－14Grid 内においてＯ－14 壺と近接する。

（形状） 南東から北西方向へ向かって蛇行しつつ、幅が広まる平面形状を呈す。断面形状は皿形で、南東から北西方向に向かって徐々に深くなる形状を呈す。

（遺物） 覆土内からは全体的にまばらに遺物が出土したが、唯一Ｌ－８Grid周辺では礫の集中と併せて集中的に遺物が出土した。Ｌ－８ Grid で出土した遺物は土師器のみであり、坏・皿・甕・置カマドが見られた。特に置カマド形土器（１・２・３）は礫集中の上からまとまって出土しており、一括して廃棄されたような状況が認められた。

（時期） ９世紀第２～３四半期（甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期）前後の時期が考えられる。

（補足） １）第１号溝が人工的な遺構であるか否かを明言することはできない。ただし、溝の底面近くまで遺物が分布していることなどから、本遺跡の竪穴住居群が集落として機能していた時期に「溝」として存在していたことは推測できる。溝の性格については、集落端部に位置していることから集落区画・防災などの機能がが想起されるが、現状では不明とせざるを得ない。なお、第１号溝に水の流れの痕跡は恒常的なもの、一時的なものとも認められていない。

２）第１号溝の北西端部以降については、その末端が明瞭には捉えられなかった。おそらく、調査区南側から西側に延びる砂礫層に切られる形で消滅しているものと考えられるが不明である。

（５）炭化物集中区

Ｊ－７炭化物集中（遺構：Fig.27・Pl.5　遺物：Fig.43～44・Pl.10・Tab. ４）

（位置） 調査区の南西側、Ｊ－７ Grid に位置する。

（重複） 他の遺構との重複関係はない。

（形状） 掘り込み等は認められないが、平面形が不整形の範囲に炭化物の濃密な堆積分布が認められ、その周辺に同一時期と考えられる土師器等の遺物が分布していたものである。遺物と炭化物集中の関係は不明である。

（規模） 炭化物分布は長軸 1.38 m×短軸 1.28 m程度の範囲を測り、堆積層は最大で８ cm を測る。

（遺物） 炭化物の堆積層およびその周辺からは皿（１）・坏（２・３・４）・鉄製品（５・６）が出土した。特に鉄製の板状製品はその形状が特異であり注目される。平面形は短冊状の薄い鉄板であるが、先端部（実測図上）は丸みを帯びた山形に加工され、基部と考えられる部分（実測図下）は両側からの抉りにより細く加工されている。その形状からは何かに差し込み用いたかのように推察されるが明らかではない。同様な形状・規模の鉄製品には神奈川県川崎市細山坂東谷遺跡・栃木県小山市寺野東遺跡等に出土事例のある「墓誌状鉄製品」があるが、類似するのみで確定的とは言えない状況である。なお、出土状況は基部を下にして、斜め方向に傾いた状態であり、下端部は炭化物層より下位まで到達していた。

（時期） 出土遺物の時期は10世紀中葉～末（古代末期土器編年第１期）前後の時期が考えられるが、炭化物集中の時期もこれに等しいものと考えられる。

（補足）　1）炭化物に混じり出土したのは皿（1）・鉄釘（5）である。また、骨片等は全く出土していない。

2）鉄製の板状製品（6）については出土段階で「墓誌」の可能性が想起された。そのため、鈴木稔氏（帝京大学山梨文化財研究所）のご協力を頂き、X線写真撮影を行なったが、象眼・線刻等は全く確認されなかった。なお、遺物表面での墨書・墨痕等の観察も腐食等により不可能である。

（6）単独出土の壺

O－14壺（遺構：Fig.28・Pl.5　遺物：Fig.45・Pl.10・Tab. 4）

（位置）　調査区の南西側、O－14Grid に位置する。

（重複）　他の遺構との重複関係はないが、南側に第1号溝が存在する。

（形状）　掘り込み等は全くなく、壺1点が口縁部を北側に横倒し割れた状態で出土したものである。単なる遺構外出土遺物として報告することも可能だが、意図的に割られたと見られる痕跡が認められたため遺構として報告するものである。出土状況からは横倒しに置いた状態の壺の肩部に一撃を加え破砕したことが推測される。

（遺物）　灰釉陶器の壺（1）に残る破砕のための打撃点とそこから派生する割れの状況についてはFig.28下段に図示したとおりであり、打撃点から放射状に割れていき、収束していく様子が観察される。

（時期）　出土遺物の時期は瀬戸美濃窯編年でいう黒笹第14号窯期（K－14：9世紀前半～）の所産時期が考えられる。

（補足）　遺物に残る打撃点について「意図的」との解釈をしたが、埋没過程における自然発生的な結果と厳密に区別することはできない。よってあくまで推測の域を出ていない可能性も高い。また、仮に「意図的」であったとしてもその意味を明らかにできるような伴出遺物や遺構等は皆無であり、不明とせざるを得ない。

第2節　遺構外出土の遺物

狐原遺跡の発掘調査において発見された遺構外出土遺物は34,380点である。その所産時期は古墳時代後期から近代までにおよぶが、大半は平安時代に属するものである。ここでは各器種ごとにその概要を記載し、計測値・出土位置等の各種データは章末の一覧表に譲る。なお、平安時代に属する各器種の調査区内におけるおおまかな分布状況はFig.57・58にあるとおりであり、遺構群（竪穴住居址ほか）と遺構外出土遺物分布域の関係を示している。また、墨書土器の分布状況についてはその一部を第V章中の「狐原遺跡における墨書土器の平面分布図」に示したとおりである。

（1）古墳時代（Fig.45・Pl.10・Tab. 4）

土師器・石製模造品（遺構外－1．2　Fig.45・Tab. 4・Pl.10）

古墳時代後期の坏（1）と石製模造品（2）の各1点が出土しているが遺構等は確認されておらず、周辺地域からの流入と見るほかない。坏（1）は須恵器模倣坏（体部と口縁部の境に稜線が明瞭に残り、体部が浅いタイプ）であり、6世紀中葉前後の所産時期が考えられる。

（2）平安時代（遺構外3～245　Fig.45～56・Pl.10～18・Tab. 4～9）

土師器（坏形土器）（遺構外3～36　Fig.45～46・Pl.10/11・Tab. 4～5）

土師器の坏のうち墨書のないものを一括するが、部位的に墨書部分が損なわれているものもあると推測される。大半は甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期（9世紀第2～3四半期頃）に属するが、一部には甲斐型土器編年第XⅡ期（10世紀第2～3四半期頃）に属すると考えられる資料（22・26他）や古代末期土器編年第1期（10世紀中葉～末）に属すると考えられる資料（13・14・26他）も含まれる。

土師器（坏形土器／墨書土器）（遺構外37～154　Fig.46～49・Pl.11/16～18・Tab.5～7）

土師器の坏のうち墨書のあるものを一括するが、墨痕がごく僅かに残る資料も取り上げたため器形・所産時期などが不明なものが多い。また、同様に文字内容を把握できる資料も少なく、「工」(45)・「仁」(51)・「乙」(52)・「千」(66)・「午」(83)・「百」(96)・「内」(113)・「山中」(134)・「好」(142)・「　(午？)」(151)・「　」(152)・「　」(153) などが字形確認できたのみである。また、墨書のある部位は大半が底部の外面であり、その他には体部の外面にあるものが僅かに存在するのみである。

墨書のある土師器の坏の時期は小片資料が多く明瞭ではないが、甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期頃（９世紀第２～３四半期）に属するものが大半であると考えられる。ただし、甲斐型土器編年第ＸⅡ期（10世紀第２～３四半期）に属すると考えられる土器底部に記号状の墨書がある資料（146）も一部ある。なお、古代末期第Ⅰ期以降の所産と考えられる坏形土器に墨書があるものは、本遺跡では全く見られない。

土師器（坏形土器／線刻土器）（遺構外 155～158　Fig.50・Pl.11/18・Tab. 7～8）

土師器の坏のうち線刻のあるものを一括するが、文字か記号か判別できないものが多い。なお、焼成前の線刻とみられるのは（156・157）、焼成後とみられるのは（155・158）であるが判別は困難であり、あくまで可能性としておく。

土師器（坏形土器／墨書＋線刻土器）（遺構外 159～160　Fig.50・Pl.11/18・Tab. 8）

土師器の坏のうち墨書と線刻が同一個体にあるものを一括する。特に（160）は墨書と線刻が重なっており、線刻の後に墨書されたことが観察できる。ただし、焼成と線刻の前後関係は不明である。また、（160）の墨書文字である「山中」は、文字だけの資料（134）と、線刻だけの資料（157）があり、墨書と線刻の関係を暗示しており興味深い。なお、（160）の所産時期は甲斐型土器編年第Ⅷ期（９世紀第２四半期）頃であろうと考えられる。

土師器（高台付坏形土器）（遺構外 161　Fig.50・Pl.11・Tab. 8）

土師器の坏のうち高台のあるものを一括する。（162）の高台は削りにより作り出されているが、底部外面と高台下端はほぼ水平である。また、体部内面には放射状暗文が施される。

土師器（高台付坏形土器）（遺構外 164　Fig.50・Pl.18・Tab. 8）

土師器の高台付坏のうち墨書あるものを一括する。（16４）は底部外面（高台内）に墨書がある。

土師器（高台付鉢形土器）（遺構外 162/163　Fig.50・Pl.11・Tab. 8）

土師器の鉢のうち高台のあるものを一括する。高台は削りにより作り出されているが、底部外面と高台下端はほぼ水平である。（162・163）とも内面が黒色処理され、（162）は内面に菊花状の暗文が施される。

土師器（鉢形土器）（遺構外 205　Fig.53・Pl.12・Tab. 8）

土師器の鉢のうち高台のないものを一括する。（205）は内面が黒色処理される。なお、底部外面の端部に極めて弱い条線が巡るが、これを「台」（あるいは高台を意識したもの）とみるならば、高台付鉢に一括されるものである。

土師器（皿形土器）（遺構外 165～180　Fig.50～51・Pl.12・Tab. 8）

土師器の皿のうち墨書のないものを一括する。大半は甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期頃（９世紀第２～３四半期）に属するが、一部には古代末期土器編年第１期（10世紀中葉～末）に属すると考えられる資料（165・175・177～179他）も含まれる。なお、古代末期に属すると考えられるこれらの資料はいずれが体部外面・底部外面とも削り調整がない特徴がある。

土師器（皿形土器／墨書土器）（遺構外 181～198　Fig.51～52・Pl.12/18・Tab. 8）

土師器の皿のうち墨書のあるものを一括するが、墨痕がごく僅かに残る資料も取り上げたため器形・所産時期などが不明なものが多い。また、同様に文字内容を把握できる資料も少なく、「西」（185）・「夷」（187）・「今」（194）などが字形確認できたのみである。また、墨書のある部位は底部の外面が多く、その他には体部の外面にあるものが存在する。なお、これらの墨書のうちでも「夷」（187）は関東近県でも極めて稀な出土事例である。

墨書のある土師器の皿形土器の時期は小片資料が多く明瞭ではないが、甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期頃（９世紀第２～３四半期）に属するものが大半であると考えられる。なお、古代末期第Ⅰ期以降の所産と考えられる皿形土器に墨書があるものは、本遺跡では全く見られない。

土師器（皿形土器／線刻土器）（遺構外 199～201　Fig.52・Pl.18・Tab. 8）

土師器の坏のうち線刻のあるものを一括するが、文字か記号か判別できないものが多い。なお、焼成前の線刻とみられるのは（200・201）、焼成後とみられるのは（199）である。

土師器（蓋形土器）（遺構外 199～201　Fig.53・Pl.12・Tab. 8）

土師器の蓋を一括する。摘みの付く（203）は甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期頃（９世紀第２～３四半期）に、摘みの付かない（202）は甲斐型土器編年第ＸⅠ期頃（９世紀末）頃の所産時期が考えられる。

土師器（蓋形土器／墨書土器）（遺構外 204　Fig.53・Pl.18・Tab. 8）

土師器の蓋のうち墨書のあるものを一括する。(204) は体部内面の口縁端部に近い部分に墨書が認められる。なお、蓋に墨書があるのは本遺跡ではこの他に第6号竪穴住居址に1点あるのみである。

土師器（甕形土器）（遺構外 206～212　Fig.53・Pl.12・Tab. 8～9）

土師器の甕を一括する。口縁部あるいは底部の破片資料のみである。甲斐型土器編年第Ⅷ～Ⅸ期頃（9世紀第2～3四半期）に属するものと考えられる。

土師器（置カマド形土器）（遺構外 21 4～215　Fig.54・Pl.12・Tab. 9）

土師器の置カマドを一括し、2点とも置カマド焚口部の鍔部破片資料である。破片資料のため詳細な時期は不明であるが、甲斐型土器の甕系統と同一の特徴（外面縦方向の刷毛調整・内面横方向の刷毛調整・胎土他）が認められる。よって、少なくとも平安時代の所産であることは間違いないが。

灰釉陶器（遺構外 216～217　Fig.54・Pl.12・Tab. 9）

灰釉陶器を一括する。(217) は碗であり、内外面ともに灰白色の灰釉が施される。外反する口縁部や角張る高台部の形態あるいは施釉方法などから、瀬戸美濃窯編年でいう黒笹第14号窯段階（K－14：9世紀前半～）の所産時期が考えられる。(217) は壺形土器であり、底部～体部下半のみの資料である。高台部の形態から黒笹14号窯段階（K－14：9世紀前半～）の所産時期が考えられる。

須恵器（遺構外 218～242　Fig.54～55・Pl.12/13・Tab. 9）

須恵器を一括する。(224) (225) は突帯付四耳壺の突帯部破片である。両者とも突帯部は断面三角形であり、(225) には耳部（D字状断面）も僅かに残存する。(226) ～ (242) は器種不明ではあるが、突帯付四耳壺の破片である (225) と同一地点から出土しており同一個体である可能性が高い。これらの破片は外面には平行叩き目、内面には当て具痕跡（一部は同心円状）が残存する。

須恵器（墨書土器）（遺構外 243　Fig.56・Pl.18・Tab. 9）

須恵器のうち墨書のあるものを一括する。本遺跡では墨書のある須恵器は坏形土器 (243) 1点のみであり、文字内容は判別できない。無高台、底部糸切り後無調整のタイプであるが、所産時期は不明である。

土製品（遺構外 244～245　Fig.56・Pl.13・Tab. 9）

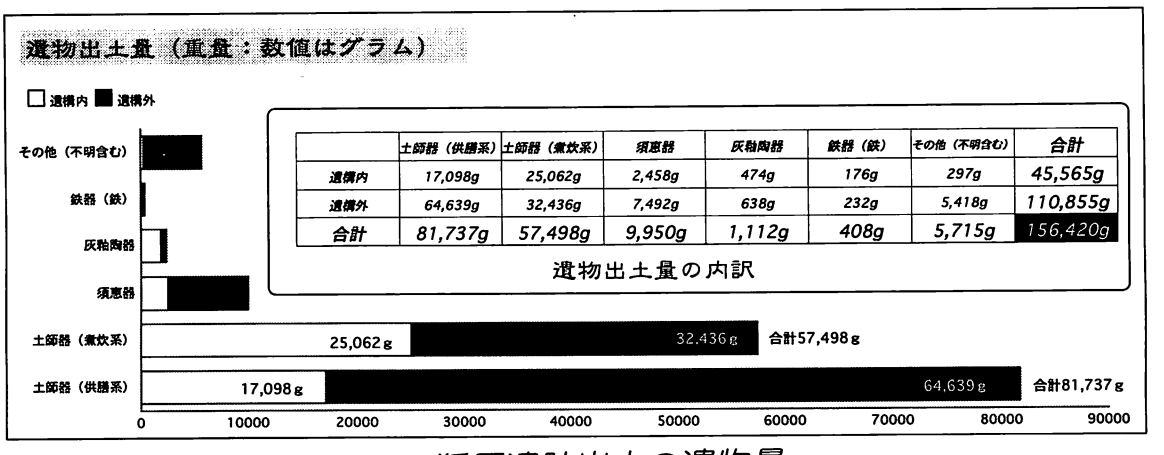
土製品を一括する。(244) は手捏ねにより成形された握拳大で三角形状の粘土塊であり、焼成もなされている。用途等は全く不明であり類例も見ない。(245) は小円盤状の土製品であり、形状からは土錘としての用途が推測される。

鉄製品（遺構外 246～264　Fig.56・Pl.13/14・Tab. 9～10）

鉄製品を一括する。用途不明なものも多いが、小規模な刃先的なもの (247・251)、釘 (250・259・260・261)、刀子 (253・254・256・262・263)、火打金 (255) などがある。

（3）その他（遺構外 265～270　Fig.56・Pl.14・Tab.10）

平安時代以外の遺物は6点のみ図示した。(265) は土師質土器であり、時期は中世以降と推測される。(206) は鉄製品であり、腐食が著しいがおそらく2点以上が付着した鉄銭（寛永通宝か？）と考えられる。(267) (268) は銅製の煙管の吸口部であり、時期はいずれも江戸時代末期以降である。(269・270) は近代以降に流通した銭貨であり、いずれも銅銭である。



	土師器（供膳系）	土師器（煮炊系）	須恵器	灰釉陶器	鉄器（鉄）	その他（不明含む）	合計
遺構内	17,098g	25,062g	2,458g	474g	176g	297g	45,565g
遺構外	64,639g	32,436g	7,492g	638g	232g	5,418g	110,855g
合計	81,737g	57,498g	9,950g	1,112g	408g	5,715g	156,420g

遺物出土量の内訳

Tab.11　狐原遺跡出土の遺物量

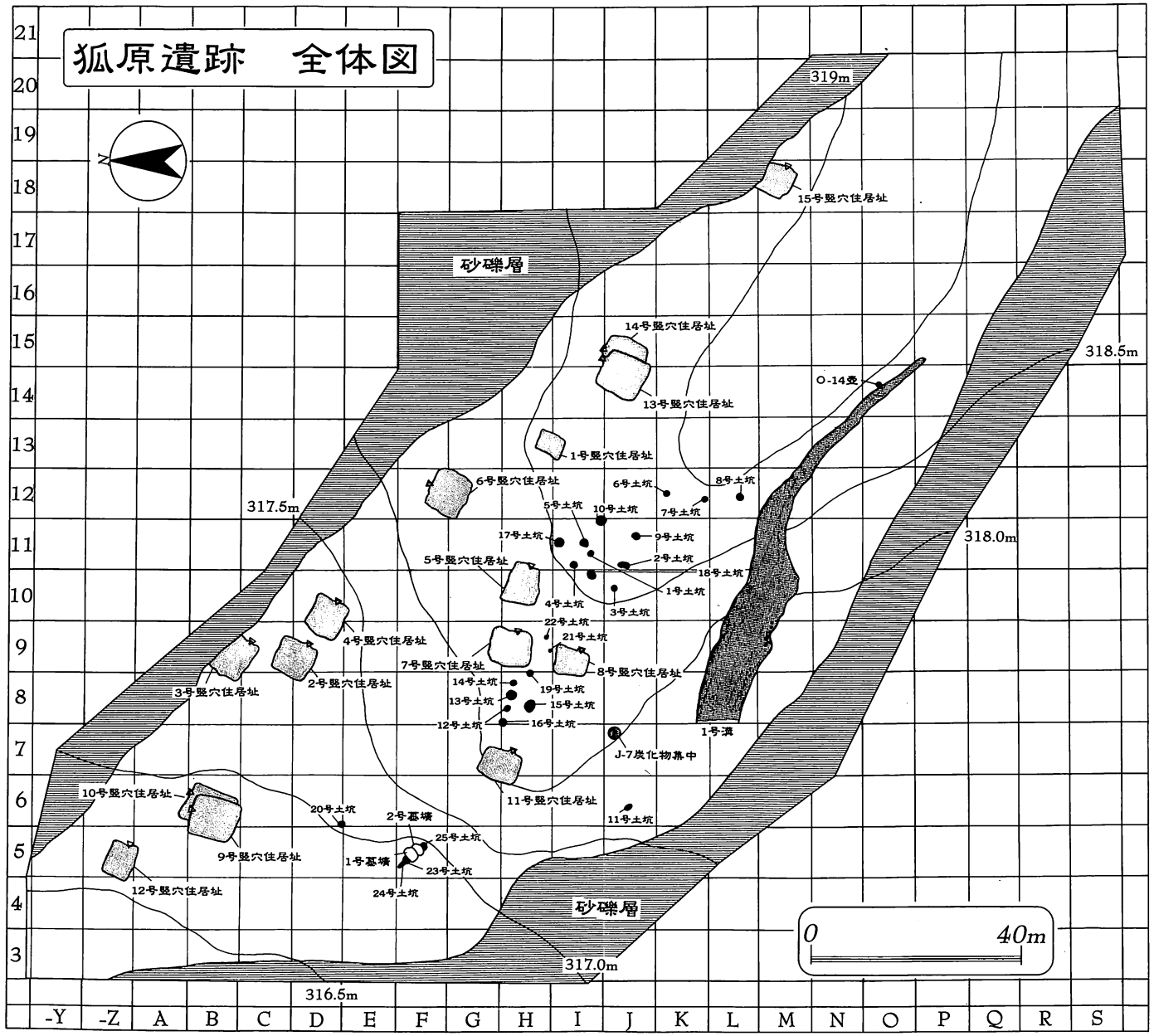


Fig. 5　狐原遺跡全体図

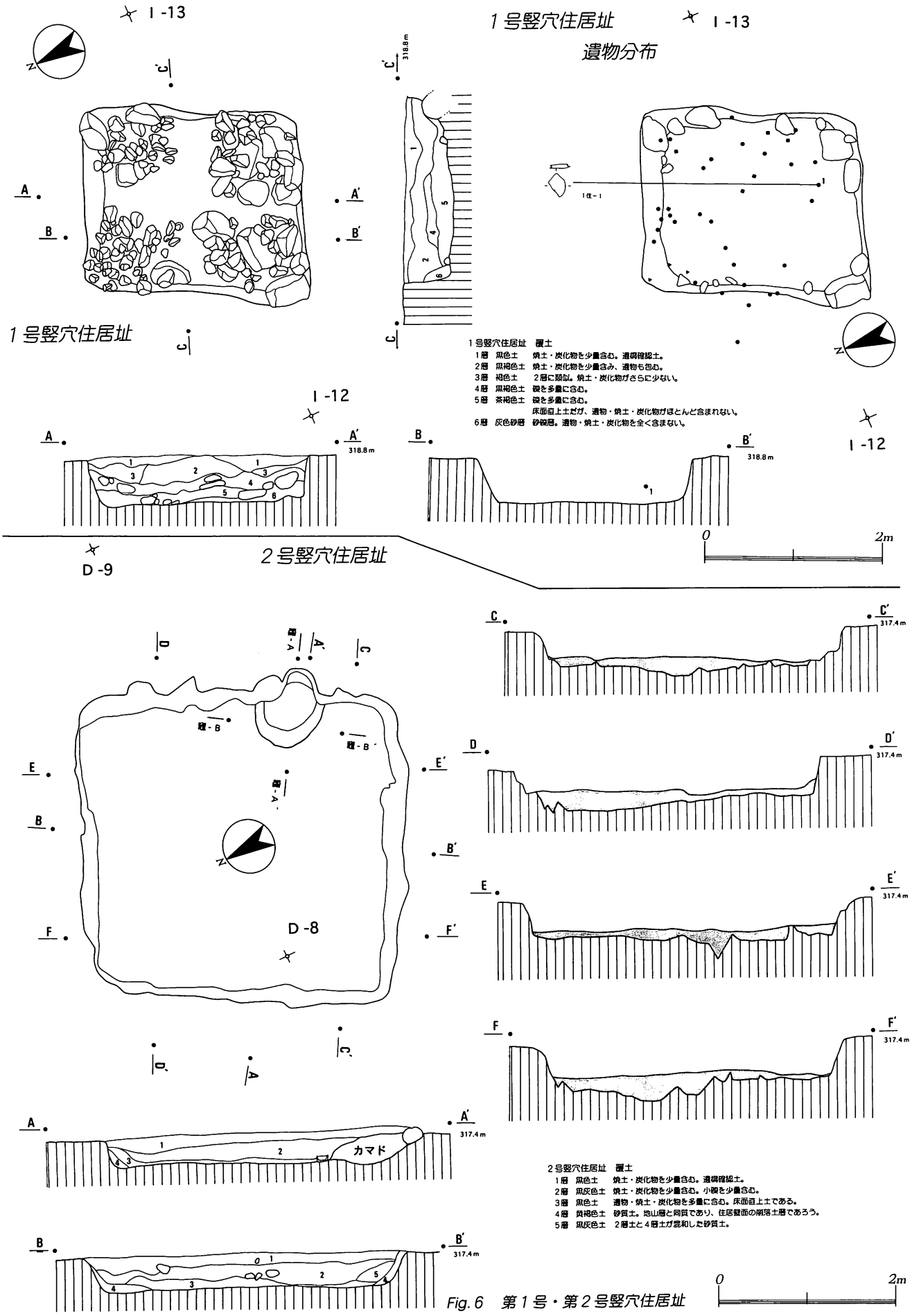
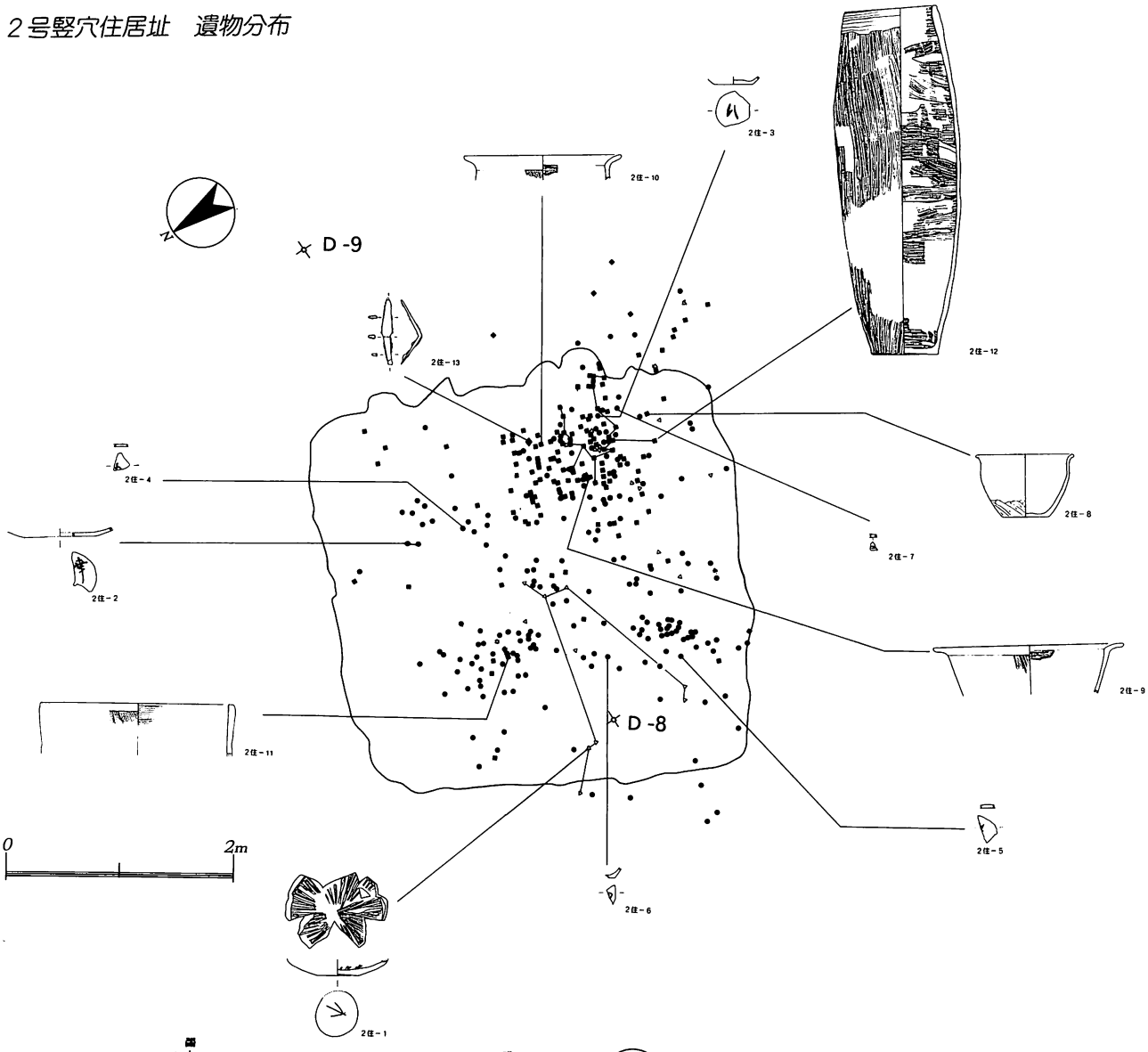
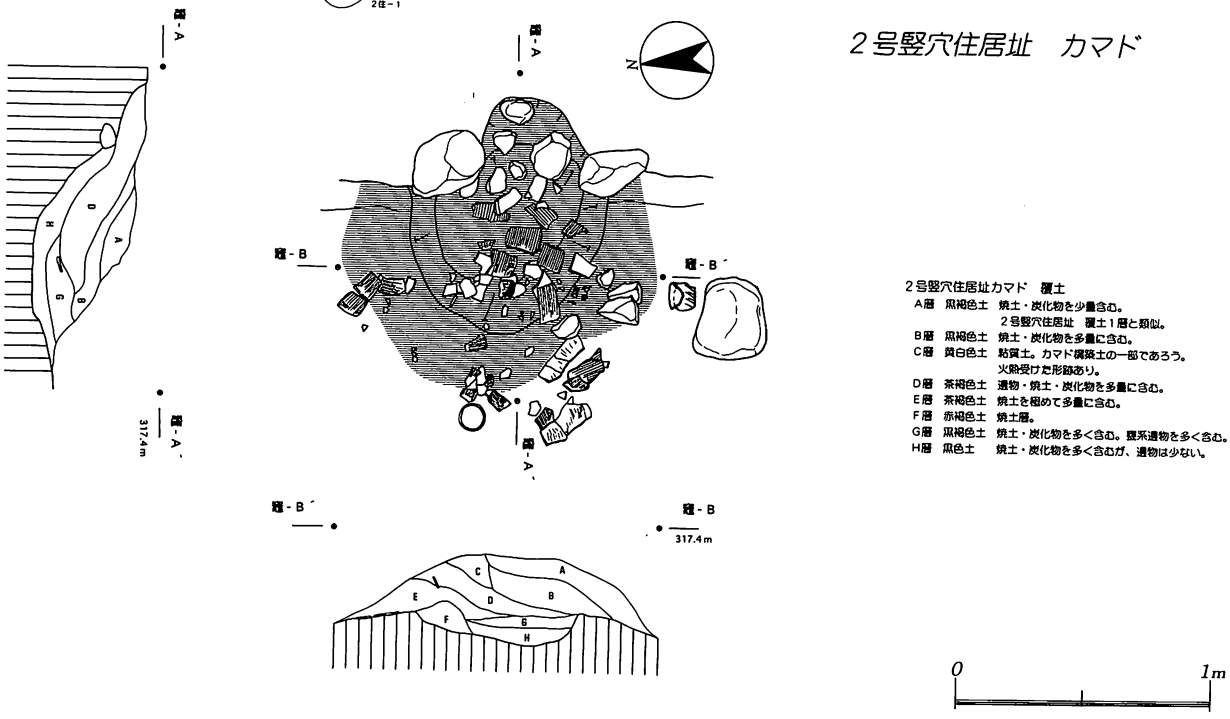


Fig. 6　第1号・第2号竪穴住居址

2号竪穴住居址　遺物分布



2号竪穴住居址　カマド



2号竪穴住居址カマド　覆土

A層　黒褐色土　焼土・炭化物を少量含む。
　　2号竪穴住居址　覆土1層と類似。
B層　黒褐色土　焼土・炭化物を多量に含む。
C層　黄白色土　粘質土。カマド構築土の一部であろう。
　　火熱受けた形跡あり。
D層　茶褐色土　遺物・焼土・炭化物を多量に含む。
E層　茶褐色土　焼土を極めて多量に含む。
F層　赤褐色土　焼土層。
G層　黒褐色土　焼土・炭化物を多く含む。鹿系遺物を多く含む。
H層　黒色土　焼土・炭化物を多く含むが、遺物は少ない。

Fig. 7　第2号竪穴住居址

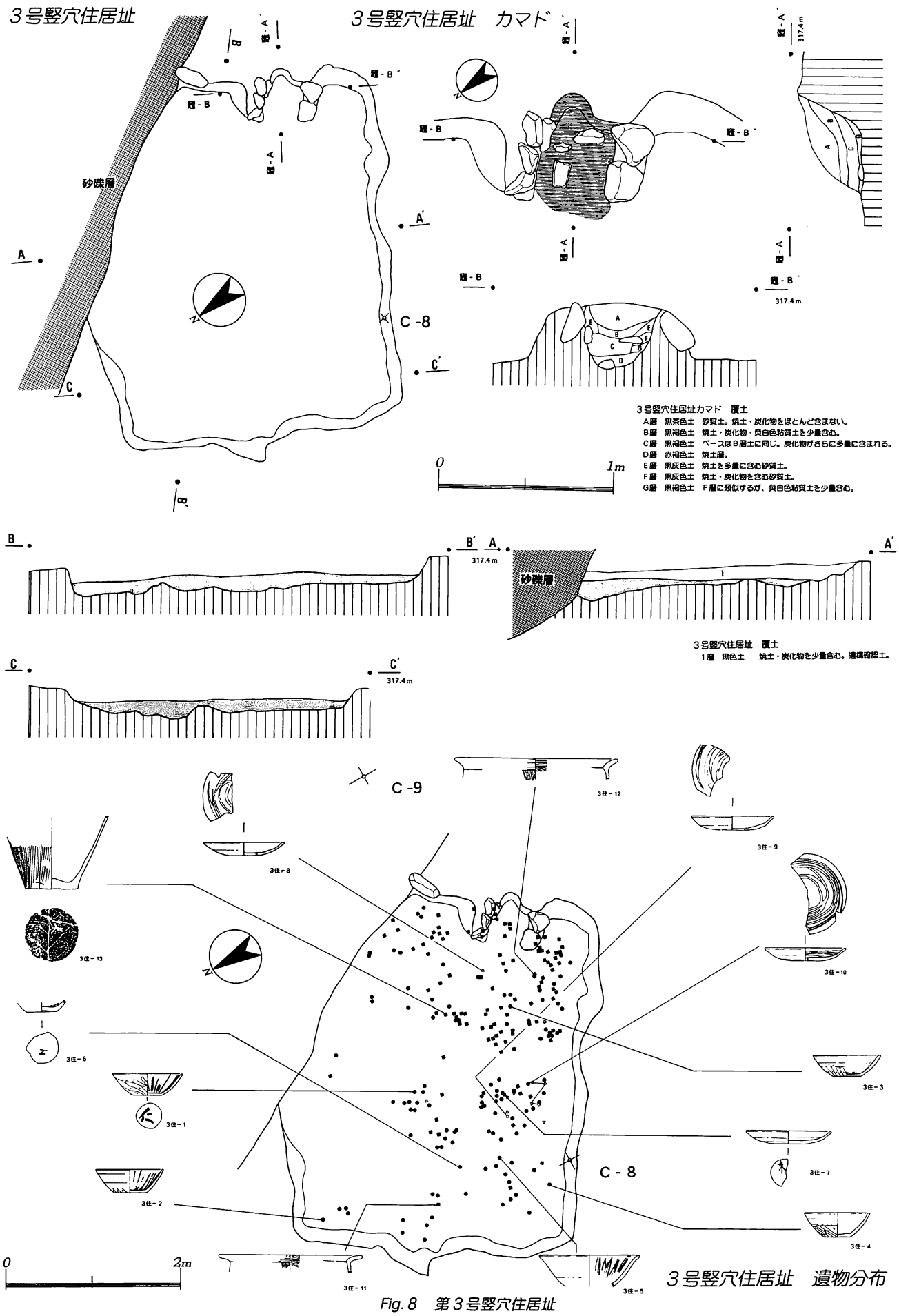


Fig. 8　第3号竪穴住居址

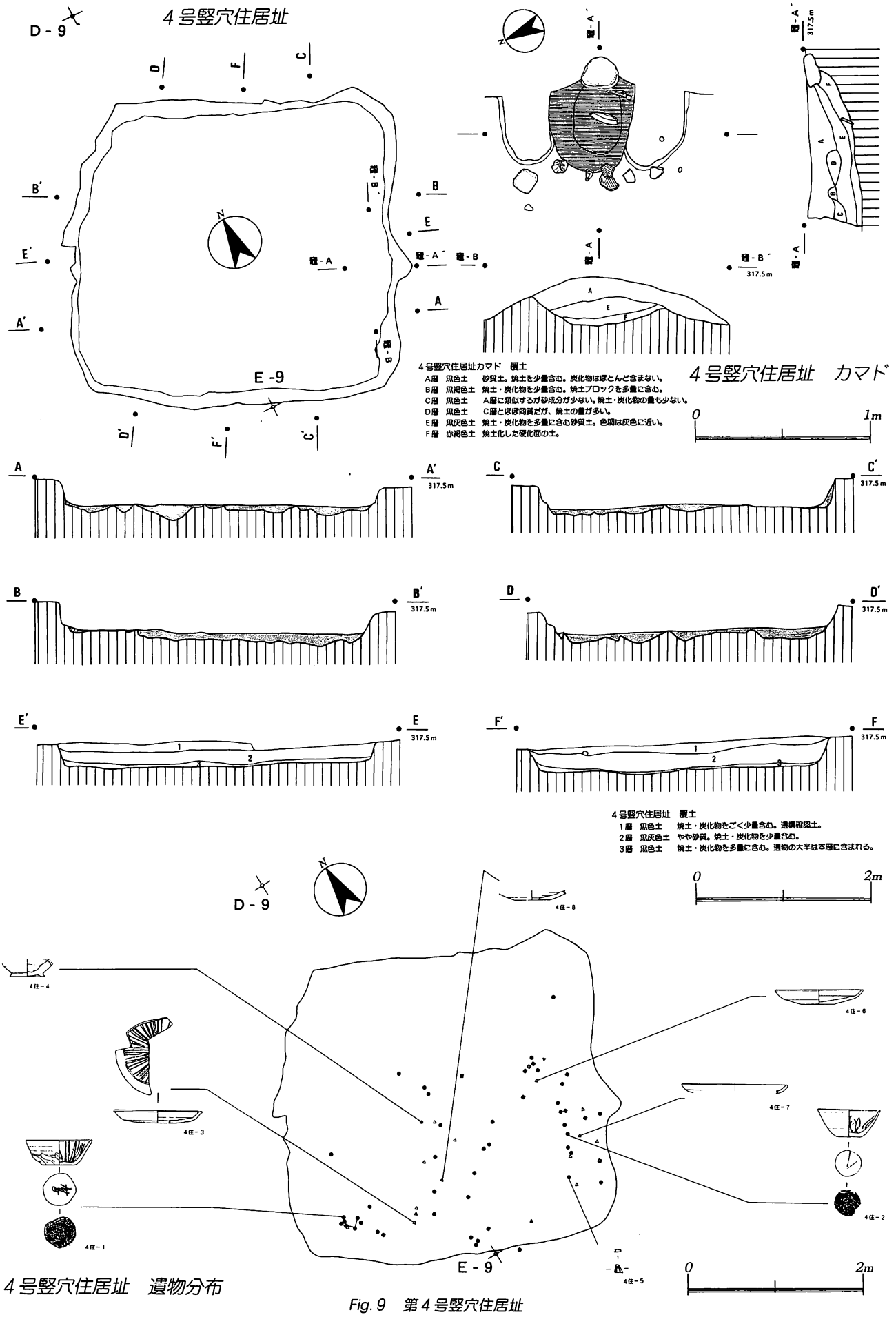


Fig. 9　第4号竪穴住居址

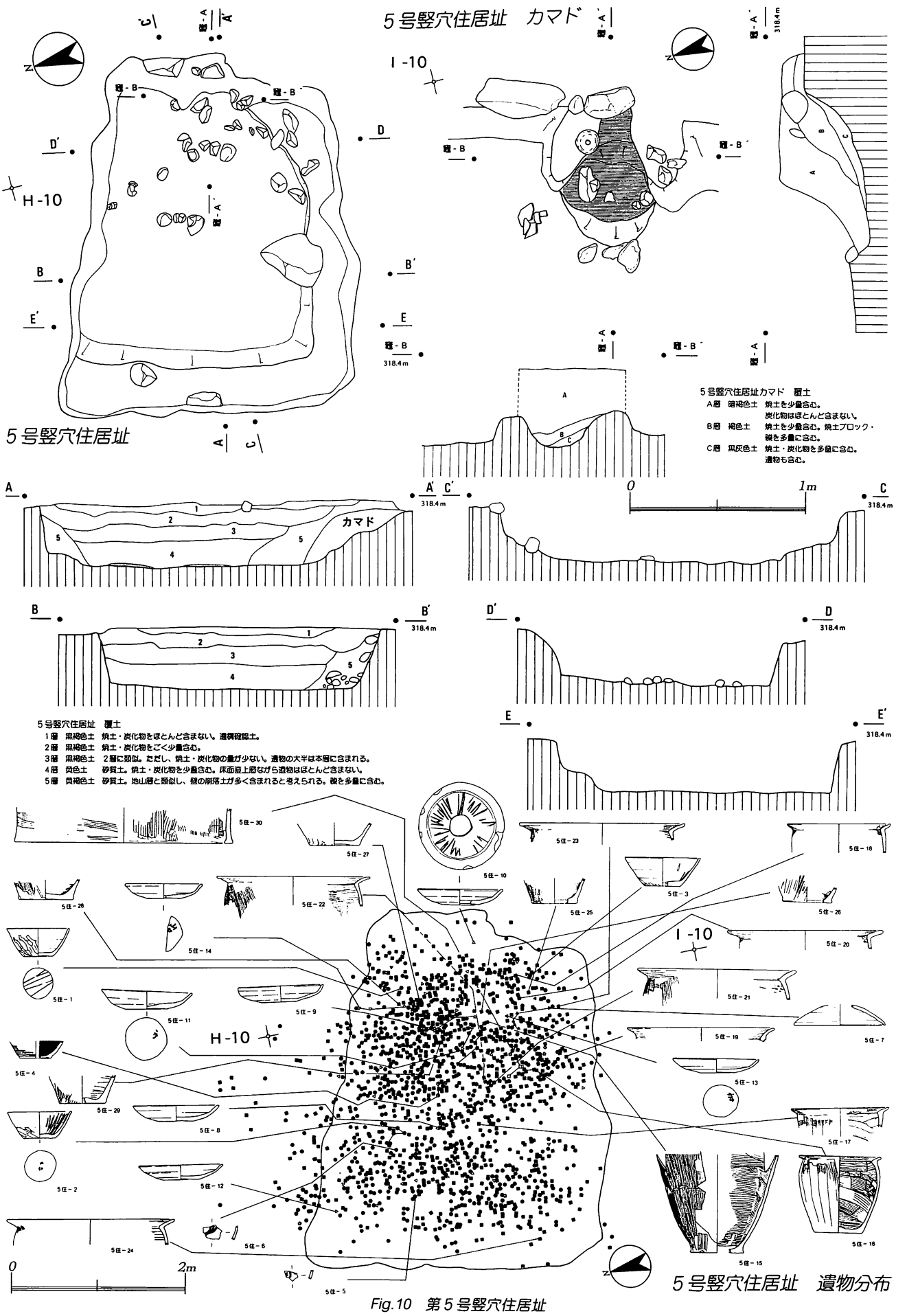


Fig.10　第5号竪穴住居址

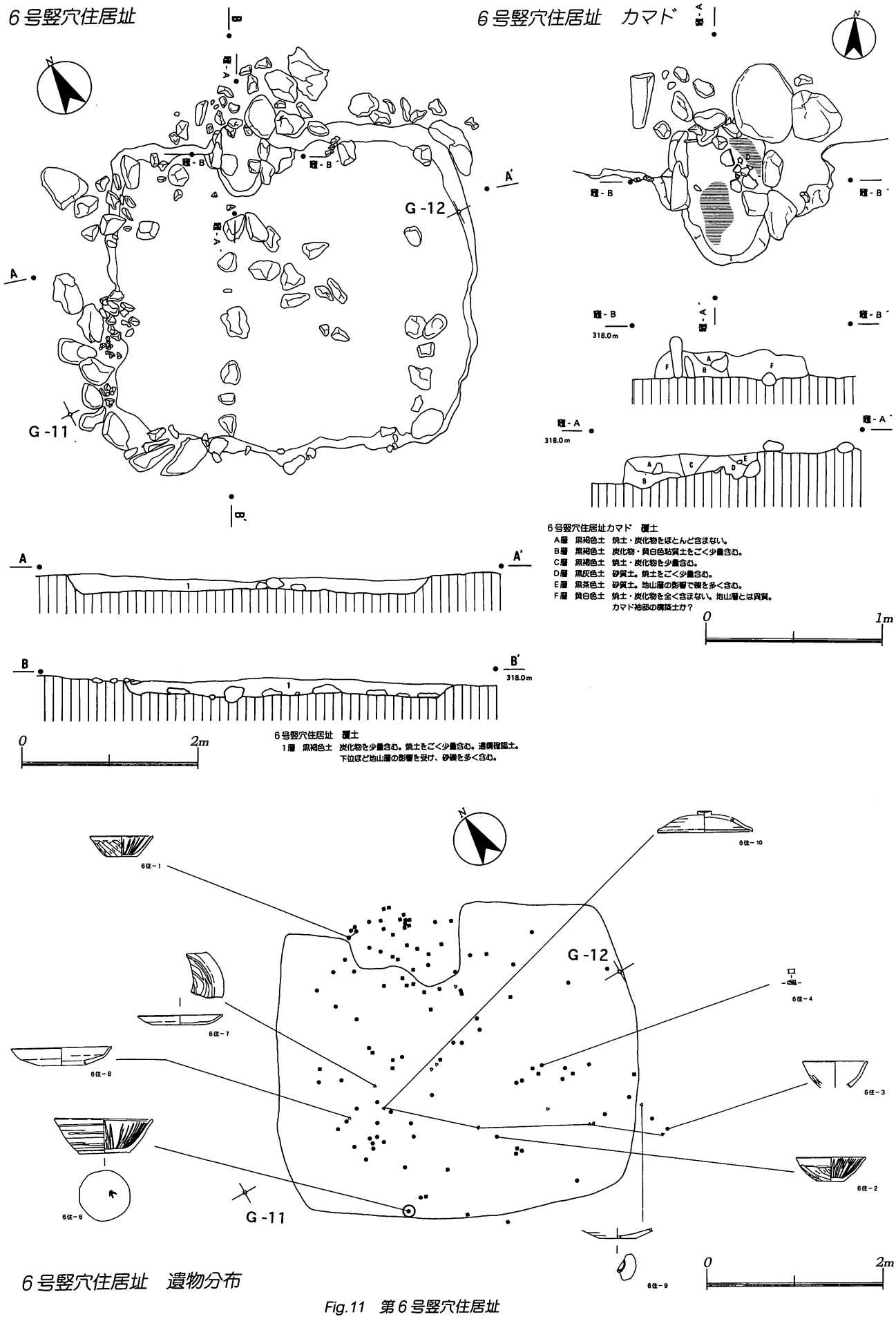


Fig.11　第6号竪穴住居址

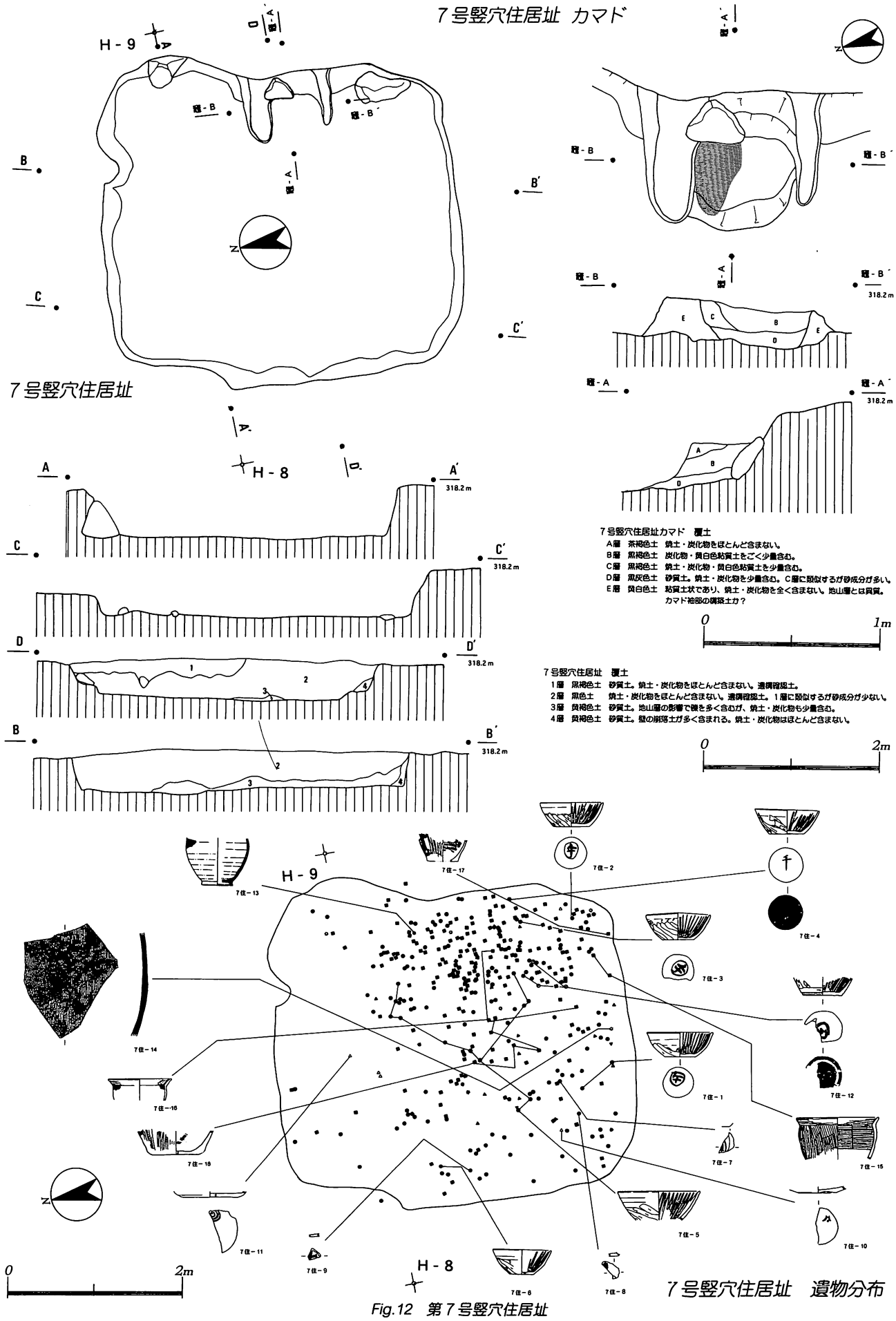


Fig.12 第7号竪穴住居址

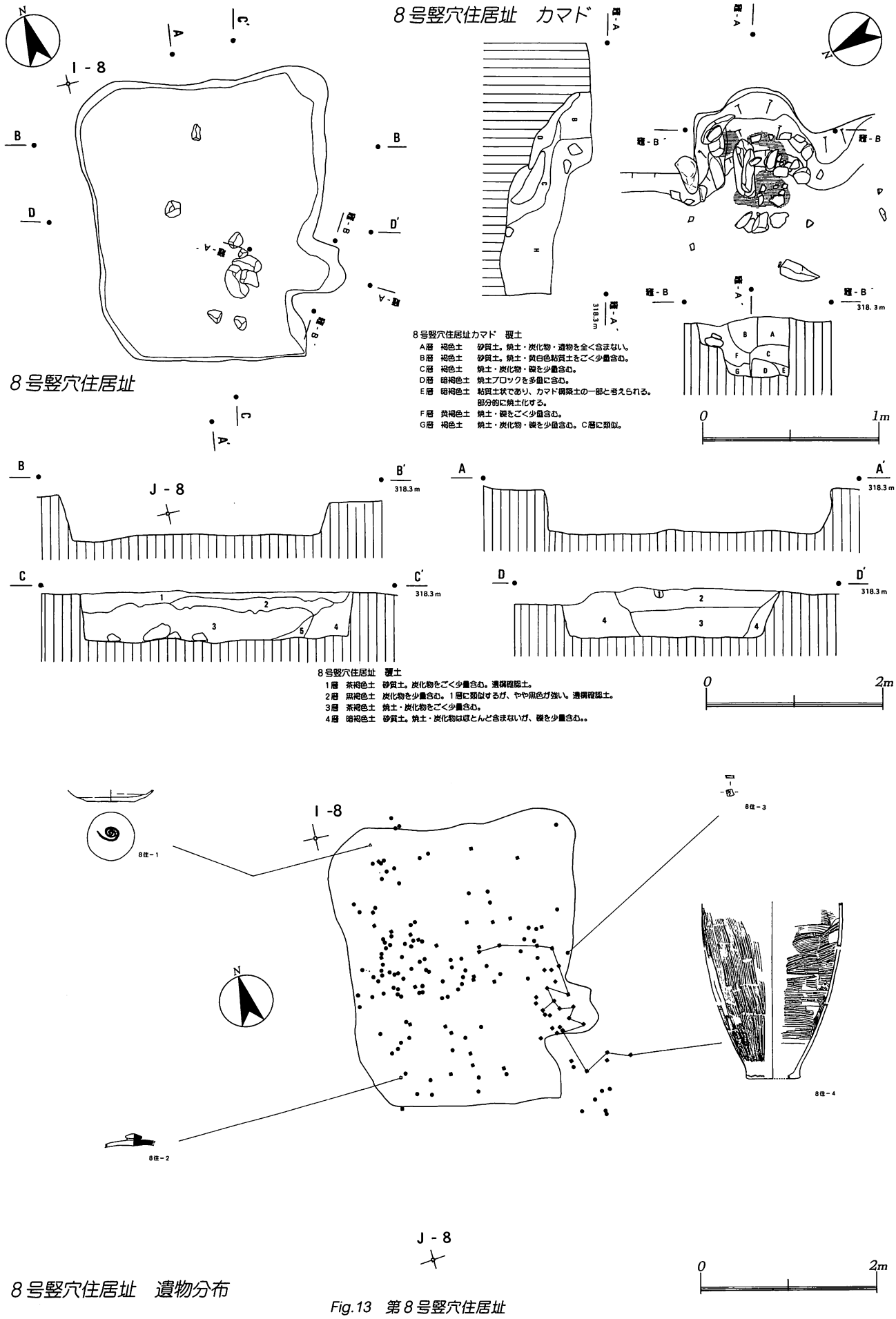


Fig.13　第8号竪穴住居址

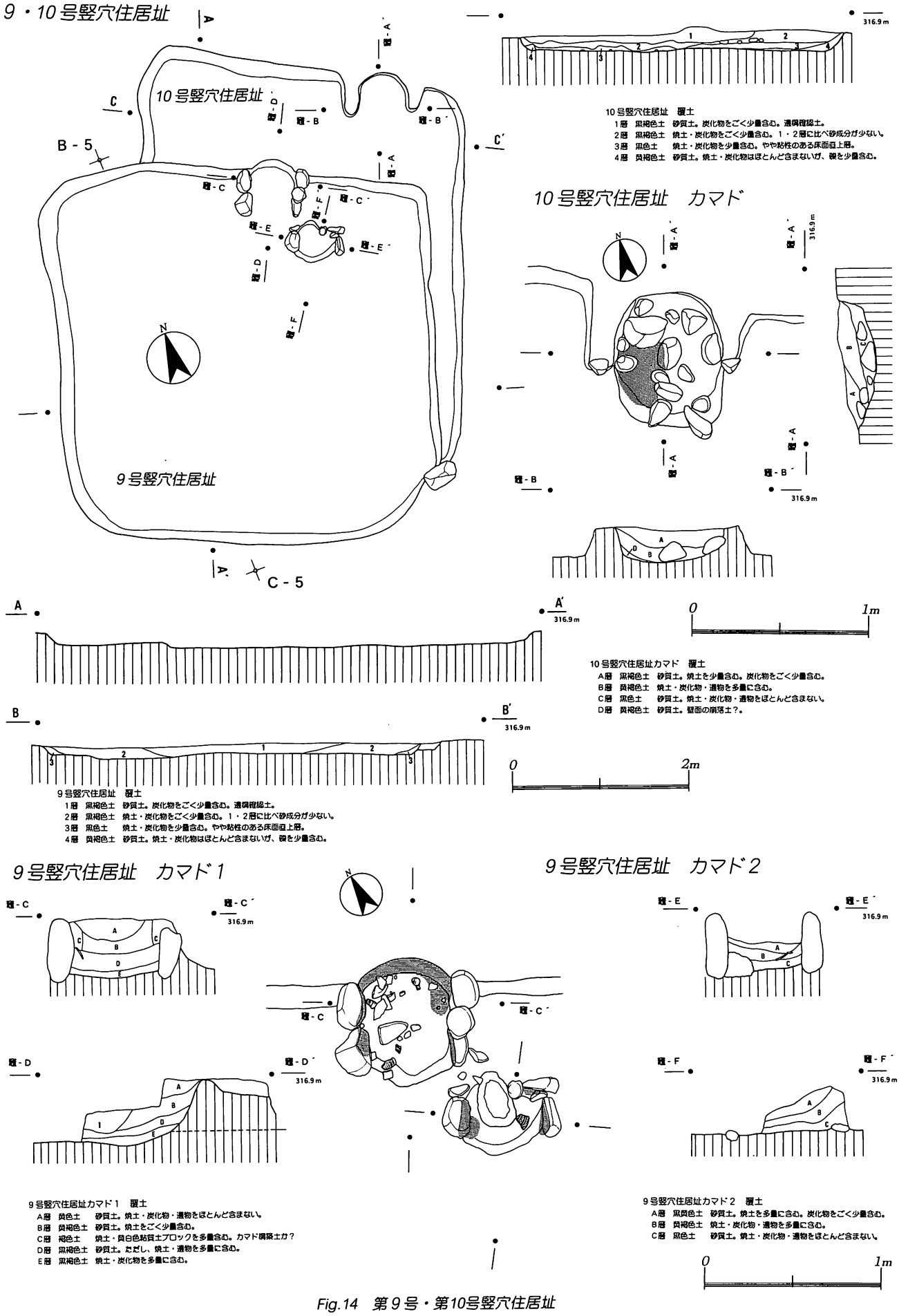


Fig.14　第9号・第10号竪穴住居址

9・10号竪穴住居址　遺物分布

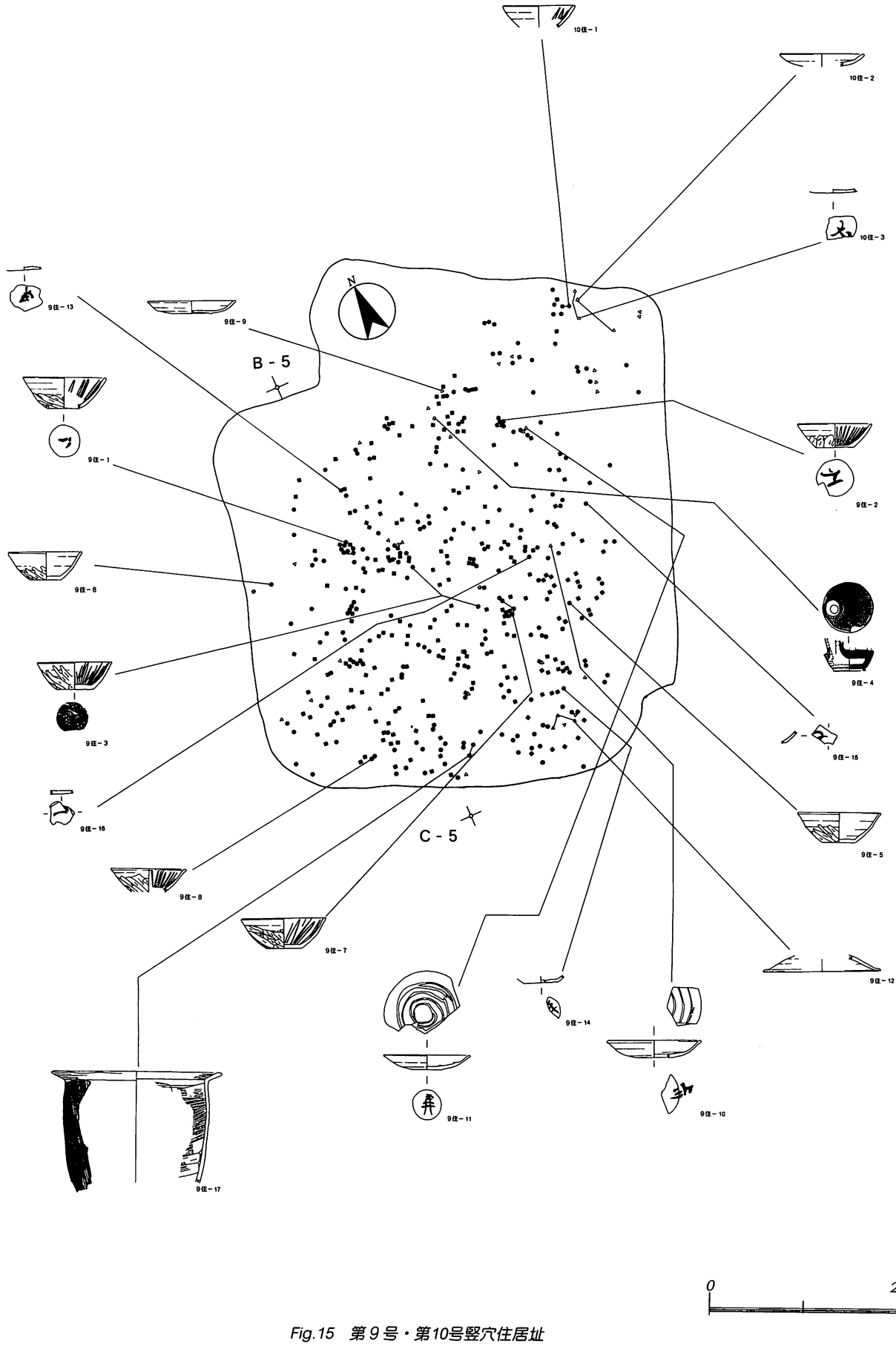
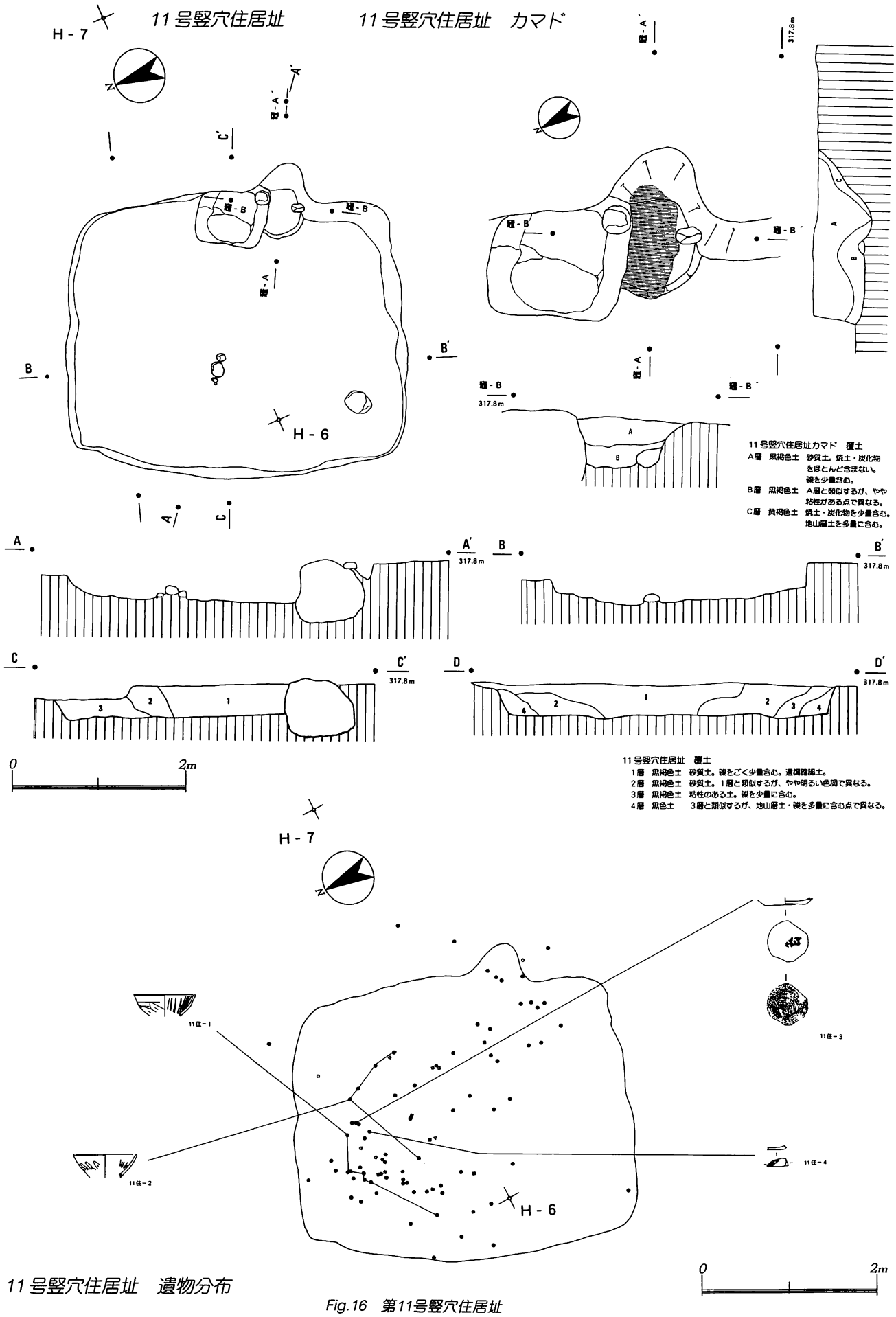


Fig.15　第９号・第10号竪穴住居址



11号竪穴住居址　遺物分布

Fig.16　第11号竪穴住居址

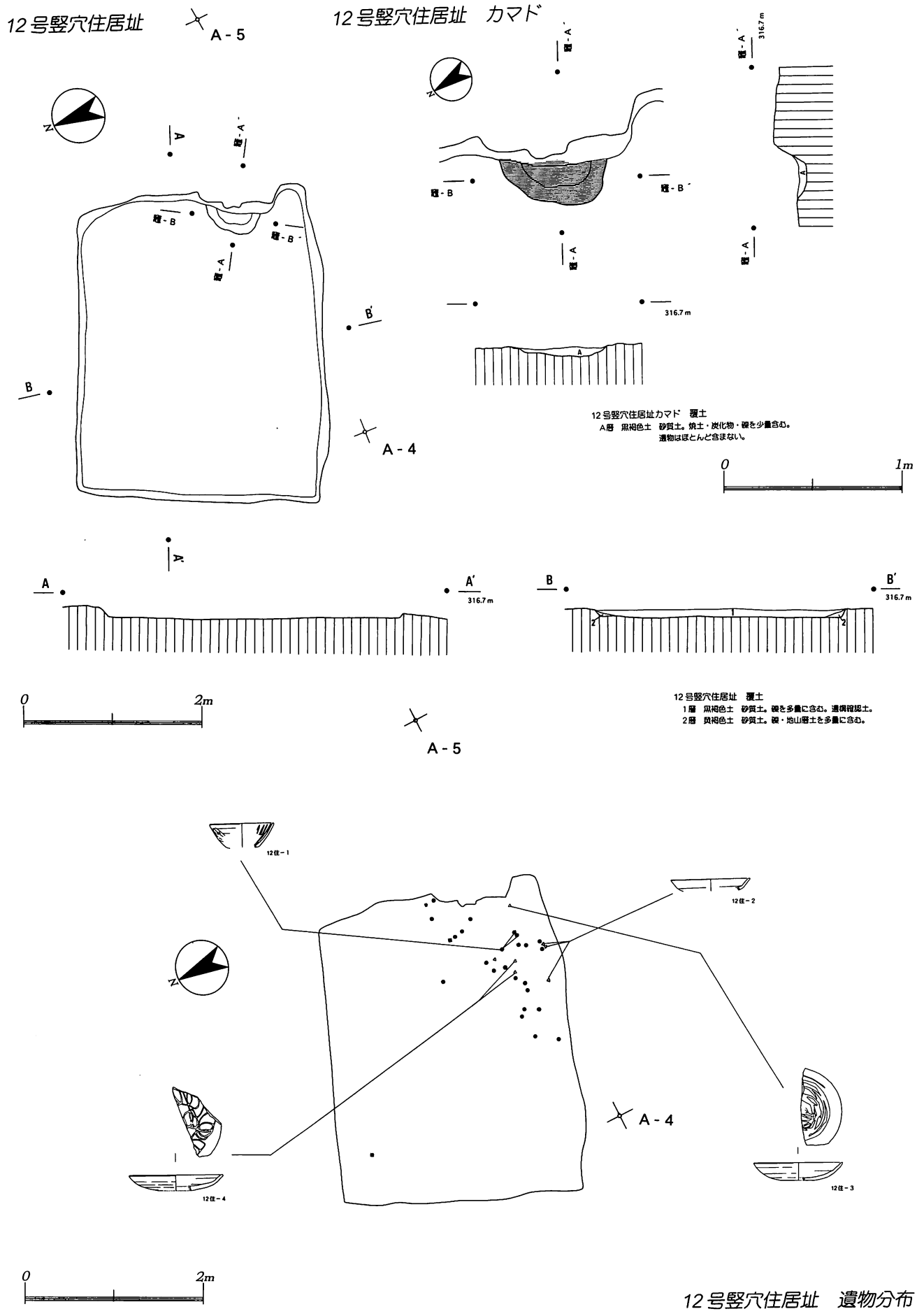
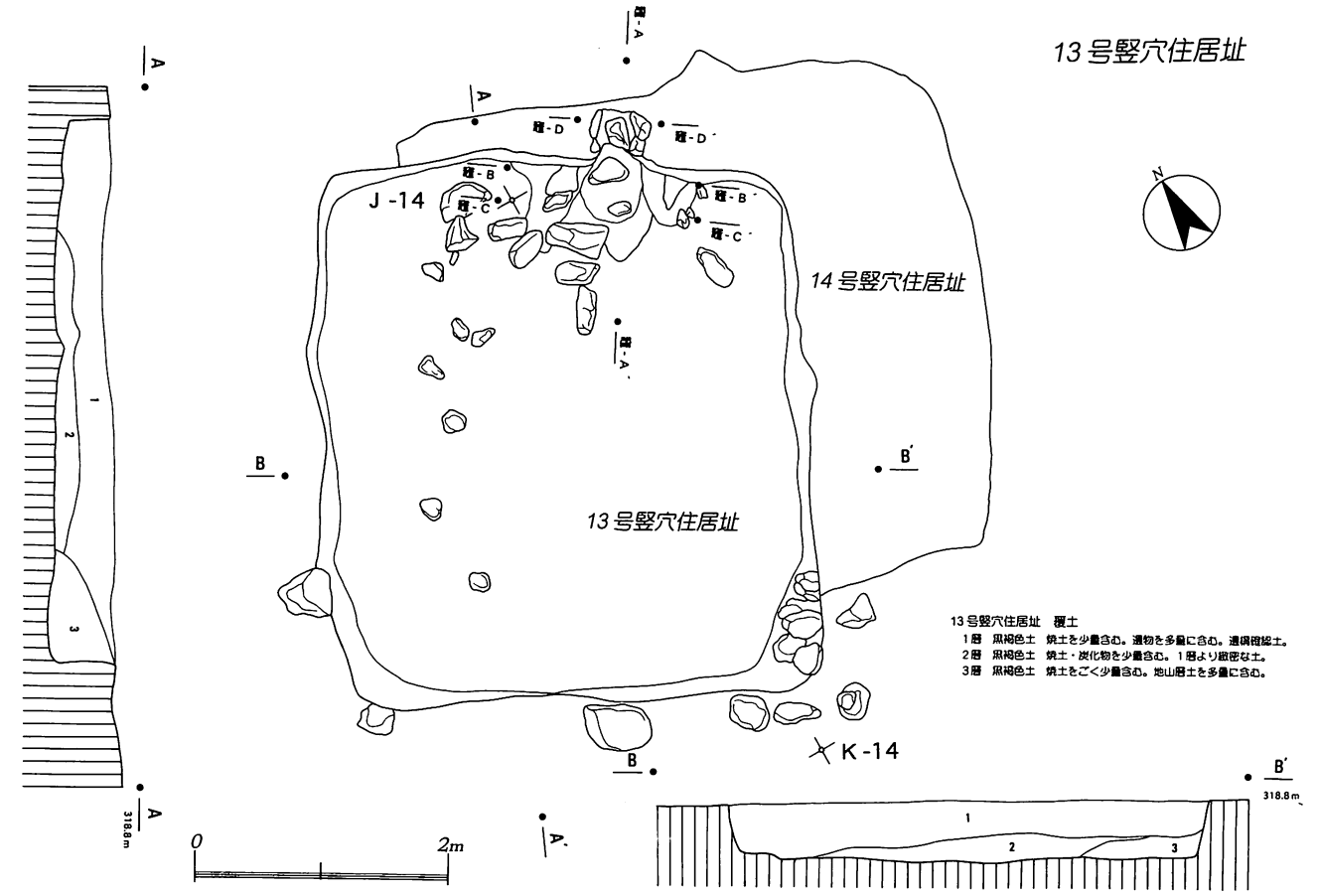


Fig.17　第12号竪穴住居址



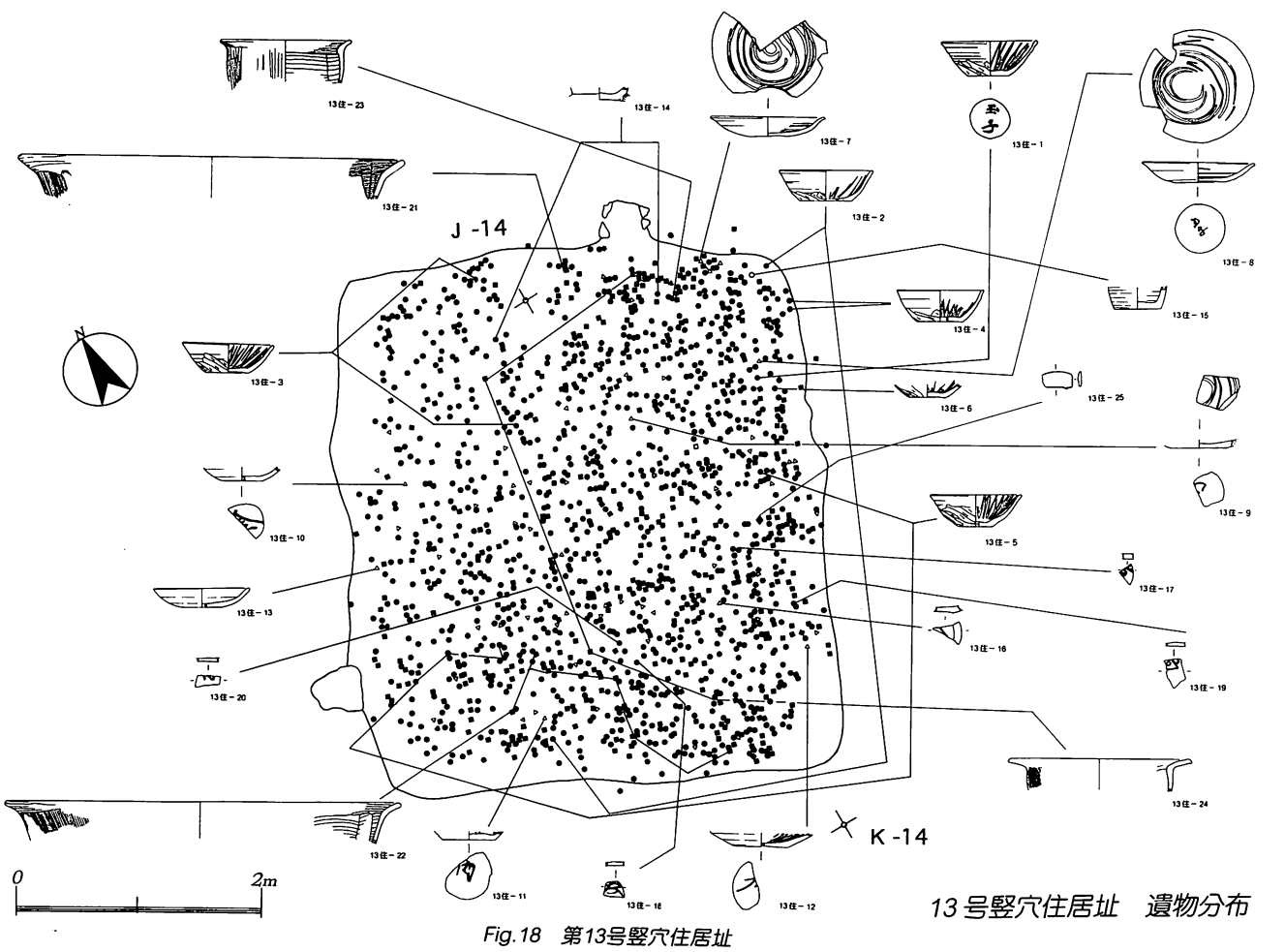


Fig.18　第13号竪穴住居址

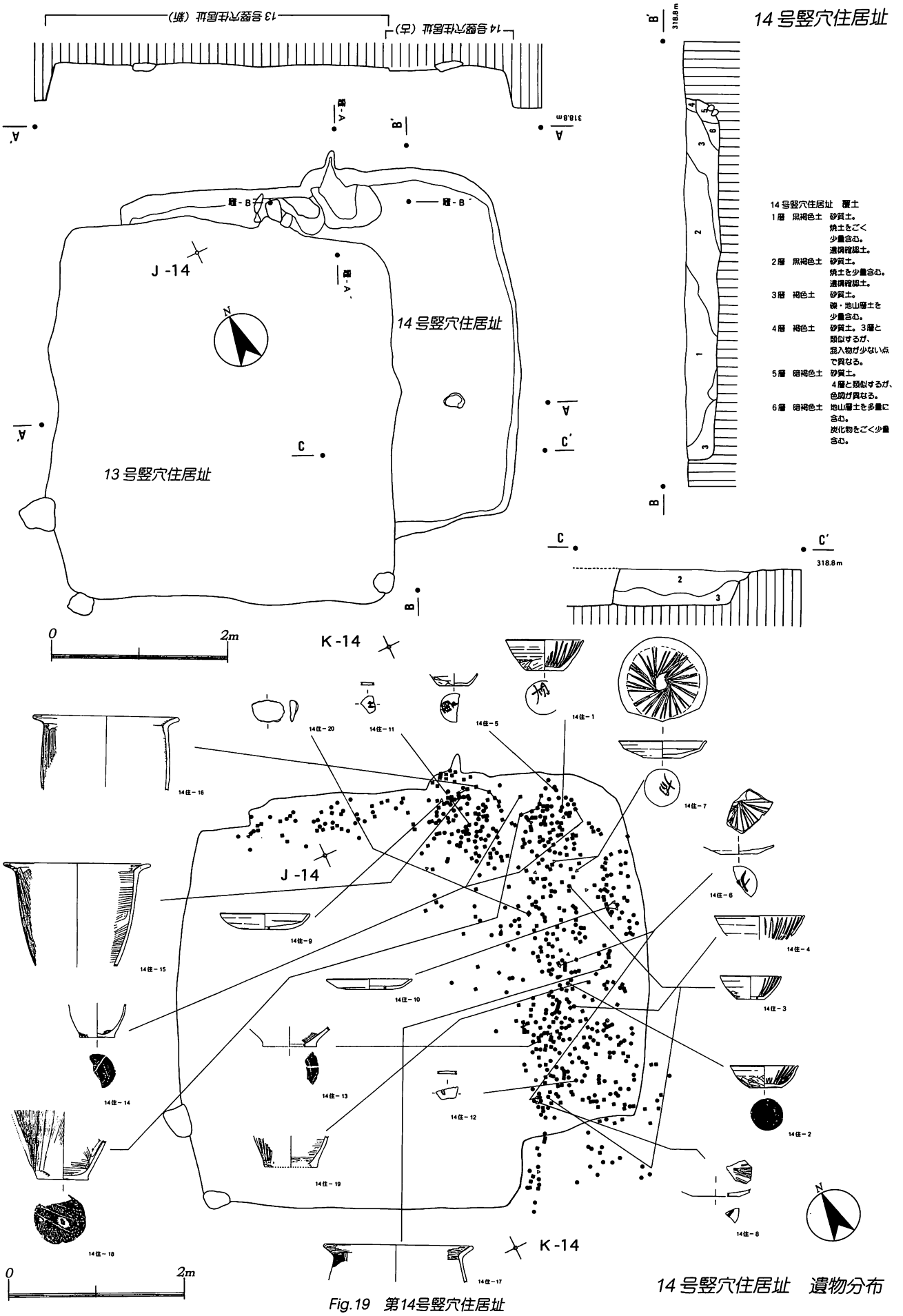
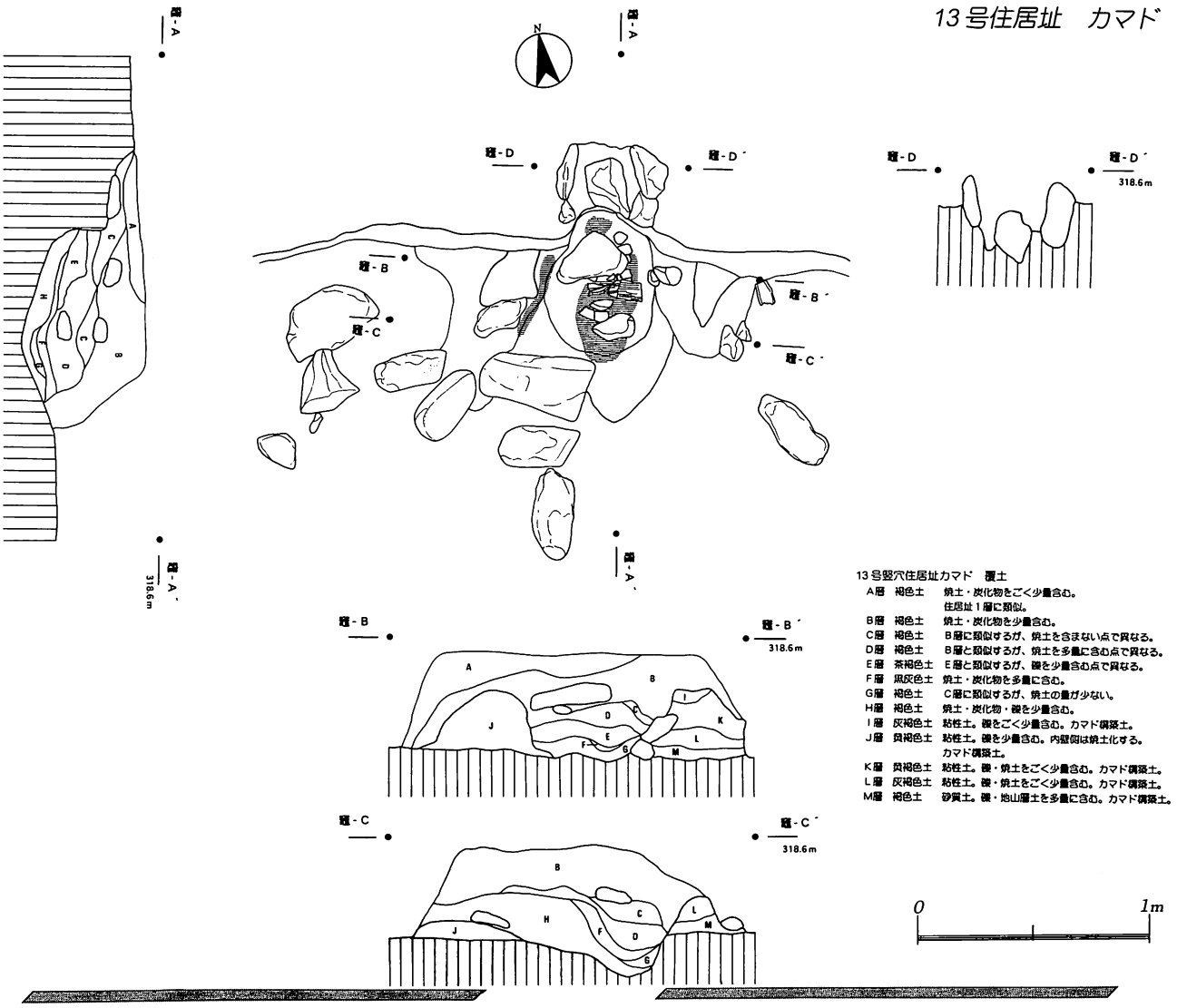


Fig.19 第14号竪穴住居址



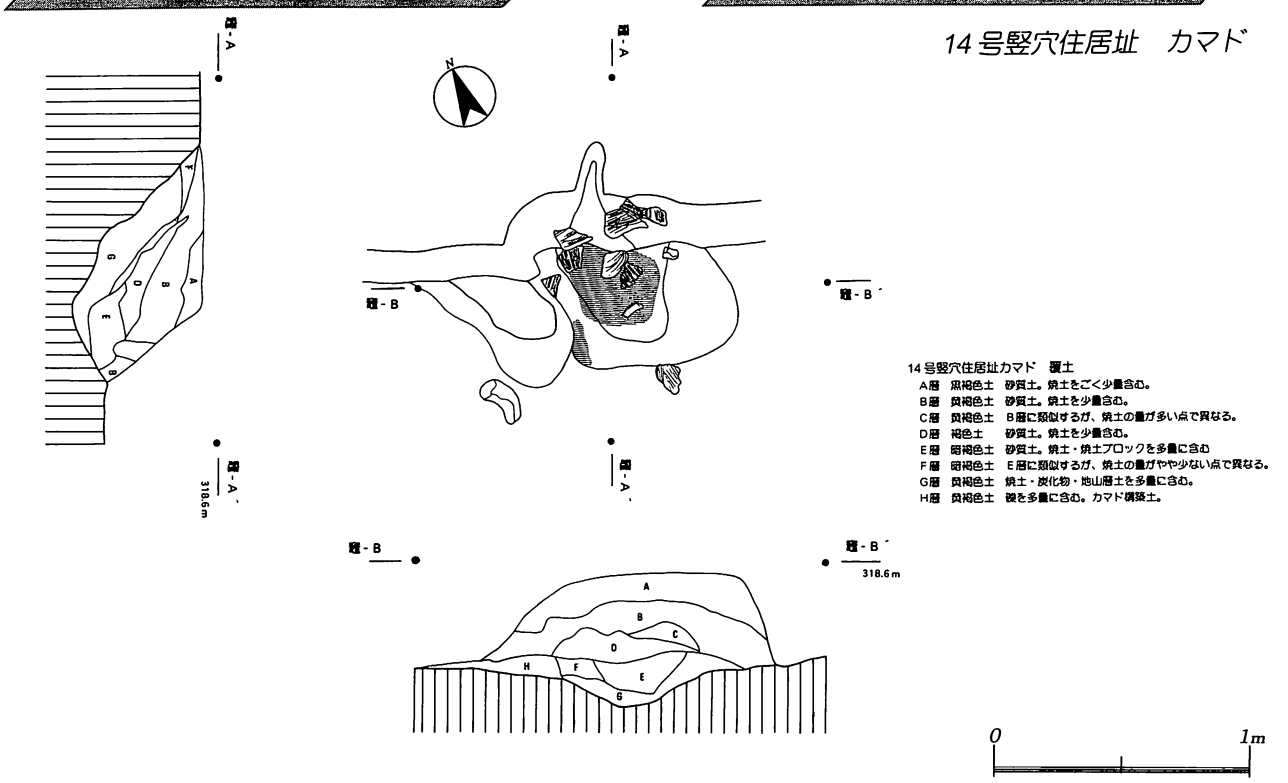


Fig.20　第13号・第14号竪穴住居址

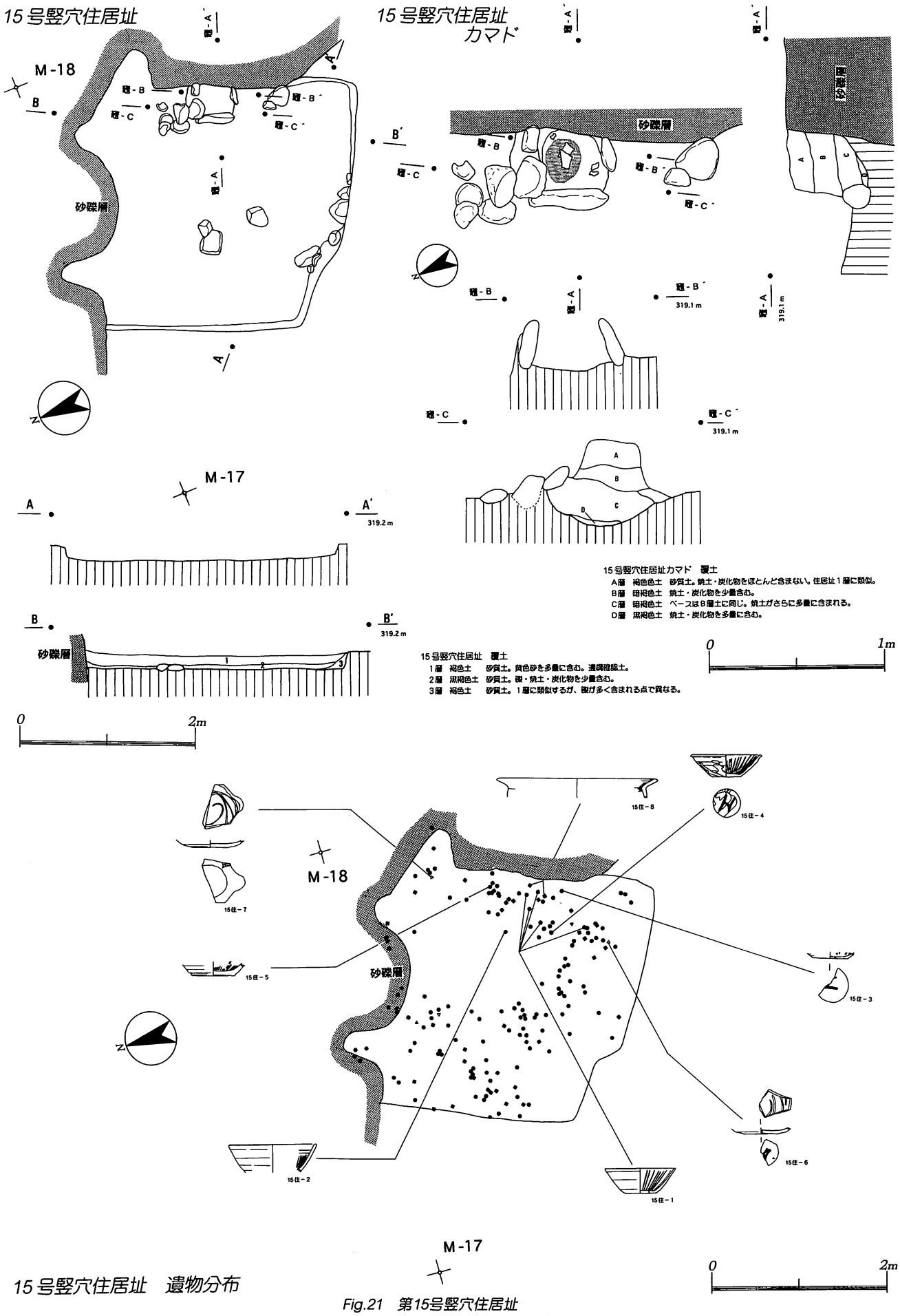
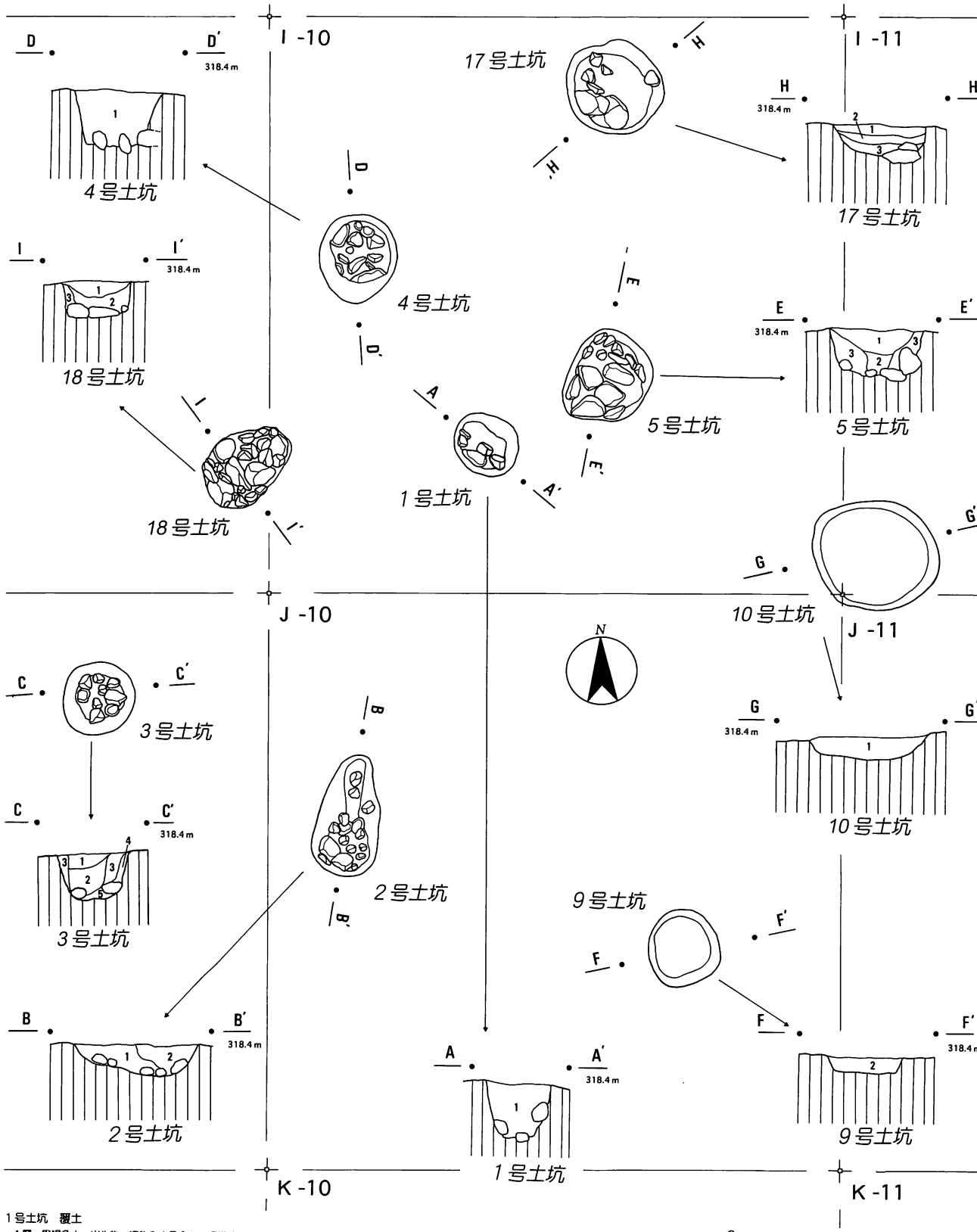
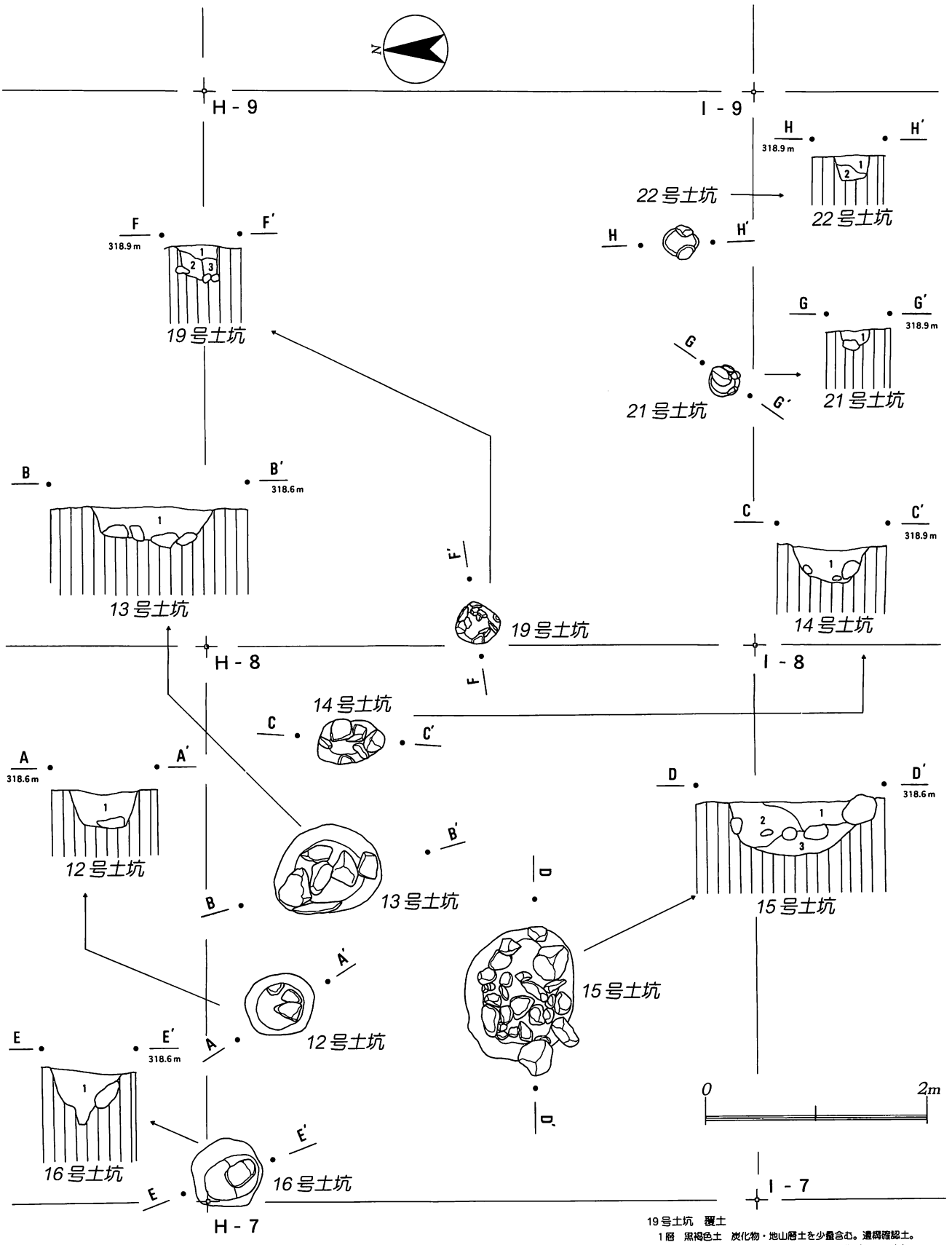


Fig.21　第15号竪穴住居址



1号土坑　覆土
　1層　黒褐色土　炭化物・遺物を少量含む。遺構確認土。
2号土坑　覆土
　1層　褐色土　炭化物・地山層土を少量含む。遺構確認土。
　2層　褐色土　1層と類似するが、やや明るい色調。
3号土坑　覆土
　1層　茶褐色土　炭化物・地山層土を少量含む。遺構確認土。
　2層　黒褐色土　炭化物・地山層土を少量含む。
　3層　黒褐色土　2層と類似するが、炭化物がさらに少ない。
　4層　黒褐色土　地山層土・礫を多量に含む。
　5層　茶褐色土　地山層土・礫を多量に含む。
4号土坑　覆土
　1層　黒褐色土　粘性土。炭化物・地山層土を少量含む。遺構確認土。
5号土坑　覆土
　1層　黒褐色土　炭化物・遺物を少量含む。遺構確認土。
9号土坑　覆土
　1層　黒褐色土　炭化物を少量含む。遺構確認土。
10号土坑　覆土
　1層　黒褐色土　炭化物・遺物を少量含む。遺構確認土。
17号土坑　覆土
　1層　黒色土　砂質土。炭化物・遺物を少量含む。遺構確認土。
　2層　黄白色土　砂質土。1層土をブロック状に多量に含む。
　3層　黒褐色土　粘性土。炭化物を少量含む。
18号土坑　覆土
　1層　黒色土　砂質土。炭化物を少量含む。遺構確認土。
　2層　黒褐色土　炭化物・焼土をごく少量含む。
　3層　茶褐色土　地山層土・礫を多量に含む。

Fig.22　第1～5・9・10・17・18号土坑



12 号土坑　覆土
　1 層　黒褐色土　炭化物を少量含む。遺構確認土。
13 号土坑　覆土
　1 層　褐色土　炭化物・地山層土を少量含む。遺構確認土。
14 号土坑　覆土
　1 層　黒褐色土　炭化物・地山層土を上層に少量含む。遺構確認土。
15 号土坑　覆土
　1 層　黒褐色土　炭化物・地山層土を少量含む。遺構確認土。
　2 層　茶褐色土　1 層土をブロック状に少量含む。
　3 層　茶褐色土　地山層土・礫を多量に含む。
16 号土坑　覆土
　1 層　黒褐色土　混入物まったくなし。遺構確認土。
19 号土坑　覆土
　1 層　黒褐色土　炭化物・地山層土を少量含む。遺構確認土。
　2 層　黒褐色土　1 層土と類似するが、炭化物がさらに少ない。
　3 層　茶褐色土　地山層土・礫を多量に含む。
21 号土坑　覆土
　1 層　黒褐色土　炭化物・地山層土を少量含む。遺構確認土。
22 号土坑　覆土
　1 層　黒褐色土　炭化物・地山層土をごく少量含む。遺構確認土。
　2 層　茶褐色土　地山層土・礫を多量に含む。

Fig.23　第12～16・19・21・22号土坑

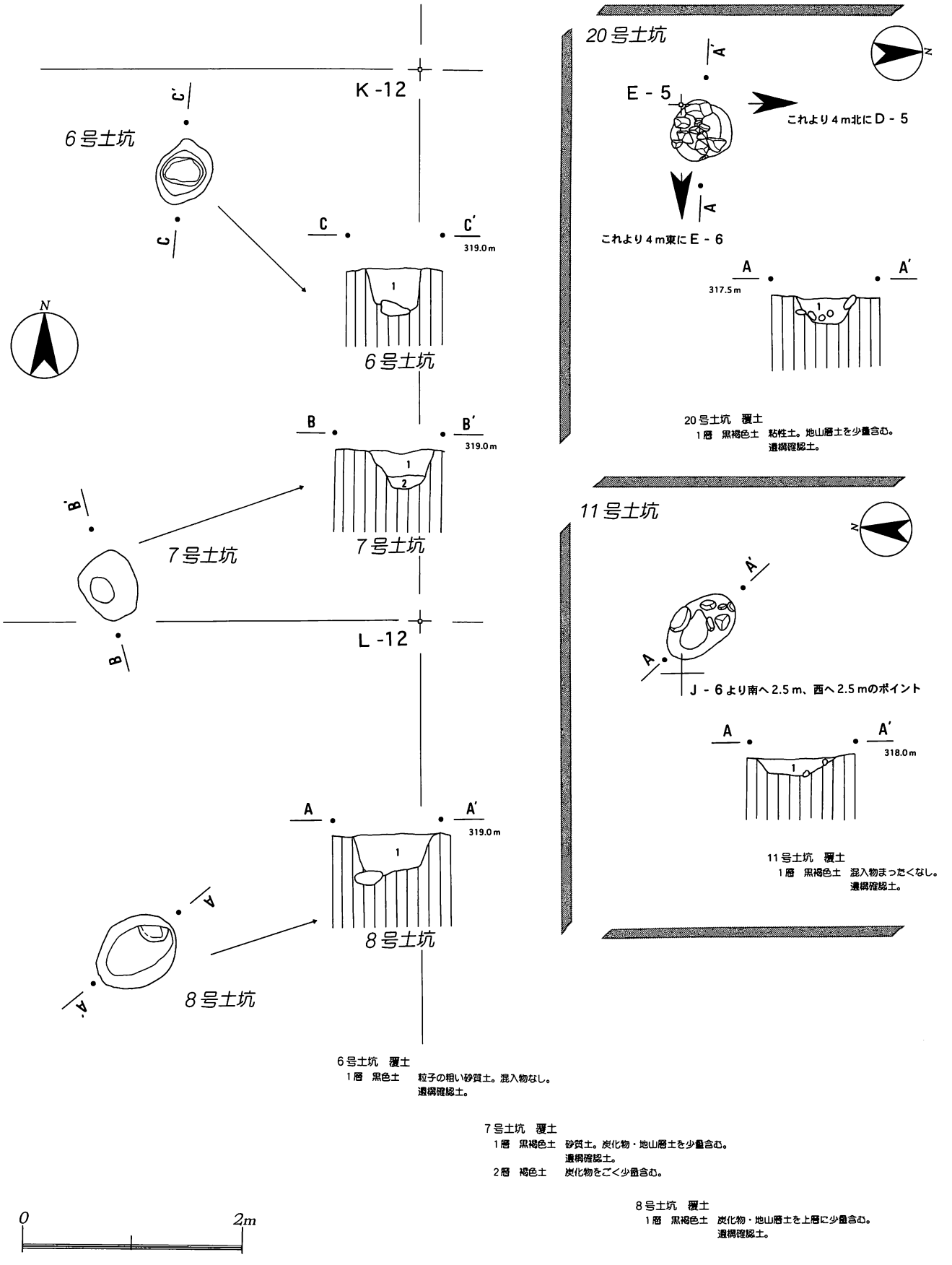
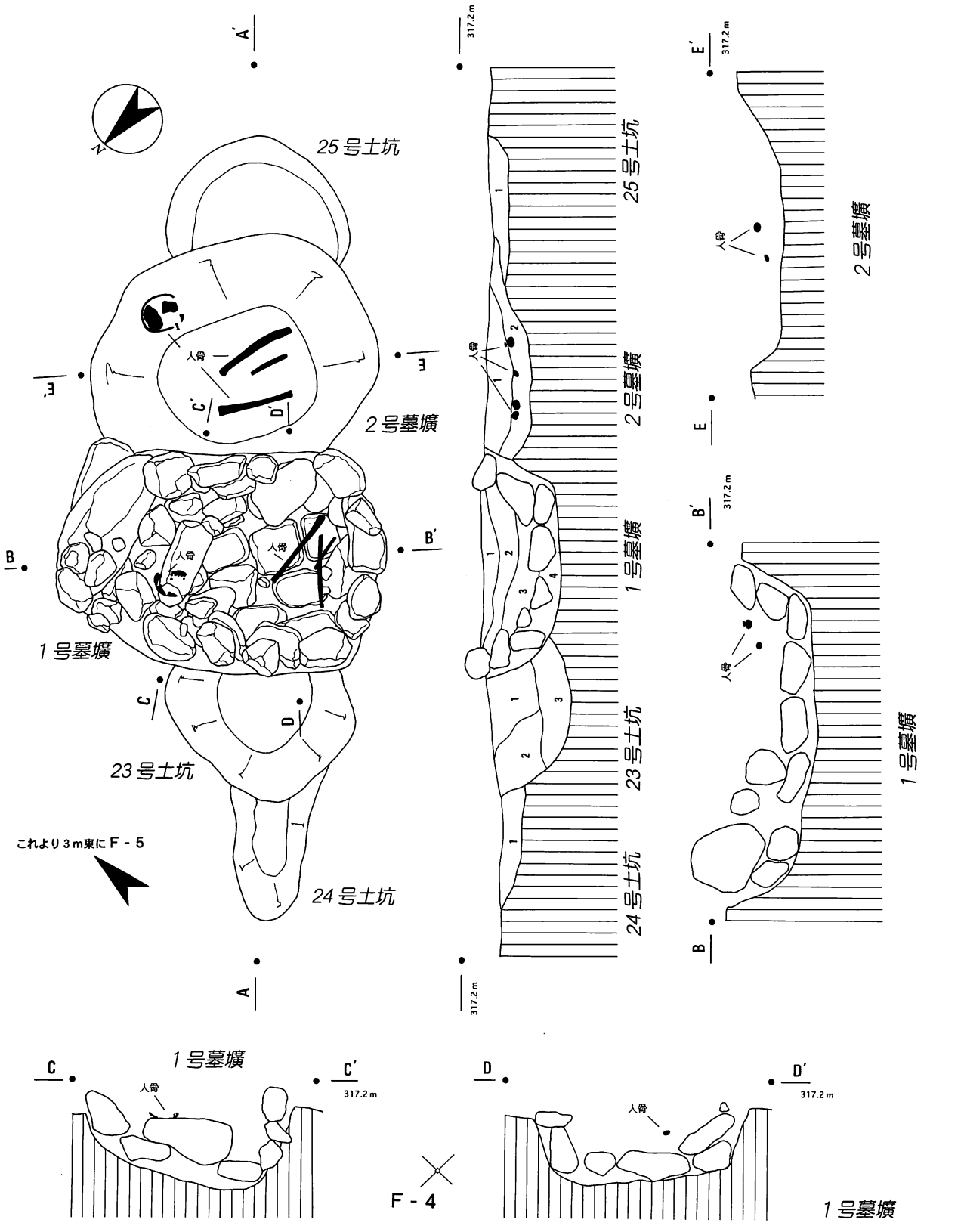


Fig.24　第6～9・11・20号土坑



1号墓壙　覆土

1層	黒褐色土	地山層土をブロック状に多量に含む。遺構確認土。 遺物（土師器片：9世紀半ば）を少量含む。
2層	黒褐色土	1層と類似。ただし、地山層土・遺物を含まず、礫を少量含む。
3層	黒色土	配石の直上に堆積し、骨片および骨粉を多量に含む。
4層	黄褐色土	配石と墓壙掘り方の間に充填されたる。地山層土を多量に含む。 墓壙の基礎を構築する際の充填土。

2号墓壙　覆土

1層	黒褐色土	地山層土をブロック状に少量含む。炭化物・骨片および骨粉をごく少量含む。遺構確認土。
2層	茶褐色土	地山層土を少量含む。炭化物・骨片および骨粉を少量含む。

23号土坑　覆土

1層	黒褐色土	1号墓壙の覆土1層に類似するが、遺物は全く含まない。 遺構確認土。
2層	黒褐色土	地山層土をブロック状に少量含む。
3層	黒褐色土	地山層土をブロック状に多量に含む。炭化物を多量に含む。

24号土坑　覆土

1層	黄褐色土	砂質土。24号土坑の覆土3層土を多量に含む。遺構確認土。

25号土坑　覆土

1層	黄褐色土	砂質土。地山層土を多量に含む。遺構確認土。

0　1m

Fig.25　第23～25号土坑／第1・2号墓壙

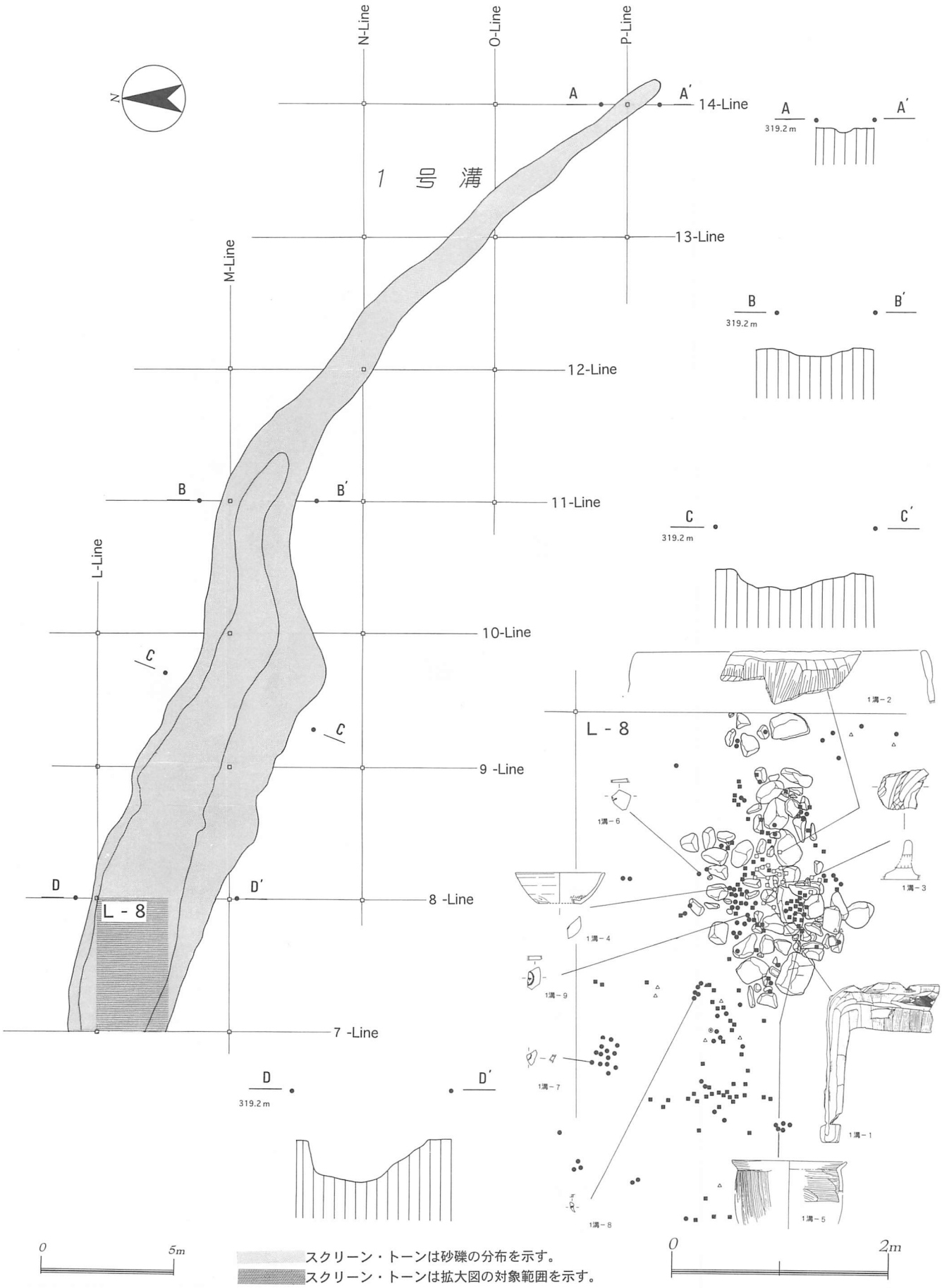
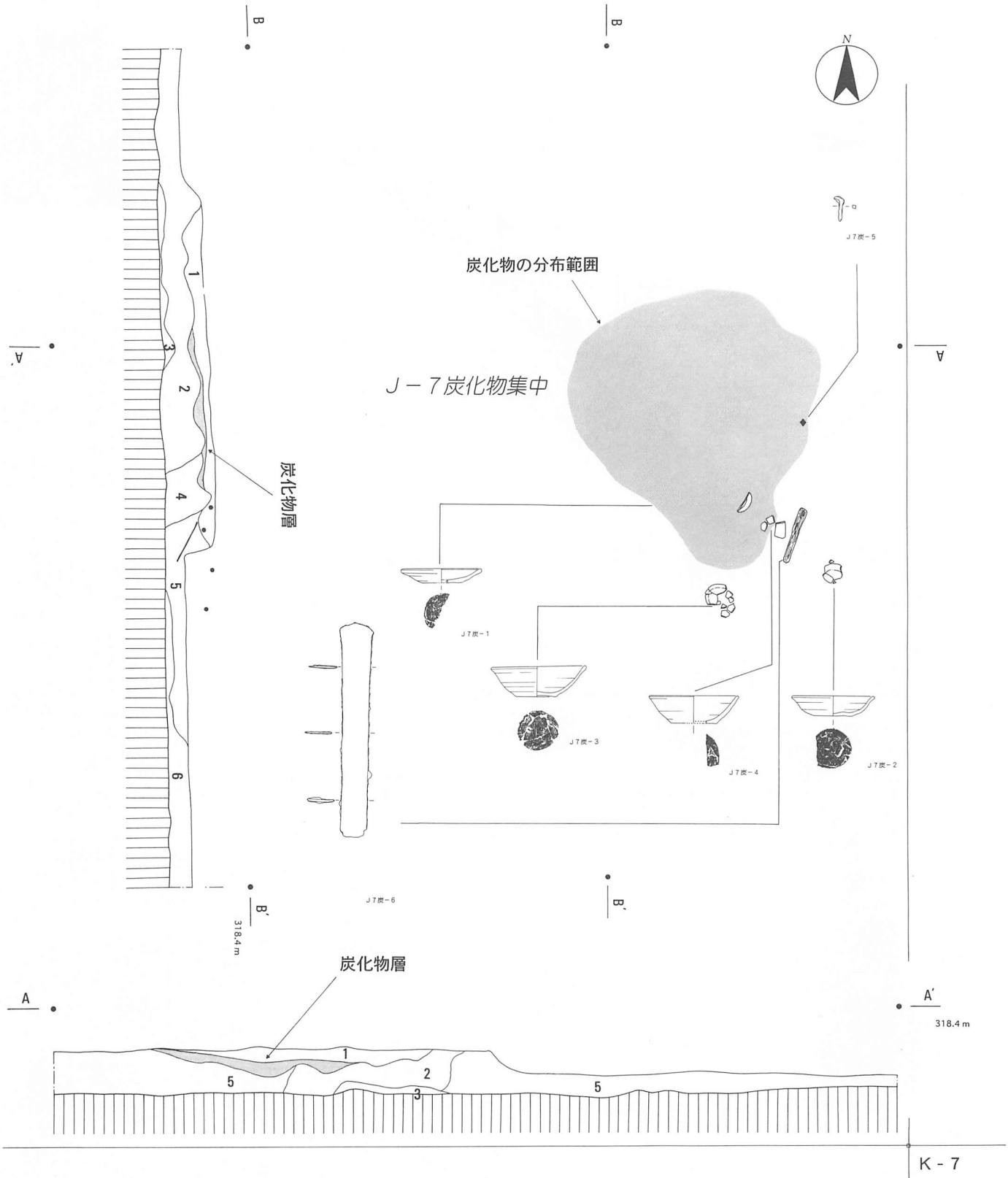

N-Line
O-Line
P-Line
M-Line
L-Line
14-Line
13-Line
12-Line
11-Line
10-Line
9 -Line
8 -Line
7 -Line
1 号 溝
L - 8
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
319.2 m
1溝－1
1溝－2
1溝－3
1溝－4
1溝－5
1溝－6
1溝－7
1溝－8
1溝－9
0
5m
2m
スクリーン・トーンは砂礫の分布を示す。
スクリーン・トーンは拡大図の対象範囲を示す。

Fig.26　第 1 号溝

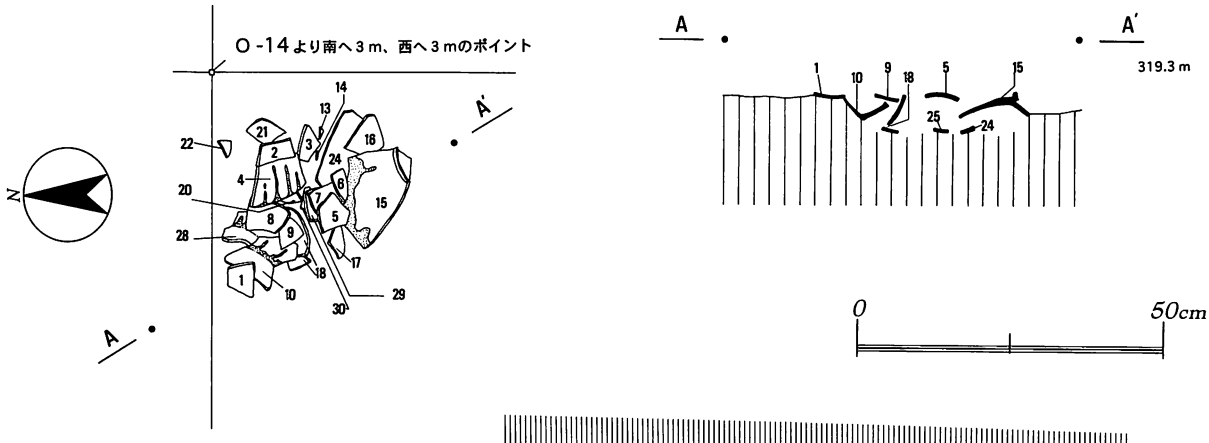


J－7 Grid 炭化物集中　周辺の土層

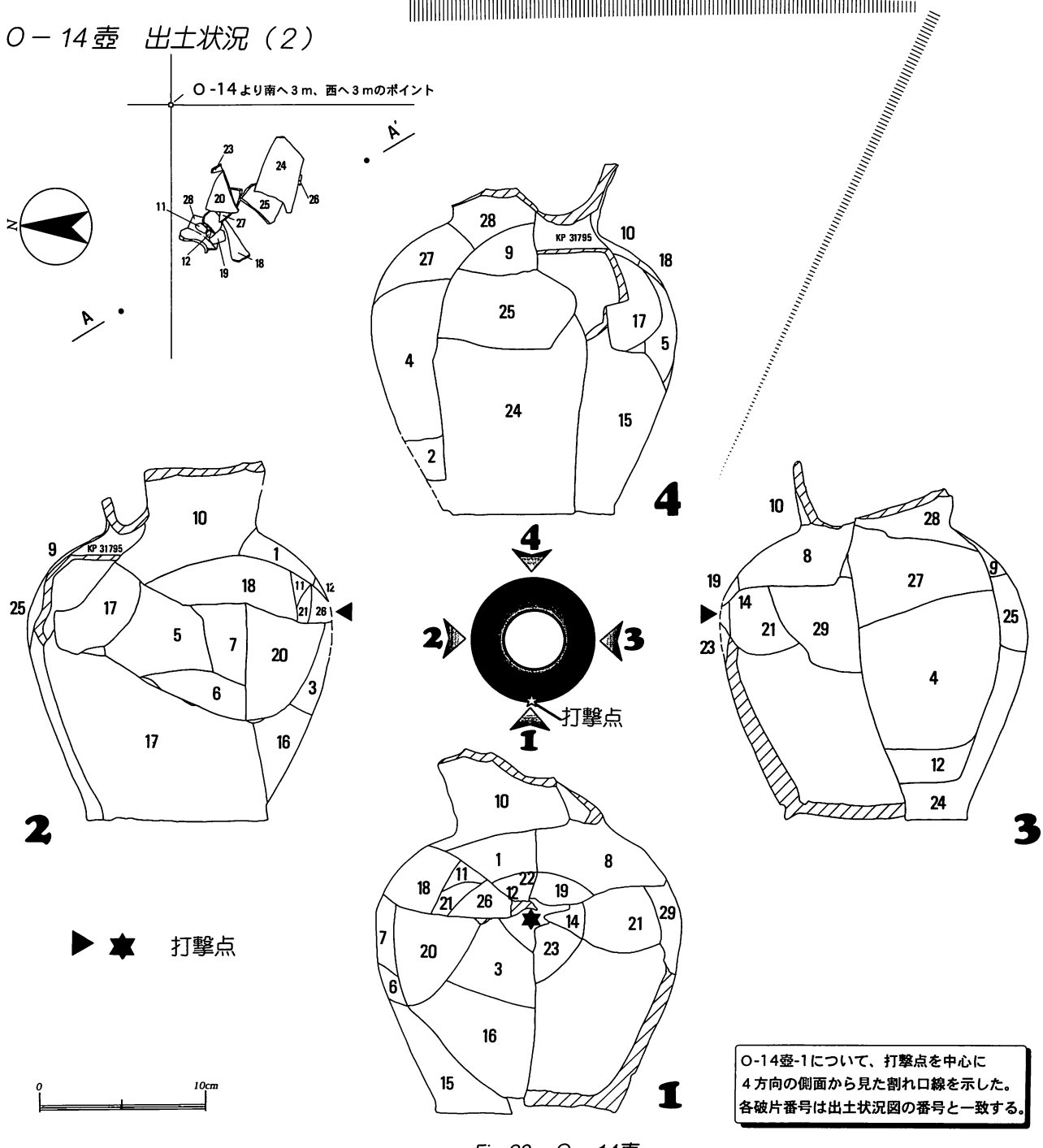
1層	黒色土	炭化物・炭化材（4cm幅程度が主体）を極めて多量に含む。特に下位には炭化物が集中し、層状になっている。金色雲母の粒子を少量含む特徴あり。焼土はごく少量含む程度である。なお、本層には遺物（土師器）を含んでいる。
2層	黒褐色土	ベースとなる土は1層と類似するが、やや明るい色調で異なる。また、炭化物・炭化材をほとんど含まない点で異なる。なお、本層にも遺物（鉄製品・土師器）が含まれる。
3層	茶褐色土	地山層土・礫を多量に含む砂質土。
4層	黒色土	1層・2層に比較して、全く混入物の含まれない土である。
5層	黒褐色土	地山層土・礫・炭化物を少量含む。
6層	茶褐色土	4層に類似するが、5層土に類似する黒褐色土をブロック状に少量含む。また、遺物（1層・2層に含まれる土師器より古い土師器）をごく少量含む。

Fig.27　J－7炭化物集中

O－14壺　出土状況（1）



O－14壺　出土状況（2）



O-14壺-1について、打撃点を中心に
4方向の側面から見た割れ口線を示した。
各破片番号は出土状況図の番号と一致する。

Fig.28　O－14壺

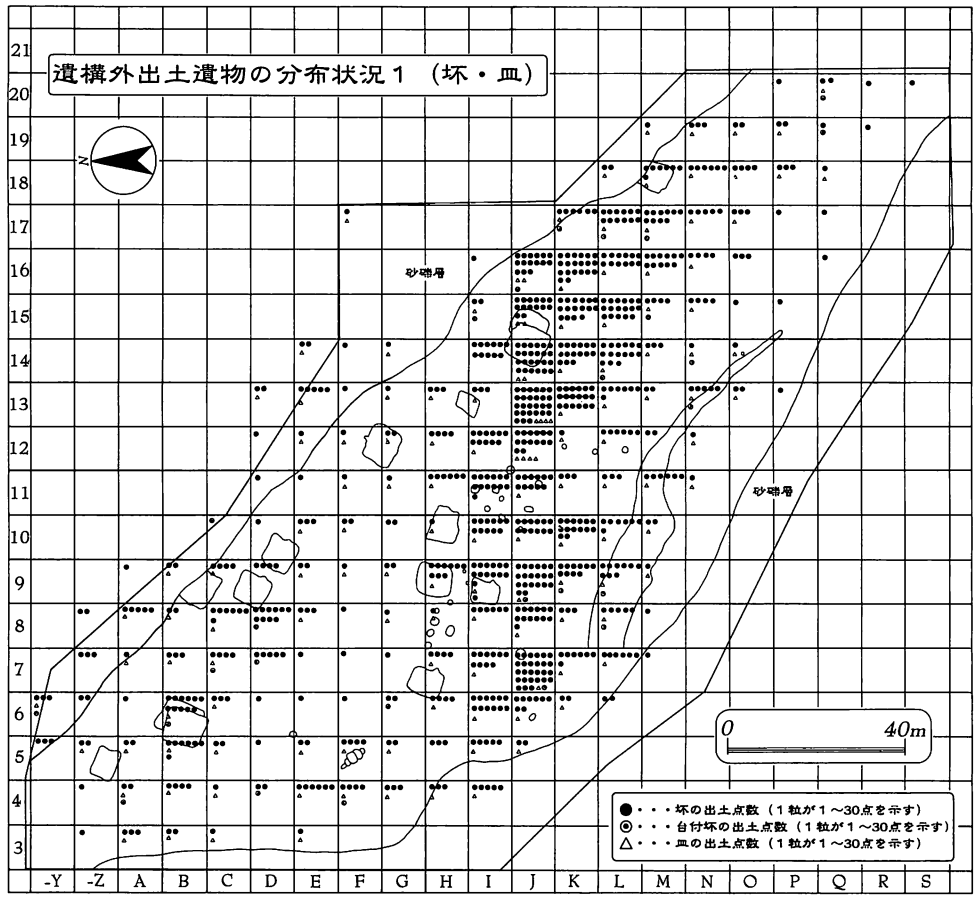


Fig.29　遺構外出土遺物の分布状況１（坏・皿）

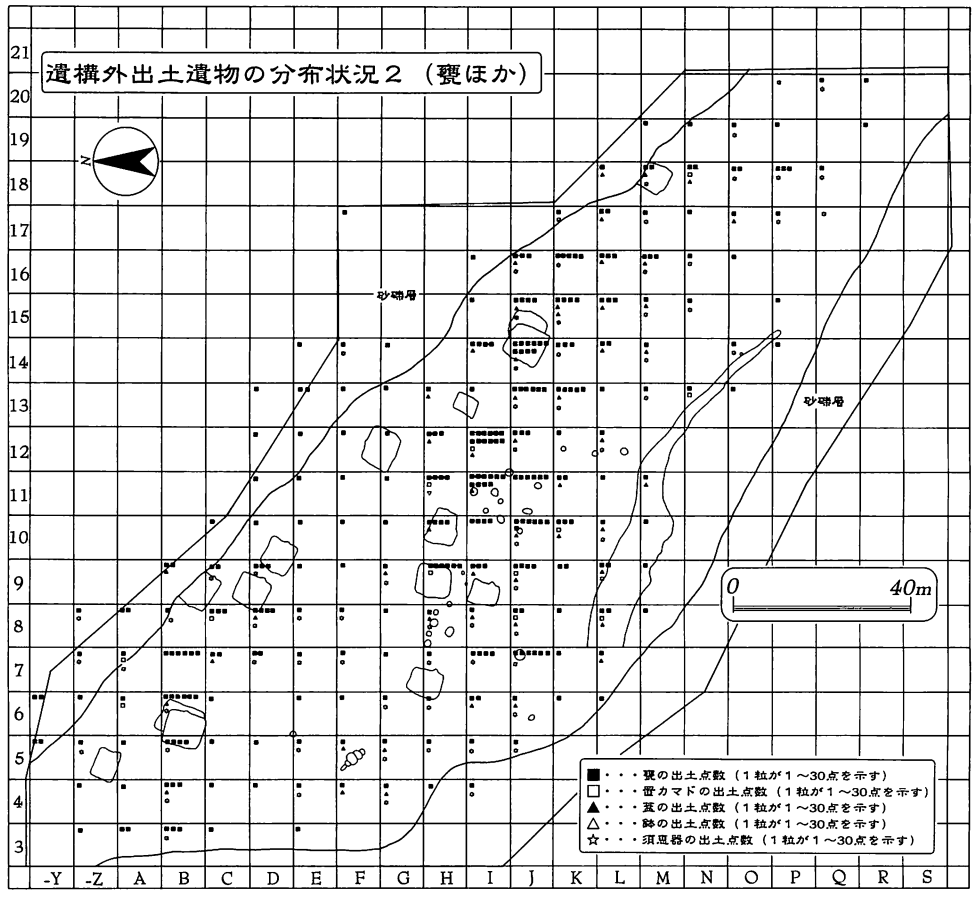


Fig.30　遺構外出土遺物の分布状況２(甕ほか)

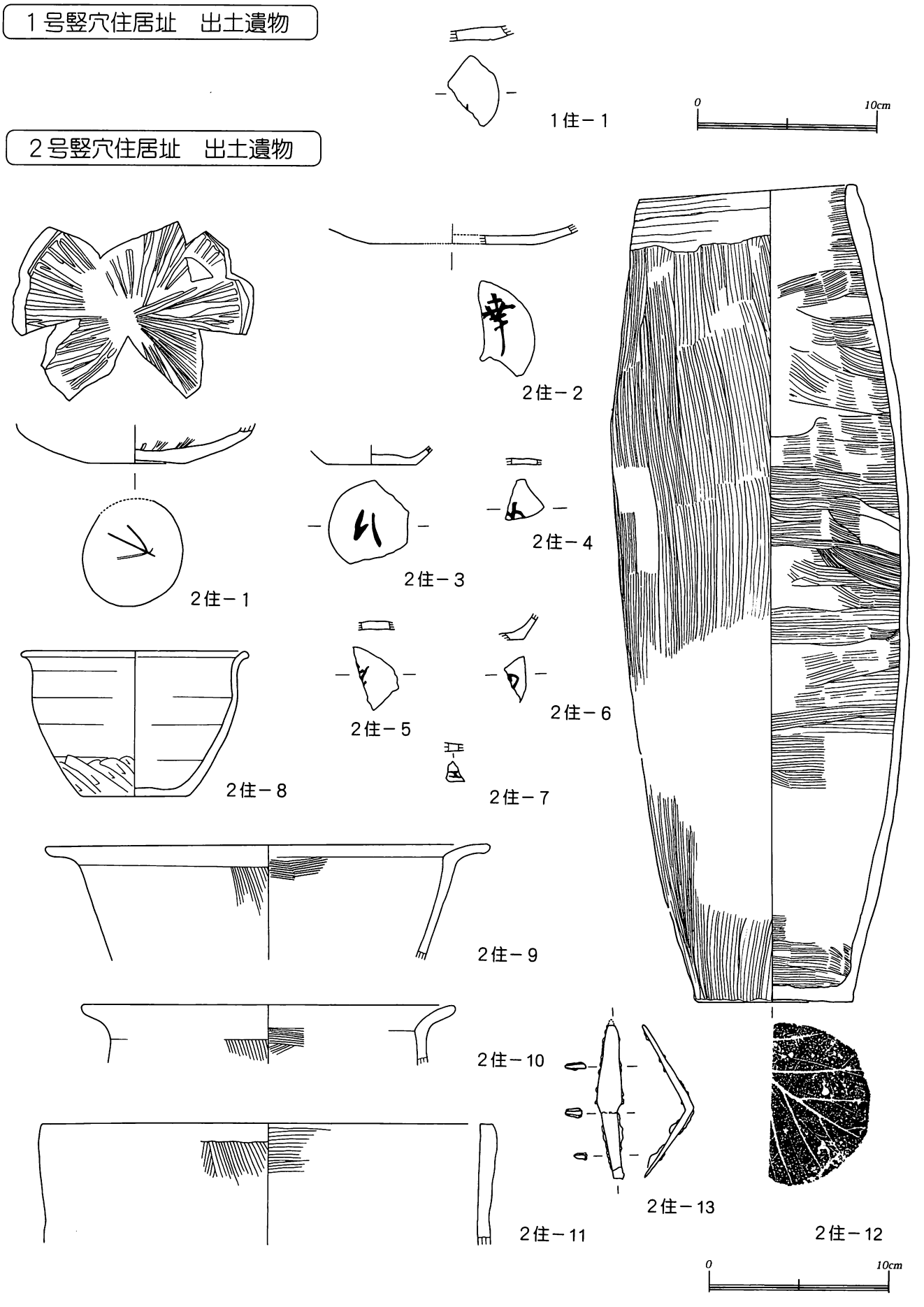


Fig.31　第1号・第2号竪穴住居址出土遺物

３号竪穴住居址　出土遺物

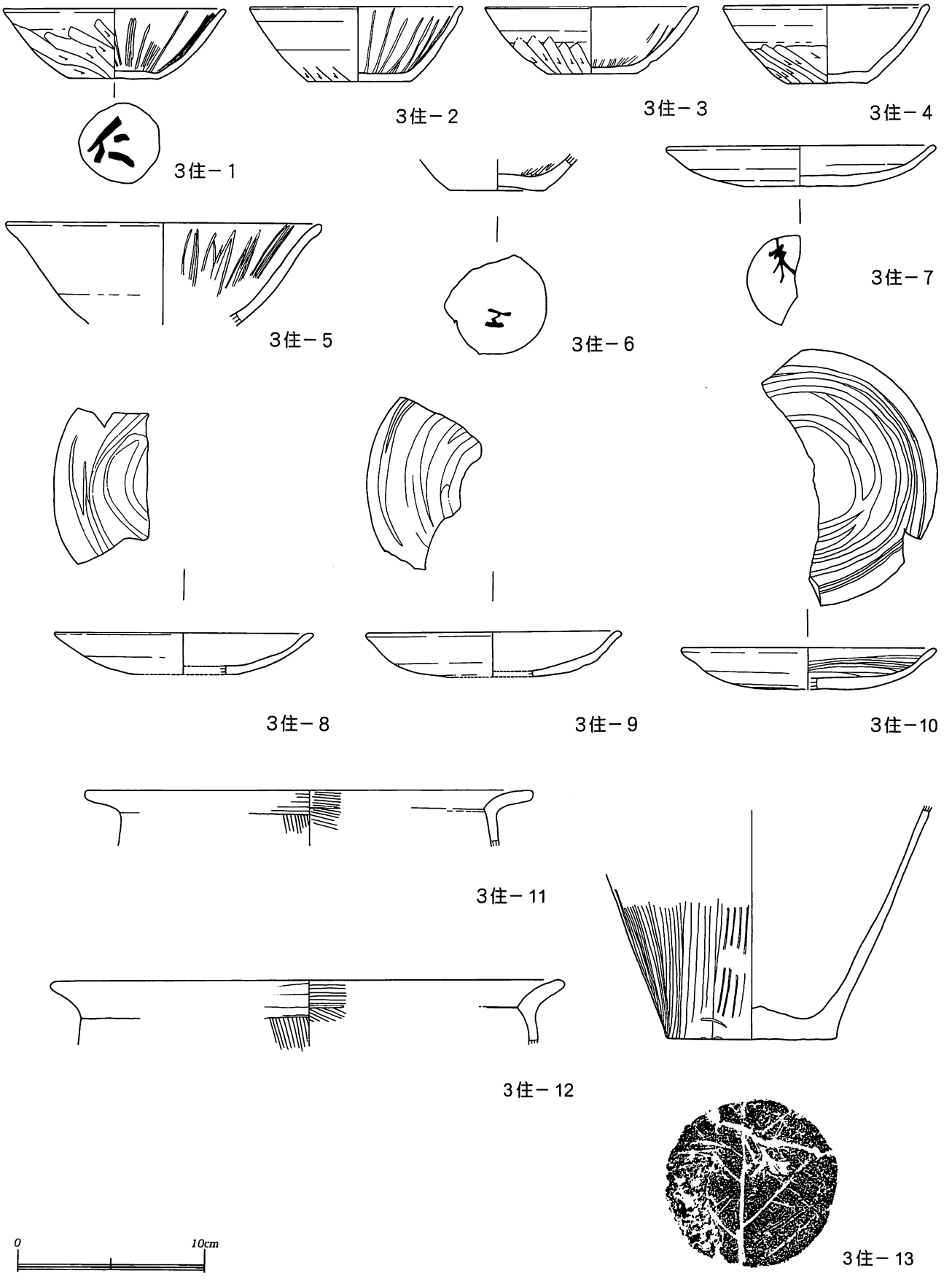


Fig.32　第３号竪穴住居址出土遺物

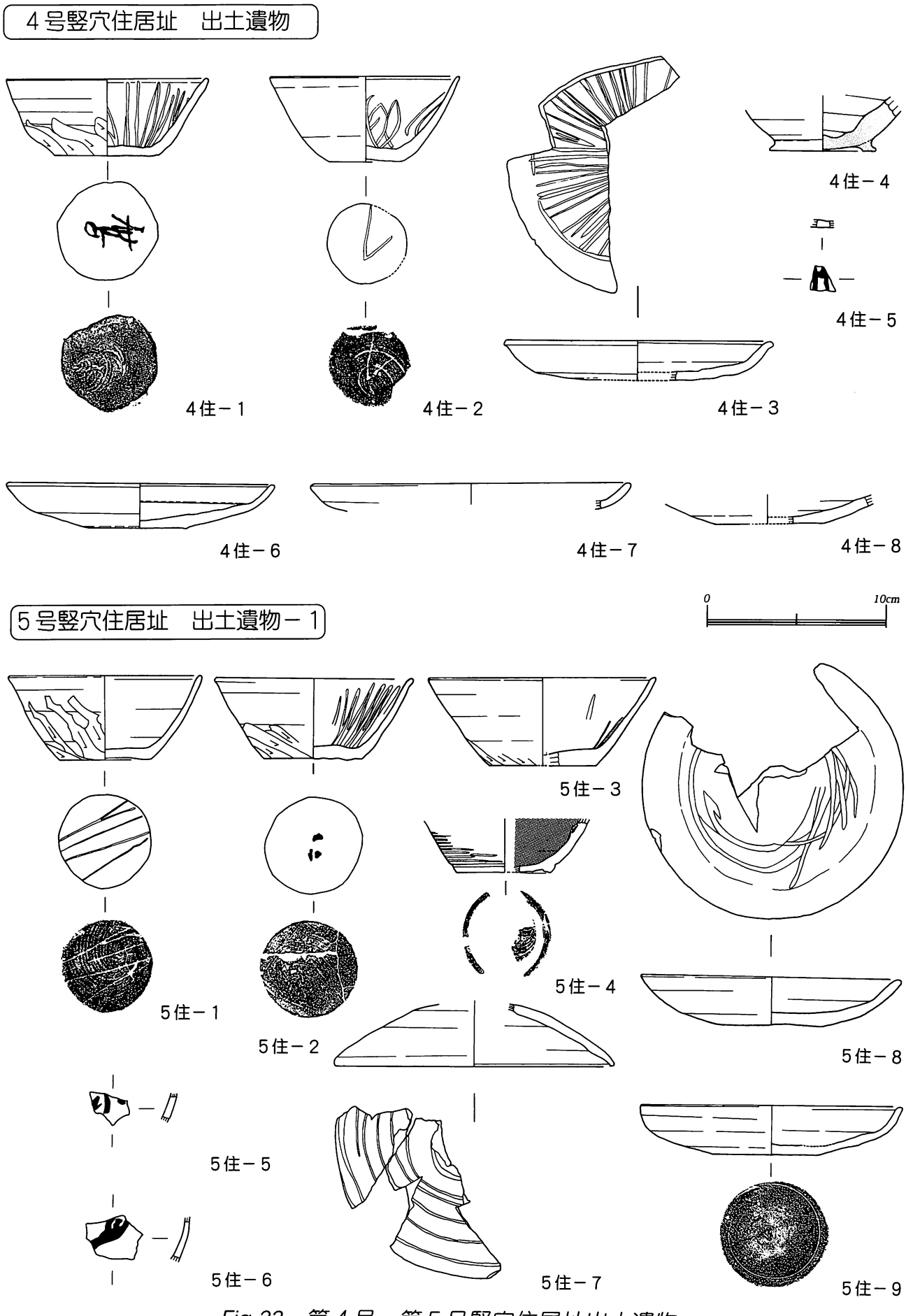


Fig.33　第4号・第5号竪穴住居址出土遺物

5号竪穴住居址　出土遺物－2

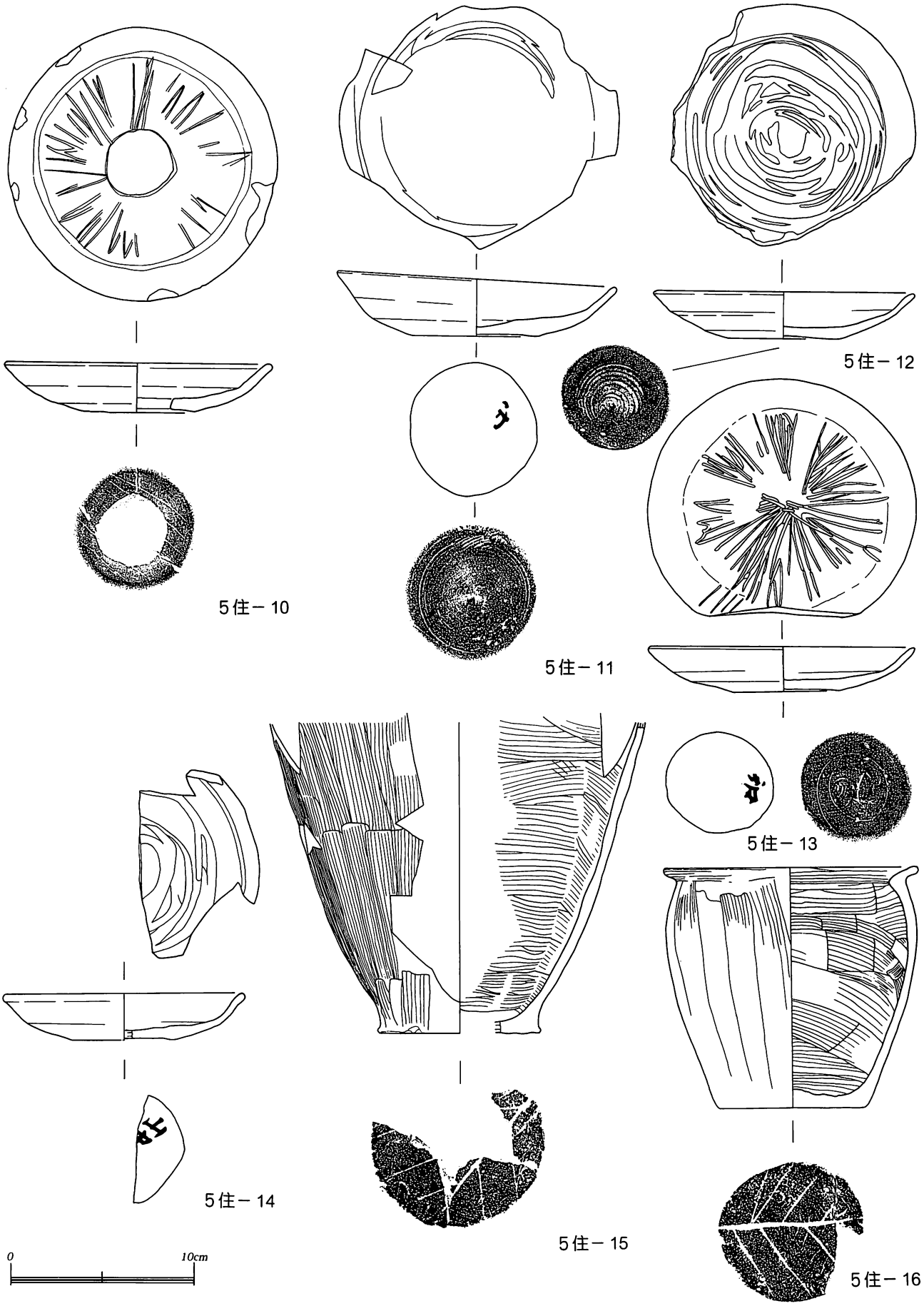


Fig.34　第5号竪穴住居址出土遺物

5号竪穴住居址　出土遺物－3

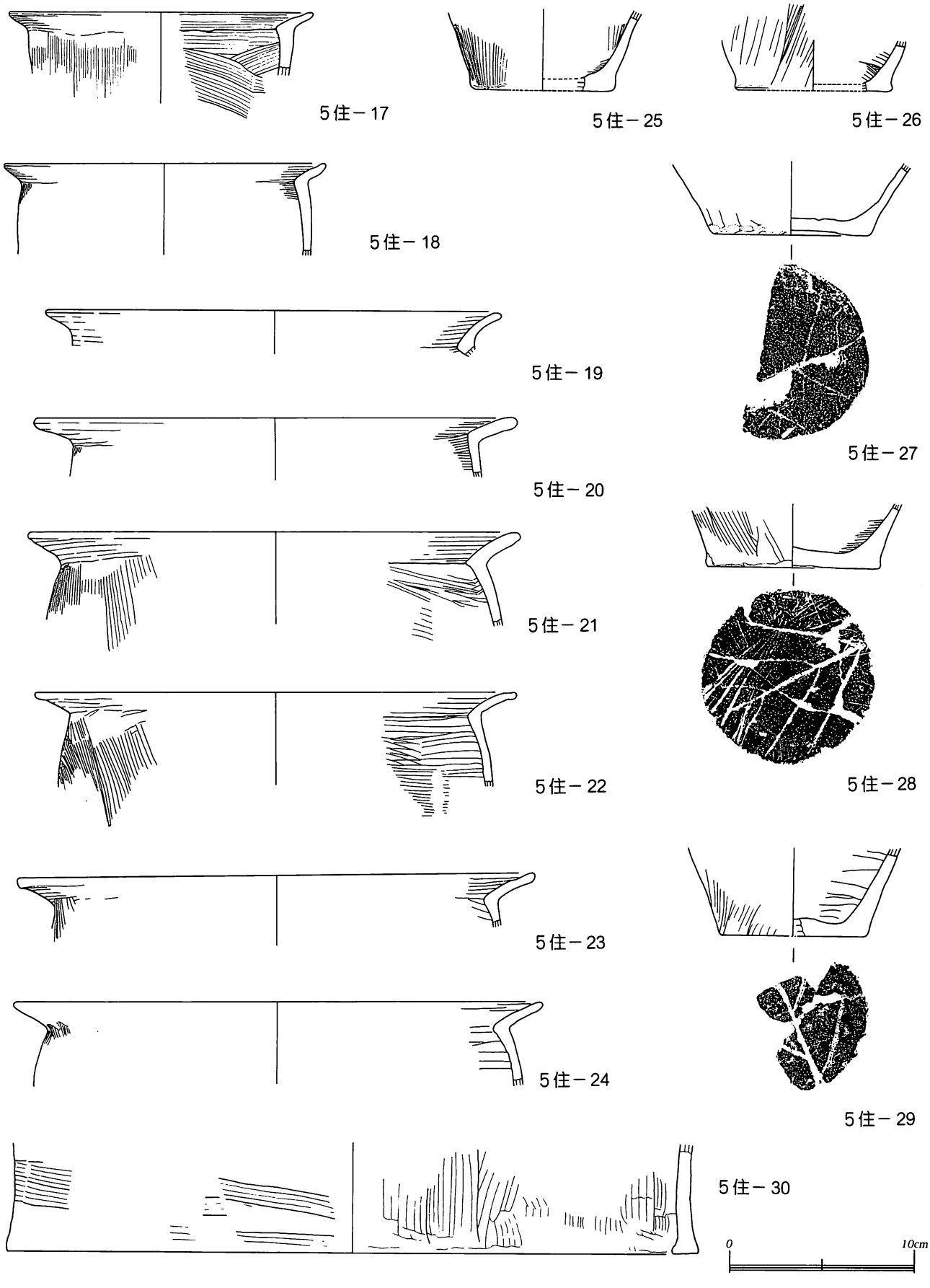
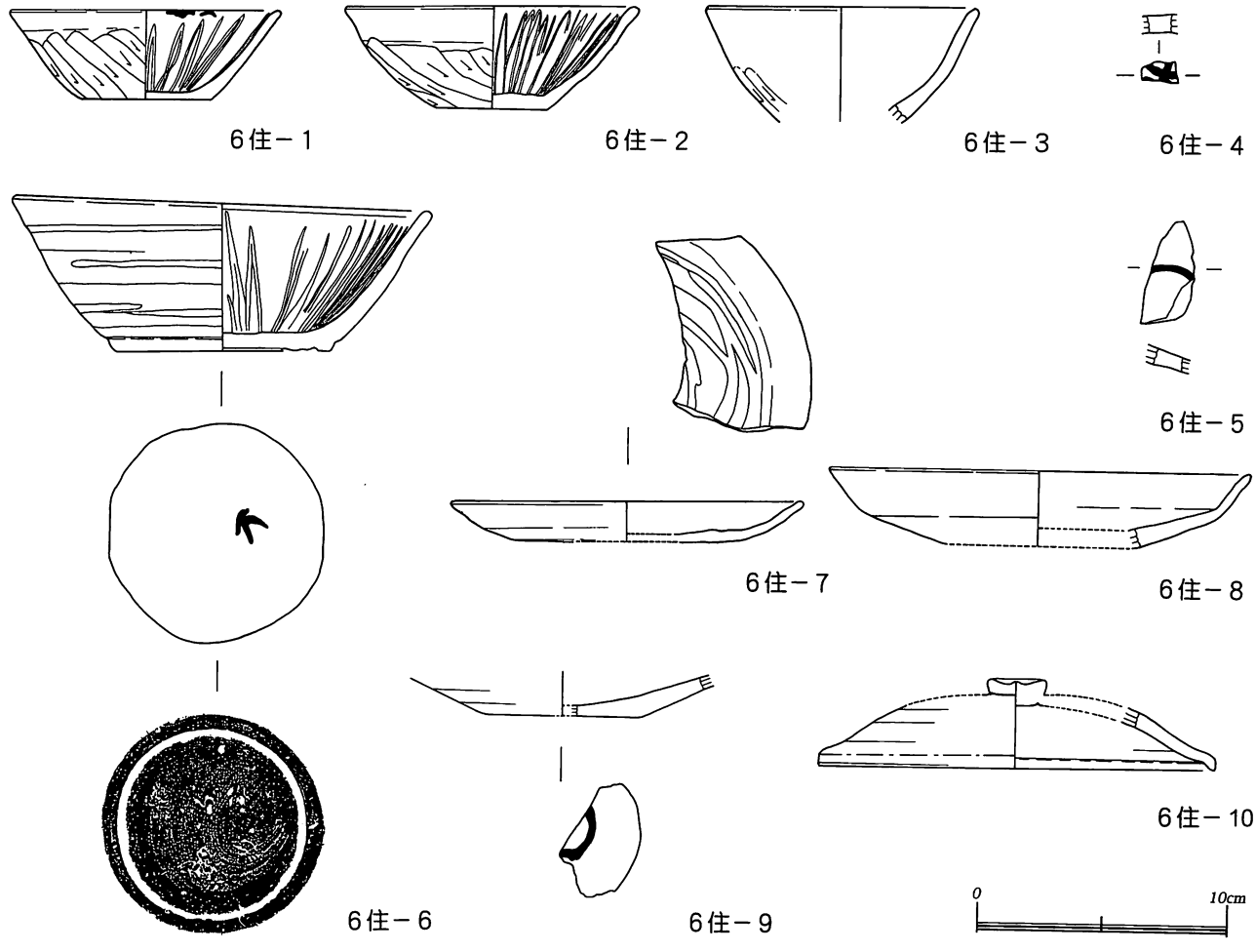


Fig.35　第5号竪穴住居址出土遺物

6号竪穴住居址　出土遺物



7号竪穴住居址　出土遺物－1

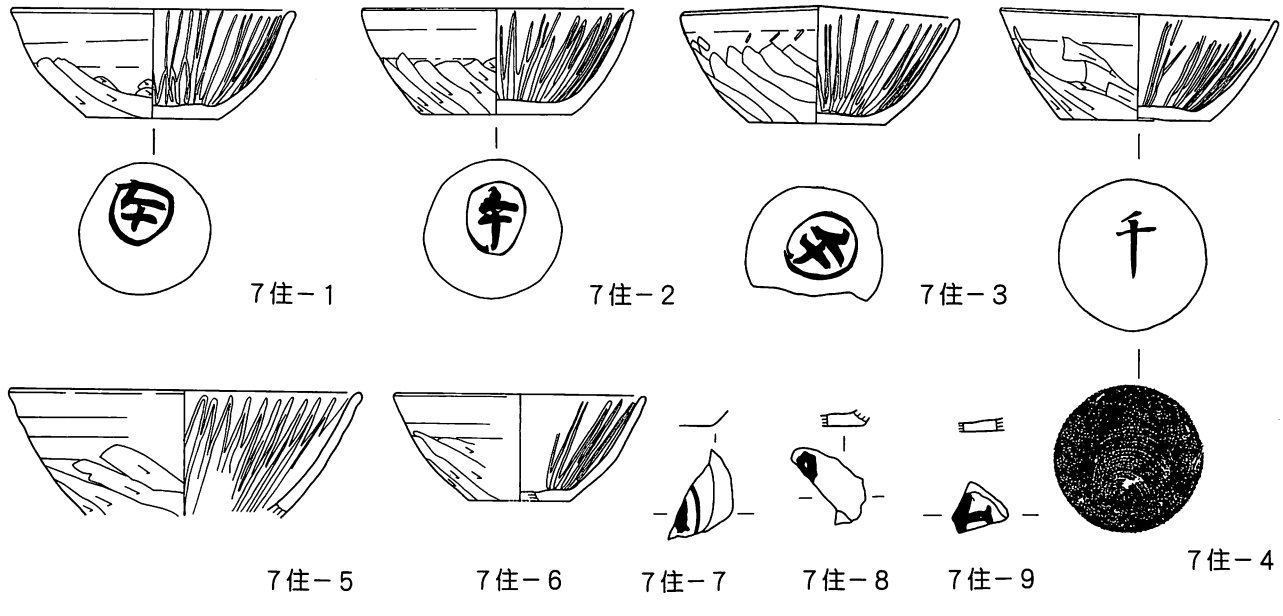
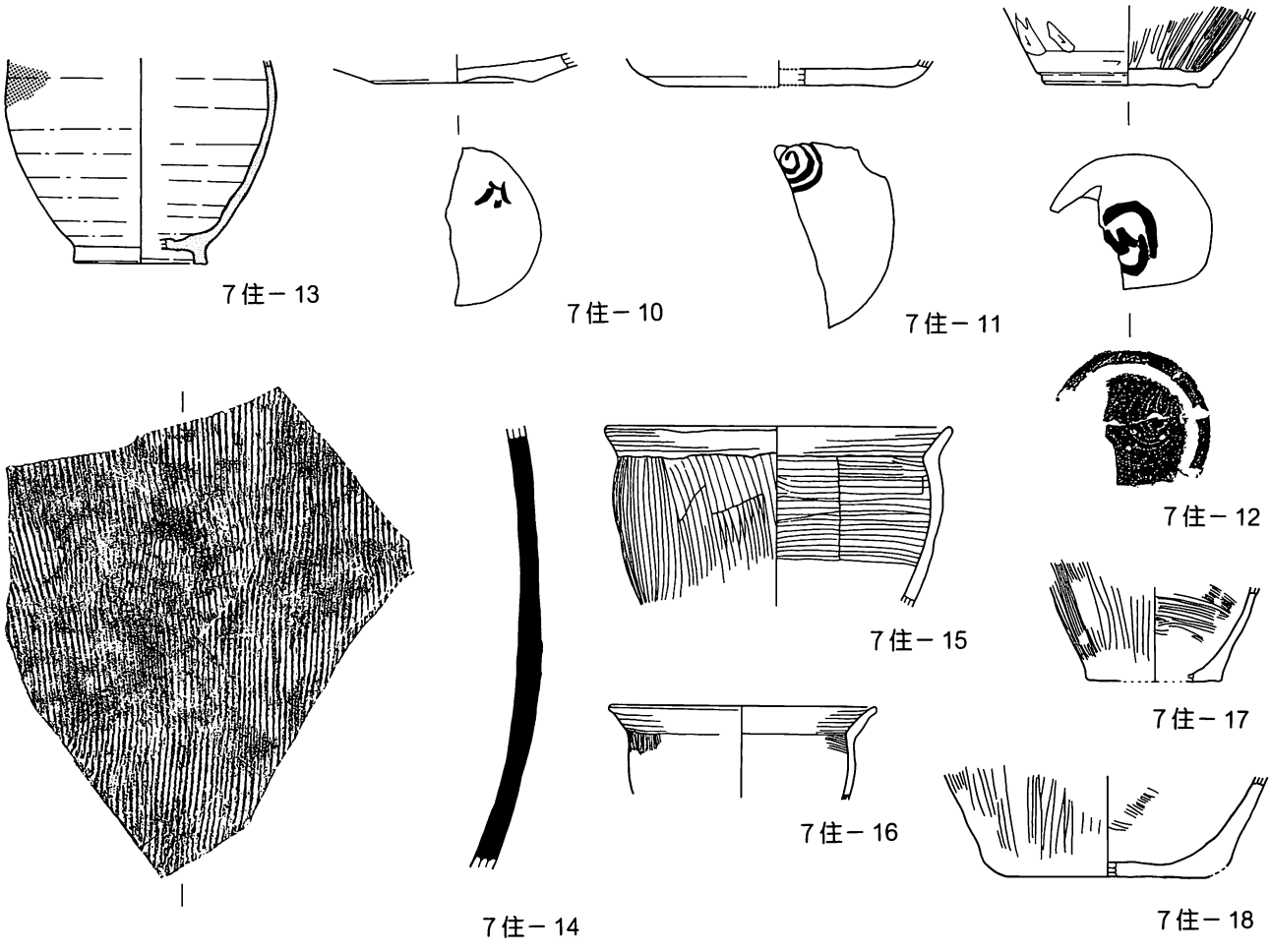


Fig.36　第6号・第7号竪穴住居址出土遺物

7号竪穴住居址　出土遺物－2



8号竪穴住居址　出土遺物

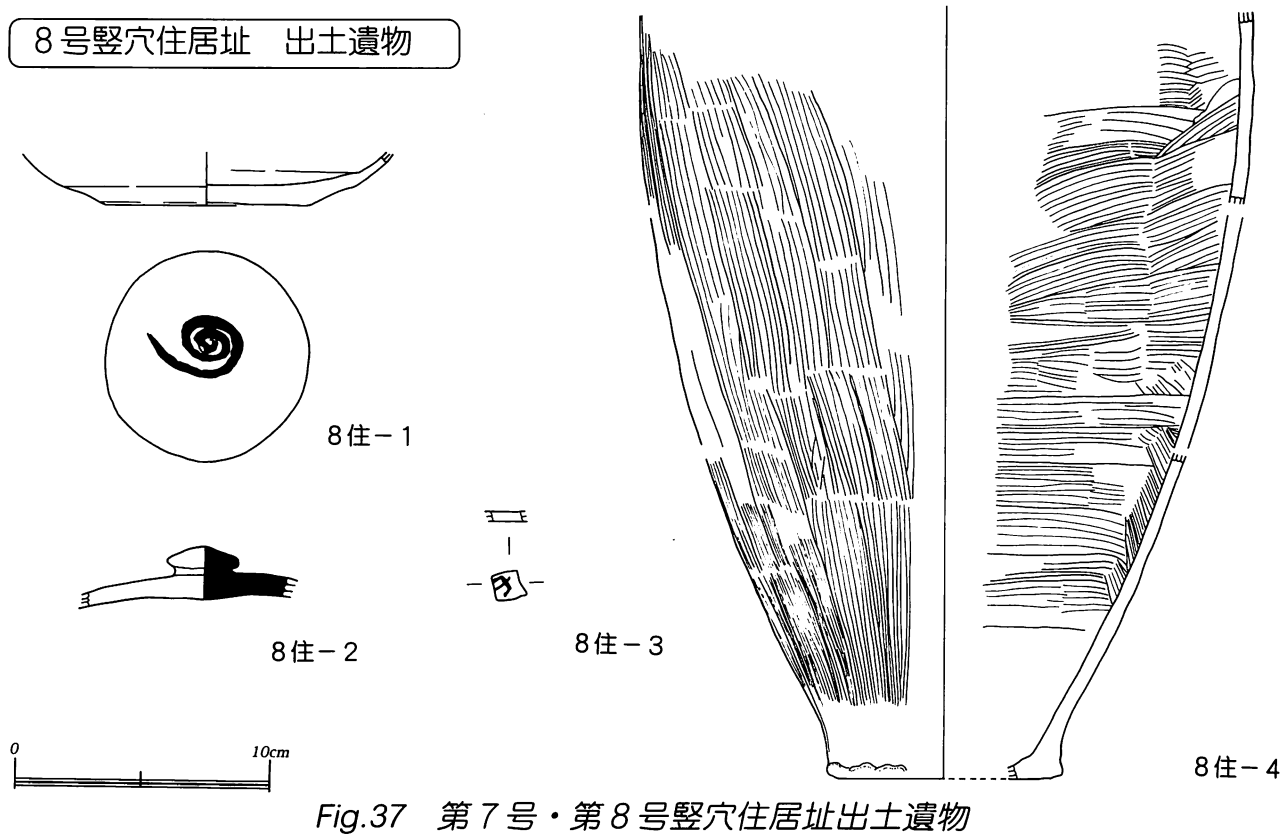


Fig.37　第7号・第8号竪穴住居址出土遺物

9号竪穴住居址　出土遺物

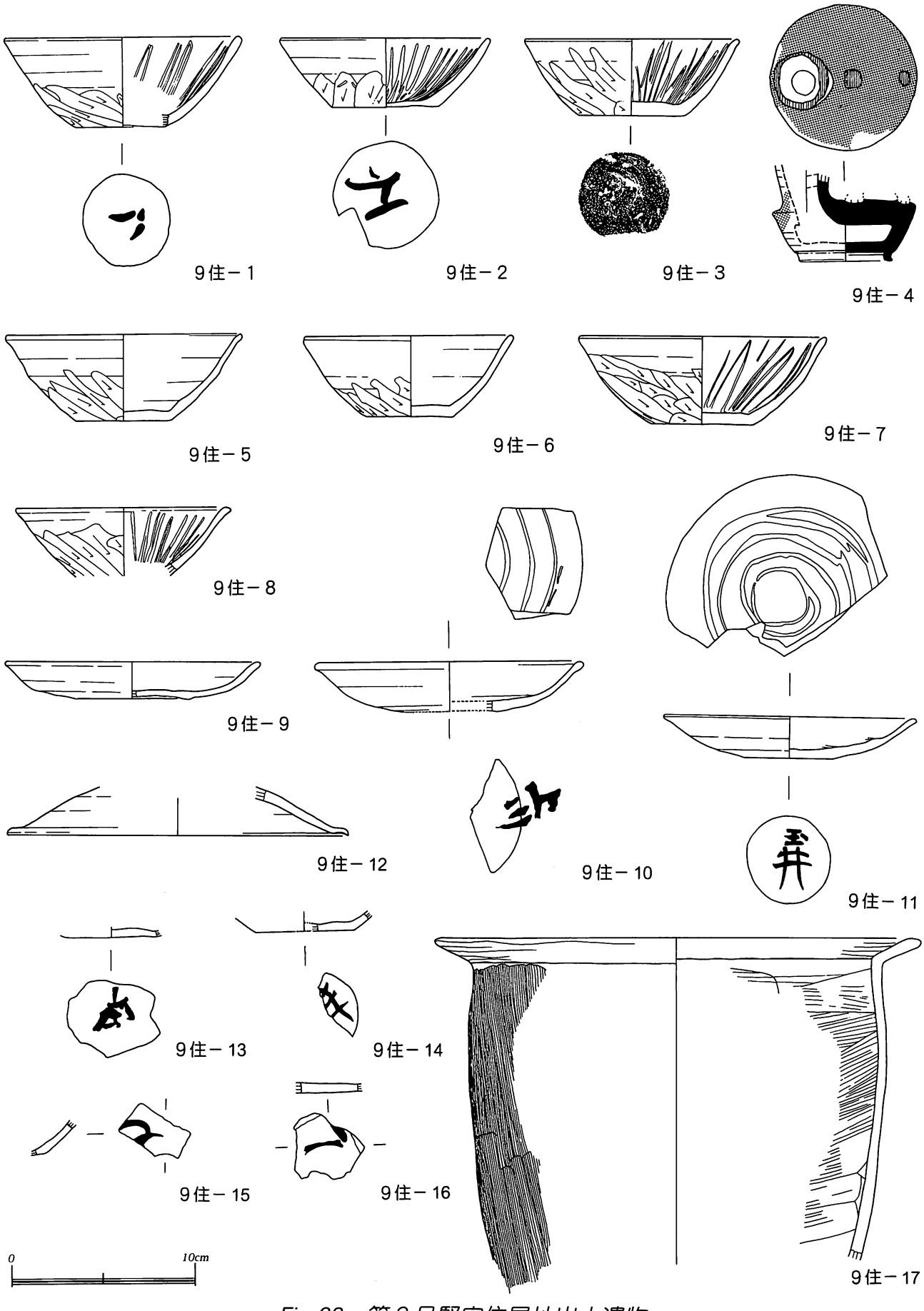
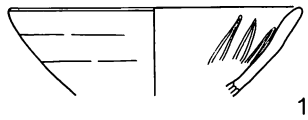
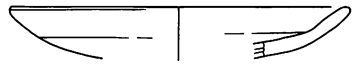


Fig.38　第9号竪穴住居址出土遺物

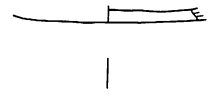
10号竪穴住居址　出土遺物



10住－1

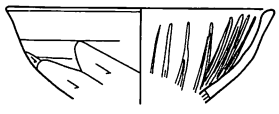


10住－2

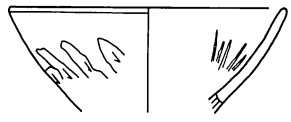


10住－3

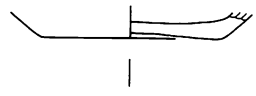
11号竪穴住居址　出土遺物

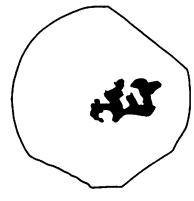


11住－1



11住－2

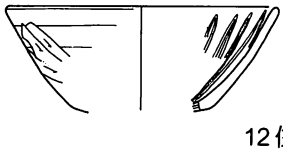




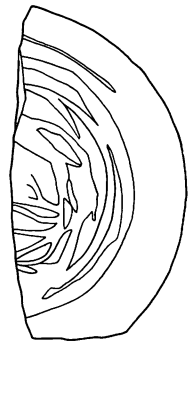
11住－3

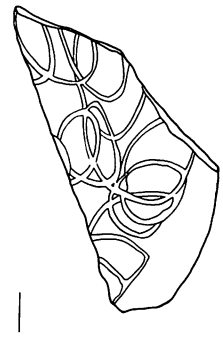
11住－4

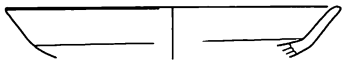
12号竪穴住居址　出土遺物



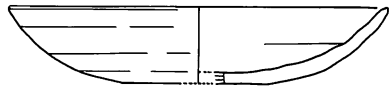
12住－1



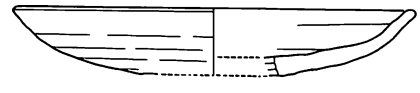




12住－2

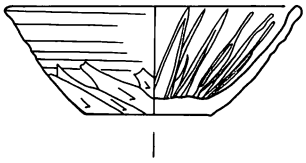


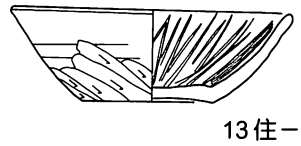
12住－3



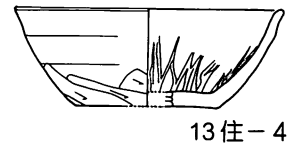
12住－4

13号竪穴住居址　出土遺物－1





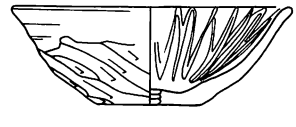
13住－3



13住－4

13住－1

13住－2



13住－5

13住－6

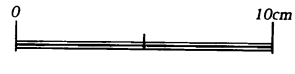


Fig.39　第10～13号竪穴住居址出土遺物

13号竪穴住居址　出土遺物－2

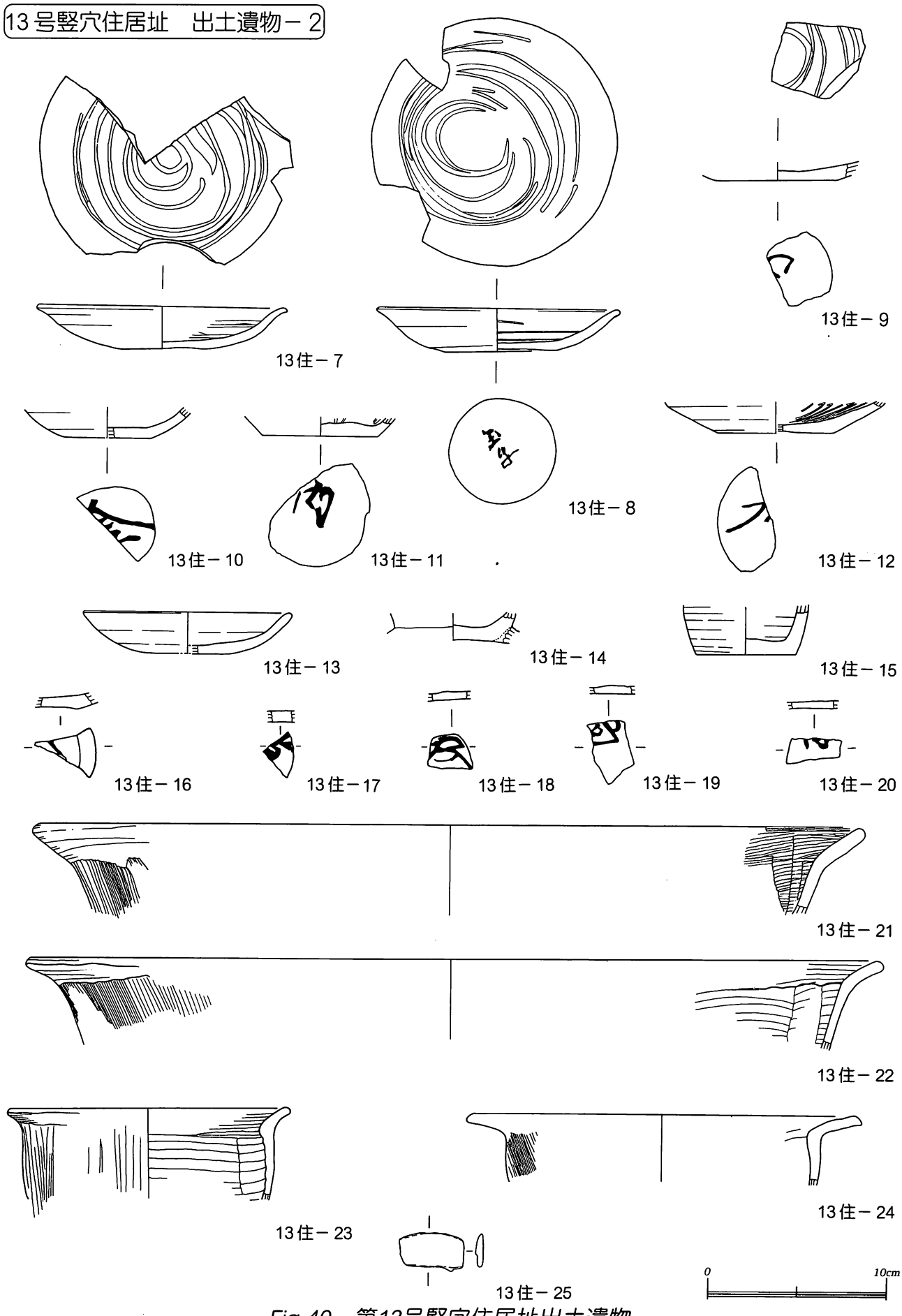


Fig.40　第13号竪穴住居址出土遺物

14号竪穴住居址　出土遺物－1

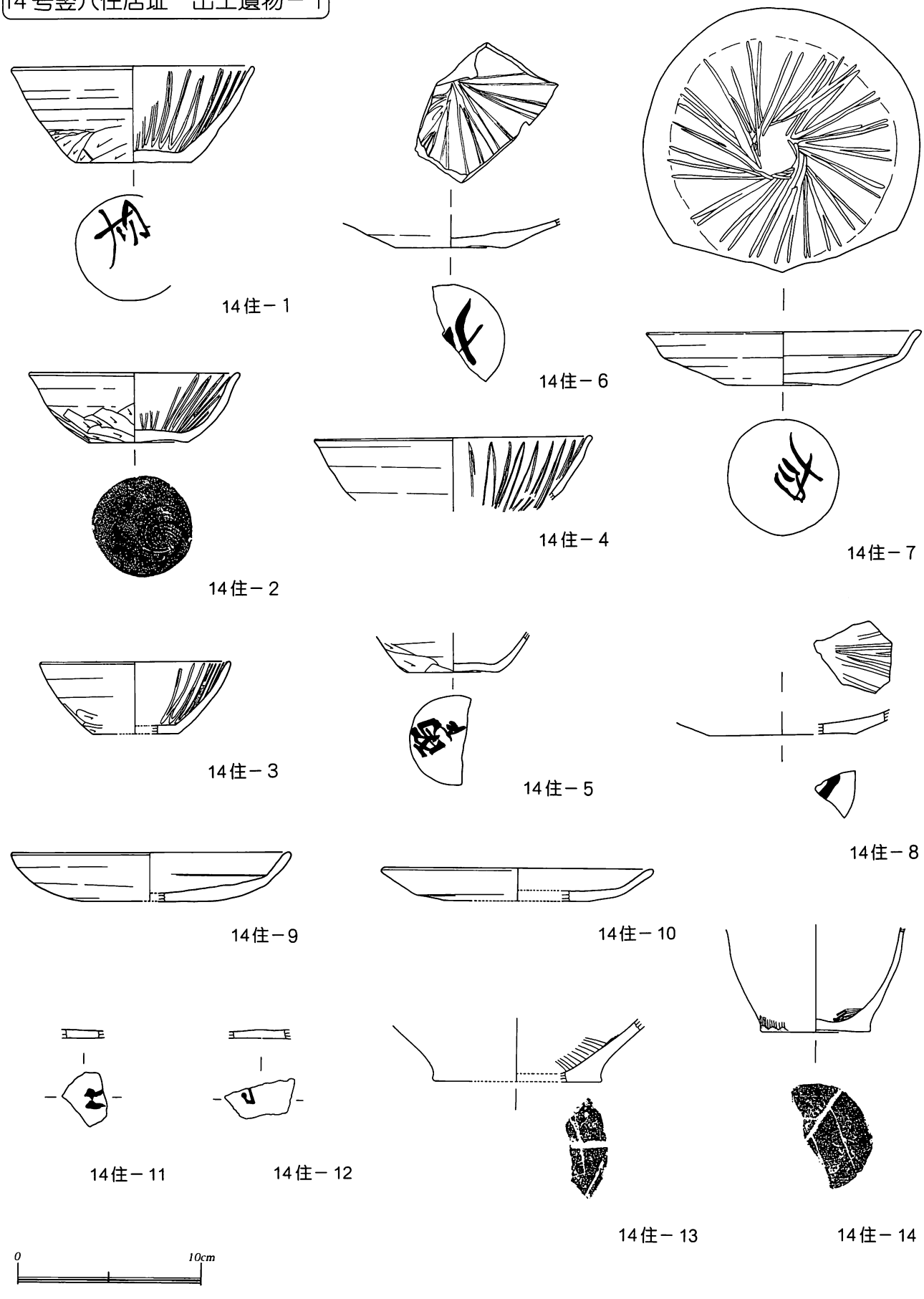
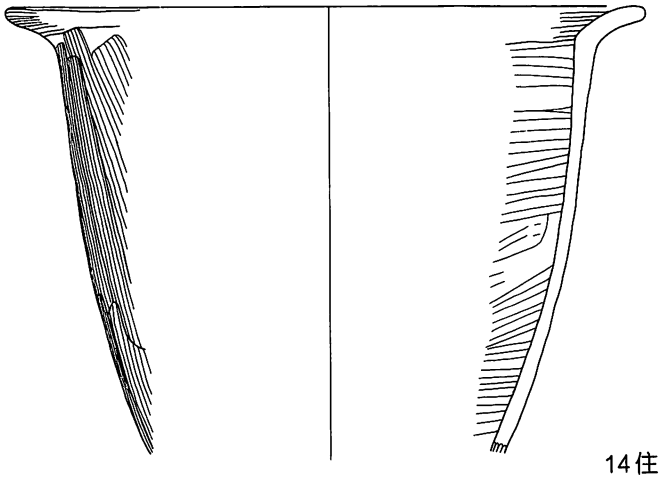
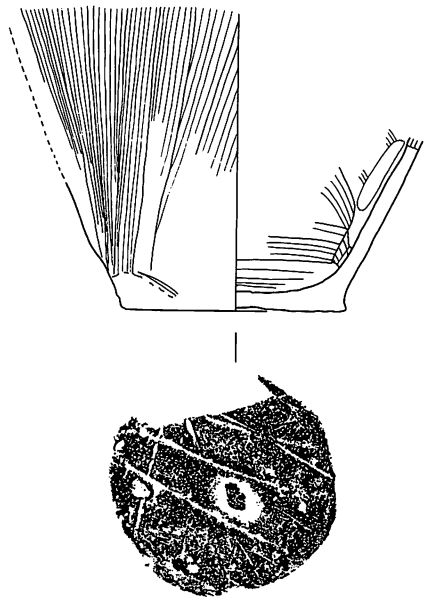


Fig.41　第14号竪穴住居址出土遺物

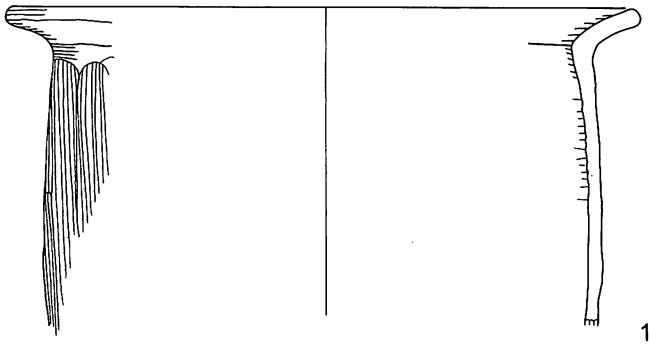
14号竪穴住居址　出土遺物－2



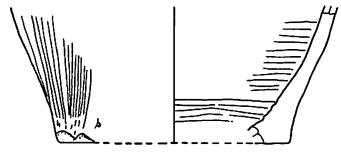
14住－15



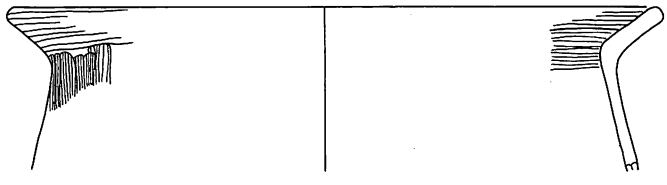
14住－18



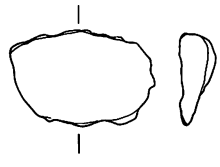
14住－16



14住－19

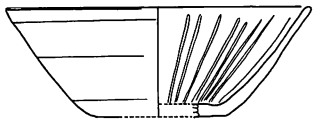


14住－17

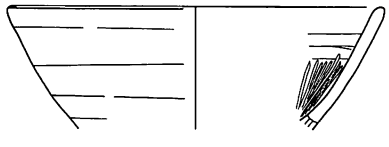


14住－20

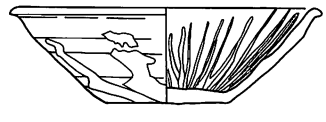
15号竪穴住居址　出土遺物－1



15住－1



15住－2



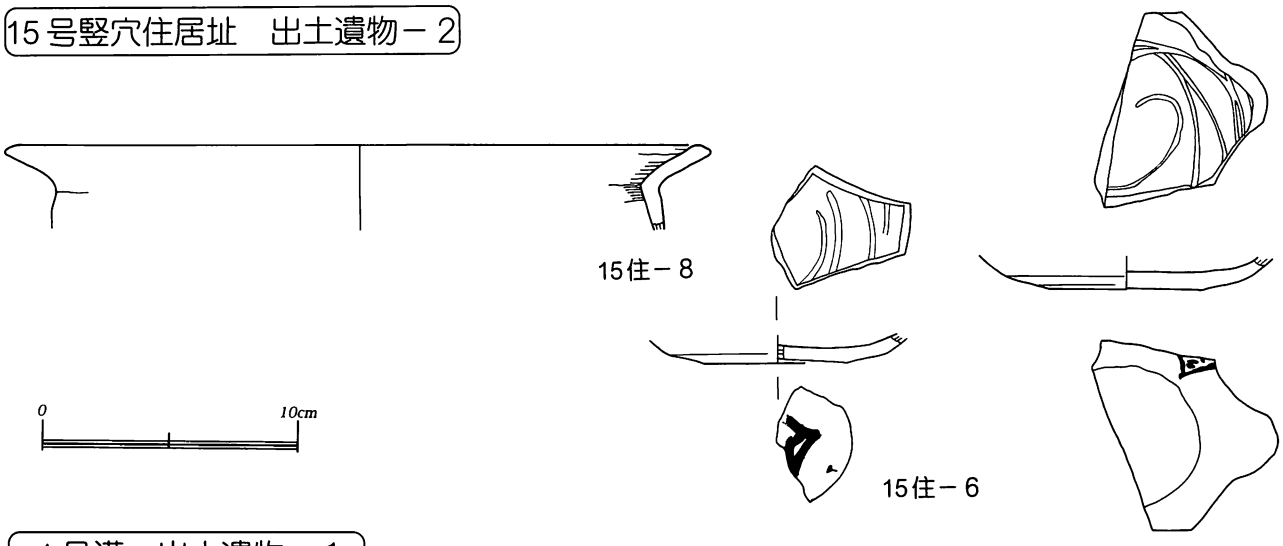
15住－5

15住－3

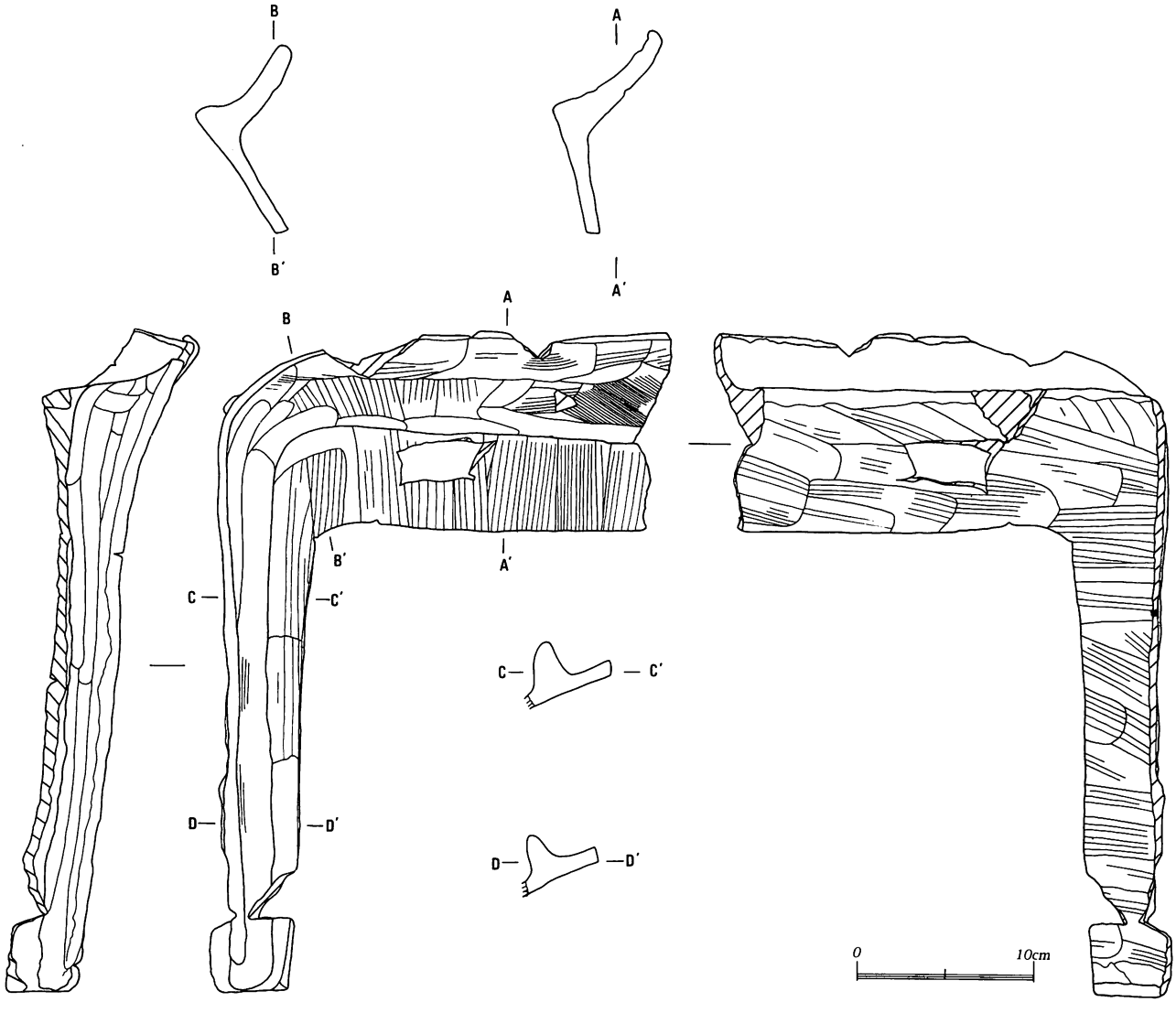
15住－4

Fig.42　第14号・第15号竪穴住居址出土遺物

15号竪穴住居址　出土遺物－2



1号溝　出土遺物－1



1溝－1

Fig.43　第15号竪穴住居址／第1号溝出土遺物

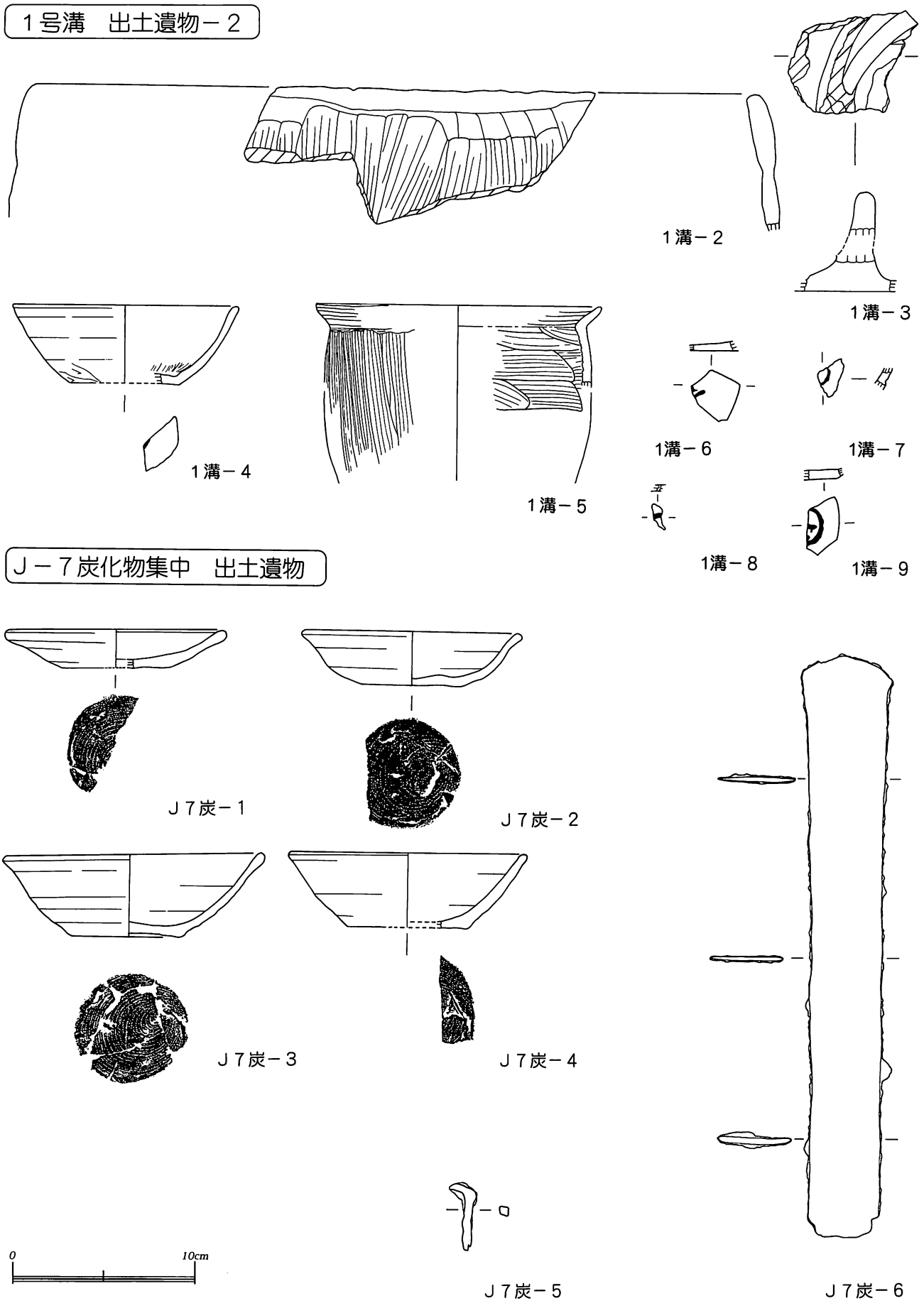


Fig.44　第1号溝／J－7炭化物集中出土遺物

O－14壺　出土遺物

釉薬の範囲を示すスクリーン・トーンの濃い部分は釉薬が濃く掛かっていることを示す。

0　10cm

O-14壺－1

遺構外　出土遺物－1

古墳時代（土師器・石製模造品）

遺構外－1

遺構外－2

平安時代（土師器・坏1）

遺構外－3

遺構外－4

遺構外－5

遺構外－6

遺構外－7

遺構外－8

遺構外－9

遺構外－10

遺構外－11

遺構外－12

遺構外－13

遺構外－14

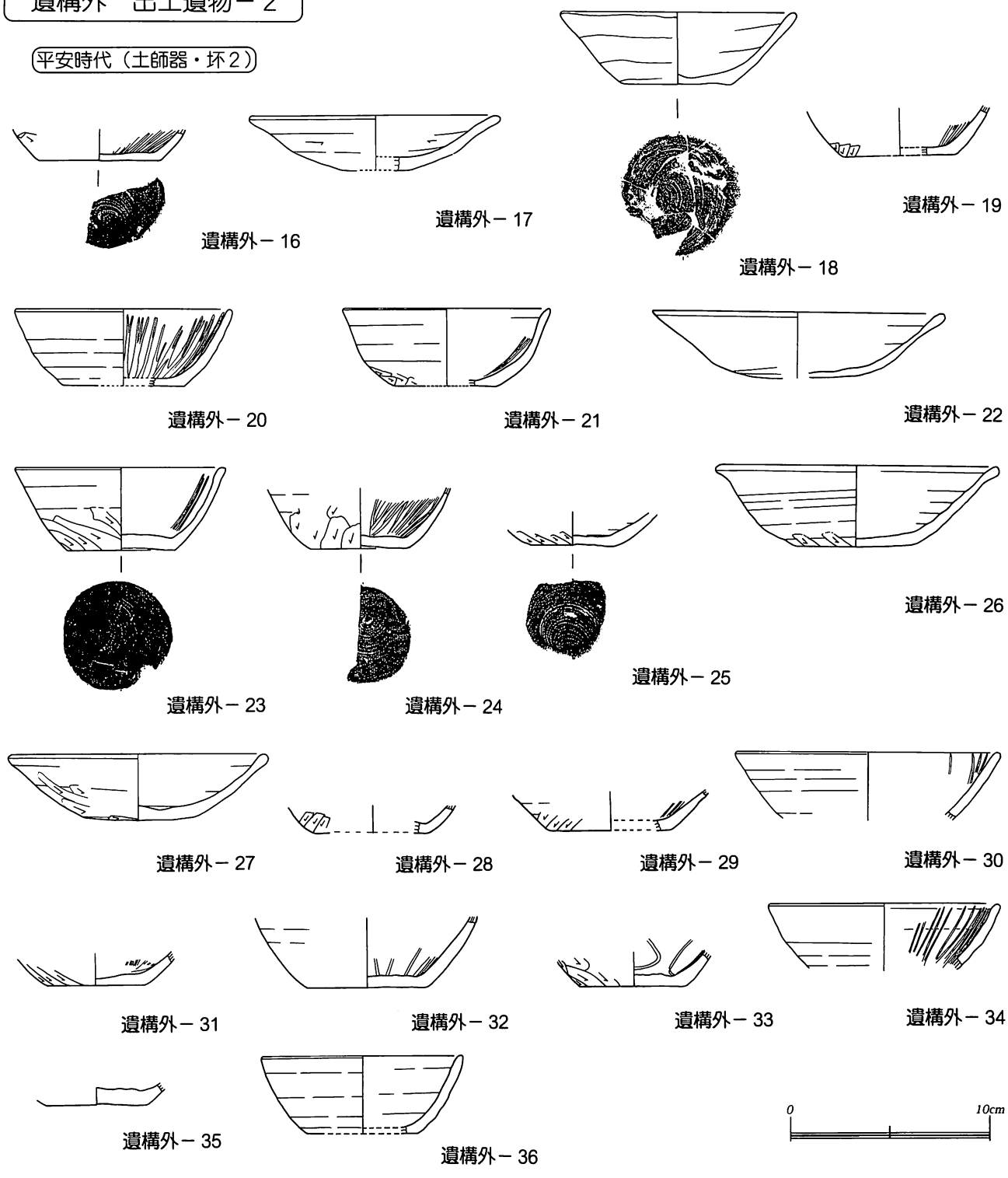
遺構外－15

0　10cm

Fig.45　O－14壺出土遺物／遺構外出土遺物 1

遺構外　出土遺物－２

平安時代（土師器・坏２）



平安時代（土師器・坏／墨書土器１）

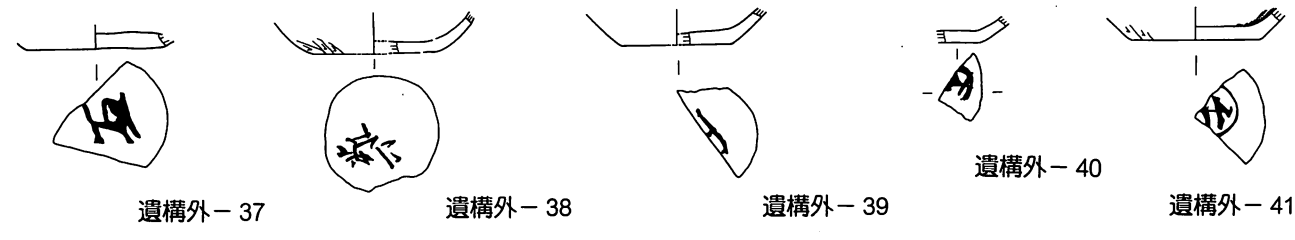


Fig.46　遺構外出土遺物２

遺構外　出土遺物－３

平安時代（土師器・坏／墨書土器２）

Fig.47　遺構外出土遺物３

遺構外　出土遺物－4

平安時代（土師器・坏／墨書土器3）

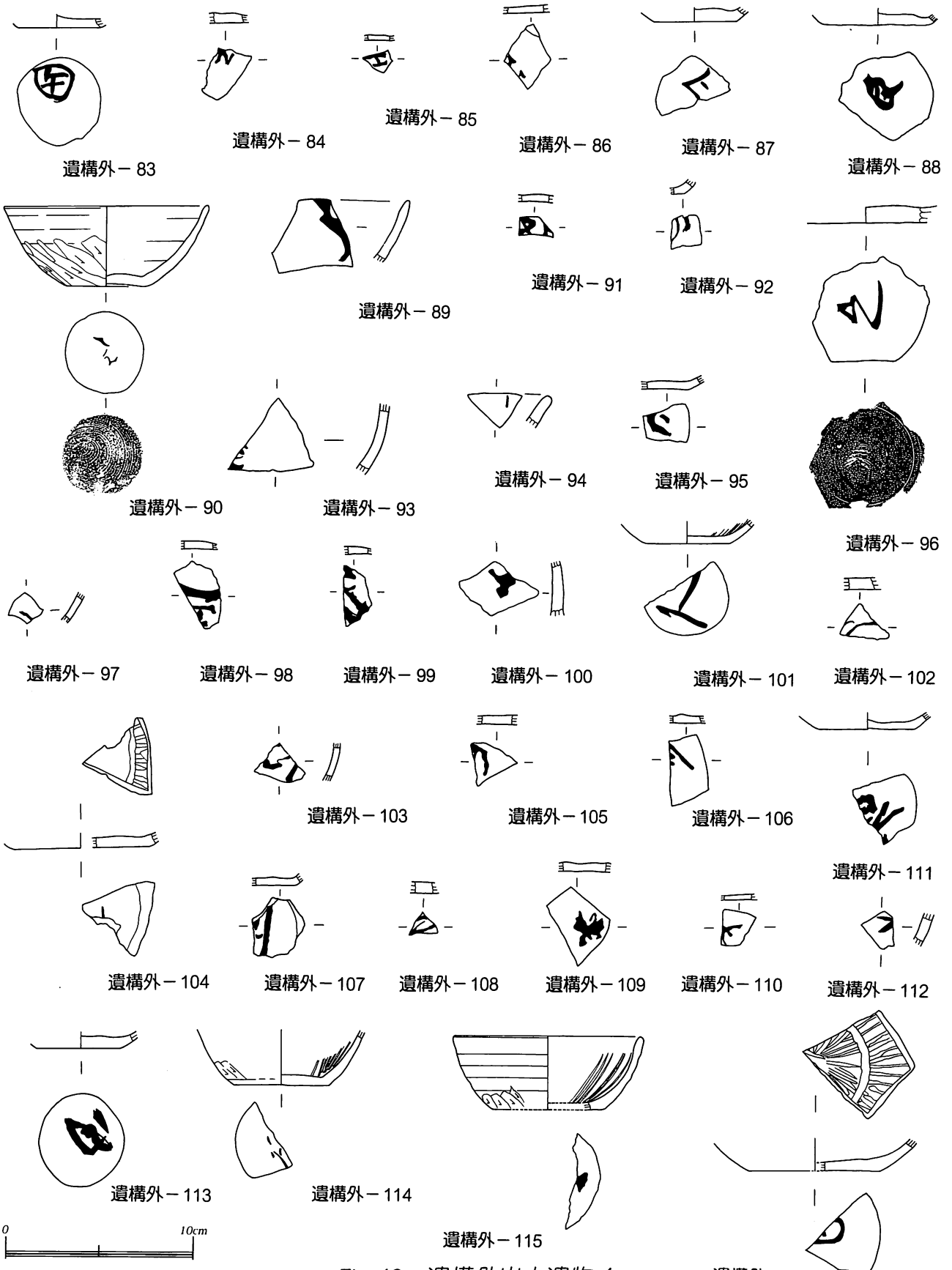


Fig.48　遺構外出土遺物4

遺構外　出土遺物－5

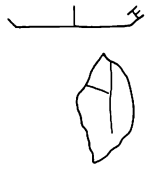
平安時代（土師器・坏／墨書土器4）

Fig.49　遺構外出土遺物5

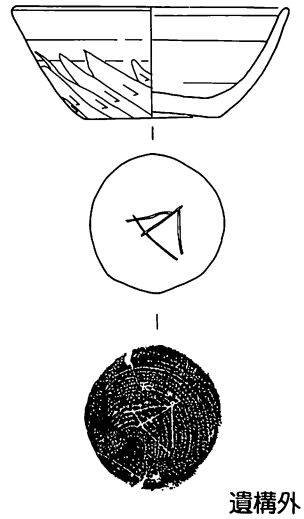
遺構外　出土遺物－6

平安時代（土師器・坏／線刻土器）

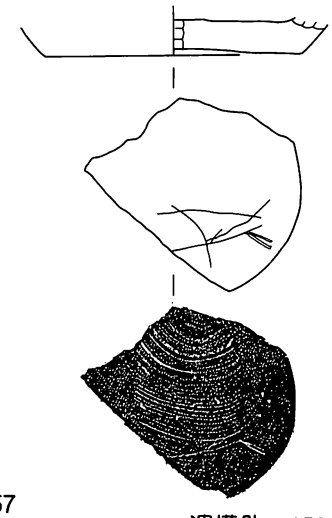
遺構外－155



遺構外－156

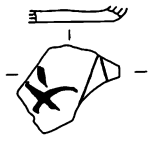


遺構外－157

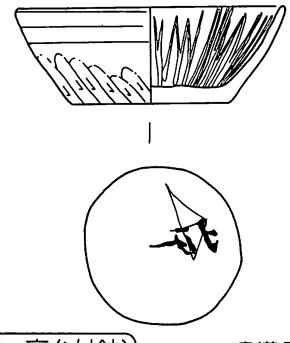


遺構外－158

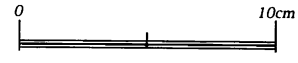
平安時代（土師器・坏／墨書＋線刻土器）



遺構外－159



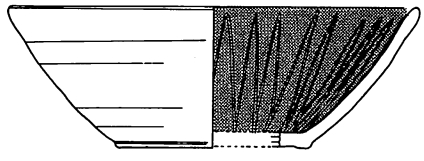
遺構外－160



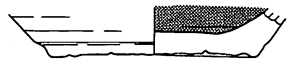
平安時代（土師器・高台付坏）

遺構外－161

平安時代（土師器・高台付鉢）

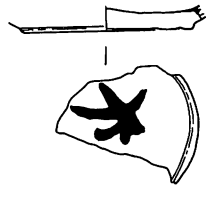


遺構外－162



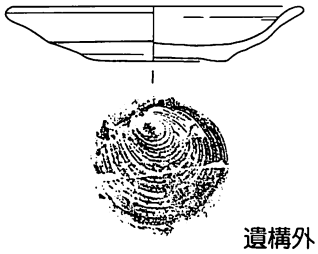
遺構外－163

平安時代（土師器・高台付坏／墨書土器）

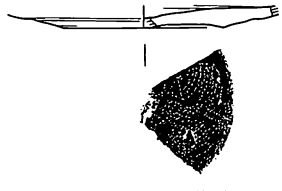


遺構外－164

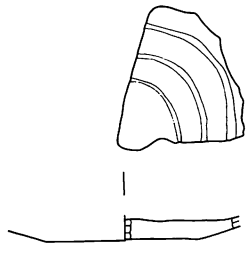
平安時代（土師器・皿１）



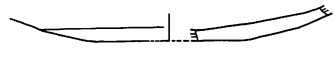
遺構外－165



遺構外－166



遺構外－167

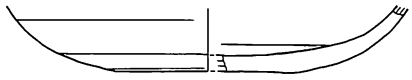


遺構外－168

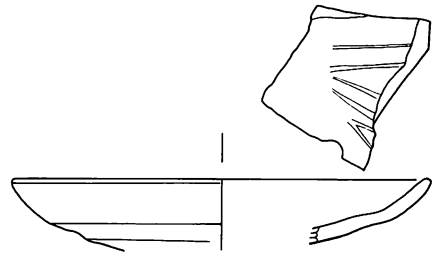
Fig.50　遺構外出土遺物 6

遺構外　出土遺物－７

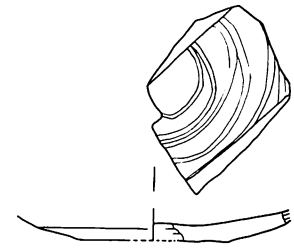
平安時代（土師器・皿２）



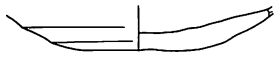
遺構外－169



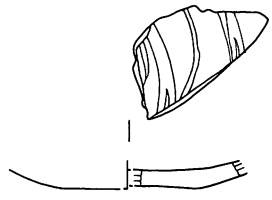
遺構外－170



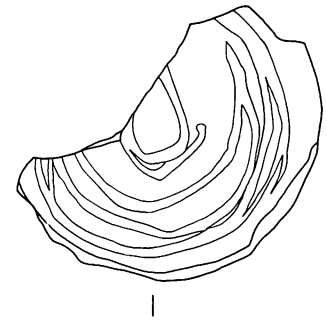
遺構外－171



遺構外－172



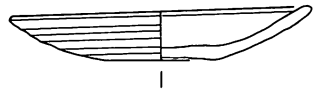
遺構外－174



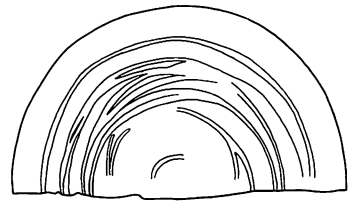
遺構外－173

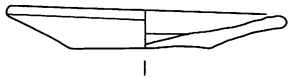
遺構外－175

遺構外－176

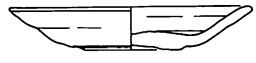


遺構外－178

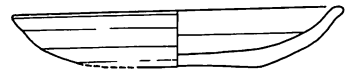




遺構外－177

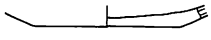


遺構外－179

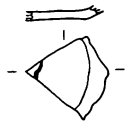


遺構外－180

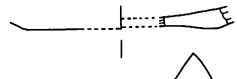
平安時代（土師器・皿／墨書土器１）



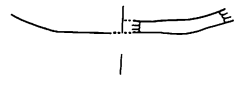
遺構外－181



遺構外－182



遺構外－183

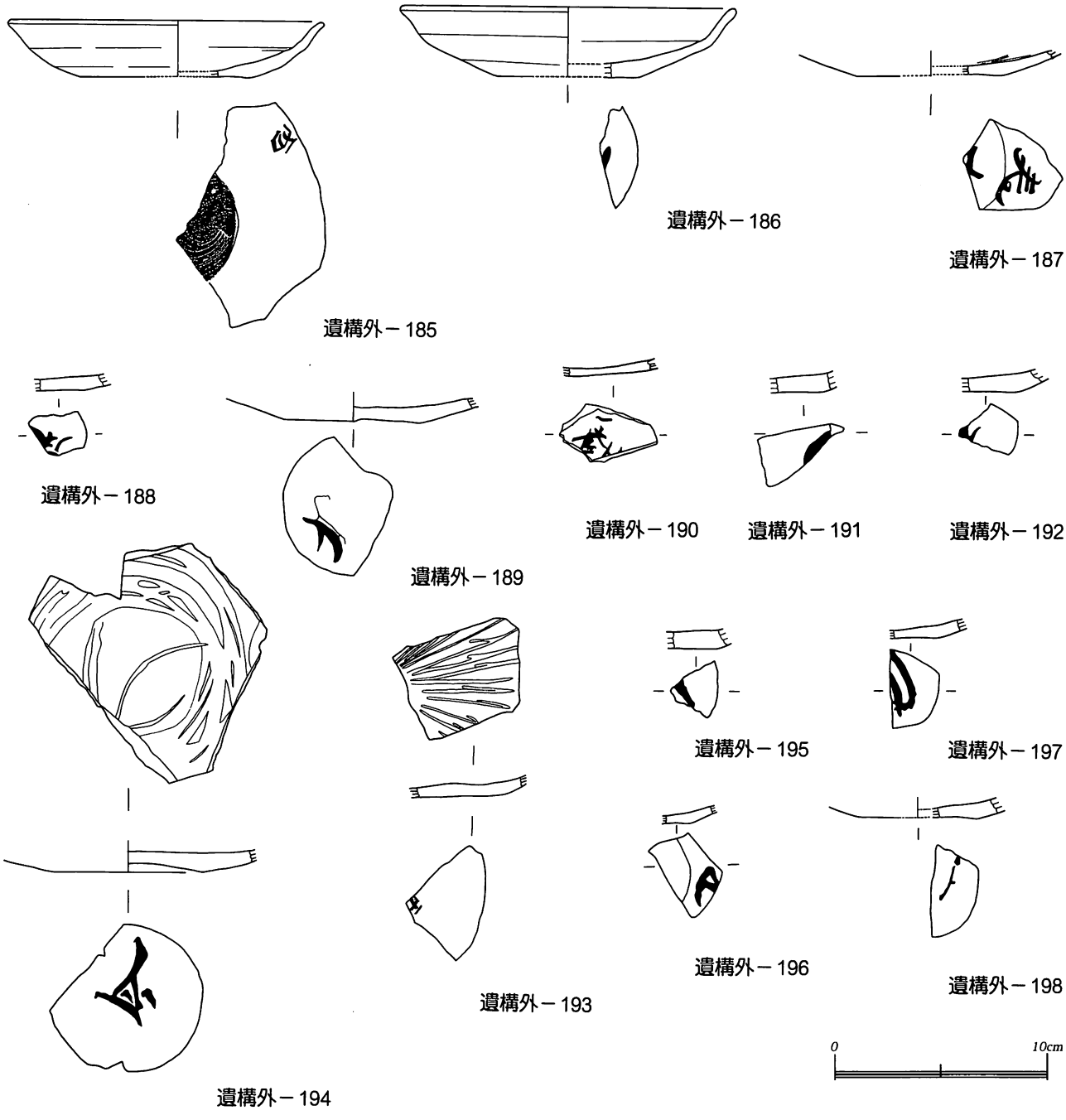


遺構外－184

Fig.51　遺構外出土遺物７

遺構外　出土遺物－8

平安時代（土師器・皿／墨書土器２）



平安時代（土師器・皿／線刻土器）

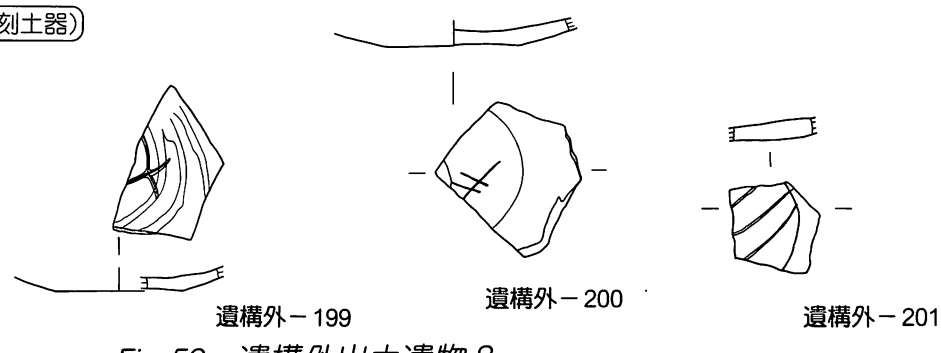
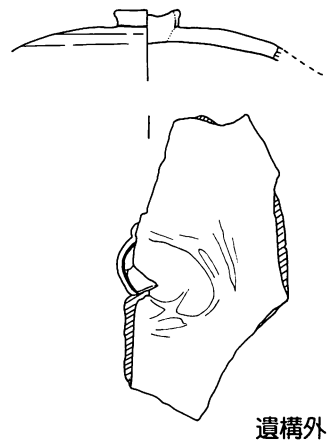


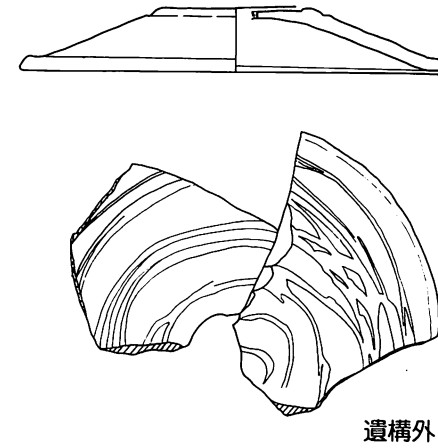
Fig.52　遺構外出土遺物 8

遺構外　出土遺物－9

平安時代（土師器・蓋）



遺構外－203



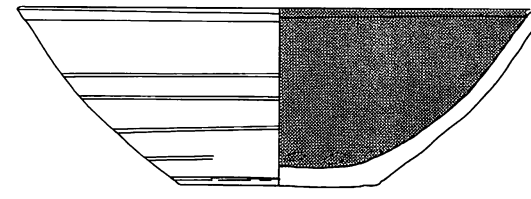
遺構外－202

0　10cm

平安時代（土師器・蓋／墨書土器）

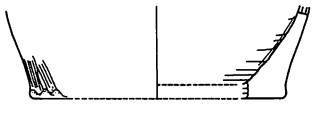
遺構外－204

平安時代（土師器・鉢）

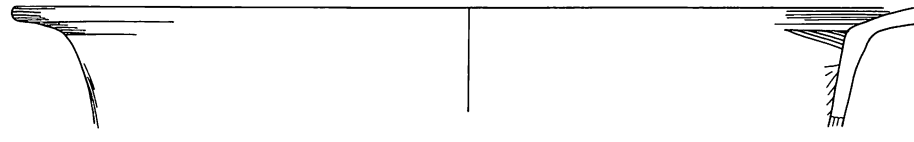


遺構外－205

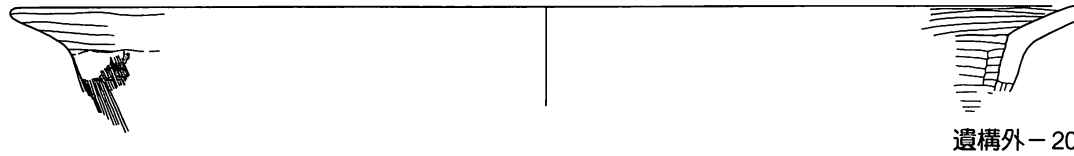
平安時代（土師器・甕）



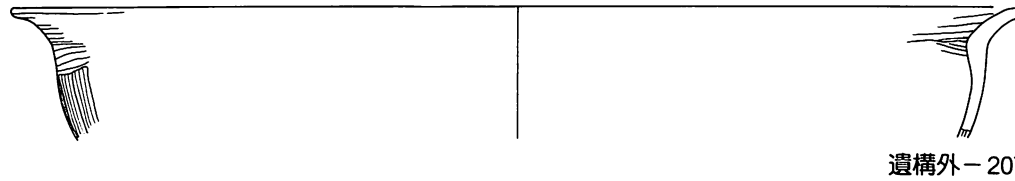
遺構外－206



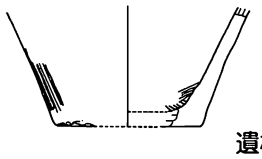
遺構外－208



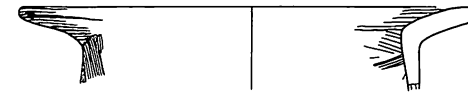
遺構外－209



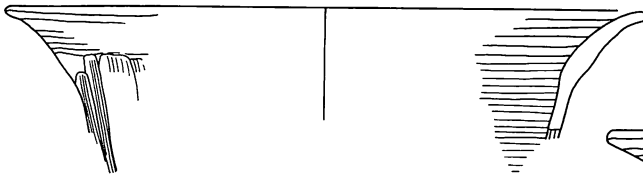
遺構外－207



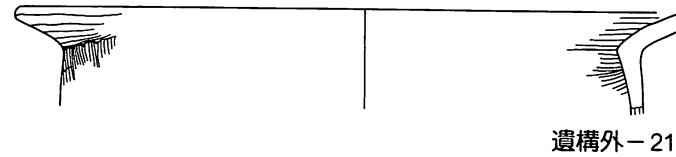
遺構外－213



遺構外－211



遺構外－210



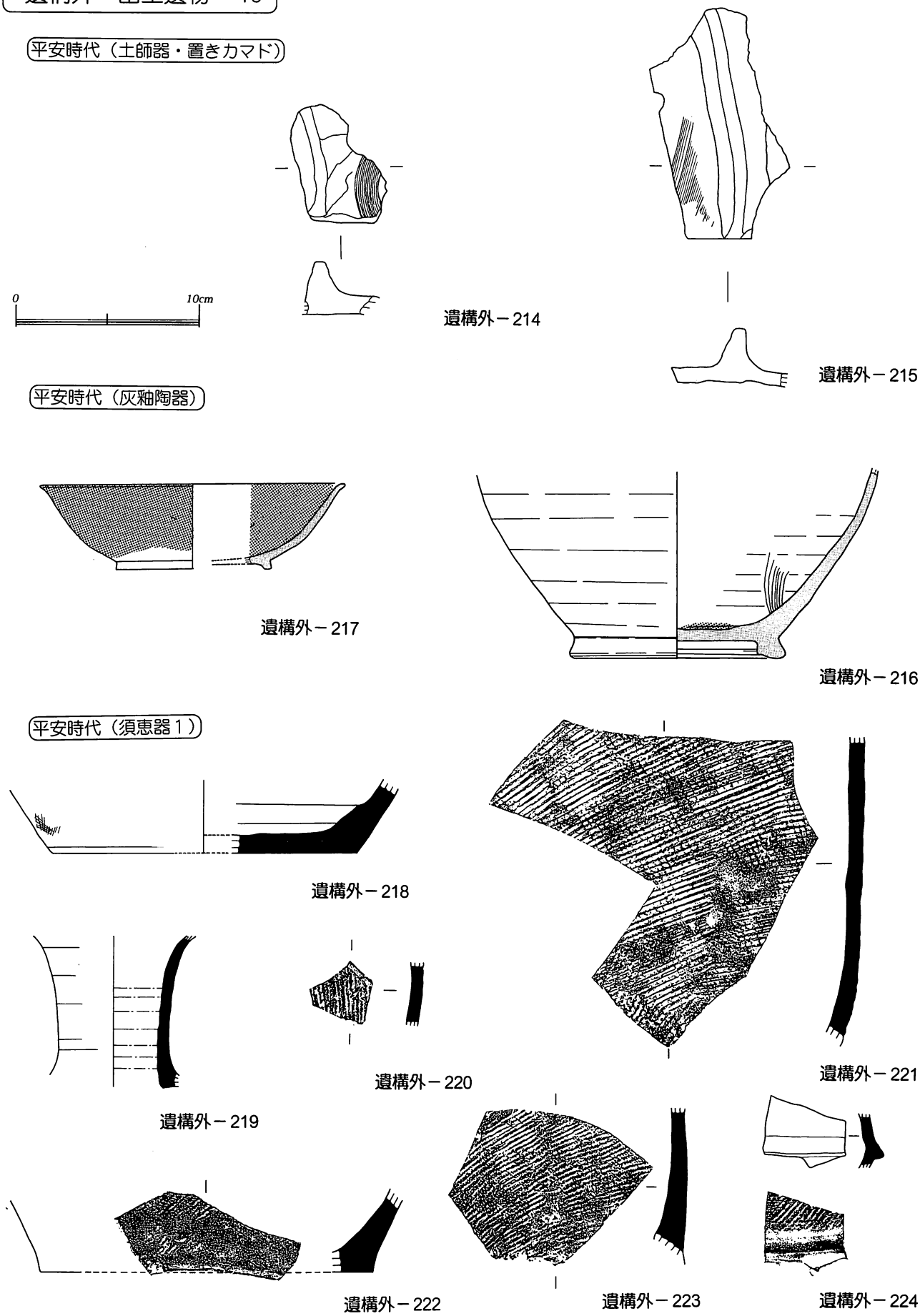
遺構外－212

0　10cm

Fig.53　遺構外出土遺物 9

遺構外　出土遺物－10

平安時代（土師器・置きカマド）



平安時代（灰釉陶器）

平安時代（須恵器１）

Fig.54　遺構外出土遺物10

遺構外　出土遺物－11

平安時代（須恵器２）

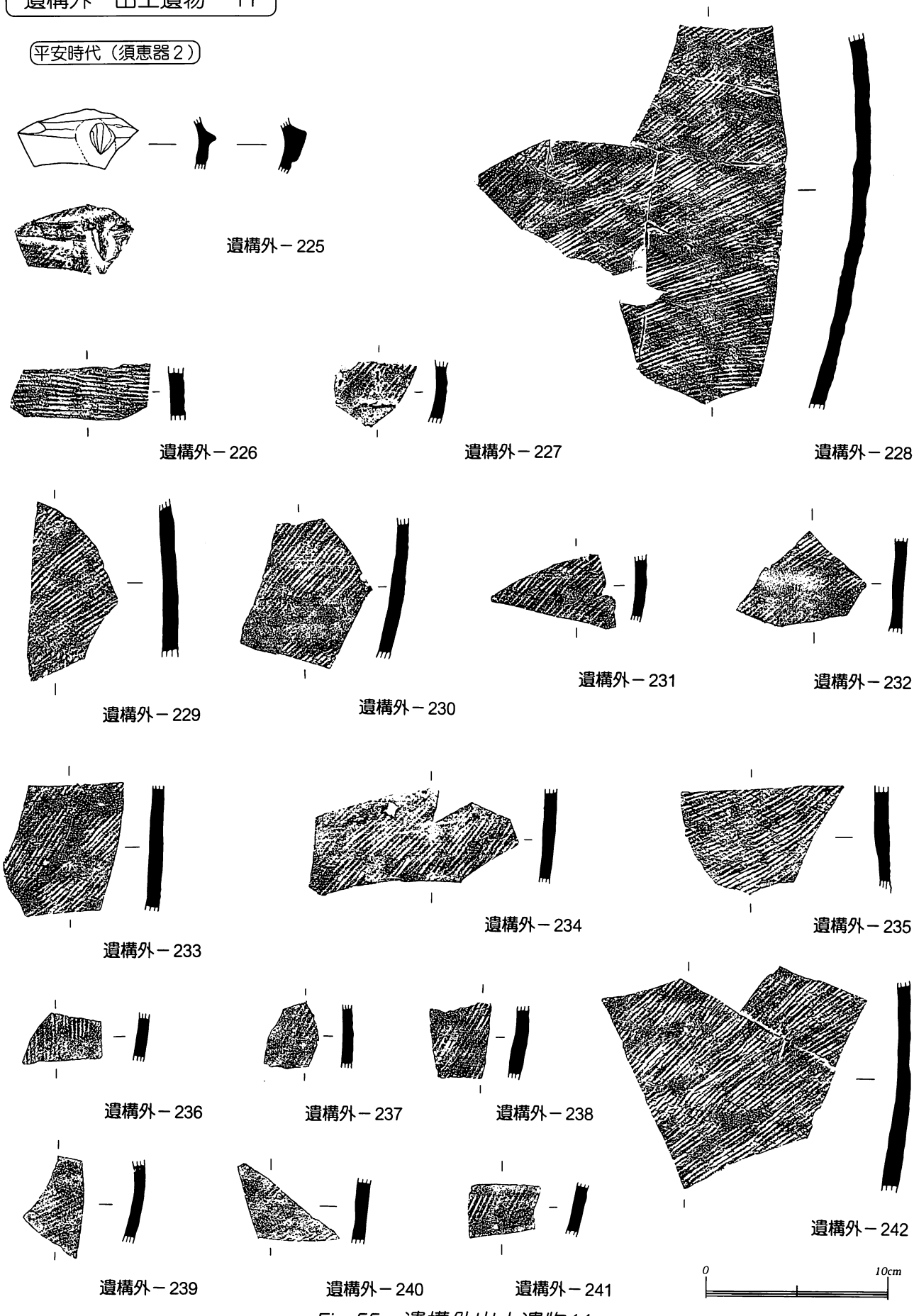
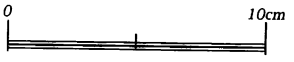


Fig.55　遺構外出土遺物11

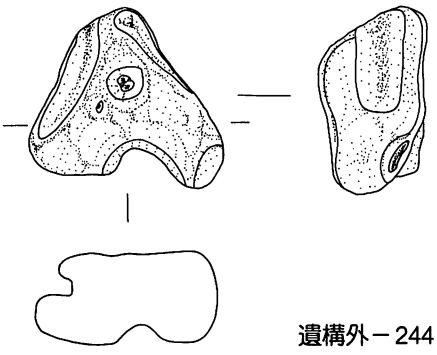
遺構外　出土遺物－12

平安時代（須恵器・坏／墨書土器）

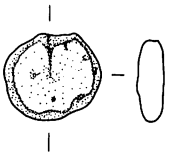
遺構外－243



平安時代（土製品）



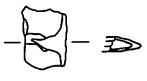
遺構外－244



遺構外－245

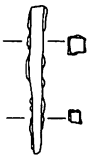
平安時代（鉄製品）

遺構外－246

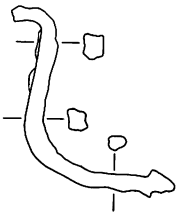


遺構外－247

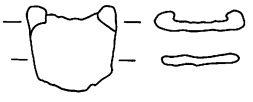
遺構外－248



遺構外－249

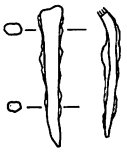


遺構外－250

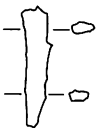


遺構外－251

遺構外－252

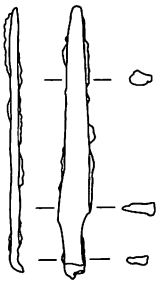


遺構外－253

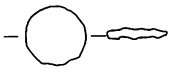


遺構外－254

遺構外－255

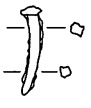


遺構外－256

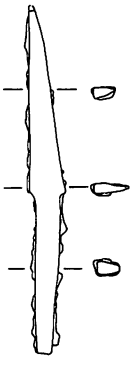


遺構外－257

遺構外－258

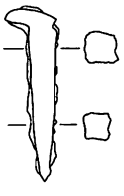


遺構外－259

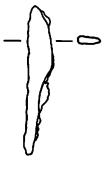


遺構外－264

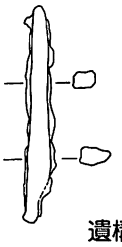
遺構外－260



遺構外－261

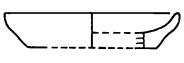


遺構外－262

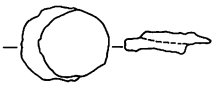


遺構外－263

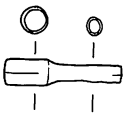
その他



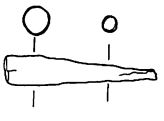
遺構外－265



遺構外－266



遺構外－267



遺構外－268

遺構外－269

遺構外－270

Fig.56　遺構外出土遺物12

Tab.1　出土遺物観察表1【1住-1～5住-15】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その部位	注記No.
1住-1	31	14	覆土	土師器・坏	--/--/--/9g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	1住-17
2住-1	31	6.14	覆土	土師器・皿	--／9.4／残高2.0/93g	色5YR6/6	線刻「木」・底外	2住-256他
2住-2	31	14	覆土	土師器・皿	--/(9.0)/残高1.0/19g	色2.5YR6/6	墨書「幸」・底外	2住-7他
2住-3	31	14	覆土	土師器・坏	--/5.0/1.2/16g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	2住-241
2住-4	31	14	覆土	土師器・坏	--/--/--/1g	色2.5YR6/6	墨書「□」・底外	2住-9
2住-5	31	5	覆土	土師器・坏	--/--/--/4g	色2.5YR6/6	墨書「□」・底外	2住-68
2住-6	31	14	覆土	土師器・鉢	--/--/--/5g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	2住-178
2住-7	31	-	覆土	土師器・坏	--/--/--/1g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	2住-409
2住-8	31	6	覆土	土師器・小形壺	13.0/6.0/8.5/160g	色5YR6/6		2住-333
2住-9	31	6	覆土	土師器・甕	(25.0)/--/残高6.0/39g	色7.5YR4/3		2住-389
2住-10	31	6	覆土	土師器・甕	(21.0)/--/残高3.2/34g	色5YR4/4		2住-415
2住-11	31	6	覆土	土師器・甕or置ｶﾏﾄﾞ	(26.0)/--/残高7.0/61g	色7.5YR5/4		2住-124他
2住-12	31	6	竈内	土師器・甕	12.0/9.0/42.0/1816g	色5YR6/6		2住-316他
2住-13	31	6	覆土	鉄器・刀子	現長9.0/復元長(11.0)/11g	中心で折れる状態		2住-302
3住-1	32	6.14	覆土	土師器・坏	12.0/4.8/3.8/58g	色2.5YR6/6	墨書「仁」・底外	3住-121他
3住-2	32	6	覆土	土師器・坏	11.4/5.6/4.0/105g	色2.5YR6/6		3住-178他
3住-3	32	6	覆土	土師器・坏	11.6/4.8/3.7/28g	色2.5YR6/8		3住-132他
3住-4	32	6	覆土	土師器・坏	11.2/4.5/4.2/51g	色2.5YR6/8		3住-25
3住-5	32	6	覆土	土師器・坏	17.0/--/残高6.0/62g	色2.5YR6/6		3住-111
3住-6	32	6.14	覆土	土師器・坏	--/5.1/残高1.9/28g	色5YR6/6	墨書「工」・底外	3住-5
3住-7	32	6.14	覆土	土師器・皿	15.0/5.8/2.2/98g	色5YR6/6	墨書「末」・底外	3住-116他
3住-8	32	6	覆土	土師器・皿	(14.0)/(5.8)/2.2/25g	色5YR5/3		3住-139
3住-9	32	6	覆土	土師器・皿	(14.0)/(5.0)/2.4/28g	色2.5YR6/6		3住-4
3住-10	32	6	覆土	土師器・皿	14.2/5.8/2.2/98g	色5YR6/6		3住-114他
3住-11	32	6	覆土	土師器・甕	(24.6)/--/残高3.0/22g	色2.5YR5/6		3住-9
3住-12	32	6	覆土	土師器・甕	(28.0)/--/残高3.6/29g	色2.5YR5/4		3住-187
3住-13	32	6	覆土	土師器・甕	--/9.2/残高13.0/412g	色2.5YR4/3		3住-150他
4住-1	33	6.14	覆土	土師器・坏	11.4/5.8/4.4/77g	色2.5YR4/4	墨書「鷹」・底外	4住-40他
4住-2	34	6.14	覆土	土師器・坏	10.8/4.2/4.8/62g	色2.5YR6/6	線刻「V」・底外	4住-65他
4住-3	35	6	覆土	土師器・皿	(15.0)/(6.0)/2.2/50g	色2.5YR6/6		4住-39他
4住-4	35	6	覆土	灰釉陶器・壺	--/6.0/残高3.2/86g	色N6/0		4住-51
4住-5	35	14	覆土	土師器・坏	--/--/--/1g	色2.5YR5/4	墨書「□」・底外	4住
4住-6	35	6	覆土	土師器・皿	15.0/6.0/2.4/147g	色2.5YR6/6		4住-68他
4住-7	35	6	覆土	土師器・皿	(18.0)/--/1.4/10g	色2.5YR6/6		4住-66他
4住-8	35	6	覆土	土師器・皿	--/(6.2)/1.6/18g	色7.5YR6/6		4住-72他
5住-1	35	6.14	覆土	土師器・坏	11.2/5.2/4.8/91g	色2.5YR6/6	線刻「〃」・底外	5住-1635他
5住-2	35	6.14	覆土	土師器・坏	11.2/5.4/4.6/53g	色2.5YR5/6	墨書「□」・底外	5住-1474他
5住-3	35	6	覆土	土師器・坏	(13.0)/(6.2)/5.0/59g	色2.5YR5/4		5住-834他
5住-4	35	6	覆土	土師器・高台付坏	--/(5.4)/残高3.0/53g	色2.5YR5/4		5住-1073他
5住-5	35	14	覆土	土師器・坏	--/--/残高1.0/1g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	5住-758
5住-6	35	14	覆土	土師器・坏	--/--/残高2.0/4g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	5住-1271他
5住-7	35	6	覆土	土師器・蓋	(16.0)/--/残高3.7/41g	色5YR5/4		5住-549他
5住-8	35	7	覆土	土師器・皿	14.8/6.0/2.8/115g	色2.5YR5/6		5住-1237他
5住-9	35	7	覆土	土師器・皿	15.0/5.8/2.8/137g	色2.5YR6/8		5住-1521他
5住-10	36	7.14	竈内	土師器・皿	14.8/6.6/2.8/179g	色5YR5/4・穿孔あり	線刻「〃」・底外	5住-1240
5住-11	36	7.14	覆土	土師器・皿	15.6/7.2/3.2/166g	色2.5YR5/6	墨書「内カ」・底外	5住-1636他
5住-12	36	7	覆土	土師器・皿	14.6/6.2/2.4/111g	色2.5YR5/6		5住-839
5住-13	36	7.14	覆土	土師器・皿	15.0/5.8/2.4/158g	色5YR5/4	墨書「和」・底外	5住-1634
5住-14	36	7.14	覆土	土師器・皿	(13.4)/5.4/2.4/45g	色2.5YR5/6	墨書「山中」・底外	5住-1439他
5住-15	36	7	覆土	土師器・甕	--/9.2／残高17.4/296g	色7.5YR5/4		5住-1617他

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.2 出土遺物観察表2【5住-16～9住-3】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その部位	注記No.
5住-16	34	7	覆土	土師器・小形甕	14.2/8.4/13.2/291g	色7.5YR4/2		5住-951他
5住-17	35	7	覆土	土師器・小形甕	(16.8)/ - /残高5.8/58g	色10YR5/3		5住-1420
5住-18	35	7	覆土	土師器・甕	(17.4)/--/残高5.0/22g	色10YR4/2		5住-1630
5住-19	35	7	覆土	土師器・甕	(25.0)/--/残高2.4/39g	色10YR2/1		5住-1516
5住-20	35	-	覆土	土師器・甕	(26.4)/--/残高3.4/49g	色7.5YR4/2		5住-1622他
5住-21	35	7	覆土	土師器・甕	(27.2)/--/残高6.2/90g	色2.5YR5/4		5住-1430他
5住-22	35	-	覆土	土師器・甕	(27.4)/--/残高7.4/75g	色7.5YR4/2		5住-1346他
5住-23	35	7	覆土	土師器・甕	(28.8)/--/残高3.8/29g	色7.5YR5/3		5住-1133他
5住-24	35	7	覆土	土師器・甕	(29.4)/--/残高4.4/34g	色5YR5/4		5住-567
5住-25	35	7	覆土	土師器・甕	--/(8.0)/残高4.4/33g	色7.5YR5/4		5住-1092
5住-26	35	7	覆土	土師器・甕	--/(8.4)/残高4.8/81g	色5YR5/4		5住-1485
5住-27	35	7	覆土	土師器・甕	--/8.8/残高4.4/86g	色5YR4/2		5住-710他
5住-28	35	7	覆土	土師器・甕	--/9.4/残高3.4/198g	色7.5YR4/3		5住-1442他
5住-29	35	7	覆土	土師器・甕	--/8.2/残高4.0/68g	色5YR5/3		5住-895他
5住-30	35	7	覆土	土師器・置カマド	底径(38.0)/残高6.0/211g	色5YR5/4		5住-1308他
6住-1	36	7	竈内	土師器・坏	11.0/5.4/3.6/75g	色5YR6/6		6住-117他
6住-2	36	7	覆土	土師器・坏	12.0/4.6/4.0/102g	色5YR6/6		6住-51
6住-3	36	7	壁上	土師器・坏	(11.0)/--/残高4.4/25g	色2.5YR6/8		6住-23他
6住-4	36	14	覆土	土師器・坏	--/--/--/2g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	6住-70
6住-5	36	14	覆土	土師器・蓋	--/--/--/5g	色2.5YR6/8	墨書「□」・体外	6住-48
6住-6	36	7.14	覆土	土師器・高台付鉢	17.2/8.8/6.4/273g	色2.5YR6/8	墨書「万」・底外	6住-10
6住-7	36	7	覆土	土師器・皿	(14.4)/(6.0)/1.6/25g	色5YR6/6		6住-8
6住-8	36	7	覆土	土師器・皿	(17.0)/(7.2)/(3.0)/43g	色2.5YR6/8		6住-28
6住-9	36	14	壁上	土師器・皿	--/(6.2)/残高1.8/21g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	6住-50
6住-10	36	7	覆土	土師器・蓋	16.2/--/3.8/66g	色5YR6/6		6住-22他
7住-1	36	7.15	覆土	土師器・坏	11.4/5.4/4.2/95g	色2.5YR6/8	墨書「(千)」・底外	7住-295他
7住-2	36	7.15	覆土	土師器・坏	10.8/6.2/4.0/82g	色5YR7/8	墨書「(千)」・底外	7住-209
7住-3	36	7.15	覆土	土師器・坏	(11.0)/5.4/4.4/68g	色5YR7/8	墨書「(千)」・底外	7住-210
7住-4	36	7.15	覆土	土師器・坏	11.0/6.0/4.2/99g	色5YR6/6	墨書「千」・底外	7住-115
7住-5	36	7	覆土	土師器・坏	(14.0)/--/残高4.8/59g	色5YR6/6		7住-77他
7住-6	36	7	覆土	土師器・坏	10.0/(4.0)/5.2/22g	色7.5YR7/6		7住-129
7住-7	36	8.15	覆土	土師器・坏	--/--/--/3g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	7住-133
7住-8	36	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/3g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	7住-33
7住-9	36	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/1g	色7.5YR7/6	墨書「□」・底外	7住-199
7住-10	37	15	覆土	土師器・皿	--/6.2/残高1.1/37g	色2.5YR6/8	墨書「仁」・底外	7住-34
7住-11	37	8.15	覆土	土師器・皿	--/(9.0)/残高1.0/29g	色5YR6/6	墨書「[illegible]」・底外	7住-15
7住-12	37	8.15	覆土	土師器・高台付坏	--/6.8/残高3.0/51g	色5YR7/8	墨書「□」・底外	7住-218他
7住-13	37	8	覆土	灰釉陶器・壺	--/(5.4)/残高8.2/151g	色N7/0		7住-375
7住-14	37	8	覆土	須恵器・甕	--/--/残高19.0/351g	色N7/0		7住-241
7住-15	37	8	覆土	土師器・小形甕	(14.0)/--/残高7.4/118g	色5YR5/3		7住-353他
7住-16	37	8	覆土	土師器・小形甕	(10.8)/--/残高3.8/28g	色7.5YR4/2		7住-119他
7住-17	37	8	覆土	土師器・甕	--/(5.2)/残高4.8/68g	色5YR3/1		7住-354
7住-18	37	8	覆土	土師器・甕	--/9.2/残高4.2/131g	色2.5YR5/4		7住-312他
8住-1	37	8.15	覆土	土師器・皿	--/8.2/残高2.0/125g	色2.5YR6/8	墨書「　」・底外	8住-112
8住-2	37	8	覆土	須恵器・蓋	--/--/残高2.5/63g	色10YR6/2		8住-138
8住-3	37	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/0.86g	色2.5YR6/8	墨書「巾カ」・底外	8住-177
8住-4	37	8	竈内	土師器・甕	--/(9.4)/残高30.2/650g	色5YR3/2		8住-169他
9住-1	38	8.15	覆土	土師器・坏	(13.2)/5.0/5.0/100g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	9住-259他
9住-2	38	8.15	覆土	土師器・坏	12.0/6.0/3.8/95g	色2.5YR6/8	墨書「エカ」・底外	9住-449他
9住-3	38	8	覆土	土師器・坏	12.0/6.0/4.4/54g	色2.5YR6/6		9住-20他

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.3　出土遺物観察表3【9住-4～13住-25】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	備考		注記Ｎｏ.
9住-4	38	8	竈内	須恵器・平瓶	最大幅8.0/残高5.2/149g	色10YR6/2		9住-265
9住-5	38	8	覆土	土師器・坏	13.0/5.2/4.8/79g	色2.5YR6/8		9住-401他
9住-6	38	8	覆土	土師器・坏	11.8/4.8/4.4/109g	色5YR7/8		9住-257
9住-7	38	8	覆土	土師器・坏	13.8/5.8/5.0/109g	色2.5YR7/8		9住-394他
9住-8	38	8	竈内	土師器・坏	(12.0)/--/残高3.0/75g	色2.5YR6/6		9住-143
9住-9	38	8	覆土	土師器・皿	14.4/6.4/1.8/36g	色5YR6/6		9住-467
9住-10	38	8.15	覆土	土師器・皿	(15.0)/(5.4)/2.8/25g	色2.5YR6/6	墨書「上川」・体底	9住-167
9住-11	38	8.15	覆土	土師器・皿	(14.0)/4.8/2.2/62g	色5YR6/6	墨書「玉井」・体底外	9住-266他
9住-12	38	8	覆土	土師器・蓋	(19.0)/--/残高2.8/67g	色5YR6/6		9住-7他
9住-13	38	15	覆土	土師器・坏	--/5.0/残高0.5/11g	色2.5YR6/8	墨書「関カ」・底外	9住-107
9住-14	38	15	覆土	土師器・坏	--/5.2/1.0/7g	色5YR6/8	墨書「□」・底外	9住-352
9住-15	38	15	覆土	土師器・坏	--/--/残高2.0/5g	墨色5YR6/4	墨書「□」・底外	9住-307
9住-16	38	15	覆土	土師器・坏	--/--/残高0.5/8g	色2.5YR6/6	墨書「□」・底外	9住-194
9住-17	38	8	覆土	土師器・甕	(27.2)/--/残高19.5/237g	色5YR6/4		9住-256他
10住-1	39	8	竈内	土師器・坏	(11.8)/--/残高3.4/30g	色2.5YR6/6		10住-40他
10住-2	39	8	竈内	土師器・皿	(13.6)/--/残高2.0/31g	色7.5YR6/4		10住23他
10住-3	39	8.15	竈内	土師器・皿	--/(6.2)/残高0.5/14g	色5YR5/4	墨書「丈カ」・底外	10住-28他
11住-1	39	-	覆土	土師器・坏	(10.8)/--/残高3.8/30g	色5YR6/6		11住-34他
11住-2	39	8	覆土	土師器・坏	(11.2)/--/残高4.0/20g	色5YR7/8		11住-45他
11住-3	39	8	覆土	土師器・坏	--/7.0/残高1.2/42g	色2.5YR7/8	墨書「□□カ」・底外	11住-76
11住-4	39	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/3g	色2.5YR7/8	墨書「□」・底外	11住-33
12住-1	39	8	覆土	土師器・坏	(11.0)/(5.4)/残高4.2/15g	色5YR6/6		12住-4他
12住-2	39	8	覆土	土師器・皿	(13.4)/--/残高2.0/15g	色7.5YR6/4		12住-25他
12住-3	39	9	覆土	土師器・皿	15.0/6.0/3.0/67g	色2.5YR7/8		12住-1
12住-4	39	9	覆土	土師器・皿	(15.6)/(5.8)2.6/49g	色5YR7/6		12住-9他
13住-1	39	9.15	覆土	土師器・坏	12.0/5.0/4.2/90g	色7.5YR7/6	墨書「玉子」・底外	13住-1452
13住-2	39	9	覆土	土師器・坏	(11.6)/(6.4)/3.8/28g	色2.5YR6/8		13住-242他
13住-3	39	9	覆土	土師器・坏	11.0/5.4/3.6/95g	色2.5YR6/8		13住-1739他
13住-4	39	9	覆土	土師器・坏	10.4/5.6/3.9/29g	色2.5YR6/8		13住-82他
13住-5	39	9	覆土	土師器・坏	11.0/4.2/3.8/34g	色5YR7/8		13住-1494他
13住-6	39	9	覆土	土師器・坏	--/4.6/残高1.6/54g	色5YR7/6		13住-1453
13住-7	40	9	覆土	土師器・皿	14.0/5.0/2.4/77g	色2.5YR6/6		13住-1776他
13住-8	40	9.15	覆土	土師器・皿	14.0/6.2/2.4/102g	色7.5YR7/6	墨書「玉子」・底外	13住-1451
13住-9	40	15	覆土	土師器・皿	--/(6.6)/残高1.0/17g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	13住-1074
13住-10	40	9.15	覆土	土師器・坏	--/(4.9)/残高1.6/21g	色5YR6/6	墨書「金カ」・底外	13住-1336
13住-11	40	915	覆土	土師器・坏	--/6.4/残高1.1/34g	色2.5YR6/8	墨書「内カ」・底外	13住-919
13住-12	40	915	覆土	土師器・皿	--/(6.4)/残高1.8/42g	色5YR7/8	墨書「有カ」・底外	13住-1267
13住-13	40	9	覆土	土師器・皿	(11.8)/(5.0)/2.3/36g	色5YR6/6		13住-1740他
13住-14	40	9	覆土	土師器・高台付坏	--/--/残高1.8/56g	色2.5YR6/6		13住-1787他
13住-15	40	9	覆土	土師器・小壺？	--/5.6/残高1.8/61g	色5YR6/6		13住-1235
13住-16	40	15	覆土	土師器・皿	--/--/残高1.2/6g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	13住-388
13住-17	40	15	覆土	土師器・坏	--/--/残高0.7/2g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	13住-269
13住-18	40	15	覆土	土師器・坏	--/--/0.5/3g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	13住-1025
13住-19	40	15	覆土	土師器・坏	--/--/残高0.4/4g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	13住-1486
13住-20	40	15	覆土	須恵器・坏	--/--/残高0.3/2g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	13住-536
13住-21	40	9	竈内	土師器・甕	(47.0)--/残高5.0/194g	色5YR5/4		13住-13他
13住-22	40	-	覆土	土師器・甕	(48.6)/--/残高4.4/109g	色7.5YR3/2		13住一括
13住-23	40	9	竈内	土師器・小形甕	(16.2)/--/残高6.4/83g	色2.5YR6/6		13住-1775
13住-24	40	-	竈内	土師器・甕	(22.4)/--/残高3.8/61g	色2.5YR6/6		13住-1783他
13住-25	40	9	覆土	鉄器・？	長さ2.0/幅3.8/5g			13住-1509

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.4　出土遺物観察表4【14住-1～外-6】

No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その部位	注記No.
14住-1	41	9.15	覆土	土師器・坏	13.2/6.4/5.2/72g	色5YR7/6	墨書「有カ」・底外	14住-718
14住-2	41	9	覆土	土師器・坏	11.8/5.2/3.9/92g	色5YR6/8		14住-724
14住-3	41	9	覆土	土師器・坏	(10.4)/(4.8)/4.1/22g	色5YR6/6		14住-68他
14住-4	41	9	覆土	土師器・坏	(15.4)/--/残高3.2/30g	色5YR6/6		14住-726
14住-5	41	9.15	覆土	土師器・坏	--/5.2/残高2.0/20g	色2.5YR6/8	墨書「南長カ」・底外	14住-692他
14住-6	41	15	覆土	土師器・皿	--/6.2/残高1.5/35g	色7.5YR7/6	墨書「有カ」・底外	14住-371他
14住-7	41	9.15	覆土	土師器・皿	15.0/6.2/3.0/152g	色2.5YR6/8	墨書「有カ」・底外	14住-719他
14住-8	41	15	覆土	土師器・皿	--/(7.8)/残高1.1/12g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	14住-422
14住-9	41	9	竈内	土師器・皿	15.4/7.4/2.8/84g	色5YR6/8		14住-732
14住-10	41	9	覆土	土師器・皿	(15.0)/(7.8)/1.822g	色5YR6/6		14住-514他
14住-11	41	15	竈内	土師器・坏	--/--/--/4g	色5YR6/8	墨書「□」・底外	14住-323
14住-12	41	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/5g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	14住-596
14住-13	41	9	覆土	土師器・甕	--/9.2/3.2残高4.0/31g	色2.5YR3/1		14住-584
14住-14	41	9	覆土	土師器・小形甕	--/6.0/5.8/77g	色2.5YR3/2		14住-717他
14住-15	42	9	竈内	土師器・甕	(25.2)/--/残高17.4/228g	色5YR5/4		14住-739他
14住-16	42	9	竈内	土師器・甕	(25.0)/--/残高12.0/103g	色2.5YR5/6		14住-741他
14住-17	42	9	覆土	土師器・甕	(26.0)--/残高6.2/66g	色7.5YR4/2		14住-721
14住-18	42	9	覆土	土師器・甕	--/9.0/残高13.0/238g	色5YR3/1		14住-728
14住-19	42	10	覆土	土師器・甕	--/(9.1)/--/50g	色7.5YR4/2		14住-173
14住-20	42	10	覆土	鉄器・？	長さ3.6/幅6.2/31g			14住-763
15住-1	42	10	竈内	土師器・坏	(12.2)/(5.2)/4.2/33g	色5YR7/6		15住-49他
15住-2	42	-	覆土	土師器・坏	(15.0)/--/残高5.0/23g	色5YR6/6		15住-16
15住-3	42	10.15	覆土	土師器・坏	--/6.0/残高1.0/16g	色5YR6/6	墨書「工」・底外	15住-137
15住-4	42	10.15	覆土	土師器・坏	12.2/4.8/4.0/91g	色5YR6/6	墨書「工」・底外	15住-13
15住-5	42	10	竈内	土師器・高台付坏	--/7.0/残高2.2/61g	色10YR7/4		15住-147
15住-6	43	15	覆土	土師器・皿	--/(4.0)/残高1.1/15g	色5YR6/6	墨書「金カ」・底外	15住-6
15住-7	43	10.15	覆土	土師器・皿	--/6.0/残高1.3/34g	色5YR6/6	墨書「金カ」・体外	15住-80
15住-8	43	10	竈内	土師器・甕	(27.4)/--/残高3.2/67g	色7.5YR5/3		15住-143他
1溝-1	43	10	覆土	土師器・置カマド	最大幅(54.0)/高38.0/1004g	色10YR6/4		L8-210他
1溝-2	44	10	覆土	土師器・置カマド	口径(40.0)/残高7.5/178g	色7.5YR5/4		L8-209他
1溝-3	44	10	覆土	土師器・置カマド	残高6.0/94g	色7.5YR5/4		L8-230
1溝-4	44	10	覆土	土師器・坏	(12.4)/(6.2)/4.3/27g	色2.5YR6/8	墨書「□」・底外	L8-127
1溝-5	44	10	覆土	土師器・甕	(16.0)/--/残高9.4/70g	色5YR6/4		L8-169他
1溝-6	44	10	覆土	土師器・坏	--/--/--/4g	色25YR5/6	墨書「□」・底外	L8-169
1溝-7	44	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/1g	色7.5YR5/4	墨書「□」・体外	L8-75
1溝-8	44	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/0.3g	色2.5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-11411
1溝-9	44	15	覆土	土師器・坏	--/--/--/3g	色2.5YR5/6	墨書「□」・底外	L8-134
J7炭-1	44	10	J-7G	土師器・皿	12.1/6.0/2.0/33g	色10YR6/4		KP-13937他
J7炭-2	44	10	J-7G	土師器・坏	12.4/5.4/3.2/49g	色7.5YR7/6		KP-13935
J7炭-3	44	10	J-7G	土師器・坏	14.4/6.2/4.8/158g	色5YR6/6		KP-13936
J7炭-4	44	10	J-7G	土師器・坏	(13.2)/(6.8)/4.1/36g	色7.5YR5/4		KP-14776
J7炭-5	44	10	J-7G	鉄器・釘	長さ3.7/4g			KP-J7
J7炭-6	44	10	J-7G	鉄器・板状製品	長さ32.2/最大幅5.1/125g			KP-14777
O-14壺-1	45	10	O-14G	灰釉陶器・壺	幅19/底径11/残高22/1323g	色7.5Y6/1		KP-014他
外-1	45	10	B-3G	土師器（古墳）・坏	稜部幅14/残高2.2/31g	色7.5YR4/3		KP-20666
外-2	45	10	D-4G	石製模造品	残長4.0/幅(3.0)/3g			KP-12275
外-3	45	10	D-4G	土師器・坏	11/5/4.2/52g	色5YR6/8		KP-34103
外-4	45	10	E-8G	土師器・坏	(12.0)/--/残高4.0/21g	色2.5YR4/6		KP-9832
外-5	45	-	E-8G	土師器・坏	(12.0)/--/残高3.1/23g	色2.5YR4/6		KP-9829
外-6	45	10	E-8G	土師器・坏	--/5.8/残高1.4/42g	色5YR5/8		KP-10145

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.5　出土遺物観察表5【外-7～外-56】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その部位	注記No.
外-7	45	10	E-8	土師器・坏	12.2/--/4.6/18g	色2.5YR5/6		KP-9830
外-8	45	10	F-9	土師器・坏	(13.2)/--/残高4.0/16g	色10YR6/6		KP-16392
外-9	45	10	H-5	土師器・坏	(11.8)/(7.2)/4.2/16g	色5YR5/6		KP-19663
外-10	45	10	G-12	土師器・坏	(17.4)/--/残高5.4/20g	色5YR4/8		KP-16358
外-11	45	10	H-10	土師器・坏	--/(4.6)/残高2.2/31g	色5YR5/6		KP-14780
外-12	45	10	H-12	土師器・坏	--/(5.6)/残高1.8/13g	色2.5YR5/6		KP-14825
外-13	45	10	I-7	土師器・坏	(15.0)/(7.4)/4.0/26g	色7.5YR5/6		KP-J7
外-14	45	10	I-7	土師器・坏	12.2/5.4/3.2/81g	色7.5YR5/6		KP-18912
外-15	45	10	I-12	土師器・坏	--/5.0/残高1.4/22g	色2.5YR4/6		KP-15320
外-16	46	11	I-12	土師器・坏	--/(6.0)/残高1.4/14g	色7.5YR5/6		KP-15316
外-17	46	11	J-6	土師器・坏	(12.8)/(3.2)/2.7/34g	色5YR6/6		KP-20183
外-18	46	11	J-6	土師器・坏	12.0/5.0/3.6/64g	色5YR5/6		KP-14010
外-19	46	11	J-7	土師器・坏	--/(5.6)/残高2.0/18g	色7.5YR3/4		KP-14775
外-20	46	11	J-10	土師器・坏	(10.8)/(6.0)/3.8/39g	色5YR5/6		KP-14209
外-21	46	11	Z-10	土師器・坏	(10.6)/(5.2)/4.0/18g	色5YR6/6		KP-13617
外-22	46	11	J-6	土師器・坏	(15.0)/(5.6)/3.3/26g	色7.5YR5/4		KP-13614
外-23	46	11	K-7	土師器・坏	10.6/5.4/4.1/56g	色5YR6/6		KP-12743
外-24	46	11	K-10	土師器・坏	--/4.8/残高3.0/34g	色5YR5/8		KP-12614
外-25	46	11	K-11	土師器・坏	--/4.2/残高1.4/31g	色2.5YR3/6		KP-1848
外-26	46	11	L-9	土師器・坏	14.6/5.8/4.2/133g	色5YR5/8		KP-32251他
外-27	46	11	L-10	土師器・坏	13.4/5.6/3.4/44g	色5YR6/8		KP-32725他
外-28	46	16	L-13	土師器・坏	--/(5.8)/残高1.4/13g	色5YR5/8		KP-4864
外-29	46	11	L-13	土師器・坏	--/(6.0)/残高1.8/11g	色5YR5/8		KP-4864
外-30	46	11	M-10	土師器・坏	(13.6)/--/残高3.4/15g	色2.5YR5/8		KP-32815他
外-31	46	11	M-11	土師器・坏	--/5.2/残高1.4/18g	色2.5YR5/8		KP-33662他
外-32	46	11	M-12	土師器・坏	--/6.2/残高3.4/110g	色5YR6/6		KP-33115
外-33	46	11	M-12	土師器・坏	--/5.4/残高2.5/55g	色5YR5/6		KP-M-12
外-34	46	11	M-13	土師器・坏	(11.8)/--/残高3.4/24g	色5YR6/8		KP-31844他
外-35	46	11	M-13	土師器・坏	--/5.0/残高1.4/36g	色5YR6/6		KP-4821
外-36	46	11	7ﾄﾚﾝﾁ	土師器・坏	(10.0)/(5.4)/4.0/21g	色5YR6/8		KP-7ﾄﾚﾝﾁ
外-37	46	16	B-3	土師器・坏	--/5.4/残高1.0/14g	色7.5YR6/4	墨書「□」・底外	KP-19942
外-38	46	11.16	B-5	土師器・坏	--/5.0/残高1.6/16g	色5YR6/6	墨書「艹ｶ」・底外	KP-18419
外-39	46	16	B-6	土師器・坏	--/(4.4)/残高1.4/9g	色5YR5/8	墨書「工ｶ」・底外	KP-18488
外-40	46	16	B-6	土師器・坏	--/--/残高0.8/5g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-18499
外-41	46	16	B-9	土師器・坏	--/(5.0)/残高1.4/9g	色5YR5/6	墨書「(千)ｶ」・底外	KP-16898
外-42	47	16	B-6	土師器・坏	--/--/残高0.4/3.7g	色7.5YR5/4	墨書「□」・底外	KP-16518
外-43	47	16	B-6	土師器・坏	--/--/残高1.6/0.9g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-16513
外-44	47	16	C-4	土師器・坏	--/--/残高0.5/7g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-21091
外-45	47	16	C-9	土師器・坏	--/--/残高0.5/12g	色2.5YR5/6	墨書「工」・底外	KP-16739
外-46	47	16	D-8	土師器・坏	--/--/残高0.2/2g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-16678
外-47	47	16	D-8	土師器・坏	--/--/残高1.4/4g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-16668
外-48	47	16	D-8	土師器・坏	--/--/残高0.5/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-21383
外-49	47	16	D-9	土師器・坏	--/--/残高0.2/0.5g	色7.5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-16525
外-50	47	16	D-9	土師器・坏	--/--/残高0.2/0.1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-9262
外-51	47	16	D-9	土師器・坏	--/5.1/残高0.6/14g	色5YR4/6	墨書「仁」・底外	KP-9321
外-52	47	16	D-10	土師器・坏	--/4.6/残高0.5/1g	色7.5YR6/6	墨書「乙ｶ」・底外	KP-11065
外-53	47	16	D-17	土師器・坏	--/(4.6)/残高0.6/5g	色7.5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-26697
外-54	47	16	D-18	土師器・坏	--/(6.6/残高2.2/22g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-26543
外-55	47	11.16	D-18	土師器・坏	--/5.8/残高0.2/53g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	Kp-27096
外-56	47	16	D-18	土師器・坏	--/--/残高0.2/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-28509

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.6　出土遺物観察表6【外57～外-106】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	備考		注記No.
外-57	47	16	D-18	土師器・坏	--//--/残高0.3/1g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-28512
外-58	47	16	E-4	土師器・坏	--/--/残高0.5/3g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-20923
外-59	47	16	E-4	土師器・坏	--/--/残高0.7/6g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-20922
外-60	47	16	E-4	土師器・坏	--/--/残高0.7/7g	色7.5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-18985
外-61	47	16	E-4	土師器・坏	--/--/残高0.8/4g	色7.5YR5/4	墨書「□」・底外	KP-18984
外-62	47	16	E-10	土師器・坏	--/--/残高0.8/5g	色2.5YR5/4	墨書「□」・底外	KP-10107
外-63	47	11.16	E-18	土師器・坏	--/(6.6)/残高2.4/23g	色2.5YR4/8	墨書「□」・底外	KP-9828
外-64	47	16	F-9	土師器・坏	--/--/残高0.4/5g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-9065
外-65	47	16	G-4	土師器・坏	--/--/残高0.9/10g	色7.5YR5/4	墨書「□」・底外	KP-21028
外-66	47	16	H-7	土師器・坏	--/4.8/残高1.1/19g	色5YR5/6	墨書「㊥カ」・底外	KP-22847
外-67	47	16	H-9	土師器・坏	--/--/残高0.5/3g	色2.5YR5/6	墨書「㊥カ」・底外	KP-13319
外-68	47	16	H-9	土師器・坏	--/--/残高0.5/4g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-13893
外-69	47	16	H-9	土師器・坏	--/--/残高0.3/2g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-12911
外-70	47	16	H-10	土師器・坏	--/--/残高0.5/3g	色2.5YR4/8	墨書「イカ」・底外	KP-9470
外-71	47	16	H-9	土師器・坏	--/--/残高1.3/12g	色5YR6/5	墨書「□」・底外	KP-13898
外-72	47	16	H-11	土師器・坏	--/--/残高0.3/2g	色2.5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-10098
外-73	47	16	H-13	土師器・坏	--/--/残高0.3/2g	色7.5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-1131
外-74	47	16	H-14	土師器・坏	--/--/残高0.5/5g	色7.5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-2308
外-75	47	16	H-14	土師器・坏	--/--/残高0.5/3g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-2222
外-76	47	16	I-5	土師器・坏	--/5.0/残高1.0/10g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-21368
外-77	47	16	I-6	土師器・坏	--/--/残高0.8/8g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-14687
外-78	47	16	I-6	土師器・坏	--/(6.8)/残高1.2/13g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-14441
外-79	47	16	I-6	土師器・坏	--/--/残高0.4/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-14108
外-80	47	16	I-6	土師器・坏	--/--/残高0.4/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-14417
外-81	47	16	I-7	土師器・坏	--/--/残高0.4/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-13930
外-82	47	16	H-14	土師器・坏	--/--/残高0.4/1g	色5YR4/8	墨書「□」・底外	KP-2242
外-83	48	16	I-7	土師器・坏	--/4.6/残高0.7/18g	色2.5YR5/8	墨書「㊥」・底外	KP-12975
外-84	48	16	I-8	土師器・坏	--/--/残高0.5/3g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-10711
外-85	48	16	I-9	土師器・坏	--/--/残高0.2/1g	色5YR4/8	墨書「工カ」・底外	KP-10494
外-86	48	16	I-9	土師器・坏	--/--/残高0.4/3g	色2.5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-12653
外-87	48	17	I-9	土師器・坏	--/4.4/残高0.8/10g	色5YR5/87	墨書「□」・底外	KP-8972
外-88	48	17	I-9	土師器・坏	--/5.8/残高1.0/7g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-18315
外-89	48	17	I-9	土師器・坏	--/--/残高3.4/8g	色5YR5/8	墨書「□」・体外	KP-8755
外-90	48	11.17	I-10	土師器・坏	11.0/4.5/4.3/61g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-8542
外-91	48	17	I-10	土師器・坏	--/--/残高0.4/1g	色5YR4/8	墨書「□」・底外	KP-7180
外-92	48	17	I-10	土師器・坏	--/--/残高0.8/2g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-24032
外-93	48	17	I-11	土師器・坏	--/--/残高4.0/9g	色2.5YR4/8	墨書「□」・体外	KP-6872
外-94	48	17	I-14	土師器・坏	--/--/残高1.8/3g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-6351
外-95	48	17	I-15	土師器・坏	--/--/残高0.9/5g	色5YR4/4	墨書「□」・底外	KP-23349
外-96	48	17	J-9	土師器・坏	--/--/残高1.0/39g	色5YR5/6	墨書「百カ」・底外	KP-8731
外-97	48	17	J-9	土師器・坏	--/--/残高1.6/1g	色5YR5/8	墨書「□」・体外	KP-8748
外-98	48	17	J-9	土師器・坏	--/--/残高0.5/4g	色2.5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-10295
外-99	48	17	J-9	土師器・坏	--/--/残高0.4/3g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-10675
外-100	48	17	J-11	土師器・坏	--/--/残高2.8/7g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-6162
外-101	48	11.17	J-12	土師器・坏	--/4.8/残高1.4/15g	色5YR6/8	墨書「工カ」・底外	KP-14216
外-102	48	17	J-5	土師器・坏	--/--/残高0.6/3g	色5YR6/8	墨書「□」・底外	KP-22616
外-103	48	17	J-12	土師器・坏	--/--/残高2.0/2g	色2.5YR4/6	墨書「□」・体外	KP-6329
外-104	48	17	J-14	土師器・坏	--/(7.4)/残高1.0/7g	色7.5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-516
外-105	48	17	J-14	土師器・坏	--/--/残高0.5/3g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-4889
外-106	48	17	J-14	土師器・坏	--/--/残高0.5/4g	色5YR6/8	墨書「□」・底外	KP-3853

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.7　出土遺物観察表7【外-107～外-156】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その部位	注記No.
外-107	48	17	J-14	土師器・坏	--/--/残高0.7/4g	色7.5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-4443
外-108	48	17	J-14	土師器・坏	--/--/残高0.6/1g	色7.5YR5/4	墨書「□」・底外	KP-7069
外-109	48	17	J-14	土師器・坏	--/--/残高0.6/6g	色10YR6/3	墨書「□」・底外	KP-22673
外-110	48	17	J-14	土師器・坏	--/--/残高0.4/1g	色2.5YR4/6	墨書「□」・底外	KP-3090
外-111	48	17	J-15	土師器・坏	--/--/残高0.5/6g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-3743
外-112	48	17	J-16	土師器・坏	--/--/残高0.8/49g	色5YR5/8	墨書「□」・体外	KP-33380
外-113	48	17	K-9	土師器・坏	--/4.6/残高0.5/21g	色5YR6/6	墨書「内カ」・底外	KP-11012
外-114	48	11.17	K-10	土師器・坏	--/(4.6)/残高3.0/19g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-11911
外-115	48	11.17	K-10	土師器・坏	10.2/(5.6)/4.0/27g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-16098
外-116	48	11.17	K-14	土師器・坏	--/(7.0)/残高2.0/20g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-5818
外-117	49	17	K-14	土師器・坏	--/--/残高0.3/1g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-1612
外-118	49	17	K-14	土師器・坏	--/--/残高0.3/1g	色7.5YR4/6	墨書「□」・底外	KP-6351
外-119	49	17	K-14	土師器・坏	--/--/残高1.4/3g	色5YR5/8	墨書「□」・体外	KP-1608
外-120	49	17	K-14	土師器・坏	--/--/残高0.3/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-3976
外-121	49	17	K-15	土師器・坏	--/--/残高1.8/1g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-29819
外-122	49	17	K-16	土師器・坏	--/--/残高0.5/3g	色5YR5/3	墨書「□」・底外	KP-31436
外-123	49	17	K-16	土師器・坏	--/--/残高0.2/1g	色5YR5/3	墨書「□」・底外	KP-31438
外-124	49	11	K-16	土師器・坏	--/--/残高2.0/1g	色5YR5/8	墨書「□」・体外	KP-31460
外-125	49	17	K-16	土師器・坏	--/--/残高1.3/1g	色5YR6/8	墨書「□」・体外	KP-32007
外-126	49	17	K-17	土師器・坏	--/--/残高1.4/3g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-31147
外-127	49	17	L-8	土師器・坏	--/--/残高1.0/3g	色2.5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-15156
外-128	49	17	L-9	土師器・坏	--/--/残高0.7/1g	色5YR4/8	墨書「□」・体外	KP-4175
外-129	49	17	L-9	土師器・坏	--/--/残高1.6/1g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-4155
外-130	49	17	L-12	土師器・坏	--/--/残高0.6/1g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-2464
外-131	49	17	l-12	土師器・坏	--/--/残高2.0/2g	色5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-2478
外-132	49	17	L-12	土師器・坏	--/--/残高0.7/3g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-3235
外-133	49	17	L-16	土師器・坏	--/--/残高0.4/1g	色5YR5/8	墨書「□□」・底外	KP-30578
外-134	49	11.17	L-12	土師器・坏	--/5.4/残高2.2/38g	色5YR5/8	墨書「山中」・底外	KP-3215
外-135	49	17	M-12	土師器・坏	--/--/残高6.0/4g	色7.5YR5/6	墨書「□」・体外	KP-5935
外-136	49	17	M-12	土師器・坏	--/(5.2)/残高1.6/9g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-5924
外-137	49	18	M-15	土師器・坏	--/(5.4)/0.5/8g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-25830
外-138	49	18	M-15	土師器・坏	--/--/残高0.5/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-29349
外-139	49	18	M-17	土師器・坏	--/--/残高0.5/2g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-29124
外-140	49	18	M-18	土師器・坏	--/--/残高0.6/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-29501
外-141	49	18	M-18	土師器・坏	--/--/残高2.0/2g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-30499
外-142	49	11.18	M-18	土師器・坏	12.0/5.0/4.1/88g	色5YR5/8	墨書「好」・底外	KP-31538
外-143	49	18	M-18	土師器・坏	--/--/残高0.5/1g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-29543
外-144	49	18	N-13	土師器・坏	--/(4.8)/残高5.0/8g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-31816他
外-145	49	18	N-13	土師器・坏	--/(4.4)/0.6/9g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-28552
外-146	49	18	5トレンチ	土師器・坏	(15.8)/(7.0)／残高4.4/26g	色5YR6/8	墨書「◉」・底外	KP-5トレンチ
外-147	49	18	7トレンチ	土師器・坏	--/--/--/3g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-7トレンチ
外-148	49	18	7トレンチ	土師器・坏	--/--/残高0.8/4g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-7トレンチ
外-149	49	18	7トレンチ	土師器・坏	--/--/残高2.0/1g	色2.5YR4/8	墨書「□」・体外	KP-1537
外-150	49	18	7トレンチ	土師器・坏	--/--/残高5.0/2g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-7トレンチ
外-151	49	18	16トレンチ	土師器・坏	--/--/残高0.4/19g	色7.5YR5/3	墨書「□」・底外	KP-16トレンチ
外-152	49	18	表採	土師器・坏	--/--/残高0.4/12g	色5YR5/8	墨書「㊥カ」・底外	KP-11363
外-153	49	18	表採	土師器・坏	--/--/残高7.0/13g	色5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-33256
外-154	49	18	表採	土師器・坏	--/--/残高1.8/1g	色5YR3/6	墨書「□」・体外	KP-14742
外-155	50	18	A-4	土師器・坏	--/--/残高5.0/2g	色7.5YR6/6	線刻「✗」・底外	KP-18603
外-156	50	18	J-11	土師器・坏	--/(4.4)/残高0.8/7g	色5YR5/6	線刻「入」・底外	KP-15482

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.8　出土遺物観察表8【外-157～外-206】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その部位	注記Ｎｏ.
外-157	50	11.18	D-9	土師器・坏	11.2/5.6/4.4/95g	色5YR6/6	線刻「⅄」・底外	KP-16522
外-158	50	11.18	I-11	土師器・坏	--/(9.8)/残高2.0/79g	色5YR5/8	線刻「⅄」・底外	KP-6273
外-159	50	18	J-11	土師器・坏	--/--/残高0.8/6g	色5YR5/6	墨書「大」+線刻「レ」底外	KP-6119
外-160	50	11.18	-Z-4	土師器・坏	11.0/6.4/3.8/103g	色5YR6/6	墨書「山中」+線刻「⅄」底外	KP-20494
外-161	50	11	E-8	土師器・高台付坏	--/6.0/残高2.4/26g	色2.5YR5/6		KP-12614
外-162	50	11	B-6	土師器・高台付鉢	16.4/(8.0)/5.6/63g	色7.5YR4/6		KP-17430
外-163	50	11	N-15	土師器・高台付鉢	--/8.4/残高2.2/25g	色5YR5/6	内面黒色処理	KP-24845他
外-164	50	18	16トレンチ	土師器・高台付坏	--/6.8/残高2.2/30g	色5YR6/8	内面黒色・墨書「□」底外	KP-16トレンチ
外-165	50	12	I-7	土師器・皿	12.0/5.4/2.2/89g	色5YR5/6		KP-18919他
外-166	50	12	I-13	土師器・皿	--/(6.0)/残高1.0/21g	色5YR4/4		KP-15508
外-167	50	12	I-11	土師器・皿	--/(5.8)/1.0/21g	色5YR5/6		KP-6845
外-168	50	12	I-13	土師器・皿	--/(5.8)/残高1.5/29g	色2.5YR5/6		KP-6926
外-169	51	12	H-9	土師器・皿	--/(7.2)/残高2.6/40g	色5YR6/6		KP-14799
外-170	51	12	J-10	土師器・皿	(16.4)/--/残高2.7/23g	色2.5YR5/6		KP-6715
外-171	51	12	J-12	土師器・皿	--/(5.8)/残高1.4/28g	色7.5YR6/6		KP-13461
外-172	51	12	J-14	土師器・皿	--/(5.0)/残高1.4/45g	色5YR6/6		KP-1288
外-173	51	12	L-9	土師器・皿	13.4/5.0/3.2/76g	色5YR6/8		KP-32660他
外-174	51	12	L-13	土師器・皿	--/(5.4)/1.4/15g	色5YR5/6		KP-4864
外-175	51	12	K-14	土師器・皿	12.0/5.0/1.7/79g	色5YR5/6		KP-5456
外-176	51	12	N-11	土師器・皿	(12.6)/--/残高1.8/21g	色5YR6/8		KP-1300
外-177	51	12	N-12	土師器・皿	11.2/5.6/1.8/67g	色2.5YR5/8		KP-34304他
外-178	51	12	N-12	土師器・皿	12.0/4.8/2.0/77g	色5YR6/6		KP-34297他
外-179	51	12	N-13	土師器・皿	9.6/4.0/1.8/25g	色5YR3/6		KP-31799他
外-180	51	12	16トレンチ	土師器・皿	13.0/6.4/2.3/66g	色5YR5/6		KP-16トレンチ
外-181	51	18.12	C-8	土師器・皿	--/(5.6)/残高1.1/23g	色5YR6/8	墨書「□」・底外	KP-16827
外-182	51	18	D-3	土師器・皿	--/--/残高0.3/5g	色2.5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-16299
外-183	51	18	D-9	土師器・皿	--/(7.6)/残高1.0/7g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-10902
外-184	51	18	D-10	土師器・皿	--/(5.0)/残高1.0/16g	色5YR5/8	墨書「□」・底外	KP-8998
外-185	52	12.18	D-8	土師器・皿	(15.0)/(8.0)/2.9/38g	色5YR5/8	墨書「西カ」・体外	KP-27147
外-186	52	12.18	G-12	土師器・皿	(16.2)/(6.8)/3.4/52g	色2.5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-16378
外-187	52	18	H-6	土師器・皿	--/(6.8)/残高1.1/13g	色7.5YR5/4	墨書「爽□」・体底外	KP-10343
外-188	52	18	J-11	土師器・皿	--/--/残高0.8/6g	色5YR4/6	墨書「床カ」・底外	KP-7511
外-189	52	18	J-14	土師器・皿	--/(6.4)/残高1.4/21g	色5YR6/8	墨書「□」・底外	KP-3020
外-190	52	18	J-15	土師器・皿	--/--/残高0.7/7g	色5YR5/8	墨書「一□カ」・底外	KP-23481
外-191	52	18	J-16	土師器・皿	--/--/残高1.1/7g	色5YR6/8	墨書「□」・底外	KP-32876
外-192	52	18	K-15	土師器・皿	--/--/残高1.2/11g	色5YR4/6	墨書「□」・底外	KP-15874
外-193	52	18	L-8	土師器・皿	--/--/残高1.0/20g	色5YR6/6	墨書「□」・底外	KP-15874
外-194	52	18	L-10	土師器・皿	--/7.2/残高1.5/83g	色5YR5/8	墨書「今」・底外	KP-13540
外-195	52	18	L-11	土師器・皿	--/--/残高1.0/8g	色7.5YR5/4	墨書「□」・底外	KP-26887
外-196	52	18	M-10	土師器・皿	--/--/残高0.9/6g	色7.5YR5/4	墨書「□」・体外	KP-32824
外-197	52	18	L-15	土師器・皿	--/--/残高1.1/6g	色5YR5/5	墨書「□」・底外	KP-30250
外-198	52	18	N-17	土師器・皿	--/(5.4)/残高1.1/12g	色2.5YR5/6	墨書「□」・底外	KP-29191
外-199	52	18	B-3	土師器・皿	--/(5.0)/残高1.1/12g	色5YR5/6	線刻「×」・底外	KP-19846
外-200	52	18	D-8	土師器・皿	--/(5.2)/残高1.2/75g	色5YR4/8	線刻「⅄」・底外	KP-9579
外-201	52	18	I-11	土師器・皿	--/--/残高1.2/11g	色7.5YR6/6	線刻「〃」・底外	KP-7871
外-202	53	12	O-17	土師器・蓋	(17.0)/(6.0)/2.6/80g	色5YR5/8		KP-27062他
外-203	53	12	M-10	土師器・蓋	つまみ径2.4/残高2.8/60g	色2.5YR5/8		KP-32820他
外-204	53	18	I-12	土師器・蓋	--/--/残高0.8/2g	色5YR6/8	墨書「工カ」・体内	KP-15250
外-205	53	12	G-5	土師器・鉢	20.6/8.0/7.2/218g	色7.5YR6/6	内面黒色処理	KP-20566
外-206	53	12	K-7	土師器・甕	--/(10.4/残高4.0/20g	色2.5YR4/4		KP-11099

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.9　出土遺物観察表9【外-207～外-256】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その他	注記Ｎｏ.
外-207	53	12	H-9	土師器・甕	(40.0)/--/残高5.0/29g	色5YR4/4		KP-10155
外-208	53	12	I-12	土師器・甕	(36.0)/--/残高4.0/55g	色5YR4/4		KP-13505
外-209	53	12	I-12	土師器・甕	(42.0)/--/残高4.0/68g	色7.5YR3/3		KP-15421
外-210	53	12	J-12	土師器・甕	(25.8)/--/残高7.0/72g	色2.5YR3/4		KP-15312
外-211	53	12	J-12	土師器・甕	(18.0)/--/残高3.4/36g	色5YR3/4		KP-14577
外-212	53	12	J-7	土師器・甕	(26.4)/--/残高4.0/42g	色7.5YR2/2		KP-15451
外-213	54	12	L-10	土師器・甕	--/(6.0)/残高4.8/29g	色2.5YR4/4		KP-15040
外-214	54	12	I-11	土師器・置カマド	--/--/残高6.4/54g	色5YR4/3		KP-6277
外-215	54	12	J-9	土師器・置カマド	--/--/残高12.8/136g	色5YR4/4		KP-10316
外-216	54	12	O-18	灰釉陶器・壺	--/11.8/残高10.0/598g	色2.5GY4/1		KP-27151他
外-217	54	12	Q-19	灰釉陶器・壺	(17.0)/(8.4)/4.8/40g	色2.5Y8/1		KP-26508他
外-218	54	12	D-9	須恵器・壺	--/(17.0)/残高4.0/180g	色2.5GY6/1		KP-9281
外-219	54	12	I-11	須恵器・壺	--/--/残高8.2/37g	色2.5YR4/3		KP-6252
外-220	54	13	M-16	須恵器・甕	--/--/残高3.2/9g	色2.5GY4/1		KP-25948
外-221	54	13	L-12	須恵器・甕	--/--/残高18.5/317g	色5GY6/1		KP-3494
外-222	54	13	M-13	須恵器・甕	--/(18.4)/残高4.6/93g	色N4		KP-33103
外-223	54	13	M-16	須恵器・甕	--/--/残高9.0/106g	色7.5GY4/1		KP-25945
外-224	54	13	N-18	須恵器・四耳壺	--/--/残高3.0/16g	色2.5GY5/1		KP-25510
外-225	55	13	P-14	須恵器・四耳壺	--/--/残高3.1/20g	色5PB4/1		KP-25527
外-226	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高2.9/31g	色10GY4/1		KP-25531
外-227	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高3.4/13g	色10BG3/1		KP-25528
外-228	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高20.5/291g	色10GY4/1		KP-25534他
外-229	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高8.8/52g	色10GY4/1		KP-25532
外-230	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高7.6/50g	色10GY4/1		KP-25515
外-231	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高3.4/18g	色10BG3/1		KP-25746
外-232	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高5.0/28g	色10GY4/1		KP-25525
外-233	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高6.8/48g	色10BG3/1		KP-25535
外-234	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高5.2/60g	色10GY4/1		KP-25526他
外-235	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高5.6/57g	色2.5GY5/1		KP-25750
外-236	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高2.6/12g	色10GY4/1		KP-25537
外-237	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高3.4/11g	色10G3/1		KP-25516
外-238	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高4.0/16g	色5BG4/1		KP-25523
外-239	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高4.4/12g	色5BG3/1		KP-25752
外-240	55	13	P-14	須恵器・甕or壺b	--/--/残高3.4/15g	色5B4/1		KP-25747
外-241	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高2.8/11g	色10BG3/1		KP-25511
外-242	55	13	P-14	須恵器・甕or壺	--/--/残高11.6/149g	色5BG3/1		KP-25519他
外-243	56	18	G-4	須恵器・坏	--/--/残高0.8/12g	色5G5/1	墨書「工カ」・底外	KP-16118
外-244	56	13	I-13	土製品・？	高さ7.0/幅8.0/157g	色5YR5/6		KP-22370
外-245	56	13	L-6	土製品（土錘）	幅3.4×4.0/15g	色5YR5/6		KP-21411
外-246	56	13	B-3	鉄製品・？	幅2.4×3.0/2g			KP-19815
外-247	56	13	B-4	鉄製品・？	長さ2.6/幅1.4/1g			KP-17511
外-248	56	13	B-6	鉄製品・？	長さ3.2/幅8.0/19g			KP-17906
外-249	56	13	B-6	鉄製品・釘？	長さ6.0/7g			KP-18265
外-250	56	13	D-8	鉄製品・釘	長さ8.0以上/22g			KP-15990
外-251	56	13	I-13	鉄製品・刃先	長さ3.4/幅3.5/8g			KP-1018
外-252	56	13	J-5	鉄製品・鉄環	幅3.2×2.4/9g			KP-15471
外-253	56	13	J-6	鉄製品・刀子	長さ5.4/3g			KP-14182
外-254	56	13	J-12	鉄製品・刀子	長さ4.6/3g			KP-2034
外-255	56	14	K-6	鉄製品・火打金	残存幅5.0/7g			KP-24116
外-256	56	14	K-14	鉄製品・刀子	残存長10.6/12g			KP-22712

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

Tab.10　出土遺物観察表10【外-257～外-270】

報告No.	Fig	Pl	位置	種類	法量	色調・その他	墨書等・その部位	注記Ｎｏ.
外-257	56	14	L-7	鉄製品・?	幅2.3×2.3/4g			KP-22984
外-258	56	14	L-15	鉄製品・鉄環	幅2.4×2.4/6g			KP-26097
外-259	56	14	7トレンチ	鉄製品・釘	長さ3.0/2g			KP-7トレンチ
外-260	56	14	16トレ	鉄製品・釘	残存長2.7/2g			KP-16トレンチ
外-261	56	14	18トレ	鉄製品・釘	長さ7.0/30g			KP-18トレンチ
外-262	56	14	18トレ	鉄製品・刀子	残存長5.8/4g			KP-16トレンチ
外-263	56	14	表採	鉄製品・刀子	残存長8.4/12g			KP-表採
外-264	56	14	表採	鉄製品・刀子	長さ13.8/17g			KP-表採
外-265	56	14	3トレンチ	土師質土器・皿	(7.0)/(5.0)/1.4/4g			KP-3トレンチ
外-266	56	14	3トレンチ	鉄製品・?	幅2.8×2.8/12g(２点付着)			KP-3トレンチ
外-267	56	14	L-9	銅製品・煙管	長さ4.8/3g			KP-25610
外-268	56	14	L-8	銅製品・煙管	長さ6.0/4g			KP-26774
外-269	56	14	表採	銭(五厘青銅貨)	直径1.9cm/2.1g	大正5年(1916)～8年(1919)		KP-表採
外-270	56	14	表採	銭(半銭銅貨)	直径2.2cm/4.0g	明治6年(1873)～25年(1892)		KP-表採

【法量欄は口径(cm)／底径(cm)／器高・残高(cm)／重量(g)の順に記載し、例外はその都度示した。なお、（　）は推定値、--は計測不能を示す。】

第Ⅴ章　若干の考察－狐原遺跡の歴史的位置付けへ向けて

第１節　遺物について

（１）出土土器の編年的位置付け

ここでは狐原遺跡の主体となる平安時代の土器資料の変遷や年代観について記述する。

１）器種

狐原遺跡出土の平安時代の主体は土師器であり、須恵器・灰釉陶器は客体的にごくわずかに存在するものである。

土師器には坏・高台付坏・皿・蓋・甕・小形甕・鉢・高台付鉢・蓋・置カマドが、須恵器には坏・壷・平瓶が、灰釉陶器には碗・壷の種類が認められた。

２）坏・皿の検討

狐原遺跡出土の各器種のうち、その変遷が最も把握しやすい器種が坏・皿である。ここではこれらの器種を概観し次の種類に大別する。

坏Ａ・・口縁端部が尖丸形あるいは丸形となる。
　　底径／口径比が50％前後（やや箱形を残す器形）
　　体部外面下半に斜め方向のヘラ削り
　　底部は回転糸切り後、周辺部のみヘラ削り
　　体部内面のみに放射状暗文が施される

坏Ｂ・・口縁端部が丸形あるいは玉形となる。
　　底径／口径比が50％を下回る（ハ字形に開く器形）
　　体部外面下半に斜め方向のヘラ削り
　　底部は回転糸切り後、全面ヘラ削り
　　体部内面のみに放射状暗文が施される

皿Ａ・・底部と体部の境、体部外面の段、体部内面の段が明瞭
　　口縁端部は尖丸形あるいは丸形となり、反りは弱い。
　　底部やや突出するものもある
　　体部内面の暗文は放射状暗文が主体的

皿Ｂ・・底部と体部の境、体部外面の段、体部内面の段が不明瞭
　　口縁端部は丸形あるいは玉形となり、
　　強く外反するものもある。
　　底部は不明瞭なものあり
　　体部内面の暗文は渦巻状暗文が主体的

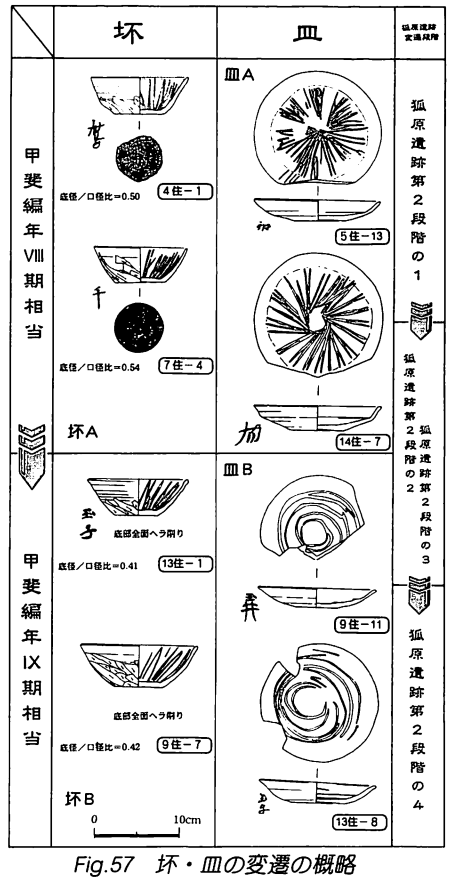


Fig.57　坏・皿の変遷の概略

このような大別を過去の研究成果と照合すると、両者とも器形・口縁部形態・製作技法の面から坏Ａ→坏Ｂおよび皿Ａ→皿Ｂの変遷を見ることができる（Fig.57）。また、この変遷内容は甲斐編年における第Ⅷ期からⅨ期への変遷にほぼ等しいものと考えられ、坏Ａ・皿Ａが甲斐編年第Ⅷ期に、坏Ｂ・皿Ｂが甲斐編年第Ⅸ期にほぼ位置付けられるようである。

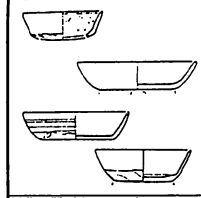
３）年代観について

前項では狐原遺跡の坏・皿が甲斐編年第Ⅷ期・第Ⅸ期の特色にほぼ合致することを見た。それではこれまで先学諸氏により研究が進められてきた編年研究では、甲斐編年第Ⅷ・Ⅸ期にどのような年代観が与えられてきたのだろうか。ここでは、次頁（Fig.58）のとおり研究成果をまとめたが、近年の研究や調査事例あるいは他地域の共伴事例を参考にすれば、第Ⅷ期については９世紀の第２四半期～第３四半期頃（830年～860年頃）に、第Ⅸ期については９世紀の第３四半期～第４四半期頃（860年～890年頃）に位置づけられるであろうことが解る。狐原遺跡では、実年代を明示できる資料はなく、また灰釉陶器・須恵器などの窯資料も極めて微量であることから、年代観を提示した諸説を肯定することも否定することもできない。そのため、現在のところは甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期の序列のみを肯定し、年代観については前述の年代観を参考案として提示しておきたい。

年代	坂本（1983）	坂本(1986)	森原(1994)	櫛田（1992）	田尾（1992）	桜原（1992）	狐原遺跡	年代
700	甲斐Ⅰ期 ・老洞1・3号窯製品に類似する須恵器					宮ノ前Ⅰ期 （甲斐Ⅰ～Ⅳ期相当）	↑ 第1段階	700
725	甲斐Ⅱ期 ・和田・百草1号窯製品／老洞1号窯製品に類似							725
750	甲斐Ⅲ期 ・永田・不入窯製品に類似する須恵器			甲斐Ⅴ期	甲斐Ⅴ期 ・平塚市内原遺跡60住 府中清水が台遺跡2住	宮ノ前Ⅱ期（甲斐Ⅴ期相当） ・硯文を持つ盤状坏との共伴例 甲斐国分寺講堂北地点／菊崎市上本田遺跡8住／菊崎市駒井遺跡1住他 ・甲斐国分寺創建期（740年頃）以降 宮ノ前Ⅲ期（甲斐Ⅵ期相当） ・平城京二条四坊十一坪 畿G／平城京Ⅵ期共伴例との類似 ・外面斜めヘラ削りなし+磨き多用の坏を甲斐Ⅵ期内で区分	750
775	甲斐Ⅳ期 ・前内出2号窯製品に類似する須恵器 甲斐Ⅴ期			甲斐Ⅵ期 ・平城京二条四坊十一坪 畿G／平城京Ⅵ期との共伴	甲斐Ⅵ期	宮ノ前Ⅳ期（甲斐Ⅵ期相当）		775
800	・前内出1号窯製品に類似する須恵器 甲斐Ⅵ期			甲斐Ⅶ期	甲斐Ⅶ期 ・小田原市三ツ俣遺跡3井戸・18住 ・秦野市草山遺跡Ⅵ期 前内出1号窯期+G37	宮ノ前Ⅴ期（甲斐Ⅶ期相当）		800
825	・G37号窯製品に類似する須恵器			甲斐Ⅷ期 甲斐Ⅸ期 ・灰釉K－14共伴開始	甲斐Ⅷ期 ・草山Ⅷ期 八板前1号窯期+G37 ・草山Ⅷ期 八板前5号窯期+新久A－1窯期 ・平塚市中原上宿Ⅲ1住	宮ノ前Ⅵ期（甲斐Ⅷ期相当）	第2段階－1 第2段階－2	825
850	甲斐Ⅶ期			甲斐Ⅹ期 ・秦野市草山遺跡Ⅸ期 相模国分尼寺金堂基壇 貞観15年（873年）	甲斐Ⅸ期	宮ノ前Ⅶ期 （甲斐Ⅸ・Ⅹ期相当） ・甲斐Ⅸ・Ⅹ期は土器の形態上、あえて区分する必要なし ・灰釉K-14共伴開始	第2段階－3 第2段階－4	850
875	甲斐Ⅷ期 ・G-59号窯製品に類似する須恵器			甲斐ⅩⅠ期 ・式根島吹之江遺跡 火山灰下資料 仁和3年（886年） ・富士吉田市西丸尾遺跡 溶岩下資料 承平7年（937年）	甲斐Ⅹ期 ・秦野市草山遺跡Ⅸ期 相模国分尼寺金堂基壇 貞観15年（873年） ・八王子市要石遺跡 八王子市船田遺跡 G-25窯期	宮ノ前Ⅷ期 （甲斐ⅩⅠ期相当） ・富士吉田市西丸尾遺跡溶岩下資は甲斐ⅩⅡまでずれる可能性あり 甲斐ⅩⅠ期を937年以前にする必要がある。 （甲斐ⅩⅡ期の暗文坏存在） ・灰釉K-90共伴開始		875
900	甲斐Ⅸ期 ・G-25号窯製品に類似する須恵器							900
925	甲斐Ⅹ期 ・G-59号窯製品に類似する須恵器		（甲斐ⅩⅡ期）			宮ノ前Ⅸ期 （甲斐ⅩⅡ期相当） ・灰釉O-53共伴開始	第3段階	925
950	甲斐ⅩⅠ期 ・灰釉K-90窯期		古代末1期 ・灰釉H-72 大原2号	甲斐ⅩⅡ期				950
975	甲斐ⅩⅡ期 ・灰釉光ヶ丘1号窯 大原2号窯期	甲斐 古代末Ⅰ期 ・灰釉大原2号窯期				宮ノ前Ⅹ期 ・灰釉H-72共伴開始	第4段階	975
1000	甲斐ⅩⅢ期	甲斐 古代末Ⅱ期 ・灰釉虎渓山1号窯	古代末2期 ・灰釉H-72 虎渓山1号			宮ノ前ⅩⅠ期 ・灰釉H-72共伴開始		1000
1025		甲斐 古代末Ⅲ期 ・灰釉虎渓山1号窯 丸石2号窯期	古代末3期 ・灰釉虎渓山1号 丸石2号					1025
1050	甲斐ⅩⅣ期	甲斐 古代末Ⅳ期 ・丸石2号窯期						1050
1075		古代末Ⅴ期 古代末Ⅵ期	古代末4期 ・白磁Ⅳ類 古代末5期				第5段階 ↓	1075

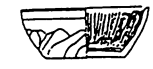
甲斐の8～11世紀
土器変遷モデル（坏）

甲斐Ⅰ～Ⅳ期（山下1986）



甲斐Ⅴ期（山下1992）

甲斐Ⅵ期（山下1992）



甲斐Ⅶ期（山下1992）

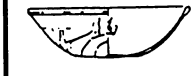
甲斐Ⅷ期（山下1992）

甲斐Ⅸ期（山下1992）

甲斐Ⅹ期（山下1992）

甲斐ⅩⅠ期（山下1992）

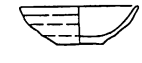
甲斐ⅩⅡ期（山下1992）



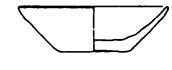
古代末1期（森原1994）

古代末2期（森原1994）

古代末3期（森原1994）



古代末4期（森原1994）



古代末5期（森原1994）

※本図は左図の年代欄とはシンクロさせてはいない。

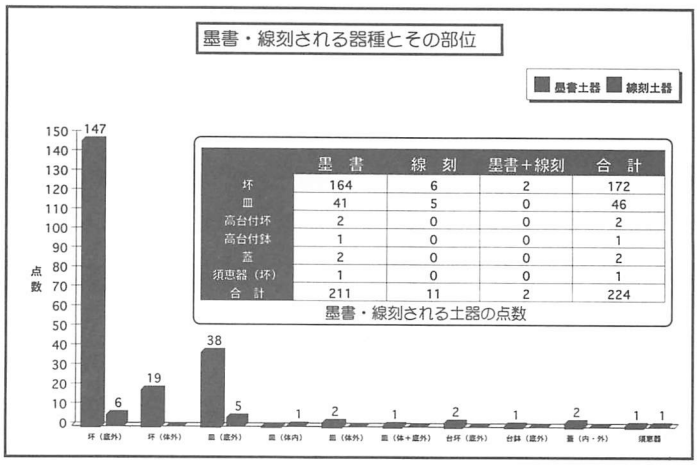
※土器はあくまで各期に特徴的な土師器（坏）を掲げたまでであり、器種分化等は表現できなかった。

Fig.58　土器編年案対比表

（2）墨書土器について

1）墨書される土器とその部位について

狐原遺跡から出土した墨書・線刻土器について、器種・部位・数量をまとめたのが(Tab.12) である。これによると墨書土器のは大半は坏の底部外面に施されたものであることがわかる。このことが時期・地域性などを表すか否かは未検討である。



	墨書	線刻	墨書+線刻	合計
坏	164	6	2	172
皿	41	5	0	46
高台付坏	2	0	0	2
高台付鉢	1	0	0	1
蓋	2	0	0	2
須恵器（坏）	1	0	0	1
合計	211	11	2	224

Tab.12　墨書・線刻される器種とその部位

2）墨書土器の内容について

出土した墨書土器は断片的な資料も合わせて222点に及んだ。これらのうち、文字等が判読されたのは極僅かであるが、以下いくつかの文字内容等について考察する。 Tab.12　墨書･線刻される器種とその部位

①「玉井」・「玉子」について

第9号竪穴住居址から出土した「玉井」は甲斐国の古代郷名のひとつである「甲斐国山梨東郡玉井郷」を表していることはほぼ間違いない。この出土をもってこの地が玉井郷に属していたとは即断できないが、その可能性は非常に高いものと考えられる。このことはほぼ同時期の所産と考えられる第13号竪穴住居址から「玉子」が出土していることからも言える。つまり、「玉子」の「玉」を玉井という地名の意味と捉え、「子」をその一員と捉えることも可能と考えられるからである。北方約500mの大原遺跡からは「玉井郷長」墨書が出土し、おそらく玉井郷の中心的集落であったものと考えられているが、狐原遺跡はその一部あるいはその衛星的集落であったとの推測も可能であろう。ただし、このことはあくまで仮説であり、「玉井」の墨書が山梨東郡林部郷の比定地である松原遺跡（一宮町東原）から出土していることなども、常に考慮はしなければなるまい。

②「午」あるいはそれに関わる可能性のある墨書について

第7号竪穴住居址などからは「午」という特徴的な墨書が出土している。この墨書についてはその文字内容から様々な推測が挙がったが、遺跡内容からはその明解な答えを導き出せていない。ここでは推測への視点を述べておくに留める。

まず始めに考えられることは、この集落に馬に関わりのある人物なり集団がいた可能性である。残念ながら狐原遺跡では他に馬と関連性のある遺構・遺物が検出されていないため、その具体的な推定像を提示することはできない。ただし、この遺跡の立地環境が唯一その可能性の完全なる否定を拒んでいる。つまり、古代甲斐国の3大要点が本遺跡周辺に集中しているという立地環境である。3大要点とは以下のような道・政・祀であり、その拠点となった施設等を指す。

- 甲斐路（道）／東海道の駿河国横走駅から甲斐国府へ至る官道（甲斐路）が本遺跡の周辺を通過していた可能性があること。あるいはアクセスしやすい立地にあること。
- 甲斐国府（政）／所在地は未確定だが、主な推定地はいずれも本遺跡の1.5～3km以内にあること。
- 甲斐国分寺・国分尼寺（祀）／いずれも本遺跡から1.5km以内にあること。

以上の3要点が有機的に繋がっていたことは疑いなく、甲斐路は甲斐国府と直結し、その他は「支道」ともいうべき道によって連結していたことが推測される。このような観点からすれば狐原遺跡（または大原遺跡を含むこの周辺の集落）はその道（甲斐路もしくはその支道）の

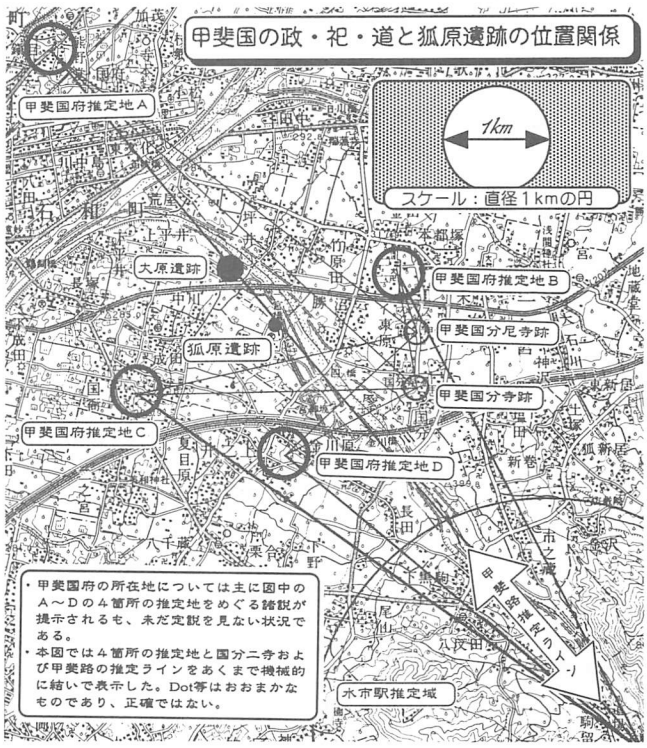


Fig.59　甲斐国の政・祀・道と狐原遺跡の位置関係

中途付近に位置していた可能性が高いものと見ることができる（Fig.58））。そのような環境下で「午」墨書の出土である。何らかの馬に関わる人々・集団ひいては周辺地も含めた施設の存在も推測可能な範囲内にあるのではなかろうか。馬に関わる人物・集団・施設の可能性としては馬の養育・管理・馬関係の諸業（皮革生産・飼料生産ほか）などが挙げられ、道に関わる馬の供給や管理業務（甲府盆地内唯一の駅である水市駅への駅馬等の供給か？）・国府や国分二寺への馬の供給や管理業務・甲斐御牧から朝廷へ貢納する馬の管理業務（貢納までの一時的な養育など）・玉井郷内部での馬の養育などが推定される。ただし、これらは全て推測の域を出ないものであり、今後十分に検討されるべき課題である。

その他でこの問題に関連する可能性のある墨書を抽出してみると、第３号竪穴住居址出土の「末」や第３・15号竪穴住居址ほか出土の「工」を挙げることができる。「末」の文字には「草木の先端」の意味があることが知られ、「秣（まぐさ）」として馬の飼料の文字へと結びつく。また、「工」は何らかの手工業を意味するものと考えられ、それが馬に関わる可能性（皮革に関わる手工業などを含む）もある。これらの点はあくまで推測あるいは妄想にも近いものであるが敢えて一視点として掲げておきたい。

③地名ほかに関わると考えられる墨書ほかについて

１文字記入例の多い中で２文字連続の記入が見られる墨書も出土している。これらを即ち「地名」とは確定できないがある法則に基づく内容が看取されるため、ここで述べておきたい。

２文字記入の墨書には、第９号竪穴住居址出土の「上川」・第５号竪穴住居址および遺構外出土の「山中」がある。「上川」については「川の上流」を、「山中」については「山の中」を意味するものと考えられ、順序は異なるが「自然環境＋位置」の組み合わせで構成されており、地名等の成り立ちを推測させる内容である。特に「上川」については川の下流域からみた上流を指すものであり、川の下流に狐原遺跡を上流にあるものと考える集団が存在したことを示すものと考えられる。この「川」に最も相応しい川は隣接している金川であり、金川の下流にある集落こそ大原遺跡である。「玉井」墨書の共通性などと併せ考えても、狐原遺跡を「上川」と呼んだ可能性は高いものと考えられる。また、「山中」については周辺の遺跡との関わりを考えることはできないが、線刻記号「𠆢」との関わりで興味深い点が指摘できる。線刻の「𠆢」は遺構外から出土しており、線刻のみで「𠆢」・線刻「𠆢」＋墨書「山中」・墨書のみで「山中」の３種類が認められる。このことは線刻「𠆢」イコール墨書「山中」と捉えることが可能であり、「山中」という地名らしき名称が記号としても使用されていたことが推測される。なお、線刻「𠆢」には焼成前線刻の可能性が指摘できる資料もあり、集中的な生産体制が考えられている土師器生産体制（甲斐国の場合は特に「甲斐型土器」と呼称される土師器坏が甲府市東部地区で集中的に生産されたことが推測されている）を考える上で重要な資料となるものである。すなわち、生産地において供給先を念頭に置いた生産がなされていた可能性も指摘できるのである。

④その他の墨書土器について

上述以外に注目される墨書について、まとめて記述する。

・14号竪穴住居址出土の「南？」の二文字目は不確定ながら、「長」とも判読できるものである。仮に「南長」と判読した場合、やはり北方の大原遺跡の存在を考慮しなければならない。つまり、「南長」とは玉井郷の中心的集落の大原遺跡の南側集落の「長」を表す可能性もあろう。ただし、この点については郷内の組織構造などをも含めて熟考すべき問題であり、ここでは可能性の指摘に留める。

・７号・８号竪穴住居址は隣接する遺構であるが、共通する「◎」の渦巻状記号の墨書が出土している。この「◎」が何を意味するかは不明であるが、他に類例を見ないだけに興味深い。

・第13号・15号竪穴住居址では「金」と考えられる墨書が出土しているが、「金」については東方1.5kｍに所在する甲斐国分寺とその周辺で出土する「金」あるいは「金寺」との関わりが想起される。国分寺周辺出土の「金寺」は国分寺の正式名称「金光明四天王護国之寺」を表すことは明らかであるが、狐原遺跡出土の「金」がこれに等しいかは不明である。しかしながら、その位置関係などから国分寺と関わりのある人物・集団等の存在を否定することはできず、その可能性は指摘できるものである。

・遺構外出土ではあるが「夷」墨書が出土している。この「夷」の文字については東北地方から北海道南部にその分布主体がある文字である。「蝦夷」との関わりでこの文字を捉えるべきか否かは関連する遺構・遺物が皆無であることから判断で

きない。ただし、文献資料からは「俘囚（帰伏した蝦夷）」が平安時代頃に甲斐国に安置されたことなどが伺える記事も見え、それらとの関わりを指摘することも可能である。また、狐原遺跡に見える平安期集落の一性格（短期かつ小規模であること）との関わりについては今後の重要な検討課題であろうと思われる。なお、「夷」文字の出土事例は山梨県では初事例であり、周辺地域でも極めて稀な出土例であることを付記しておく。

・上記以外にも狐原遺跡からは「鷹」・「好」・「今」・「仁」・「千」・「万」・「幸」・「有」・「西」などの墨書が多数確認されている。また、判読できない文字なども多数あり、今後の継続的な検討が必要であるものと考えられる。なお、竪穴住居址出土の墨書土器を主体とした分布については下に図示した(Fig.60)。

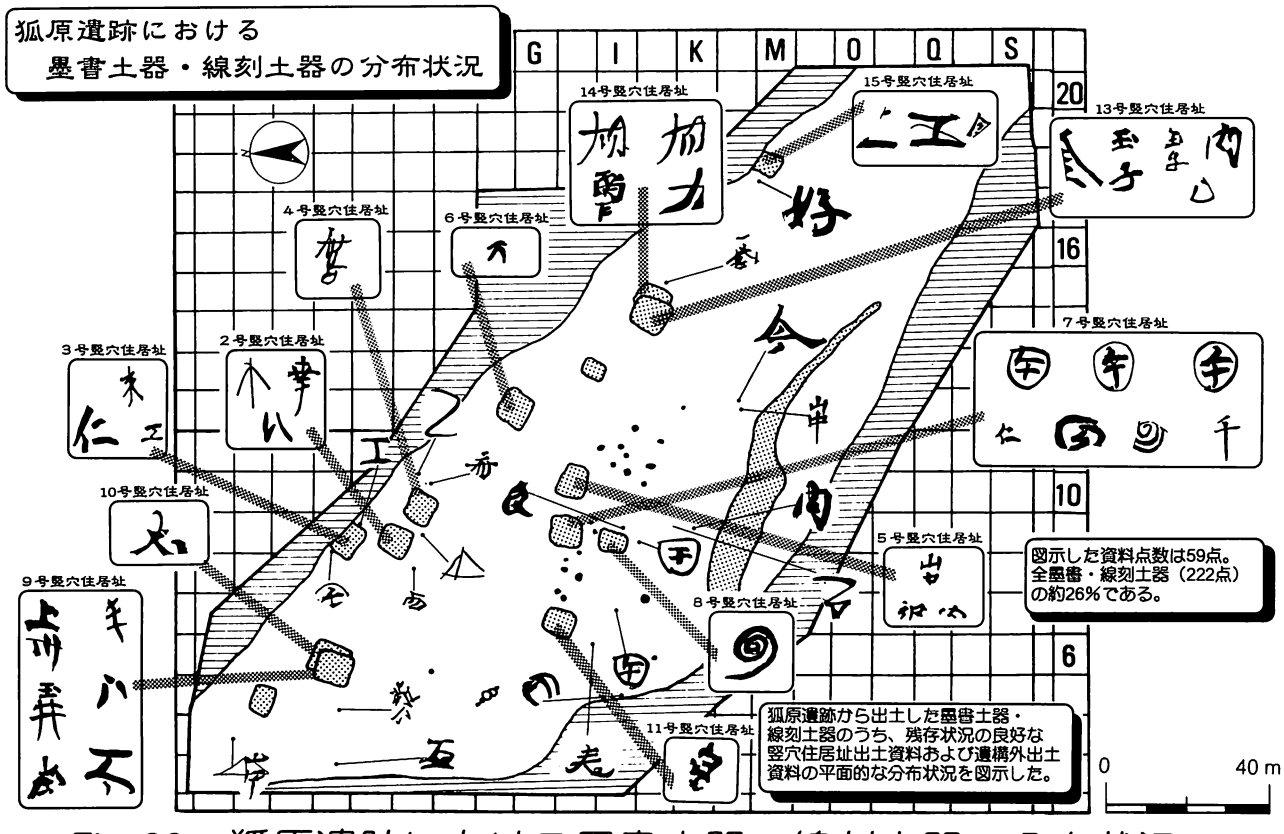


Fig.60　狐原遺跡における墨書土器・線刻土器の分布状況

第2節　遺構について

（1）住居址の時期・変遷について

1）住居址の時期について

ここでは前項までに述べた出土遺物の序列・年代観をベースに、検出された遺構の所産時期についてまず述べる。その後、遺構の配置・カマド位置・重複関係を併せ見ながら導き出される集落構成の変遷案を述べることとする。なお、ここでは竪穴住居址を主体的に取り上げ、他の遺構は補助的に取り上げるものとする。

1）遺物から見た竪穴住居址の時期

検出された15軒の竪穴住居址について、出土遺物から各々の所産時期を考えてみると、以下のとおりとなる。

第1号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期 ？
第2号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期
第3号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅸ期
第4号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期
第5号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期
第6号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅸ期
第7号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期
第9号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅸ期
第10号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期？
第11号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期
第12号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期
第13号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅸ期
第14号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期
第15号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期

第８号竪穴住居址・・・・甲斐編年第Ⅷ期

２）遺構配置等を併せ見た集落構成の変遷について

15軒の竪穴住居址の遺物から見た時期は上述のとおりであるが、この時期をもとにその集落構成の変遷を考えてみる。

集落を構成する各住居址の共存関係を探るべく必要となる要素は、遺構の時期（出土遺物ベース）が最重要であるが、その他に竪穴住居址という遺構自体がもつ要素（カマド位置・重複関係・主軸方位など）を併せ見ることも必要であると考えた。ここではそのような視点で集落構成の変遷案を提示する。なお、後述するが集落が営まれた平安時代を「狐原遺跡第Ⅱ段階」と呼称する。よってその中を１期から４期へと細分する形をとる。

狐原遺跡第２段階－１期　甲斐編年第Ⅷ期の遺物を出土する竪穴住居址である。カマドは東側壁に位置する。
第２・４・７・８・11号竪穴住居址が該当する。

狐原遺跡第２段階－２期　甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期の遺物を出土する竪穴住居址である。カマドは東側壁に位置する。
第３・５・１２・１５号竪穴住居址が該当する。

狐原遺跡第２段階－３期　甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期の遺物を出土する竪穴住居址である。カマドは北側壁に位置する。
第10・14号竪穴住居址が該当する。

狐原遺跡第２段階－４期　甲斐編年第Ⅸ期の遺物を出土する竪穴住居址である。カマドは北側壁に位置する。
第６・９・13号竪穴住居址が該当する。

このように狐原遺跡の平安時代の竪穴住居址群の構成（あるいは時間的変遷）を追うことが可能であると考えられる。ただし、この変遷案の注意すべき点を少なくとも２点挙げておきたい。まず一点は遺構に伴う遺物が複数期（ここでは甲斐編年第Ⅷ期～Ⅸ期）に及ぶ場合の捉え方に盲点があるということである。つまり、そのような場合にはⅧ期の住居址にⅨ期製品が廃棄されたのか、Ⅸ期の住居址でⅧ期製品を継続使用したのかが判別できない点である。二点目はカマドの位置に重点を置いた点である。カマドの位置は同時期イコール同方向とは限らないはずであり、大きな誤解の原因となっている可能性もある。この弱点とも言うべき２点については今回の報告では解決できないが、より細かい共伴遺物の把握（一点目の弱点）や周辺遺跡における類似時期のカマド位置傾向（二点目の弱点）の検討を継続させる中で解決していきたいと考え、集落構成の変遷についての一案として掲げておきたい。

なお、その他の遺構の所産時期については、報告文中に触れたとおりであるが、特に１号溝については甲斐編年第Ⅷ期・Ⅸ期の遺物が出土していることから、竪穴住居址が展開している間には溝的な役割を担い続けていた可能性がある点のみ指摘するに留めたい。

（２）その他の遺構について

ここでは狐原遺跡において検出された特殊な遺構について補記する。

１）墓壙について

狐原遺跡からは人骨を伴う墓壙が２基検出されたが、これらはその位置関係などからほぼ同時期に構築されたものであることが推測され、その時期は竪穴住居址を伴う集落が営まれた時期（狐原遺跡第２段階）である可能性が高い。山梨県地域においては平安時代の葬制に関わる遺構の確認事例は極めて少なく不明瞭な点が多い。このような状況下で検出された第１・２号墓壙は稀有な事例となるものであり、新旧関係（土坑のみの第２号墓壙→配石を伴う第１号墓壙）や竪穴住居址群との位置関係（竪穴住居址群からやや離れた位置にあること）が把握されたことには大きな意義がある。ただし、遺構時期のより正確な把握や集落内における墓壙位置（墓域）のあり方などの検討課題は残り、今後の類例の増加等を待ちながら検討を継続すべきであろう。

２）鉄製品等を伴う炭化物集中について

Ｊ－７Gridから検出されたＪ－７炭化物集中については明確な掘り込み等は認められなかったが、共伴する遺物群に特異性があるのでここで補記しておく。Ｊ－７炭化物集中からは鉄製板状製品・鉄製釘・炭化物・土師器（皿・坏）の４種類の遺物が出土しているが、この遺物構成に人骨・骨蔵器が加われば他地域に類例のある「火葬墓」の事例に極似するものとなる。特に鉄製板状製品はその短冊形の形状などから「墓誌」の可能性を指摘できるものであり、火葬墓に伴う事例が多く見られるものでもある。Ｊ－７炭化物集中からは「墓」としての必要条件である人骨が出土していない以上、この遺構を「墓」

と断定することは勿論できない。また、土師器から導き出される時期は古代末期編年第１期（10世紀中葉～末）となり、他地域に見る火葬墓の存続時期とのずれの問題も発生する。ただし、「火葬墓」・「火葬行為に関わる遺構」の可能性はどうしても残り、不確実ではあるがそれらである可能性をここでは示唆しておきたい。なお、山梨県地域では未だ確実な火葬墓の調査事例はないに等しい状況であるが、他地域の事例からも狐原遺跡の周辺地域（国府・国分二寺・官道の集中する地域）には火葬墓の存在する可能性の高いことも併せて指摘しておく。

（３）狐原遺跡の総合的な変遷について

ここでは狐原遺跡における総合的な土地利用の変遷過程についてまとめておきたい（下図参照）。

狐原遺跡において検出された全ての遺構・遺物から考えられる土地利用の変遷は下記のとおりの大きく５段階である。

なお、各段階（主に２～４段階）のおおまかな年代的位置は土器編年案対比表（Fig.58）に示したので参照されたい。

狐原遺跡第１段階・・・・古墳時代【遺物分布のみの時期】

狐原遺跡第２段階－１・・甲斐編年第Ⅷ期【竪穴住居を伴う集落が営まれる時期】

狐原遺跡第２段階－２・・甲斐編年第Ⅷ～Ⅸ期【竪穴住居を伴う集落が営まれる時期】

狐原遺跡第２段階－３・・甲斐編年第Ⅷ～Ⅸ期【竪穴住居を伴う集落が営まれる時期】

狐原遺跡第２段階－４・・甲斐編年第Ⅸ期【竪穴住居を伴う集落が営まれる時期】

狐原遺跡第３段階・・・・甲斐編年第ＸⅡ期【遺物分布のみの時期】

狐原遺跡第４段階・・・・甲斐編年第Ⅷ期【Ｊ－７炭化物集中＋遺物分布の時期】

狐原遺跡第５段階・・・・中世から近現代【遺物分布のみ＋畑地＋果樹園？】

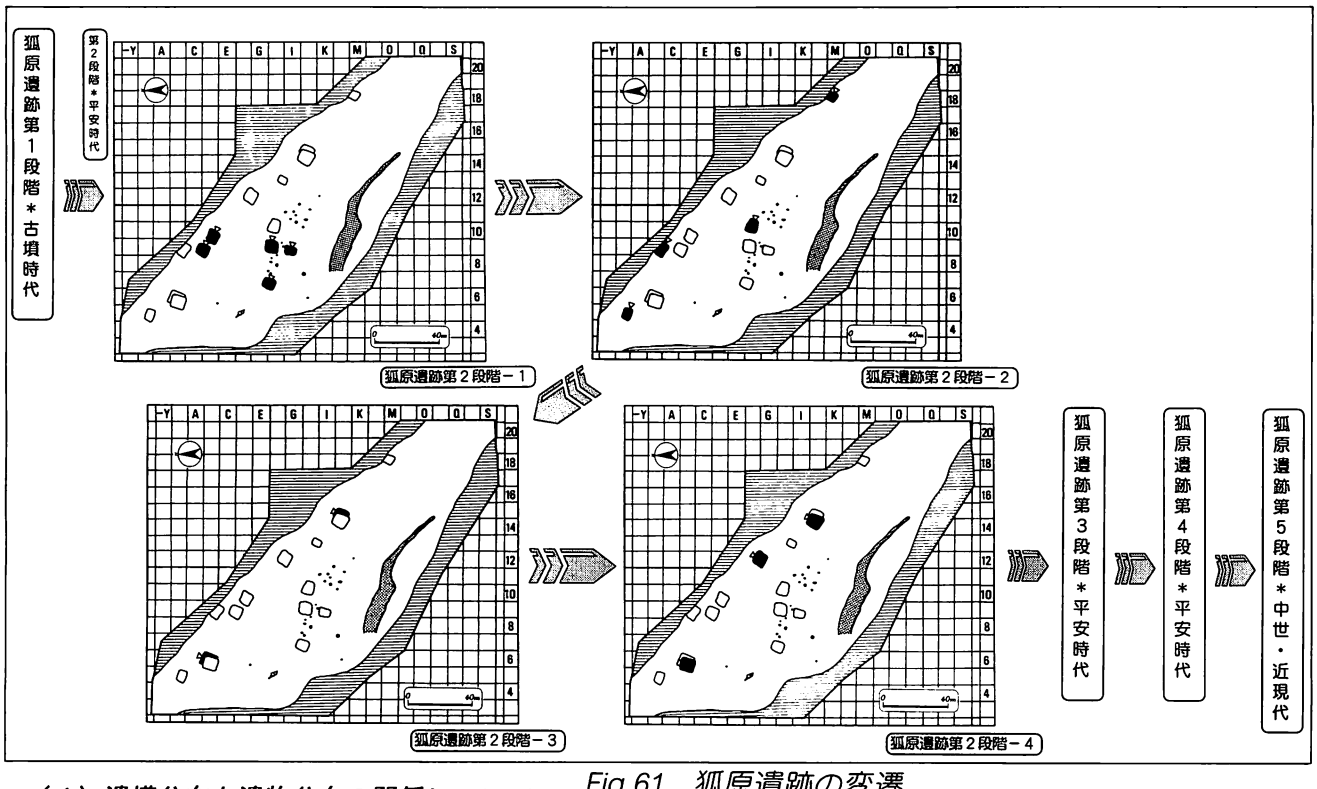


Fig.61　狐原遺跡の変遷

（４）遺構分布と遺物分布の関係について

狐原遺跡における遺構外出土遺物の分布状況については、Fig.29・30に示したとおりであるが、特にその分布傾向と遺構（特に竪穴住居址）分布との関係について、着目される点のみ指摘しておきたい。それはGridのＩライン（東西方向）付近から南側の区域（１号溝までの区域）における集中的な遺物出土が見られる点とGridのＥ・Ｆ・Ｇライン（東西方向）周辺における希薄な遺物分布に見る対照的な状況である。竪穴住居址の分布からすればより平均的な遺物分布が、あるいは自然地形的には高所から低所への遺物分布の傾向が見られるのではないかと考えられるが、実際には遺構分布や自然地形に反するような遺物分布が看取される。この点については、そこに遺物を意図的に廃棄した理由（集中区域について）や意図的にしない理由（希薄な区域について）を求めざるを得ない。ここではその結論は導き出せないが、特に遺物分布が希薄な区域

については、道・広場のような集落内外で共有すべきスペースの存在なども考慮すべきかと考えられる。遺構として捉えることのできない広い意味での「遺構」を探る視点に繋がるのではないかと思われる事例として掲げておきたい。

第Ⅵ章　結語にかえて－狐原遺跡の検討課題の提起－

ここでは狐原遺跡の調査成果と残された課題について記述し、今後の検討課題の提起としたい。

狐原遺跡では５段階に分けられる土地利用の変遷過程が想定された。その主体となるのは遺構等を伴う時期であり、平安時代のごく限られた期間に竪穴住居址を伴う集落が形成された時期【９世紀の第２四半期から第４四半期にかけての時期(840年～890年頃)】とその後暫くの空白期を置いて炭化物集中等を遺した時期【10世紀の第３四半期から第４四半期にかけての時期（960年～990年頃)】である。特に金川周辺の地域に見られる集落遺跡には稀なほどの短期間の集落存続が指摘できる遺跡であり、忽然と現れまた消えていくという様相が看取できた。この要因を明らかにすることはできないが、遺跡に残る氾濫・洪水等の自然災害の痕跡から集落を持続させるに相応しくない（居住に適すとは言い難い）場所だったことが一原因に挙げられるであろう。ただし、これはあくまで自然環境の要因であり、周辺に官道・国府推定地・国分二寺を擁するという歴史的環境（あるいは人的・政治的環境とすべきか）が持つ要因も必ずやあったものと推測される。

狐原遺跡の持つ意味あるいは歴史的な位置付けは推測の域を出ないものではあるが、大きな視点からは甲斐国の「政」の中心である国府・「祀」の中心である国分二寺・甲斐国と朝廷や他国とのパイプである「道」の中心である甲斐路（あるいはそれら３大要素を結ぶ「支路」）と密接に関わりあった可能性のある集落であり、「馬」が何らかの重要な意味を持つであろうことことがまず指摘できる。さらに細かい視点では、墨書土器の内容等から周辺の大集落である大原遺跡と何らかの関係がある集落と見え、あるいは拠点的遺跡（大原遺跡）に対する衛星的集落（狐原遺跡）である可能性もあることが指摘できた。ただし、特に大原遺跡との関係については、大原遺跡の内容が公にされた段階での再考が必要であることは言うまでもない。

狐原遺跡に残された多くの検討すべき課題については、自然環境・歴史環境を総合的に捉える視点での研究が必要不可欠であり、この周辺地域における近年の調査研究成果をもってすれば、そのような取り組みは決して「時期早尚」とは言えない状況になりつつある。よって狐原遺跡の真価は今後のこの地域についての調査研究の進展にかかっているものと言え、調査担当の責務として負うべき課題であるとも考えている。

いずれにせよ、狐原遺跡の調査は古代甲斐国の中心地における地域構造の一端を覗かせる調査事例となったことに最大の意味があり、検討は報告書の刊行をもってようやく始まるものと考えている。今回の報告が古代甲斐国をめぐる研究への一素材となり、さらに地域を知る手掛かりになるとするならば、これに優る幸いはない。また、報告文中には事実誤認や飛躍の過ぎる推測の数々が多くの方々によるご叱正を受けとめようとしている。多くの方々からのご叱正を頂きながら、これらの点を訂正していくことも大きな幸いの一つと考えていることを最後に申し添えるものである。

文末となったが、狐原遺跡の発掘調査・整理調査にご理解とご協力を賜ったすべての方々に感謝申し上げ、本報告の結語とさせていただきたい。

【参考文献】参考にさせていただいた文献を五十音順・敬称略にて掲げ、感謝申し上げる次第である。

秋山　敬　　1986年　「古代」『白州町誌』　白州町誌編纂委員会

秋山　敬　　1992年　「甲斐の御牧」『山梨郷土史研究入門』　山梨郷土研究会・山梨日日新聞社

磯貝正義　　1978年　『郡司及び采女制度の研究』　吉川弘文館

磯貝正義ほか 1990年　『図説　山梨県の歴史』(図説　日本の歴史19)　河出書房新社

出月洋文　　1994年　「平安時代須恵器の流通の一様相－山梨における「凸帯付四耳壷」を中止に－」『山梨考古学論集」Ⅲ』　山梨県考古学協会

井上喜久男　1992年　『尾張陶磁』　ニュー・サイエンス社

石和町教育委員会ほか　1991年　『茶かん遺跡』

石和町教育委員会ほか　1991年　『狐原遺跡』

石和町教育委員会ほか　1992年　『御幸道遺跡（山梨アイネ調査地点）』

一宮町教育委員会　1995年　『筑前原墨跡発掘調査概報』

一宮町教育委員会ほか　1990年　『大原遺跡発掘調査概報』

一宮町教育委員会　1990年　『甲斐国分寺跡－寺域及び遺構確認を目的とした緊急発掘調査報告書』

一宮町教育委員会ほか　1991年　『金山遺跡』

一宮町教育委員会ほか　1995年　『北大内遺跡・矢倉遺跡』

一宮町教育委員会ほか　1992年　『松原遺跡』

一宮町教育委員会ほか　1995年　『竜の木遺跡』

猪股喜彦　1985年　「山梨県における奈良・平安時代の集落遺跡」『歴史手帖』第13巻第1号　名著出版

猪股喜彦　1992年　「蓋」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

上野晴朗ほか　1967年　『一宮町誌』　一宮町誌編纂委員会

木下　良　1986年　「国府研究の現状（その二）甲斐国府」『国立歴史民俗博物館研究報告』第20集（共同研究「古代の国府の研究」（続））　国立歴史民俗博物館

櫛原功一　1992年　「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』韮崎市遺跡調査会ほか

國井弘紀　1995年　『東国火葬事始－古代人の生と死－』　栃木県立博物館

國井弘紀　1995年　「東日本の墳墓にみる奈良・平安時代の地域性－火葬墓を中心に－」『東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－』第5回東日本埋蔵文化財研究会

国立歴史民俗博物館　1986年　「国府研究の現状（その一）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集（共同研究「古代の国府の研究」）

児島恭子　1984年　「エミシ、エゾ、「毛人」「蝦夷」の意味－蝦夷論序章－」『律令制と古代社会』（上巻）　東京堂出版

坂本美夫・末木健・堀内真　1983年　「甲斐地域」『神奈川考古』第14号（シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題）神奈川考古同人会

坂本美夫　1984年　「甲斐の郡（評）制」『研究紀要』1　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

坂本美夫　1986年　「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号（シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題）　神奈川考古同人会

坂本美夫　1987年　「甲斐国府－その環境と展望－」『研究紀要』3　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

坂本美夫　1989年　「甲斐型坏－編年について（1）－」『山梨考古学論集』Ⅱ　山梨県考古学協会

佐野五十三　1992年　「駿河国における甲斐型土器」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

佐野五十三　1995年　「墨書土器観試論－遠江国・駿河国・宮都の事例検討から－」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

末木　健　1983年　「山梨県下の墨書刻書土器」『甲斐路』49　山梨郷土研究会

末木　健　1983年　「八ヶ岳西麓の古代甲信国境」『甲斐路』59　山梨郷土研究会

末　創一　1994年　「古代辺境政策における甲斐国の役割」『山梨考古学論集』Ⅲ　山梨県考古学協会

瀬田正明　1992年　「Ⅲ」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

瀬田正明　1992年　「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

瀬田正明　1993年　「甲斐型坏の成立年代について～甲斐国分寺跡・国分尼寺周辺の調査から」『山梨県考古学協会誌』第6号

髙橋照彦　1994年　「東国の施釉陶器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東』3（施釉陶器）　古代の土器研究会

田尾誠敏　1992年　「関東地方出土の甲斐型土器－その分布と年代－」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

田尾誠敏　1992年　「相模地方の甲斐型土器覚書」『山梨県考古学協会誌』第5号　山梨県考古学協会

田尾誠敏　1995年　「相模地方の甲斐型土器覚書Ⅱ」『東海大学校地内遺跡調査団報告』5　東海大学校地内遺跡調査団ほか

髙田竹山監修　1993年　『五體字類』　西東書房

仲山英樹　1993年　「古代東国における墳墓の展開とその背景」『研究紀要』1　栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

萩原三雄　1986年　「八ヶ岳南麓における平安時代集落の展開」『山梨考古学論集』Ⅰ　山梨県考古学協会

橋口定志　1985年　「平安期火葬墓の性格について－南関東の事例から－」『生活と文化』（豊島区立郷土資料館研究紀要第1号）

長谷川　厚　1983年　「歴史時代墳墓の成立と展開（1）－特に相模・南武蔵の火葬墓の様相を中心として－」『古代』第75・76合併号　早稲田大学考古学会

長谷川　厚　1987年　「歴史時代墳墓の成立と展開（2）－特に相模・南武蔵の火葬墓の成立を中心として－」『古代』第84号　早稲田大学考古学会

長谷川　厚　1990年　「歴史時代墳墓の成立と展開（3）－南武蔵地域の展開期の火葬墓の構造と解釈をめぐって－」『古代』第88号　早稲田大学考古学会

原　正人　1992年　「古代甲斐国と官道」『山梨郷土史研究入門』　山梨郷土研究会・山梨日日新聞社

原　正人　1992年　「甲斐国府」『山梨郷土史研究入門』　山梨郷土研究会・山梨日日新聞社

平川南・天野努・黒田正典　1989年　「古代集落と墨書土器－千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　国立歴史民俗博物館

平川南　1991年　「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集（創立10周年記念論文集）　国立歴史民俗博物館

平川　南　1993年　「土器に記された文字」『月刊文化財』362　文化庁文化財保護部

平川　南　1993年　「地下から発見された文字」『新版　古代の日本』10　角川書店

平野　修　1989年　「宮間田遺跡における墨書土器の展開」『山梨考古学論集』Ⅱ　山梨県考古学協会

平野　修　1992年　「山梨県内出土の墨書土器と線刻土器」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』4

平野　修　1992年　「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の集落様相」『宮ノ前遺跡』　韮崎市遺跡調査会ほか

藤森栄一　1970年　「甲斐の黒駒と望月の牧」『古代の日本』6　角川書店

保坂和博　1992年　「古代の竪穴住居址の基礎的研究」『山梨県考古学協会誌』第5号　山梨県考古学協会

保坂康夫　1992年　「甲斐国における平安時代研究の現状と課題」『山梨県考古学協会誌』第5号　山梨県考古学協会

保坂康夫　1992年　「甕」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

野沢昌康　1988年　「国府跡」『春日居町誌』　春日居町誌編纂委員会

村田文夫・増子章二　1989年　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（上）－川崎市域における事例研究をふまえて－」『川崎市民ミュージアム紀要』2

村田文夫・増子章二　1990年　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（下）－川崎市域における事例研究をふまえて－」『川崎市民ミュージアム紀要』3

森原明廣　1994年　「山梨県地域における古代末期の土器様相－「甲斐型土器」の消滅とその後－」『丘陵』第14号　甲斐丘陵考古学研究会

森原明廣　1995年　「山梨県」『東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－』第5回東日本埋蔵文化財研究会

森原明廣　1995年　「山梨県地域における古墳時代後期の土器様相」『東国土器研究』第4号　東国土器研究会

山下孝司　1992年　「坏」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

山下孝司　1994年　「墨書土器に関する一考察－寺所遺跡に見る墨書土器のあり方－」『山梨考古学論集』Ⅲ　山梨県考古学協会

山田真一　1992年　「甲斐周辺地域の甲斐型土器の状況－長野県地域－」『甲斐型土器－その編年と年代－』　甲斐型土器研究グループ・山梨県考古学協会

山梨郷土研究会　1992年　『山梨郷土史研究入門』　山梨日日新聞社

吉澤　悟　1995年　「煙の末々－日本における火葬の導入と展開過程に寄せる想念－」『東国火葬事始－古代人の生と死－』　栃木県立博物館

吉澤　悟　1995年　「古代火葬墓の展開を語るために」『東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－』第5回東日本埋蔵文化財研究会

若尾俊平・服部大超　1976年　『くずし解読字典』　柏書房

付編 I

狐原遺跡出土甲斐型土器の胎土分析

河西　学（帝京大学山梨文化財研究所）

本遺跡は、一宮町竹原田に所在し、金川扇状地の扇央部に位置する。遺跡からは平安時代前半期の住居址が検出され、同期の土師器が大量に出土している。これらの出土土器の多くはいわゆる「甲斐型土器」の範疇に入るものである。甲斐型甕は、砂が多く特に雲母が顕著であること、甲斐型坏はきめ細かい胎土で雲母や赤色粒子を含むことが特徴とされている。ここでは甲斐型土器の胎土に関して基礎的な報告を行う。

試料と分析方法　試料は、本遺跡第２号住居址出土の甲斐型土師器である。試料表を以下に示す（第１表）。両試料とも甲斐型Ⅷ期（AD840～860年頃）と考えられている。分析方法は従来の方法と同様である（河西、1991;1992）。なお粒度分析は、画像解析装置（Leica 社 Q500）を用いて行った（第２図）。

第１表　試料表

試料番号	器種	部位	注記	色調
No.1	甕	胴部	KP･2住･368	表面7.5YR6/6橙色；内部5YR5/6明赤褐色
No.2	坏	口縁部	KP･2住･129	全体5YR6/6橙色

分析結果　分析結果を第２表に示す。これをもとに土器全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの構成を示した全体構成、砂粒子中の岩石鉱物組成、および重鉱物組成を示す（第１図）。

全体構成に占める砂粒子は、甕(No.1)が35.7％と高いのに対し坏(No.2)は2.2％と極めて少ない。粒度組成でも両者は明らかに異なる。甕(No.1)では、ヒストグラムのピーク頂部は平坦で、粗粒砂を中心として極粗粒砂から中粒砂までの広範にピークが分布する。これに対して坏(No.2)は、細粒砂から極細粒砂の範囲にピークが分布し、ヒストグラムは凹凸を示す。ヒストグラムの凹凸の原因は、坏胎土が緻密であることにより孔隙中に着色エポキシ樹脂が含浸されず、画像解析装置によって孔隙と砂粒子とを区別できなかったことによるものと推定される。

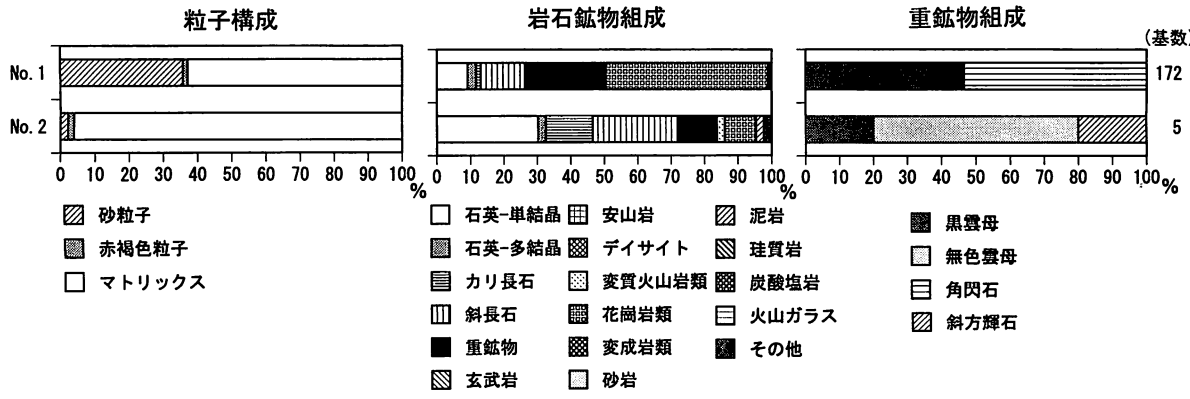
岩石鉱物組成では、両試料とも花崗岩類に由来する粒子が大部分を占める点で共通性が高い。甕(No.1)は、花崗岩類(48.4％)・重鉱物(24.1％)・斜長石(13.2％)・石英(11.6％)のほか、カリ長石・ホルンフェルス・泥岩などをわずかに含む。坏(No.2)は、花崗岩類は9.3％とあまり多くないが、それに由来する石英(32.6％)・斜長石(25.6％)・カリ長石(14.0％)・重鉱物(11.6％)などが多く含まれ、変質火山岩類・泥岩をわずかに伴う。

重鉱物組成において、甕(No.1)では角閃石(53.5％)と黒雲母(46.5％)から構成されるのに対して、坏(No.2)では黒雲母・無色雲母・斜方輝石などが検出されている。検出粒数が極端に異なることから単純には比較できないが、黒雲母が共通するものの、両者には若干の重鉱物組成の違いが認められる。

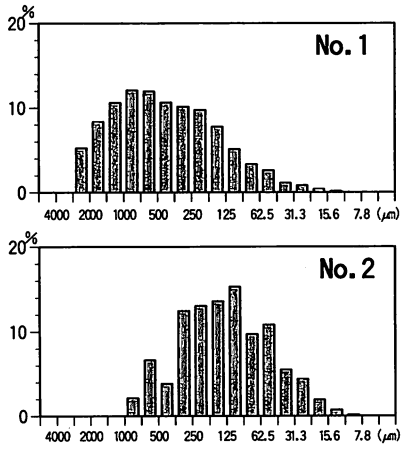
第２表　土器試料の岩石鉱物
（数字はポイント数、＋は計数以外の検出を示す）

試料番号	No.1	No.2
石英-単結晶	65	13
石英-β型		
石英-多結晶	18	1
カリ長石	10	6
斜長石	94	11
安山岩		
玄武岩		
デイサイト		
砂岩		
泥岩	1	1
珪質岩		
炭酸塩岩		
赤褐色粒子	29	35
火山ガラス-無色	1	＋
火山ガラス-褐色		
変質火山岩類	＋	1
"緑色火山岩類"		
変質岩石	4	1
変質鉱物		
その他	1	
花崗岩類	345	4
ホルンフェルス	2	
変成岩類		
黒雲母	80	1
無色雲母		3
角閃石	92	
斜方輝石		1
緑簾石		＋
ジルコン	＋	
マトリックス	1258	1922
合計	2000	2000

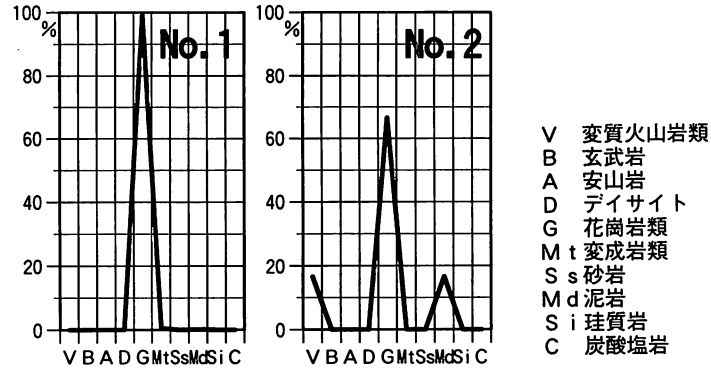
赤褐色粒子　甲斐型坏の胎土の特徴として、赤色粒子（あるいは赤色スコリア）と雲母が含まれていることが報告されている。この特徴は甲斐以外の地域で出土する甲斐型坏の識別にも有効であるようだ。今回赤色粒子が坏試料(No.2)表面に肉眼で観察された。肉眼で認められる赤色粒子は、偏光顕微鏡下の観察では「赤褐色粒子」と認識された。第１図全体構成に占める赤褐色粒子は、坏(No.2)が1.8％、甕(No.1)が1.5％と大差はない。両試料の赤褐色粒子含有率は、従来分析した山梨県内出土の縄文土器・古代瓦などの一般的な範囲におさまり、特異な値ではない。県内には富士火山のスコリア質テフラが、桂川流域を中心に広く分布しているが、甲府盆地内での分布量は少ない。土器胎土中へのスコリア粒子の混入の可能性はあり得るが、今回分析試料にはスコリアの存在は認められなかった。赤褐色粒子は、外形が丸い～やや角ばり、赤褐色を呈し、普通の粘土部分とは色調により境界が明瞭に区別されるが、一部の境界は漸移的なものも認められる。赤褐色粒子は、細粒で、石英・カリ長石・角閃石など堆積性の粒子を含み、組織は一般



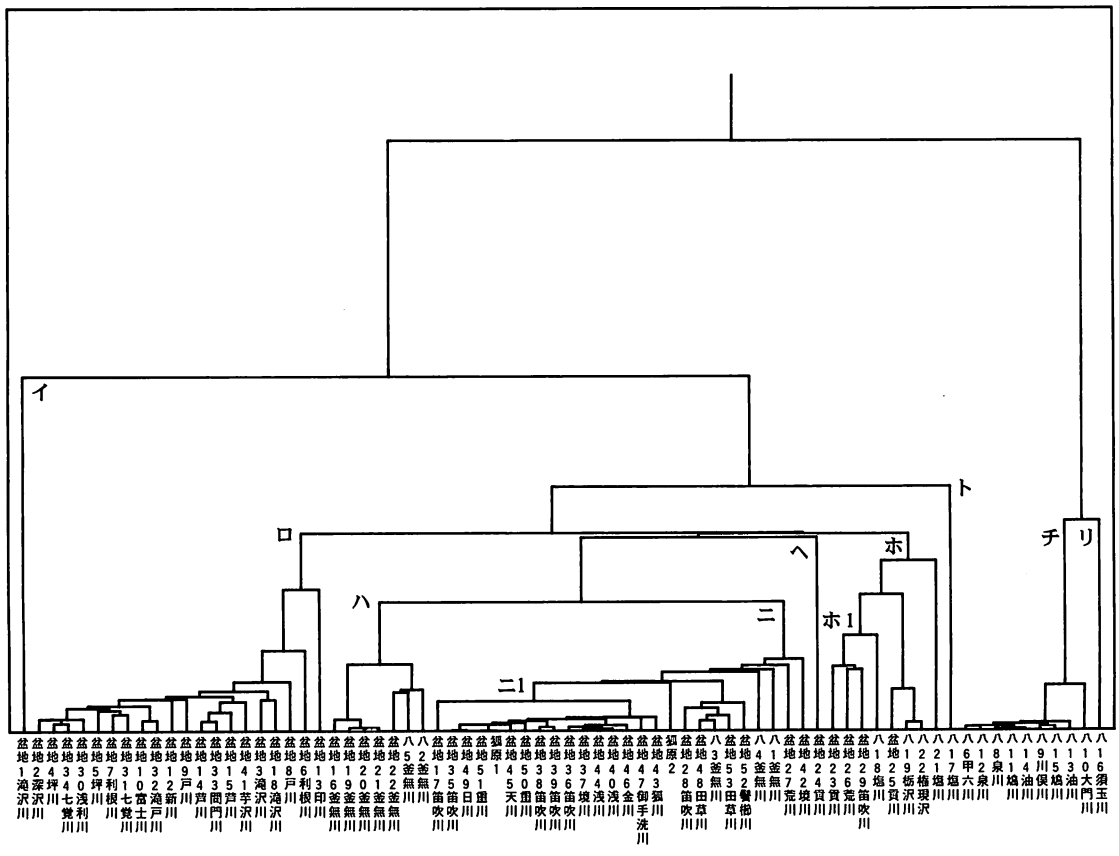
第１図　狐原遺跡出土土器試料の岩石鉱物組成



第２図　土器試料の粒度組成

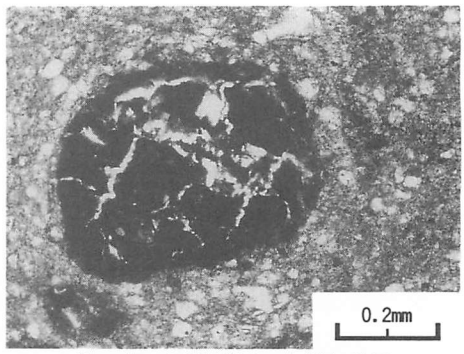


第３図　土器試料の岩石組成折れ線グラフ



第４図　狐原遺跡出土土器と甲府盆地河川砂とのクラスター分析樹形図

的な粘土部分のものと類似性が高い。以上のことから赤褐色粒子の起源は、原料である泥質堆積物中に含まれていた褐鉄鉱の濃集部分と推定される。褐鉄鉱は、鉄分が沈着して形成され高師小僧などとしても知られている。



第５表　甲斐型坏の赤褐色粒子
（内部に石英粒子を含む）

岩石組成折れ線グラフ　変質火山岩類・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基数とし、それぞれの岩石の構成比を折れ線グラフに示した（第３図）。第３図では、甕(No.1)が99.1％と圧倒的に花崗岩類が多いのに対して、坏(No.2)では花崗岩類が66.7％とやや低く変質火山岩類と泥岩とが各16.7％と強調されている。しかし両試料は含砂率が極端に異なり、ポイント総数も甕(No.1)が348に対し坏(No.2)は６と極端に少ない。したがって両者を単純に比較することは適当ではない。ここでは両者において花崗岩類が多く含まれる類似性に注目しておきたい。

クラスター分析による樹形図　折れ線グラフに用いた10岩石種のデータを用いてクラスター分析を行ない、甲府盆地河川砂と比較した（第４図）。クラスター分析における非類似度はユークリッドの平均距離を用い、最短距離法によって算出した。第４図において狐原遺跡試料は、笛吹川水系の河川砂との類似性が高いことを示している。これらの河川砂は河西（1992）の報告でニ群としたグループに属する。甕(No.1)は、ニ群の中でさらにニ１群と細分されたクラスター中に属し、重川の河川砂ともっとも類似性が高いことが示された。坏(No.2)は、ニ１群に直接融合することから甕(No.1)とも類似性が高いと考えられる。狐原遺跡が立地する扇状地を形成した金川もニ１群に属していること、釈迦堂遺跡の曽利Ⅳ式あるいは加曽利Ｅ式土器の内ニ１群に属するものは在地的土器と推定されている（河西、1992）ことなどから、両土器試料は在地的土器と考えられる。したがって笛吹川流域である甲府盆地東半部（峡東地域）で生産された可能性が高いと推定される。なお韮崎市伊藤窪第２遺跡出土の古墳前期土師器の一部もニ１群に属し、笛吹川流域が産地候補と推定されている（河西、1991）。

考察　甕と坏との胎土の岩石鉱物組成では、花崗岩類に由来する粒子が多いという点で類似性が高いが、岩石組成折れ線グラフで変質火山岩類・泥岩の割合が若干異なっている。重鉱物組成でも若干の違いがあることなどから両者の胎土の産地が笛吹川流域でも若干異なる可能性もあるかもしれない。なお一宮町金山畑総遺跡・竜ノ木遺跡、甲府市大坪遺跡出土の甲斐型土器の重鉱物分析・蛍光Ｘ線分析による胎土分析からは、坏と甕における重鉱物組成・元素組成の違いによって製作地がことなる可能性が推定され、さらに大坪遺跡と一宮町の２遺跡の坏で元素組成が区分されることから坏の産地の違いも推定されている（増島，1995）。今回の粒度組成では、両者が異なる粒度組成の胎土を使用していることが明らかになった。この相違は、使用胎土を区別してそれぞれの器種を作り分けていたことを反映しているものと考えられる。

保坂（1989）における甲斐型の甕の定義には、内外面のハケメ調整技術および底部外面の木葉痕とともに「胎土に砂粒が多く、特にいわゆる金雲母が非常に目立つ」ことが明らかにされている（下線は著者）。ここでいう金雲母は、肉眼的に金色を呈する黒雲母のことであり、考古学分野において一部で慣用される場合もあるが、岩石学的にいう金雲母（フロゴパイト）とは異なるものを指す。保坂が報告した甲斐型甕の胎土の肉眼観察結果と今回の胎土分析の結果とは類似性が高い。しかし考古学的考察によってなされた甲斐型甕産地が甲府市川田町付近ではないかとの推定に関して、前述したように笛吹川流域で生産された可能性は指摘できるが、さらに細分化して地域を限定するために議論できる事実は今回の分析からは得られなかった。類例にあたった後にさらに検討したい。

引用文献

保坂康夫（1989）古代の甲斐型甕をめぐって。『甲斐の成立と地方的展開』、162-186、角川書店。

河西学（1991）伊藤窪第２遺跡出土土器の胎土分析。『伊藤窪第２遺跡』、22-35、韮崎市教育委員会。

河西学（1992）岩石鉱物組成からみた縄文土器の産地推定－山梨県釈迦堂遺跡・郷蔵地遺跡・柳坪遺跡の場合－。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、4、61-90。

増島淳（1995）壱町田Ｃ遺跡出土土器の胎土分析－重鉱物組成と元素組成からみた－。『大場川遺跡群』、158-185、三島市教育委員会。

付編Ⅱ
狐原遺跡出土の人骨

茂原信生（京都大学霊長類研究所）

Ⅰ）はじめに

狐原遺跡は山梨県東八代郡一宮町竹原田にある遺跡で、山梨県埋蔵文化財センターによって1994年に発掘調査された。その際、平安時代（９世紀中葉）の所産と考えられる墓壙から２体の人骨が出土した。今回報告するのはこの人骨に関するものである。平安時代の人骨はさほど多くなく、貴重な資料である。

計測方法はマルチン（馬場；1991）にしたがった。また、歯の計測は藤田（1949）にしたがった。

Ⅱ）出土状況

１号墓壙と２号墓壙が確認され、それぞれから人骨が出土している。骨の保存状況はさほど良好ではなく、大多数の四肢骨は失われており、残っている四肢骨でも骨端が失われていたり、表面の緻密質が部分的にはげ落ちたりしている。残存部に重複はないので、それぞれ１体づつが埋葬されていたと考えられる。

Ⅲ）出土骨の特徴

１）１号墓壙（写真１－１～６）

膝を屈して埋葬されていた。右大腿骨は後面を上に、左大腿骨は内側を上にして出土した。底面が凸凹しているので、白骨化した際に動いたものであろう。頭蓋との位置関係、ならびに骨盤があったと思われる場所から考えて右に向いて埋葬されていたと思われる。

頭蓋骨の右側が右側上顎歯列をともなって残っており、また下顎の一部と下顎歯列が出土している。四肢骨では、骨盤と思われる細片と左右の大腿骨が出土している。大腿骨の骨端は失われているし、骨幹も表面の脱落している部分が多い。

頭蓋骨

右の側頭骨外側部と右の上顎骨、および左の下顎の一部が残っている。側頭骨の乳様突起は中等程度の大きさである。乳突上溝は顕著ではない。外耳道骨種などは見られない。下顎骨体はさほど厚くない。

歯

上顎歯は右の側切歯から第２大臼歯までの６本が残っており、下顎歯は右の第１大臼歯から左の第２大臼歯までの13本が残っている。上下顎の第２大臼歯の遠心面には隣接面摩耗がまったく見られないことから、少なくとも上顎の右と下顎の左の第３大臼歯とは萌出しておらず、下顎の第２大臼歯の遠心の歯槽骨の中にも第３大臼歯が見られないことから判断して、先天的に欠如していたものと考えられる。咬耗は、下顎の第２小臼歯は象牙質の露出していないモルナー（1971）の２、第１大臼歯は４、それ以外はすべて３である。第１大臼歯の咬耗が比較的進んでおり成人であると考えられる。しかし、咬耗の程度はさほど進んでおらず、壮年には達していないものと推測される。特殊な咬耗はない。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第２大臼歯が＋４型で、第１大臼歯は＋５型であろう。

歯の大きさは、櫂田（1959）の現代日本人のデータと比較すると、切歯や犬歯は狐原遺跡人の方が現代人男性よりやや大きめであるが、臼歯は現代人男性と同じくらいで、現代人女性よりはやや大きめである（表１）。

う蝕（虫歯）やエナメル質減形成などは見られない。

四肢骨

大腿骨後面の粗線はあまり発達しておらず、稜状の高まりはごくわずかである。また、殿筋隆起もごくわずかである。右の骨体上断面数（扁平示数）はおよそ77.4で、程度は低いが扁平大腿骨に属し、およその中央部での断面示数は約103.6（骨体中央横径約28.0 mm、中央矢状径約29.0 mm）である。

この個体は成人であると推測されるが、性別は不明である。第３大臼歯は先天的に欠如していた可能性がある。

２）２号墓壙（写真１－７～９）

埋葬姿勢はやはり膝を屈していたものと考えられる。右を下にした屈葬であろう。

頭蓋骨の一部、上腕骨片、大腿骨骨幹、および脛骨片が出土している。歯は破片が２点だけ残っているが歯種は判定でき

ない。

頭蓋骨

左半分が出土しているが、顔面、頭頂の後部は失われている。乳様突起は大きく、かつ厚くて男性的である。関節突起は大きい。耳道上稜はあまり発達していない。下顎枝の上半が残っており、頑丈である。縫合の状態や耳の状態から判断して成人であろう。

四肢骨

下顎骨が出土しているがどちらも埋葬時の自然位を保っている。大腿骨の粗線は１号人骨よりもよく発達しており、後面に稜状に張り出している。骨幹の上部外側に位置する殿筋隆起はごくわずかに発達している。中央の位置を推定し計測した骨体中央横径は28.5ｍｍで１号人骨よりわずかに太い。上部はやや扁平である。脛骨は扁平ではない。

この個体は、１号人骨より頑丈で成人男性と推測されるが、詳細は不明である。

Ⅳ）まとめ

狐原遺跡から出土した人骨は２体で、１号墓壙から出土した１号人骨は成人で性別は不明、２号墓壙から出土した２号人骨は成人男性と考えられる。時代的な特徴は明らかにできなかったが、脛骨が扁平ではないこと、大腿骨はどちらもやや扁平であることが明らかになった。残存部に特記すべき病気などの痕跡はなかった。

この人骨を観察する機会を与えて下さった山梨県埋蔵文化財センターの方々に厚く感謝いたします。なお、写真撮影は当研究所の木下實氏にお願いした。厚く感謝いたします。

参考文献

馬場悠男（1991）：人骨計測法．人類学講座別巻１，「人体計測法」，江藤盛治編集；159-358

藤田恒太郎（1949）：歯の計測規準について．人類学雑誌，61；１-６

櫂田和良（1959）：歯の大きさの性差について．人類学雑誌，43（1）；151-163

写真説明

写真１；狐原遺跡１号墓壙および２号墓壙出土の平安時代人骨

１；１号墓壙出土の頭蓋骨右側面、右が前方。矢印が右外耳孔。

２；１号墓壙出土の下顎骨左側面

３；１号墓壙出土の左上顎歯咬合面

４；１号墓壙出土の左下顎歯咬合面

５・６；１号墓壙出土の右および左大腿骨前面

７・８；２号墓壙出土の左および右大腿骨前面

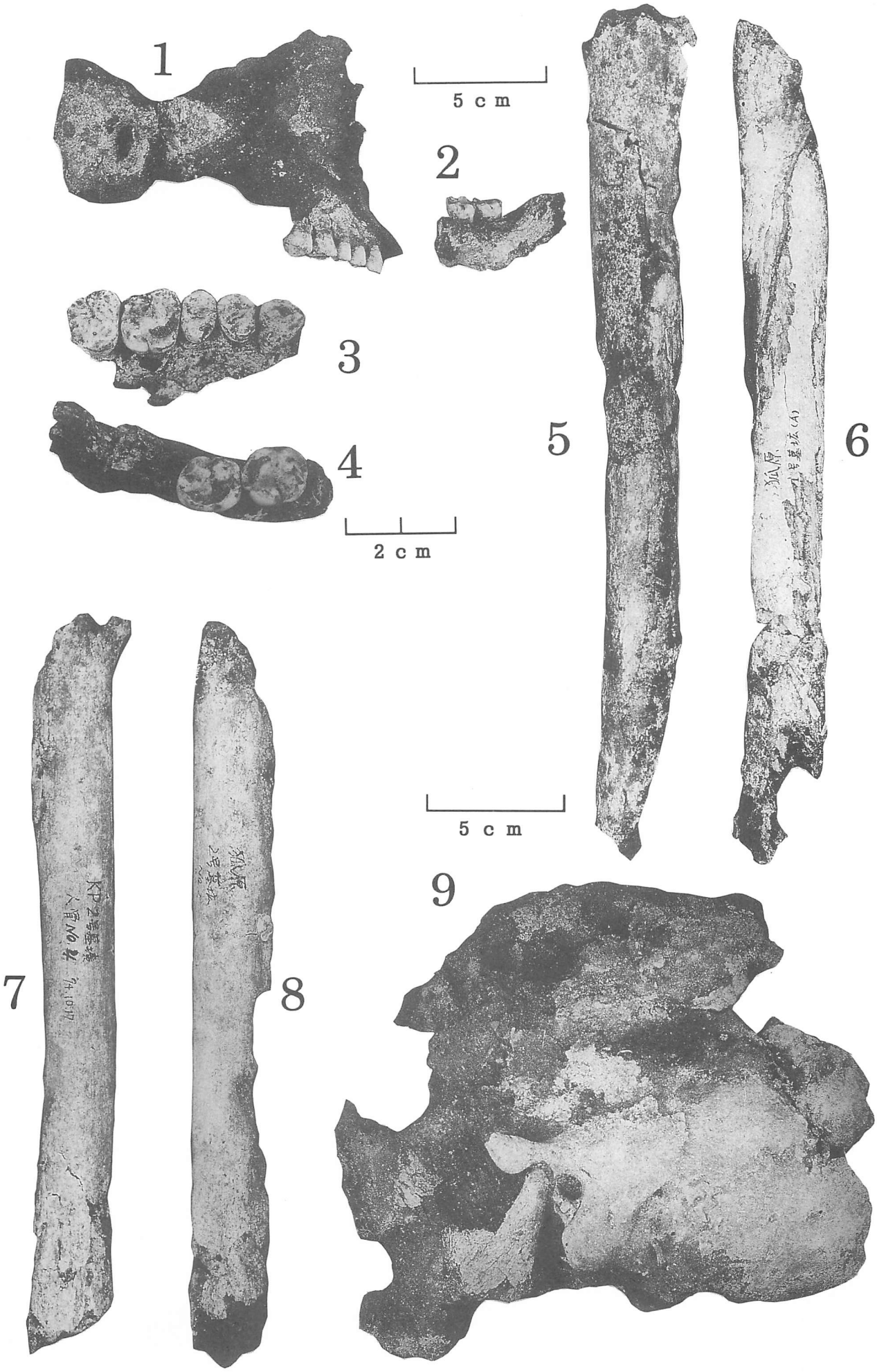
９；２号墓壙出土の頭蓋骨左側面。矢印が左の外耳工孔。

表１－１：狐原遺跡出土人骨の上顎歯の計測値と比較資料
（単位はｍｍ）

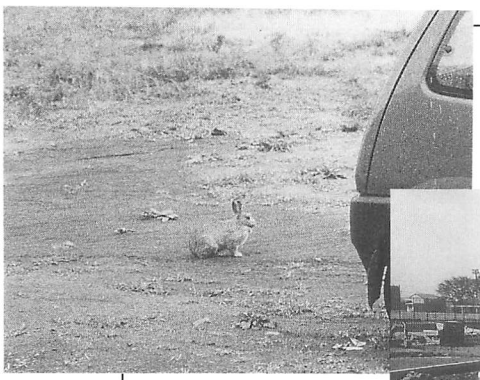
遺跡名	時代	性別	左右	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3	
				m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
狐原遺跡１号	平安		右			7.2	6.9	8.2	9.0	6.6	8.9	6.2	9.3	10.2	11.5	9.5	11.5		
日本人	現代	男		8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79
(櫂田,1959)		女		8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50

表１－２：狐原遺跡出土人骨の下顎歯の計測値と比較資料
（単位はｍｍ）

	時代	性別	左右	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3	
				m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
狐原遺跡１号	平安		右	5.6	6.3	6	6.7	7.1	8.2	6.8	8.6	7.2	8.6	11.7	11.7				
			左	5.8	6.5	6.0	6.7			6.5	8.3	7.3	8.8	11.3	11.0	11.0	10.1		
			平均	5.7	6.4	6.0	6.7	7.1	8.2	6.7	8.5	7.3	8.7	11.5	11.4	11.0	10.1		
日本人	現代	男		5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28
(櫂田,1959)		女		5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02

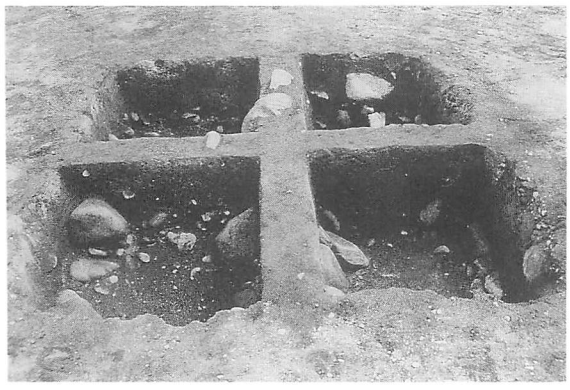

1
2
3
4
5
6
7
8
9
5 cm
2 cm
5 cm

写真図版（Pl.）

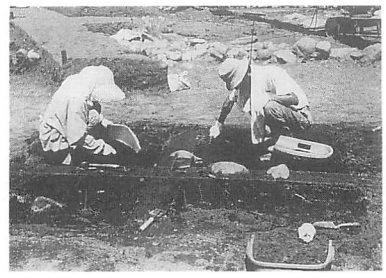


狐原遺跡にあらわれた野うさぎ
【調査用プレハブ前までよく遊びにきました】

発掘調査終了後の狐原遺跡
【県立園芸高校の実習場に造成されました】

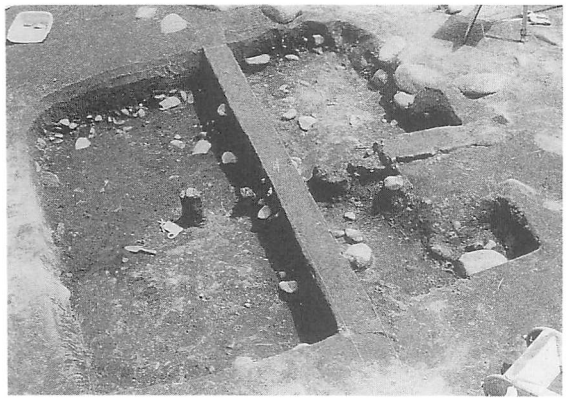


第1号竪穴住居址（北西→）



第1号竪穴住居址 検出風景（東→）

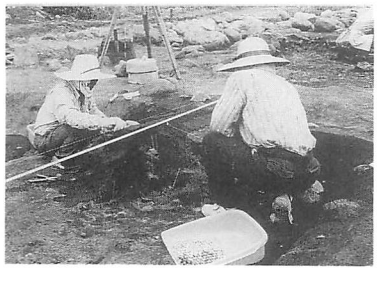
第1号竪穴住居址 検出風景（東→）



第2号竪穴住居址（南西→）

第2号竪穴住居址カマド 遺物出土状況（北→）

第2号竪穴住居址カマド（北西→）

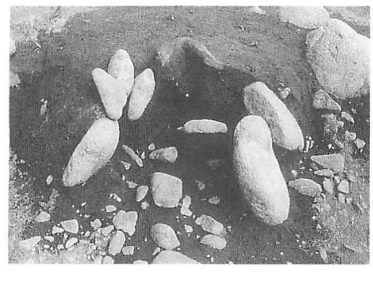


第2号竪穴住居址カマド 検出風景（南→）

第2号竪穴住居址プラン 確認状況（北西→）

第2号竪穴住居址 貼床除去後の状況（北西→）

第3号竪穴住居址（北西→）



第3号竪穴住居址カマド（北西→）

第3号竪穴住居址 貼床除去後の状況（北西→）

第4号竪穴住居址（北西→）

第4号竪穴住居址 貼床除去後の状況（北西→）

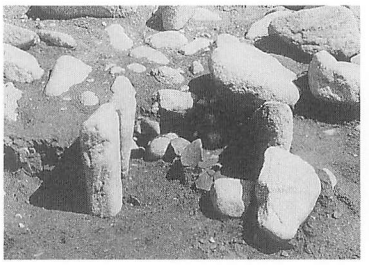
第2・3・4号竪穴住居址【手前から3・2・4号】（北西→）

第5号竪穴住居址（北西→）

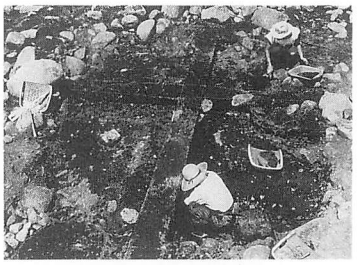
第5号竪穴住居址カマド（北西→）

第5号竪穴住居址 カマド脇遺物出土状況（西→）

第6号竪穴住居址（南西→）

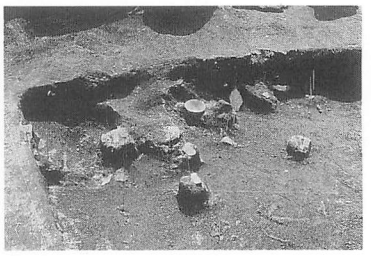


第6号竪穴住居址カマド（南西→）

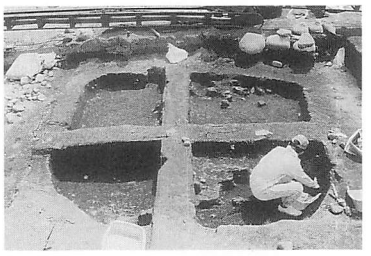


第6号竪穴住居址 検出風景（東→）

第7号竪穴住居址（西→）



第7号竪穴住居址 カマド脇遺物出土状況（西→）



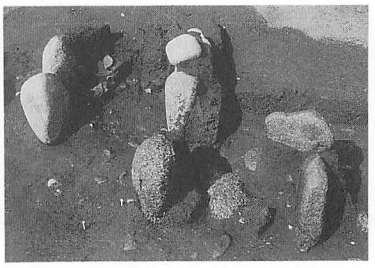
第7号竪穴住居址 検出風景（西→）

第8号竪穴住居址（西→）

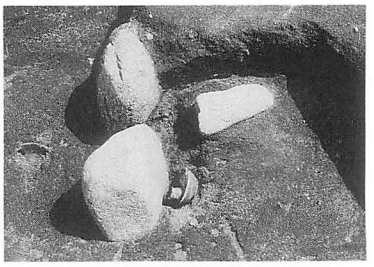
第8号竪穴住居址カマド（西→）

第8号竪穴住居址（南→）

第9号竪穴住居址（南西→）

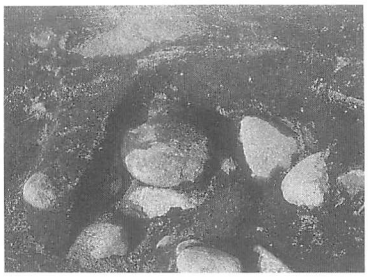


第9号竪穴住居址カマド1・2（南西→）



第9号竪穴住居址 遺物（平瓶）出土状況（南→）

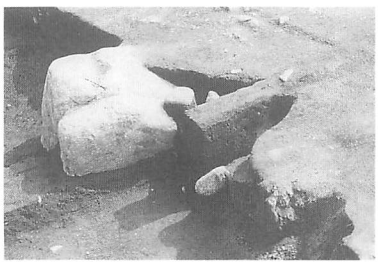
第10号竪穴住居址（南西→）



第10号竪穴住居址カマド（南西→）

第10号竪穴住居址 測量風景（南西→）

第11号竪穴住居址（北西→）

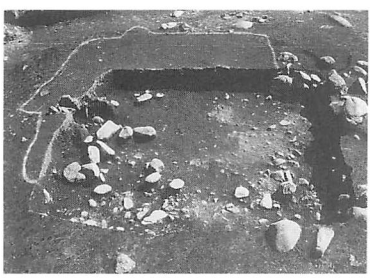


第11号竪穴住居址カマド（南西→）

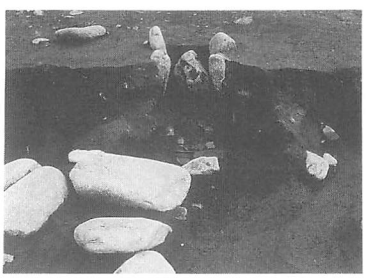
第11号竪穴住居址 検出風景（南西→）

第12号竪穴住居址（北西→）

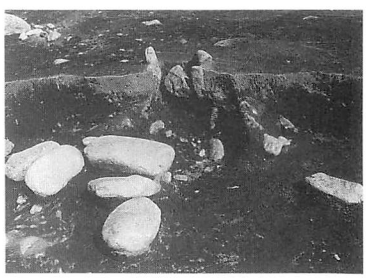
第13号竪穴住居址（南西→）



第13号竪穴住居址【第14号竪穴住居址プラン確認状況】（北西→）



第13号竪穴住居址カマド 遺物出土状況（南西→）

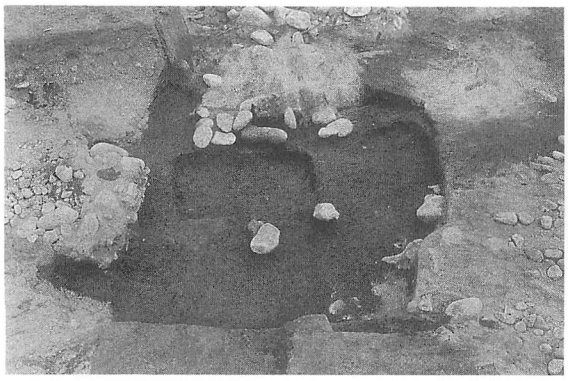


第13号竪穴住居址カマド（南西→）

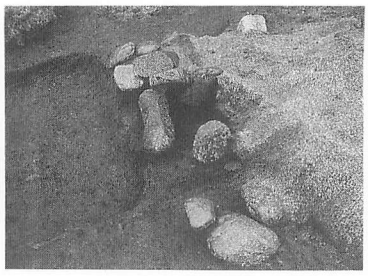
第14号竪穴住居址（南西→）

第14号竪穴住居址カマド 遺物出土状況（南西→）

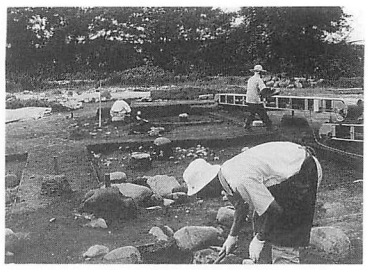
第14号竪穴住居址カマド（西→）



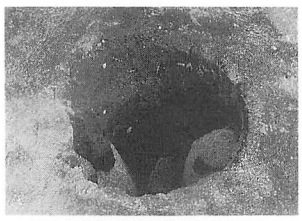
第15号竪穴住居址（北西→）



第15号竪穴住居址カマド（南→）



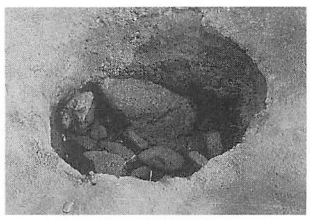
15号竪穴住居址周辺の調査風景（北→）



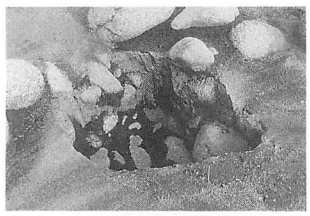
第1号土坑（南西→）

第2号土坑（西→）

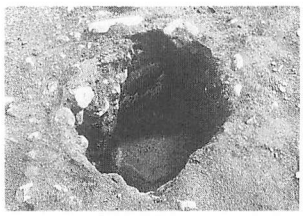
第3号土坑（南東→）



第4号土坑（南→）

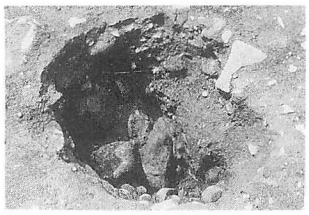


第5号土坑（西→）



第6号土坑（北→）

第7号土坑（南→）

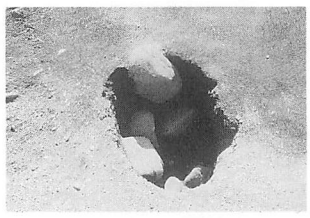


第8号土坑（南西→）

第11号土坑（南西→）

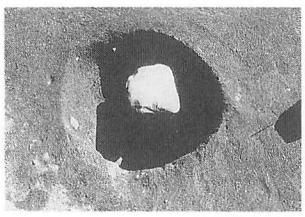
第12号土坑（北西→）

第13号土坑（北東→）

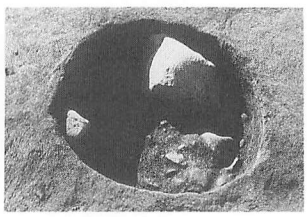


第14号土坑（南→）

第15号土坑（西→）

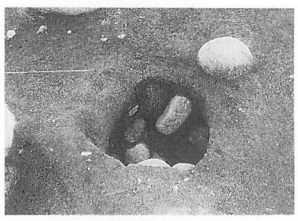


第16号土坑（南西→）

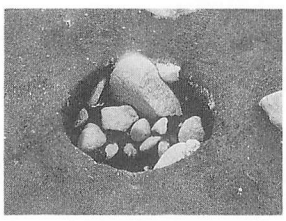


第17号土坑（北東→）

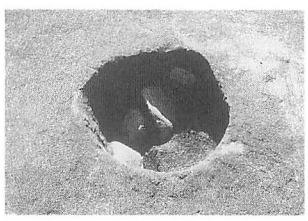
第18号土坑（北西→）



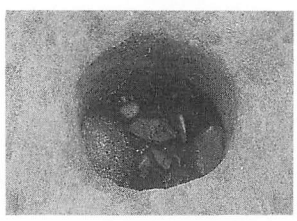
第19号土坑（北→）



第20号土坑（西→）

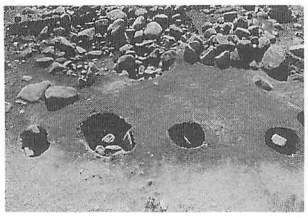


第21号土坑（北西→）



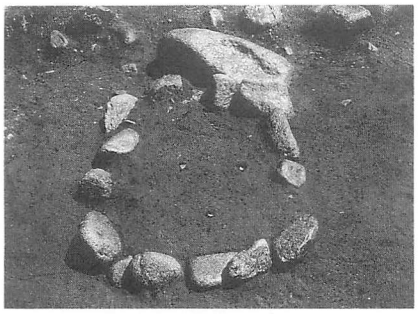
第22号土坑（北西→）

Ⅰ・J-10・11Grid内の土坑検出状況（南西→）

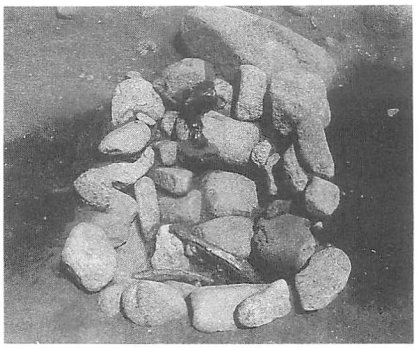


H・Ⅰ-8 Grid内の土坑検出状況（北→）

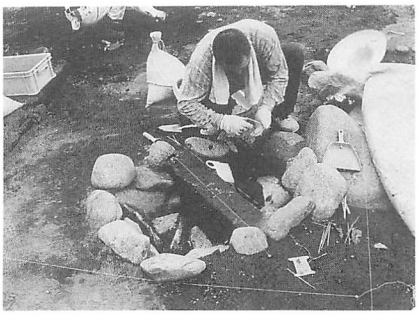
土坑群の検出風景（北西→）



第1号墓壙 プラン確認状況（南西→）



第1号墓壙 人骨出土状況（南西→）

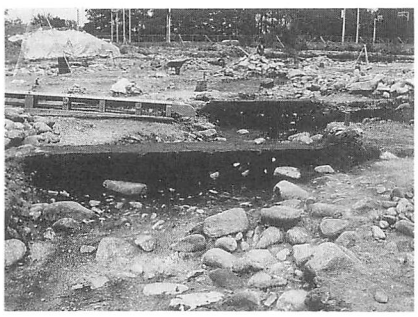


第1号墓壙 検出風景（南東→）

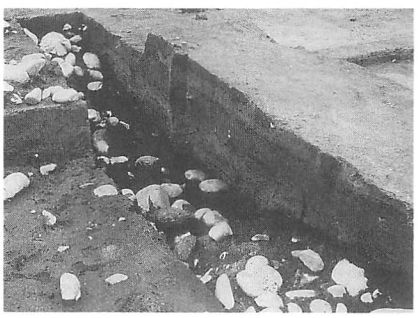
第2号墓壙 人骨出土状況（南東→）

第1・2号墓壙 検出状況
【左より第25号土坑・第2・1号墓壙】（北東→）

O-14壺 検出状況（西→）

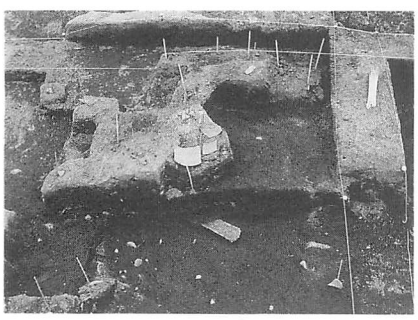


第1号溝 （西→）

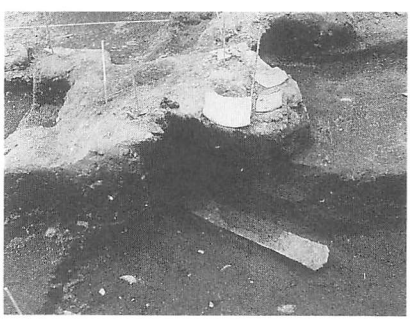


第1号溝 セクション【Grid 8-Line】（西→）

第1号溝 遺物出土状況【L-18Grid】（北東→）

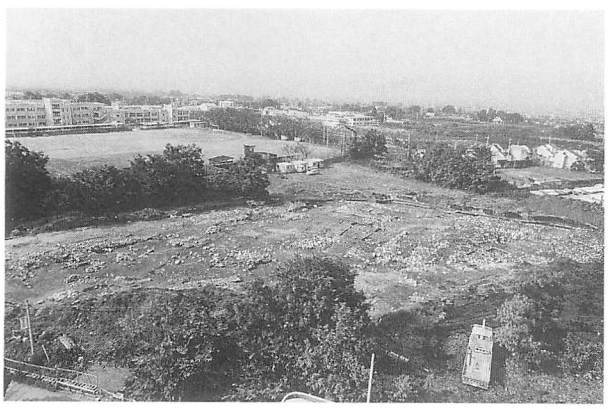


J-7炭化物集中 (東→)



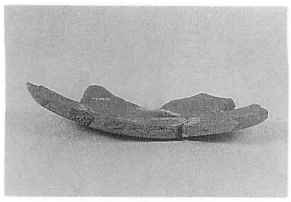
J-7炭化物集中 【鉄製板状製品の出土状況】(東→)

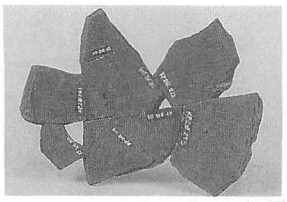
J-7炭化物集中 検出状況(東→)



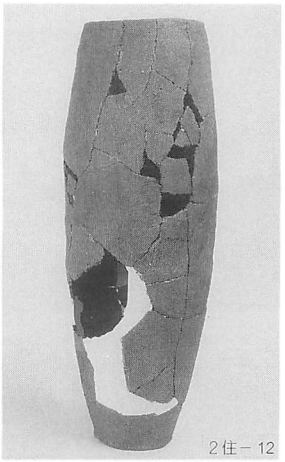
狐原遺跡 調査終了後 全景(北東→)
【地上約25mより撮影
左奥は山梨県立園芸高等学校校舎
右奥は東八代郡石和町の市街地 】

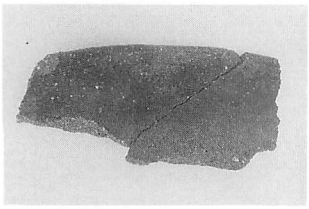
狐原遺跡 調査終了後 全景(北西→)
【地上約30mより撮影
中央上から左上への方向で金川が流れる
金川の手前は国道137号線で中央奥方向に御坂峠
右上は山梨県立園芸高等学校グランド 】

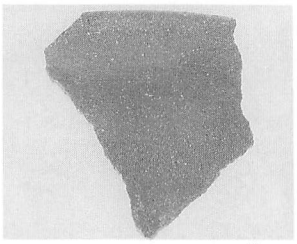

2住－1

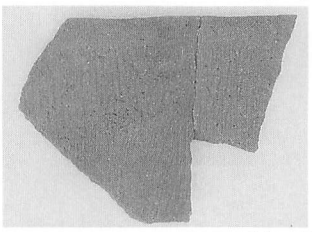

2住－1（内面）

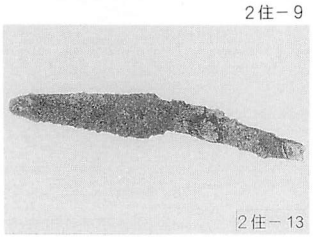
2住－8

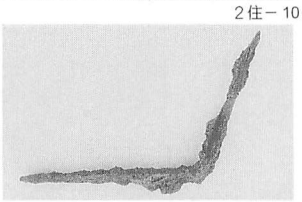

2住－12

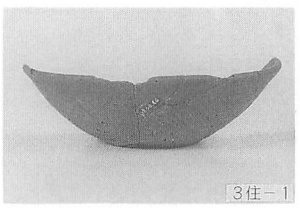

2住－9

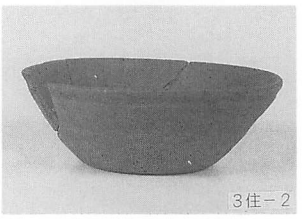

2住－10

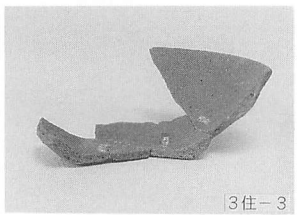

2住－11

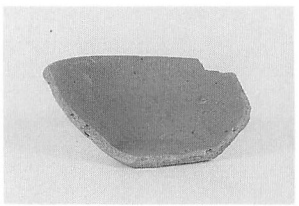

2住－13

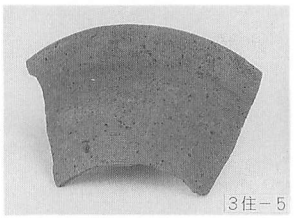

2住－13（側面）

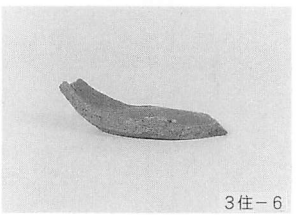

3住－1

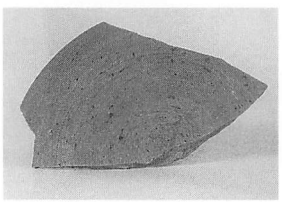

3住－2

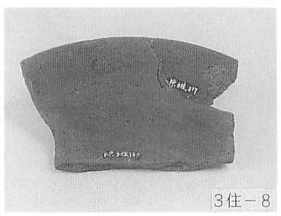

3住－3

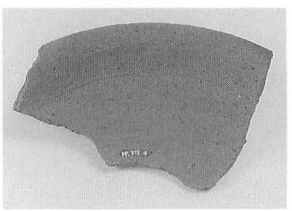

3住－4

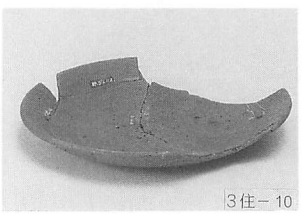

3住－5

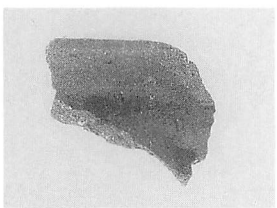

3住－6

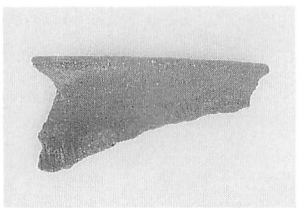

3住－7

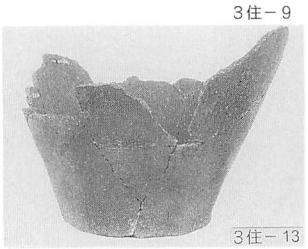

3住－8

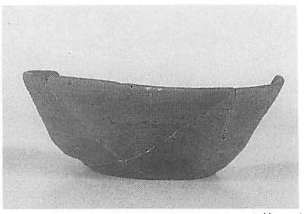

3住－9

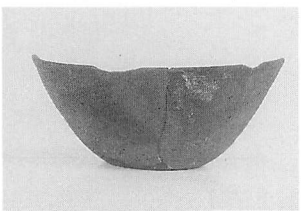

3住－10

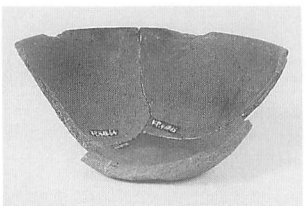

3住－11

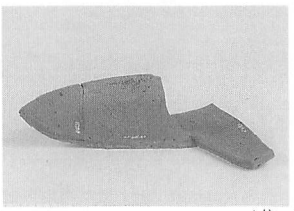

3住－12

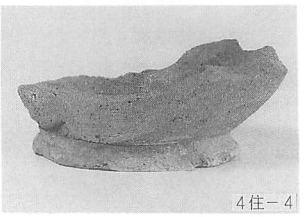

3住－13

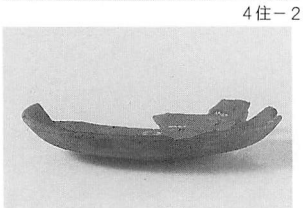

4住－1

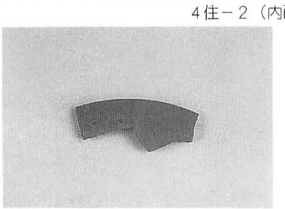

4住－2

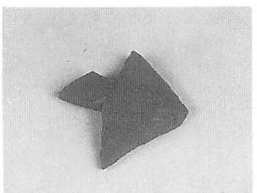

4住－2（内面）

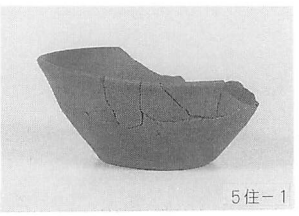

4住－3

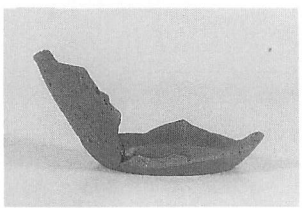

4住－4

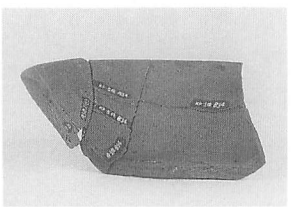

4住－6

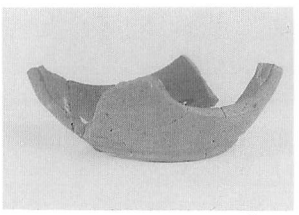

4住－7

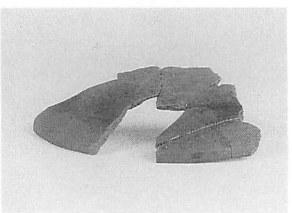

4住－8

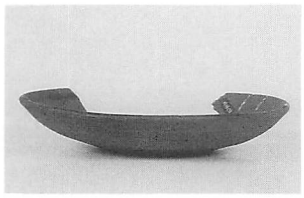

5住－1

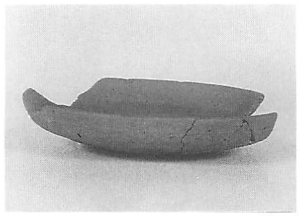

5住－2


5住－3

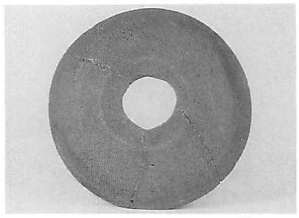

5住－4

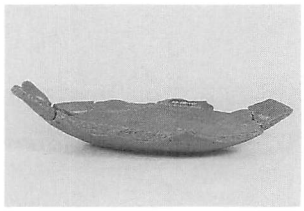

5住－7

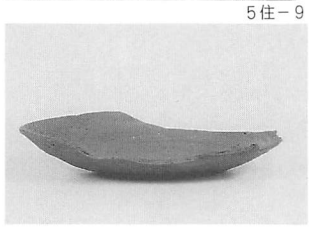

5住－8

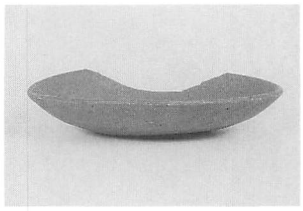

5住－9

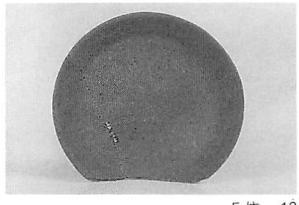
5住－10

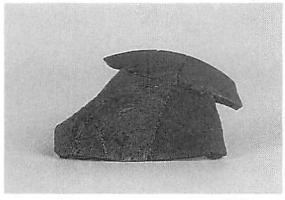

5住－10

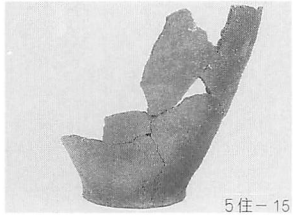

5住－11

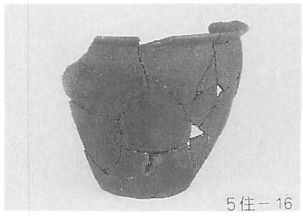

5住－12

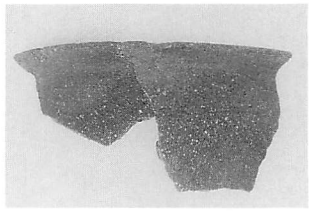

5住－13

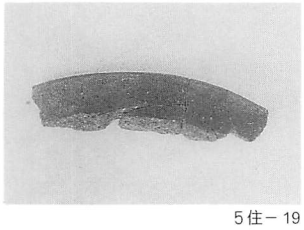

5住－13

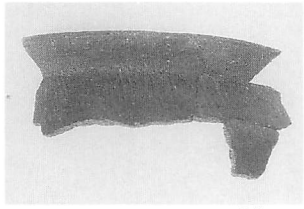

5住－14

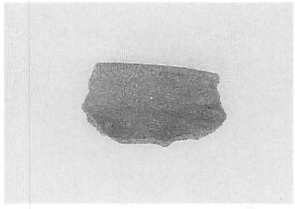

5住－15

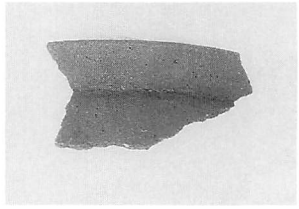

5住－16

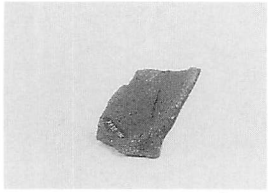

5住－17

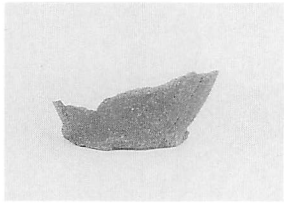

5住－19

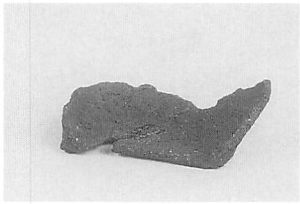

5住－21

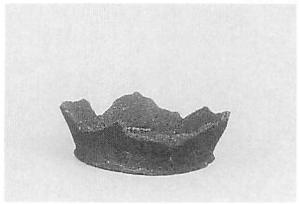

5住－23

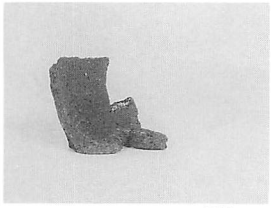

5住－24

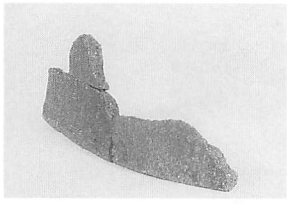

5住－25

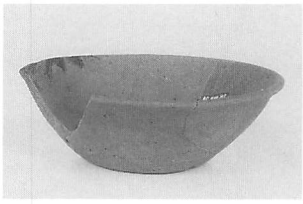

5住－26

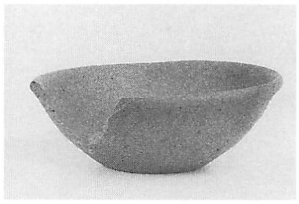

5住－27

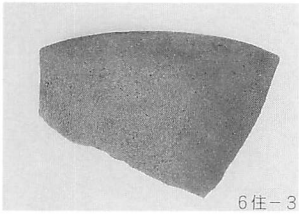

5住－28

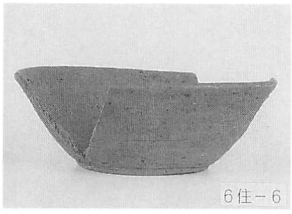

5住－29

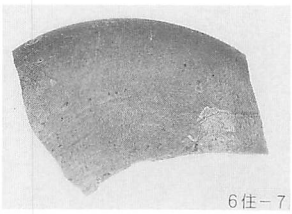

5住－30

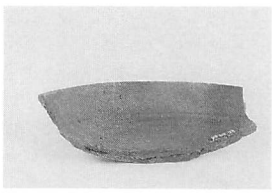

6住－1

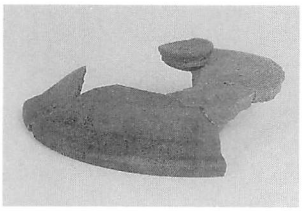

6住－2

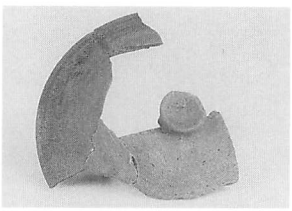

6住－3

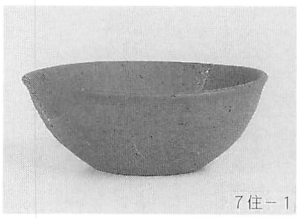

6住－6

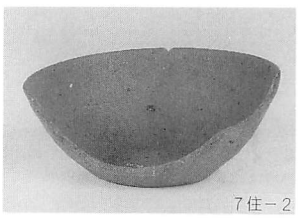

6住－7


6住－8


6住－10

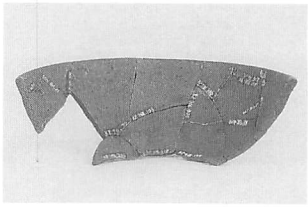

6住－10

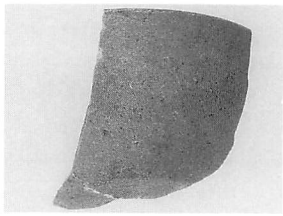

7住－1

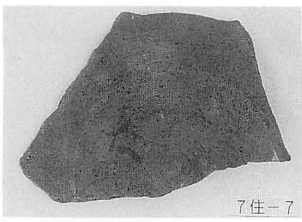

7住－2

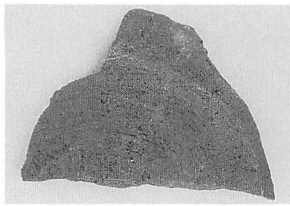
7住－3

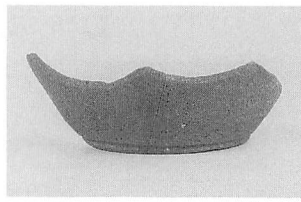
7住－4

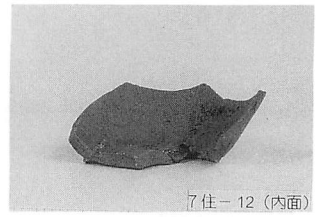

7住－5

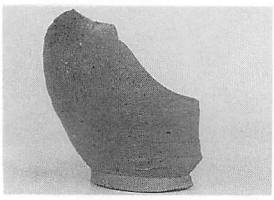

7住－6

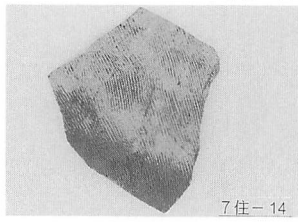

7住－7

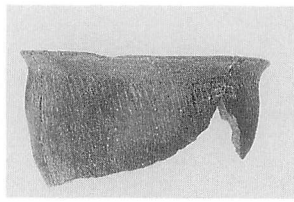

7住－11

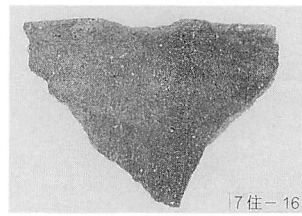

7住－12

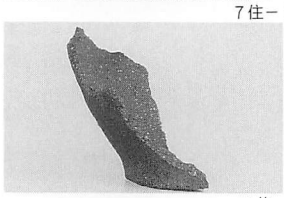

7住－12（内面）

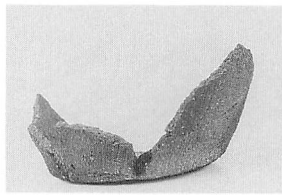

7住－13

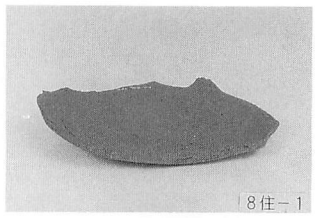

7住－14

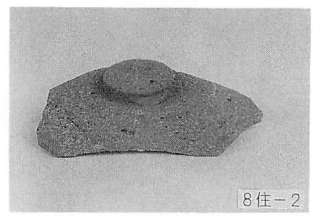

7住－15

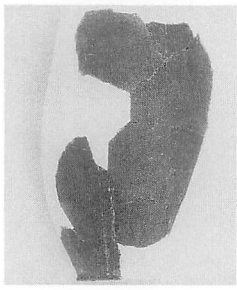

7住－16

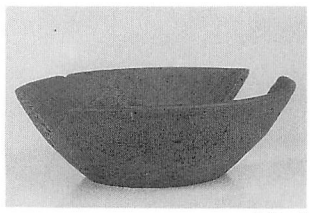

7住－17

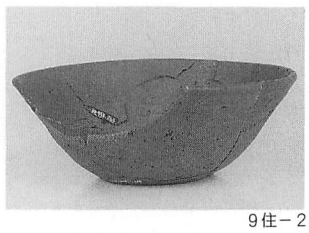

7住－18

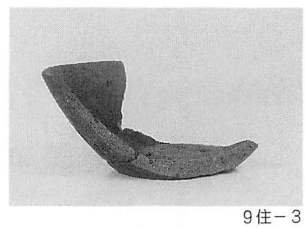

8住－1


8住－2


8住－4

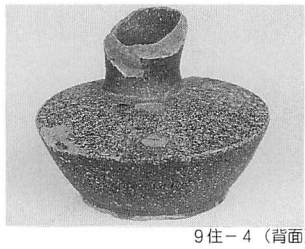

9住－1

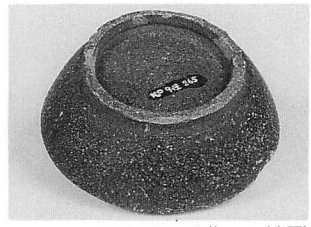

9住－2

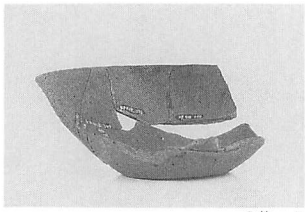

9住－3

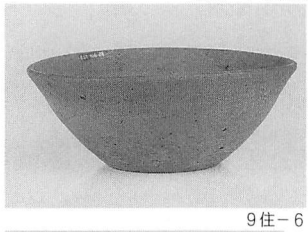
9住－4

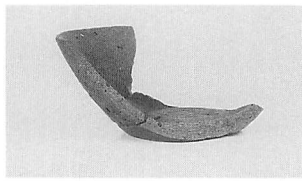
9住－4（正面）

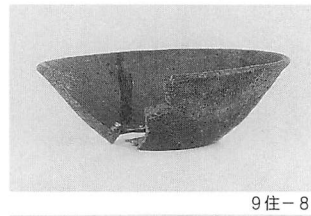

9住－4（背面）

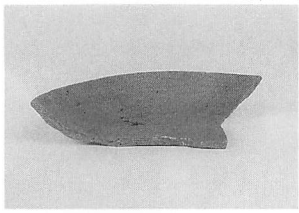

9住－4（底面）

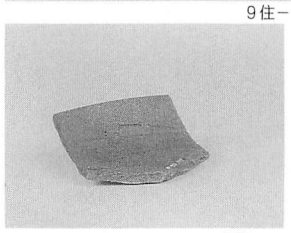

9住－5

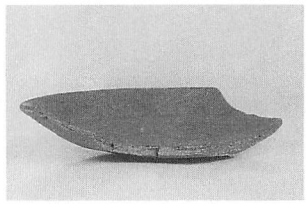

9住－6

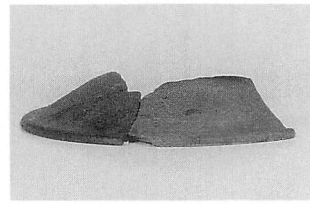

9住－7

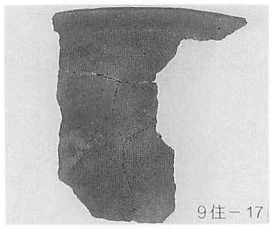

9住－8

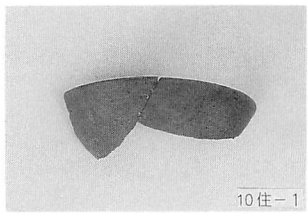

9住－9

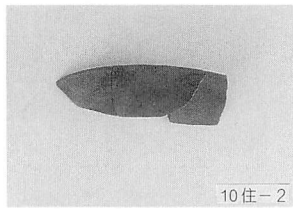

9住－10

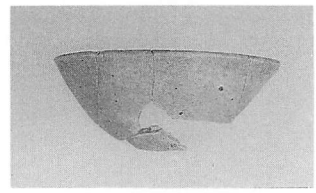

9住－11

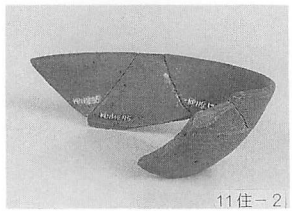

9住－12

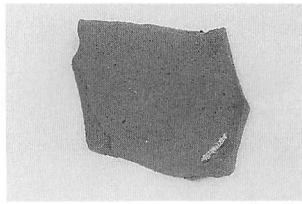

9住－17

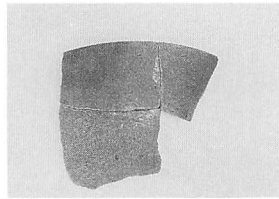

10住－1

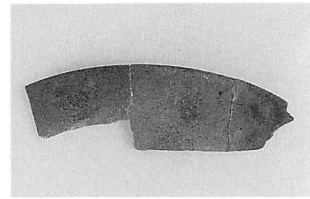

10住－2

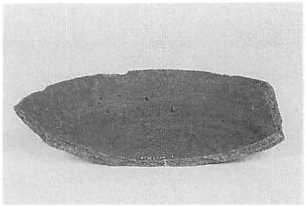

10住－3

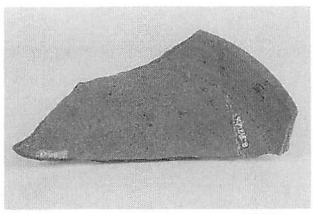

11住－2

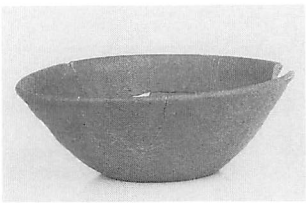

11住－3

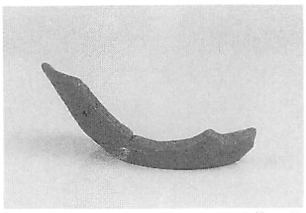

12住－1

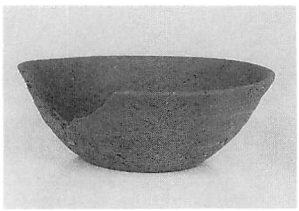

12住－2

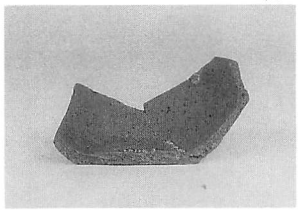

12住－3

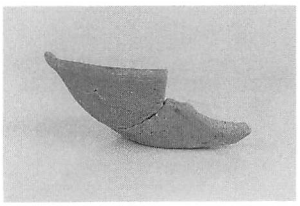

12住－4

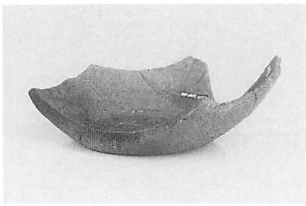

13住－1

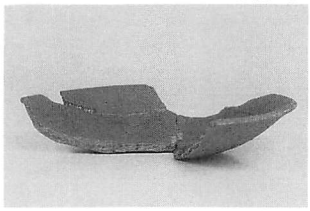

13住－2

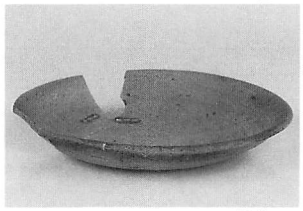

13住－3

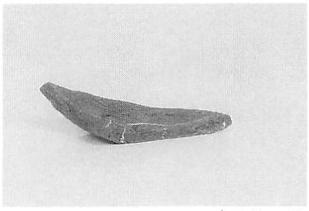

13住－4

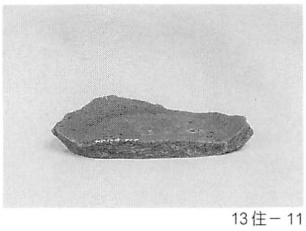

13住－5

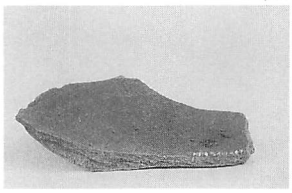

13住－6

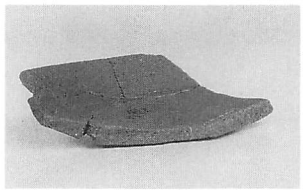

13住－7

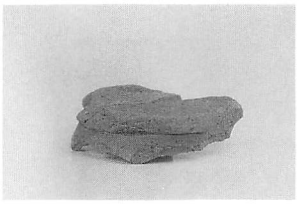

13住－8


13住－10

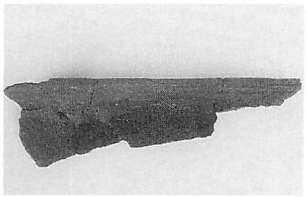

13住－11

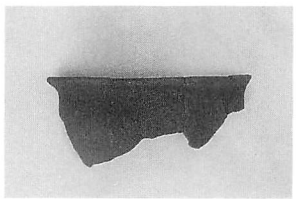

13住－12

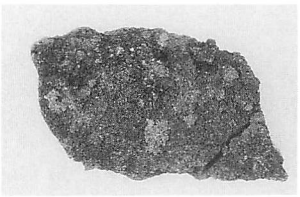

13住－13

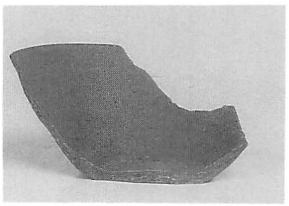

13住－14

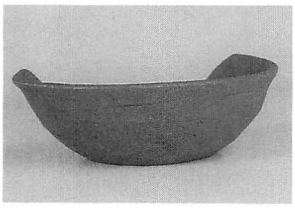
13住－15

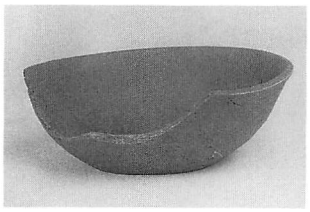

13住－21

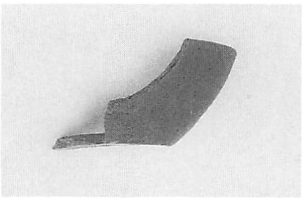

13住－23

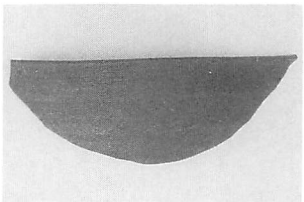

13住－25

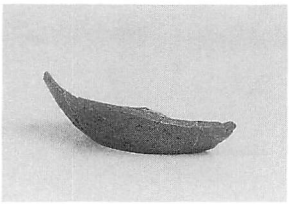

14住－1

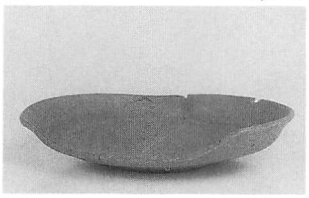

14住－2

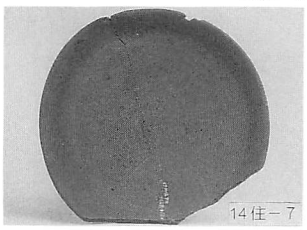

14住－2

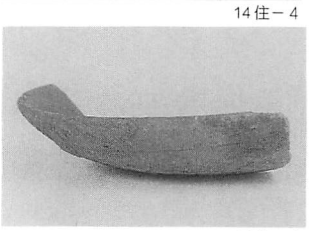

14住－3

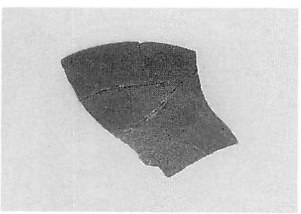

14住－4

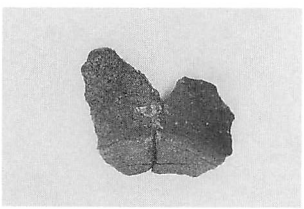

14住－5

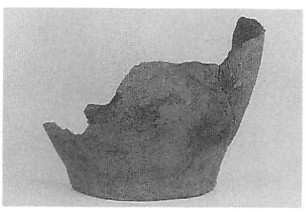

14住－7

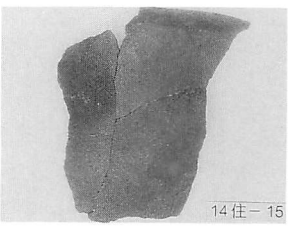

14住－7

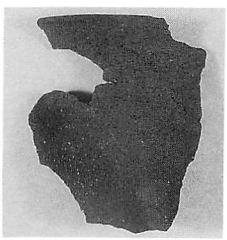

14住－9

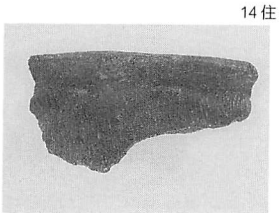

14住－10

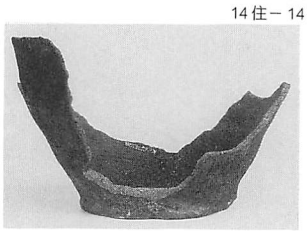

14住－13

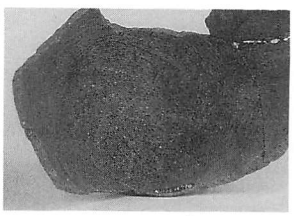

14住－14

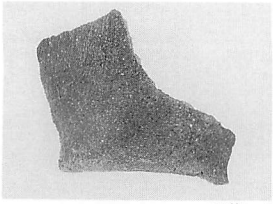

14住－15

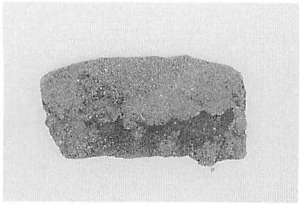

14住－16

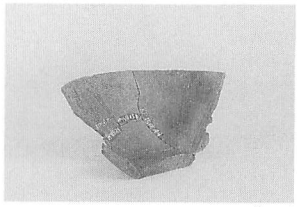

14住－17

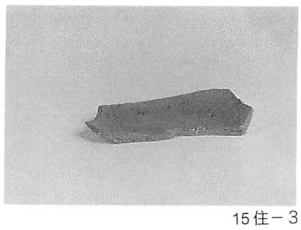

14住－18

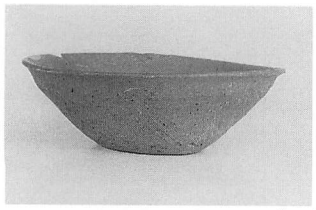

14住－18（内面）

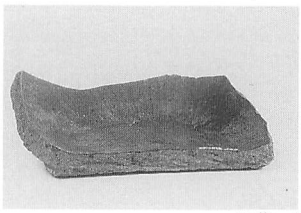

14住－19

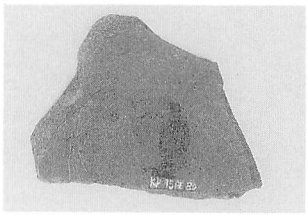

14住－20

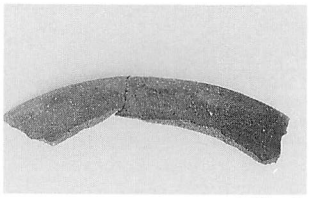

15住－1

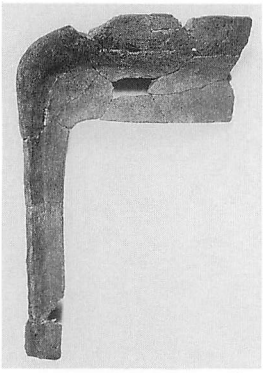

15住－3

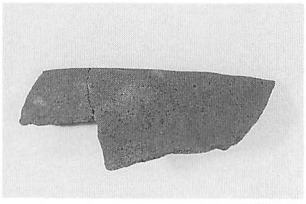

15住－4

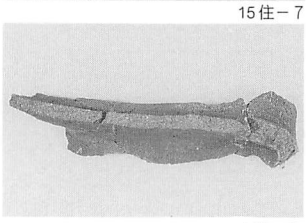

15住－5

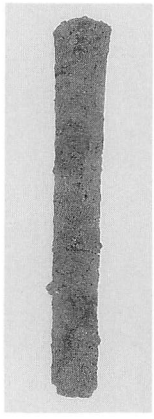

15住－7


15住－8

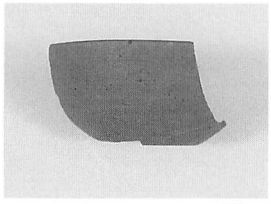

1溝－1

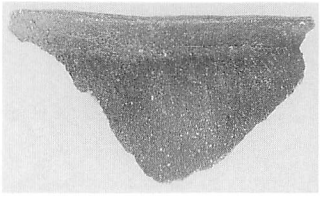

1溝－2

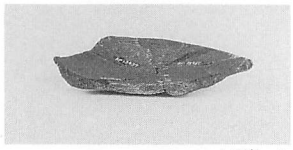

1溝－3

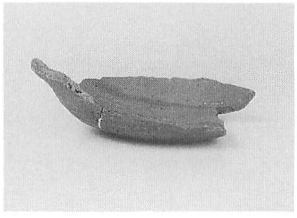

J7－6

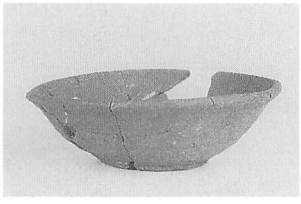
J7－5

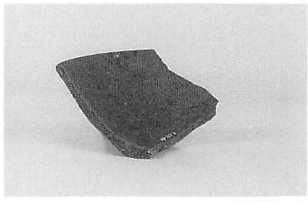

1溝－4

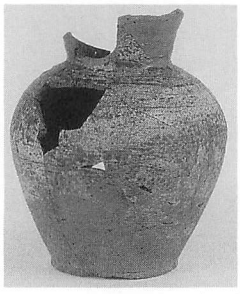

1溝－5


J7炭－1

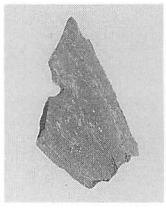

J7炭－2


J7炭－3


J7炭－4

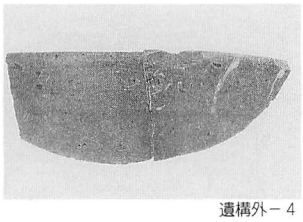

O14壺－1

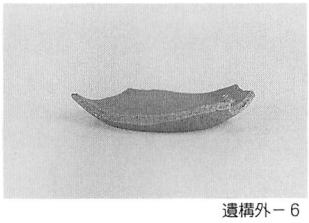
遺構外－1

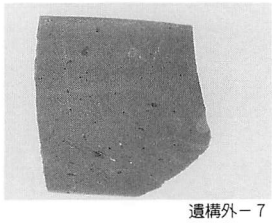


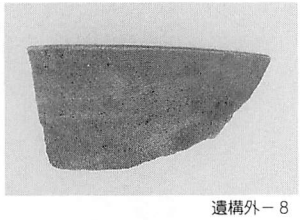
遺構外－2

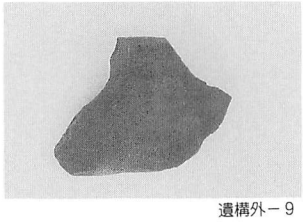
遺構外－3

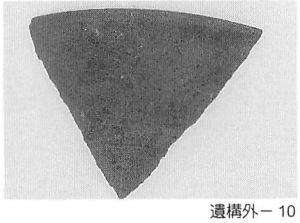

遺構外－4


遺構外－6

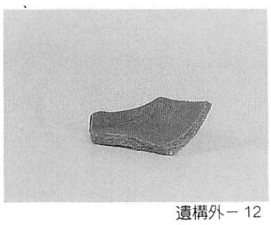

遺構外－7

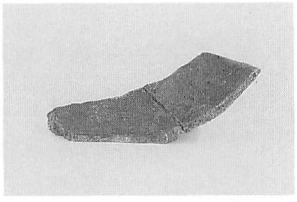

遺構外－8


遺構外－9


遺構外－10

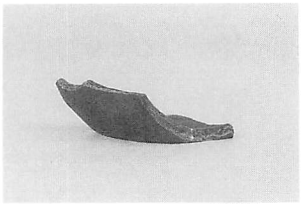
遺構外－11

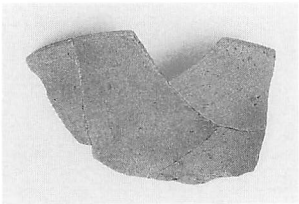

遺構外－12

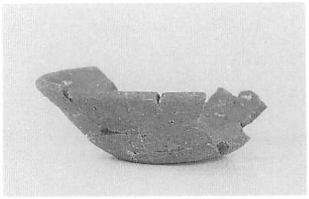

遺構外－13

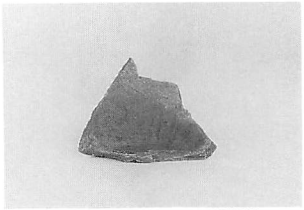
遺構外－14

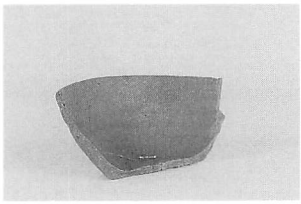
遺構外－15

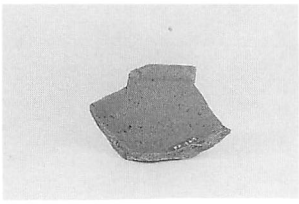

遺構外－16

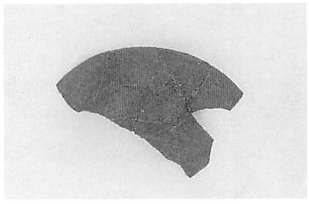

遺構外－17

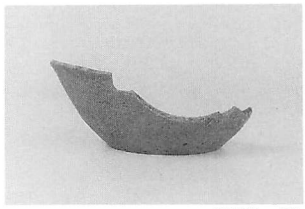

遺構外－18

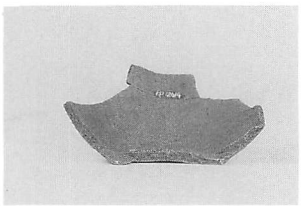

遺構外－19

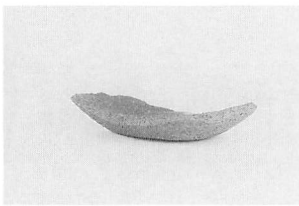

遺構外－20

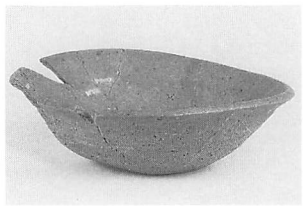

遺構外－21

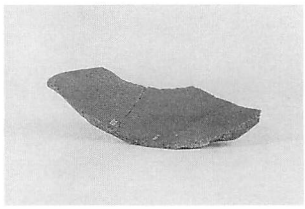

遺構外－22

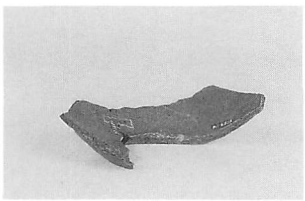

遺構外－23

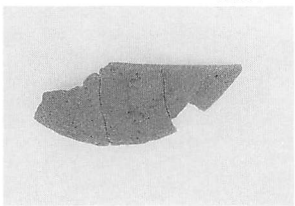

遺構外－24


遺構外－25

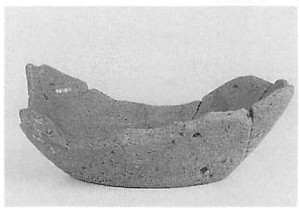

遺構外－26

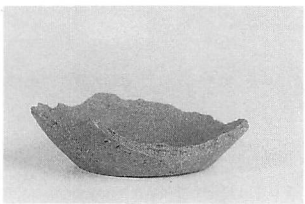

遺構外－27

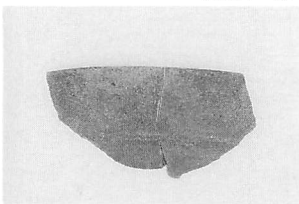

遺構外－29


遺構外－30

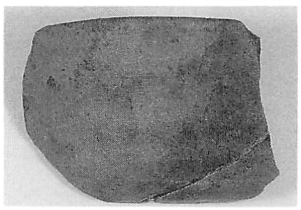
遺構外－31

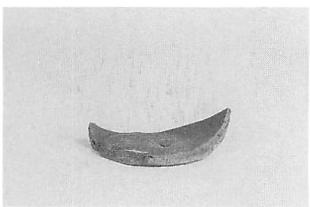

遺構外－32


遺構外－33

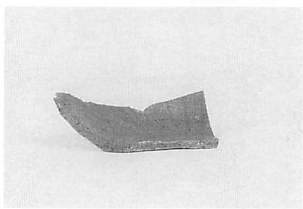

遺構外－34

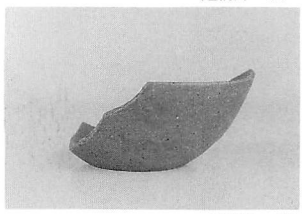
遺構外－35

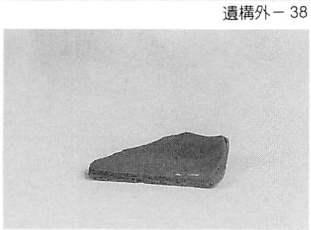

遺構外－36


遺構外－38

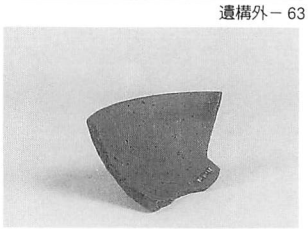
遺構外－55


遺構外－63

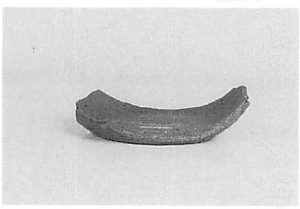

遺構外－90


遺構外－101

遺構外－114


遺構外－115

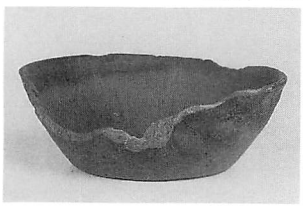
遺構外－116


遺構外－134

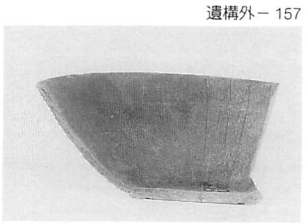
遺構外－142

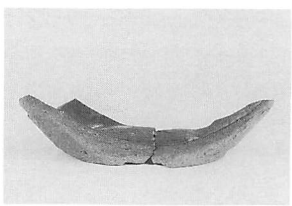
遺構外－157

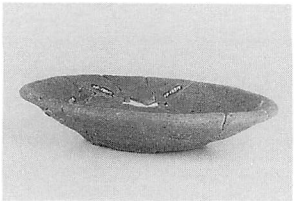
遺構外－158

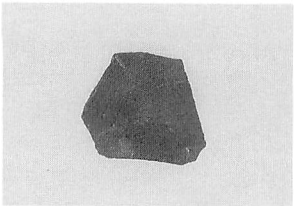

遺構外－160

遺構外－161

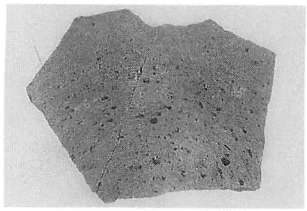

遺構外－162

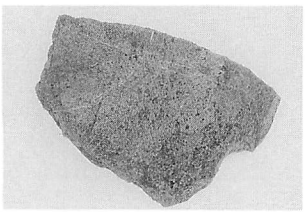

遺構外－163

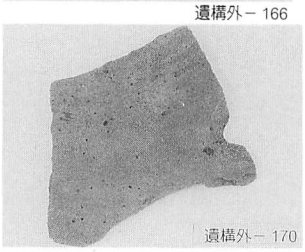

遺構外－165

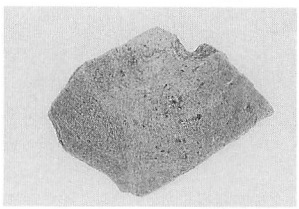

遺構外－166

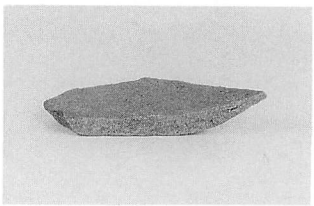
遺構外－167

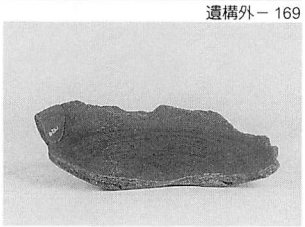

遺構外－168

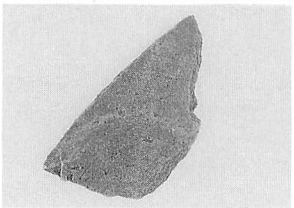

遺構外－169

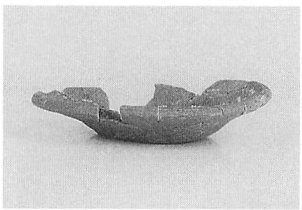

遺構外－170

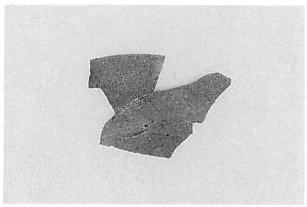

遺構外－171


遺構外－172

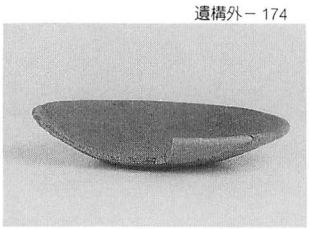

遺構外－173

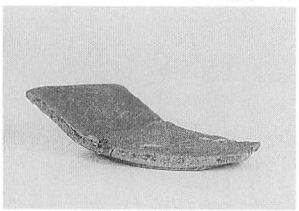

遺構外－174

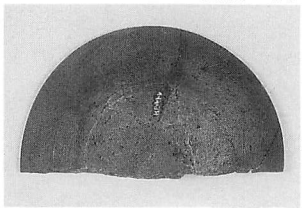

遺構外－175

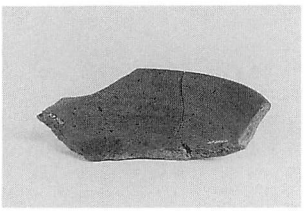

遺構外－176

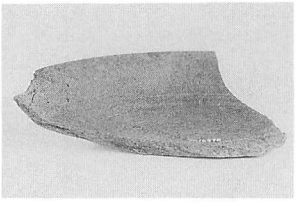
遺構外－177

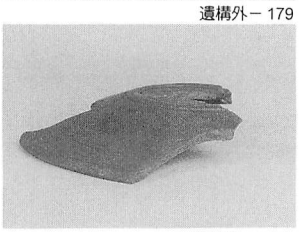

遺構外－178

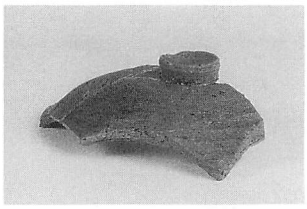

遺構外－179

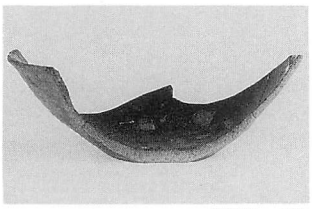

遺構外－180

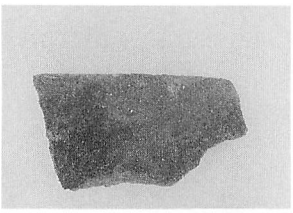

遺構外－185

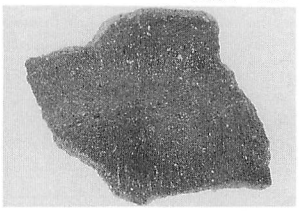

遺構外－186

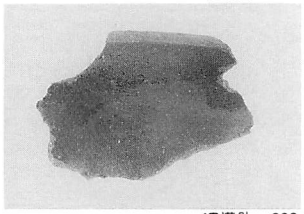

遺構外－202

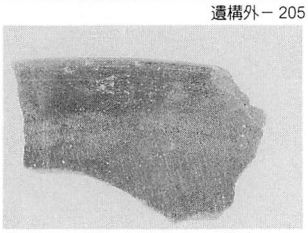

遺構外－203

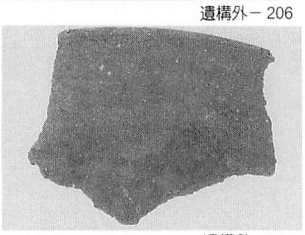

遺構外－205

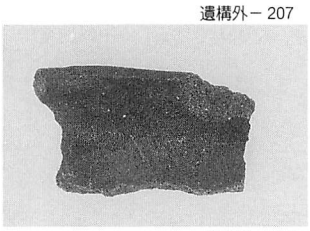

遺構外－206

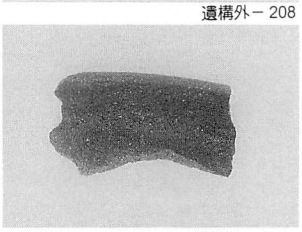

遺構外－207

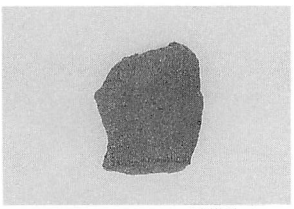

遺構外－208


遺構外－209

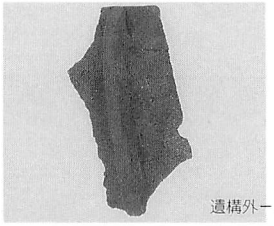

遺構外－210

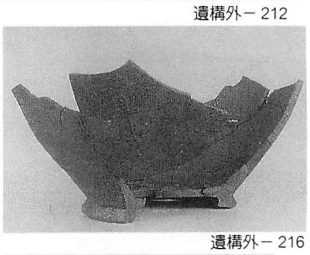

遺構外－211

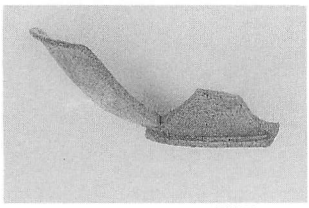

遺構外－212

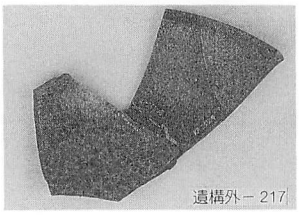

遺構外－213

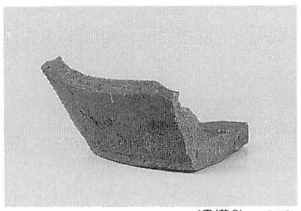
遺構外－214


遺構外－215

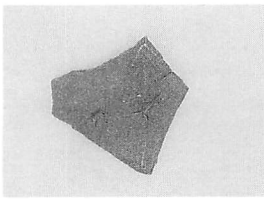

遺構外－216

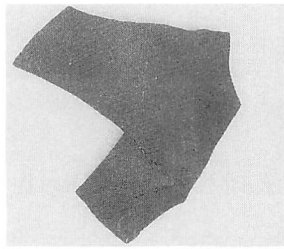

遺構外－217

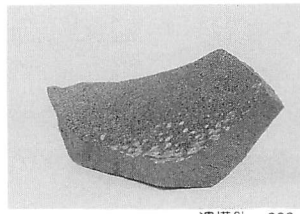

遺構外－217

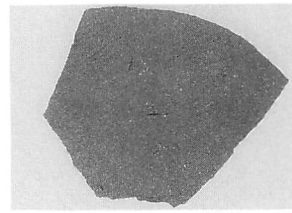

遺構外－218

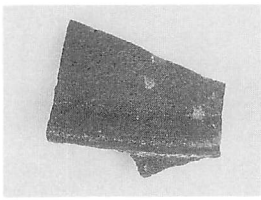
遺構外－219

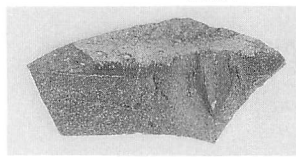

遺構外－220

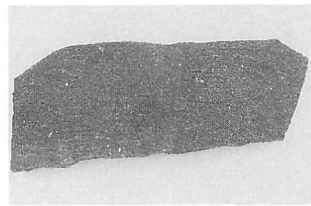

遺構外－221

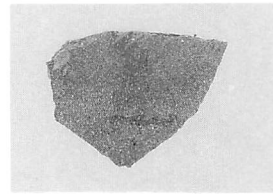

遺構外－222

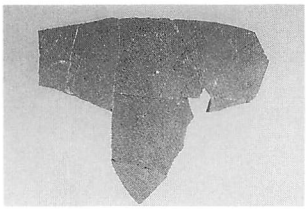

遺構外－223

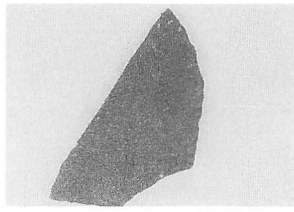

遺構外－224

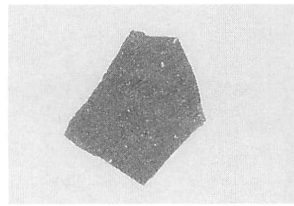

遺構外－225

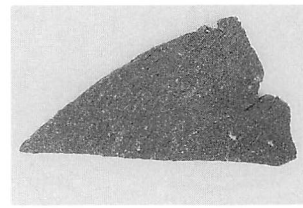

遺構外－226

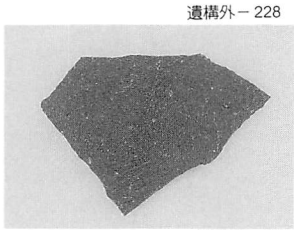

遺構外－227

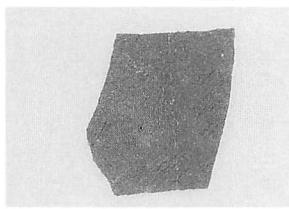

遺構外－228

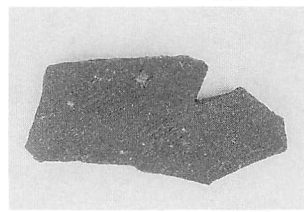

遺構外－229

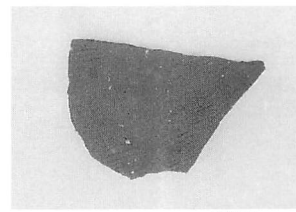

遺構外－230


遺構外－231

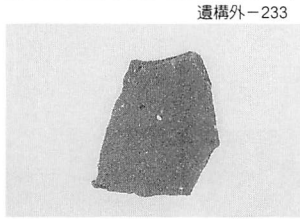

遺構外－232

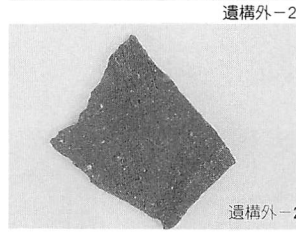

遺構外－233

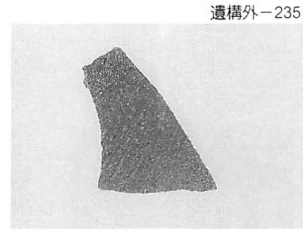

遺構外－234

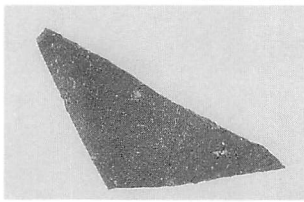

遺構外－235

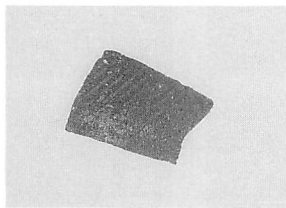
遺構外－236

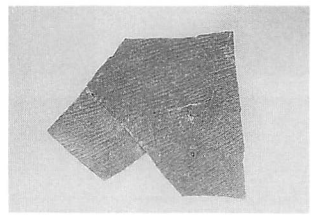

遺構外－237

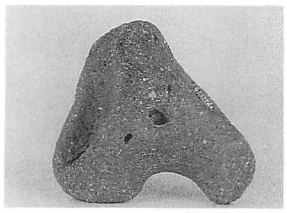

遺構外－238

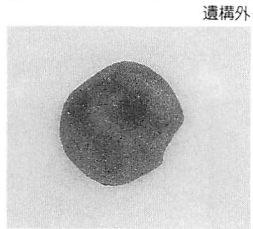

遺構外－239

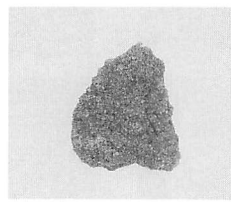

遺構外－240

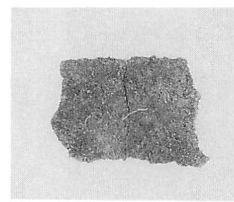

遺構外－241

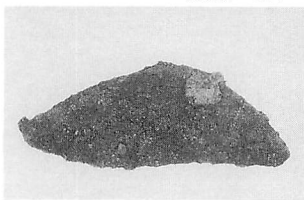

遺構外－242

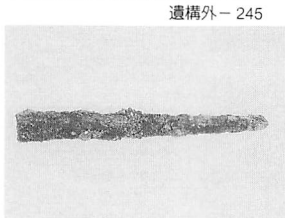

遺構外－244

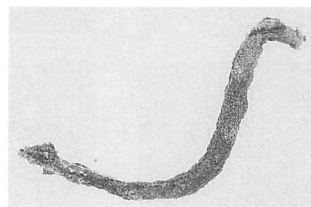

遺構外－245


遺構外－246

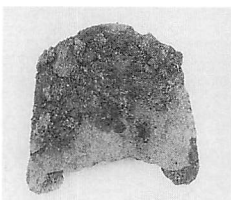

遺構外－247

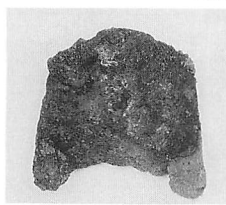

遺構外－248

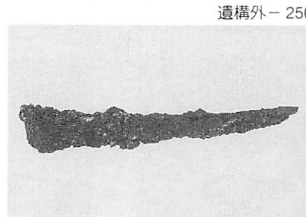

遺構外－249

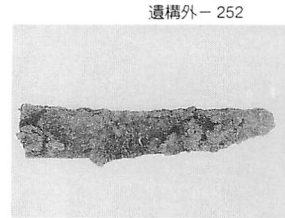

遺構外－250

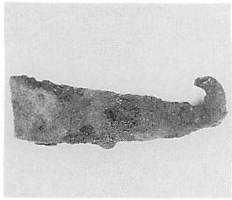
遺構外－252

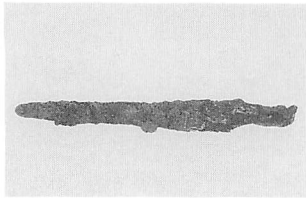

遺構外－251

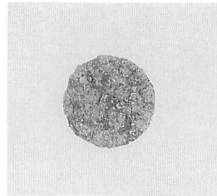

遺構外－251

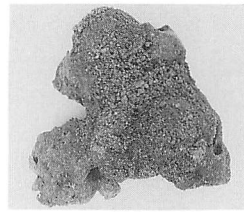

遺構外－253

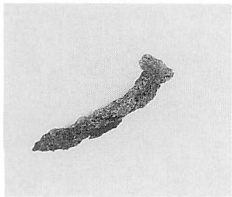

遺構外－254

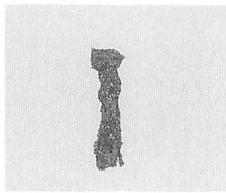

遺構外－255

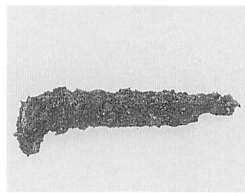

遺構外－256

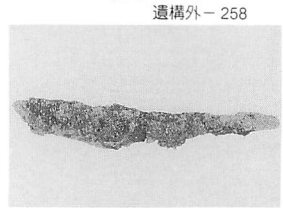

遺構外－257

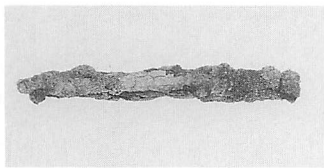

遺構外－258

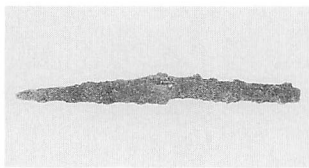

遺構外－259

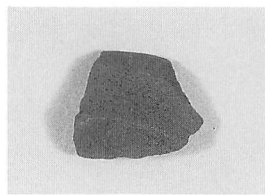

遺構外－260

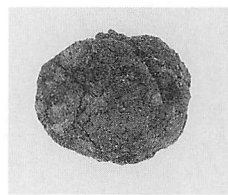

遺構外－261

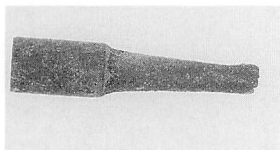

遺構外－262

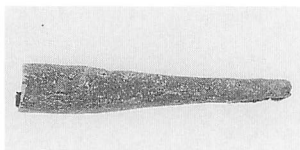

遺構外－263

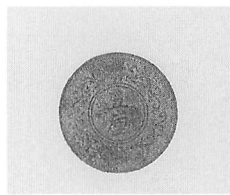

遺構外－264

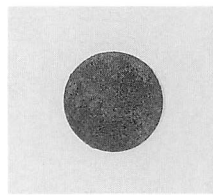

遺構外－265


遺構外－266

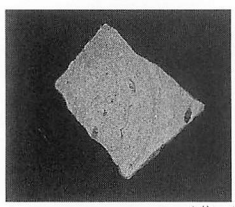

遺構外－267

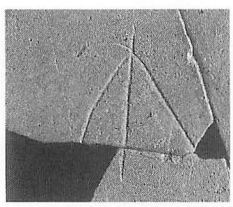

遺構外－268

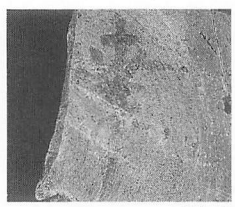

遺構外－269

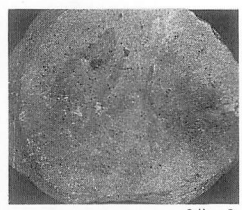

遺構外－270

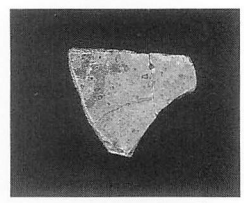
墨書土器および線刻土器

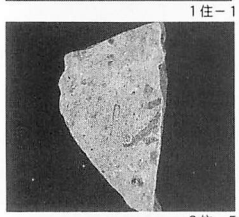

1住－1

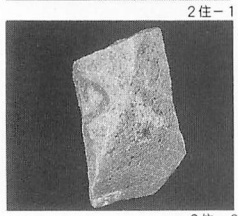

2住－1

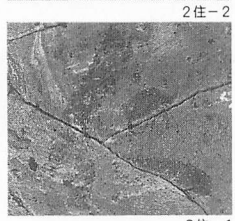

2住－2

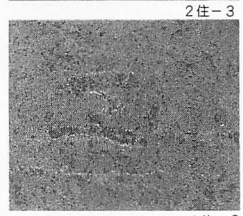

2住－3

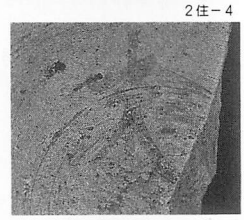

2住－4

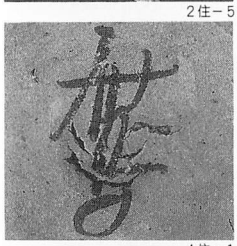

2住－5

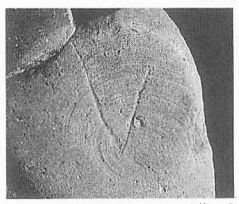

2住－6

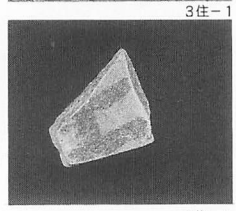

3住－1

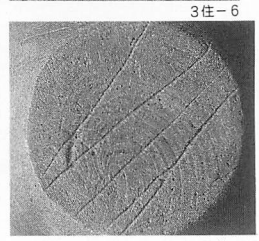

3住－6

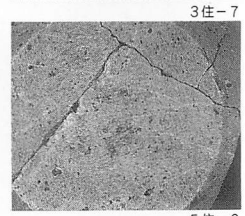

3住－7

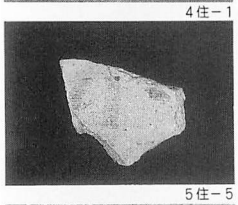

4住－1

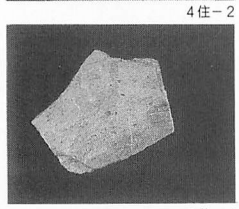

4住－2

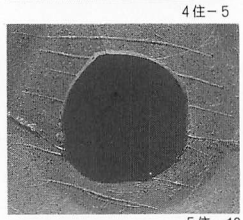

4住－5

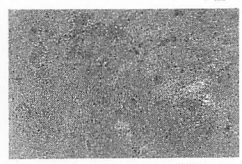

5住－1

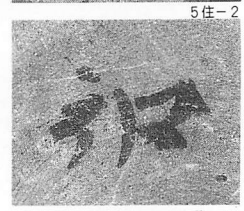

5住－2

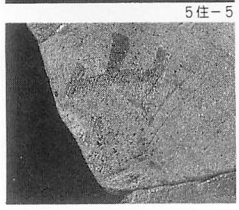

5住－5

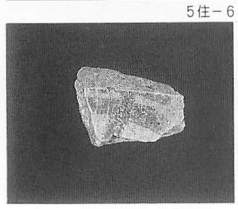

5住－6

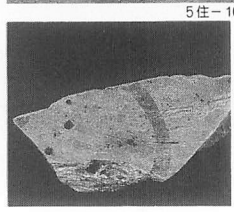

5住－10

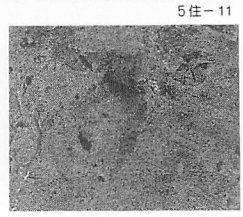

5住－11

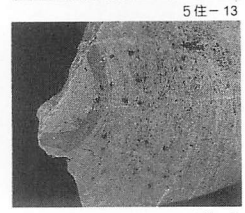

5住－13

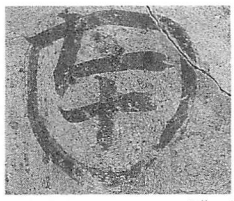

5住－14


6住－4


6住－5

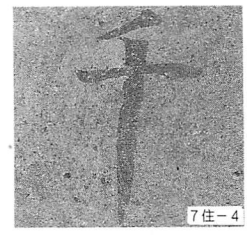

6住－6

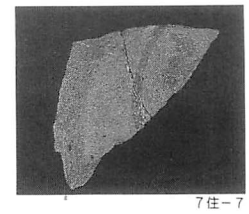

6住－9

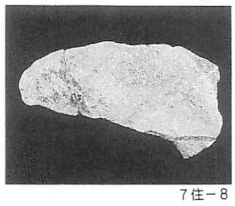

7住－1

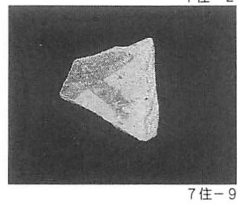
7住－2

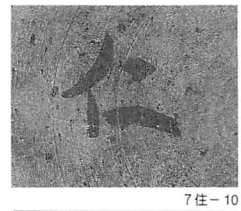
7住－3

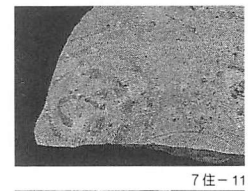

7住－4

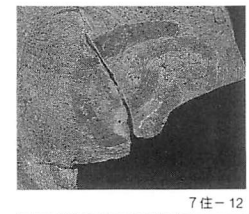

7住－7

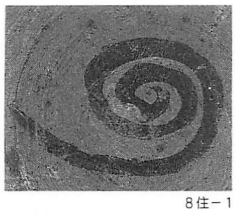

7住－8

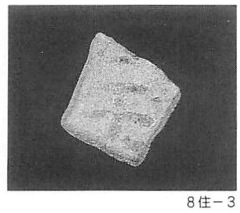

7住－9

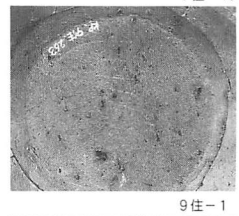

7住－10

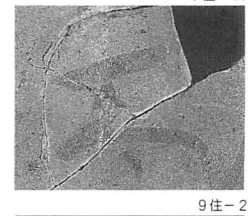

7住－11

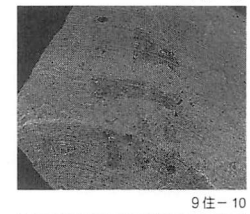

7住－12

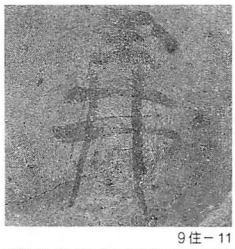

8住－1

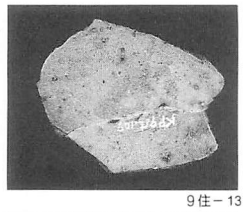

8住－3

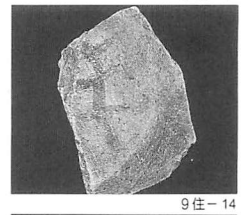

9住－1

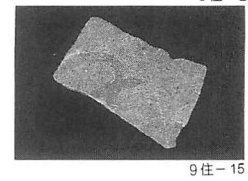

9住－2

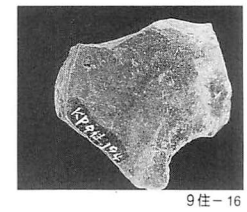

9住－10

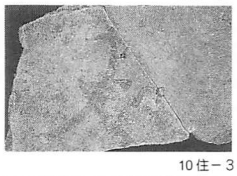

9住－11

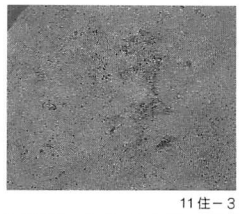

9住－13

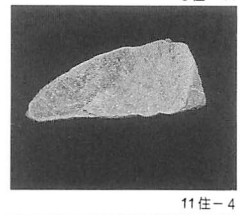

9住－14

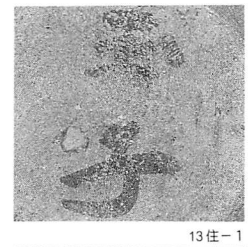

9住－15

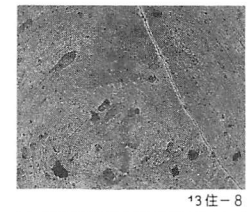

9住－16

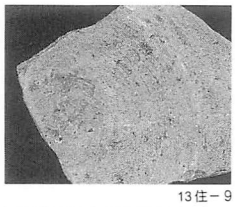

10住－3

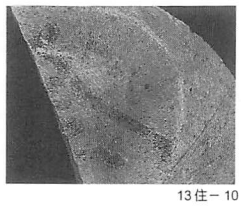

11住－3

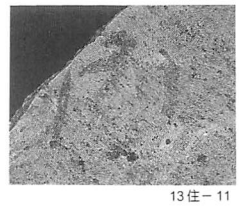

11住－4

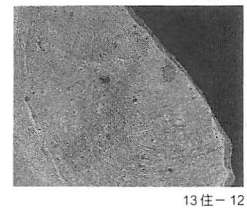

13住－1

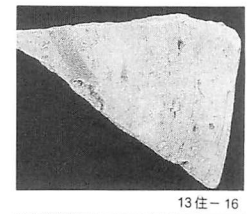

13住－8

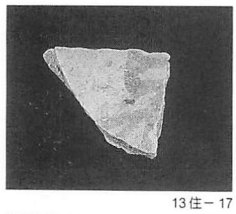

13住－9

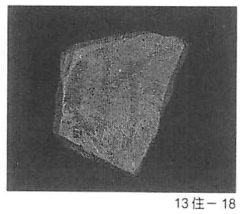

13住－10

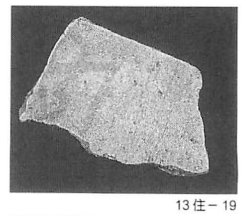

13住－11

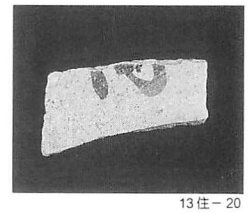

13住－12

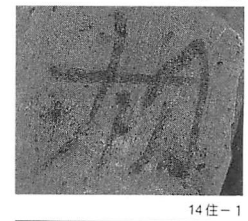

13住－16

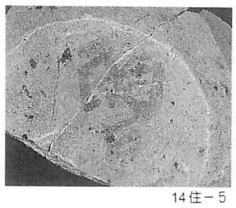

13住－17

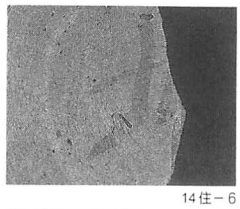

13住－18

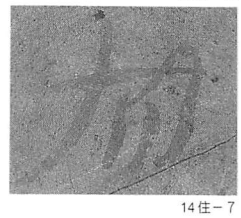

13住－19

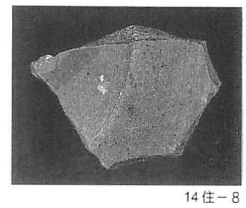

13住－20

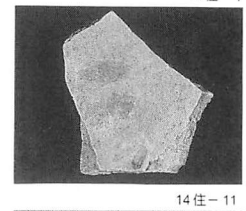

14住－1

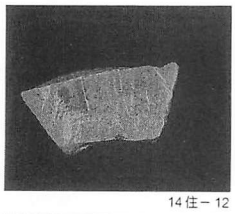

14住－5

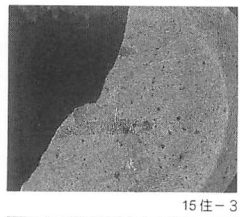

14住－6

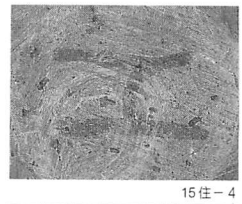

14住－7

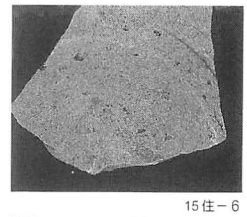

14住－8

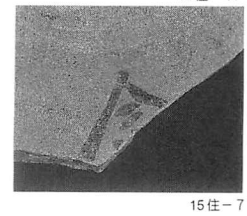

14住－11


14住－12

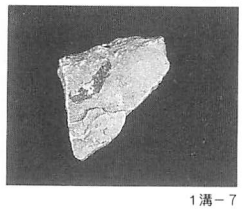

15住－3

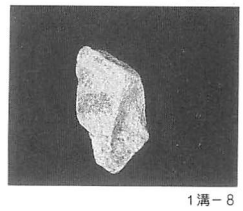

15住－4

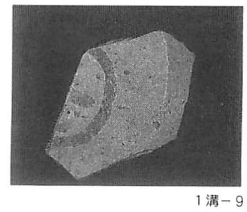

15住－6

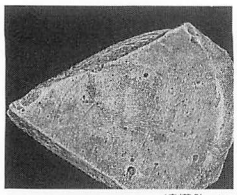

15住－7

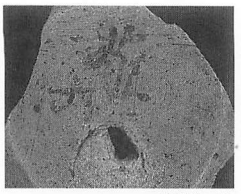
1溝－6

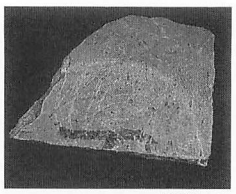

1溝－7

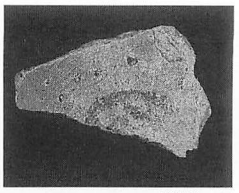

1溝－8

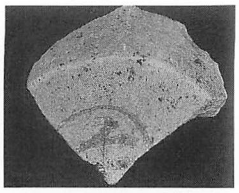

1溝－9

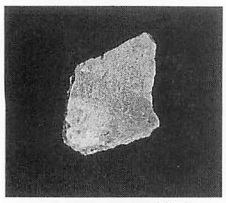

遺構外－37

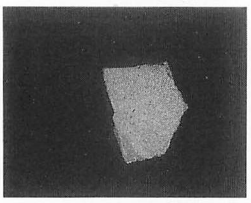

遺構外－38

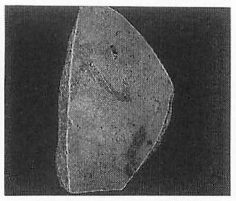

遺構外－39

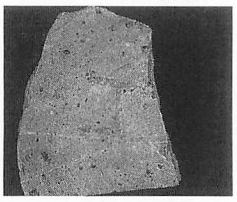

遺構外－40

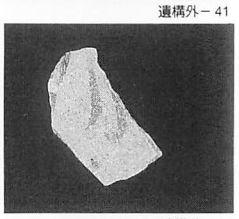

遺構外－41

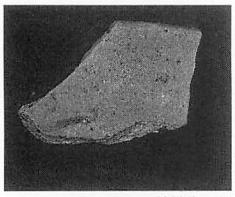

遺構外－42

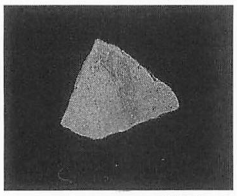

遺構外－43

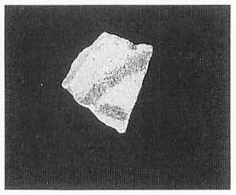

遺構外－44

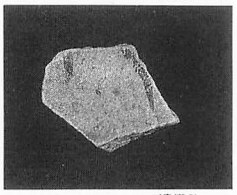

遺構外－45

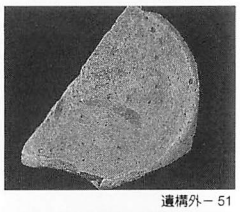

遺構外－46

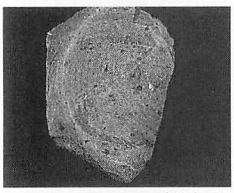

遺構外－47

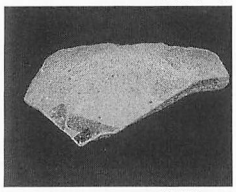

遺構外－48

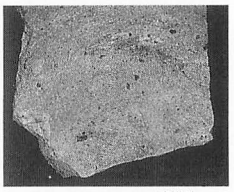

遺構外－49

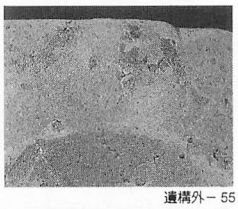

遺構外－50

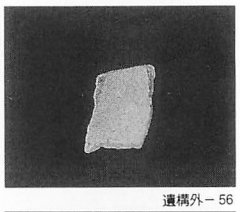

遺構外－51


遺構外－52

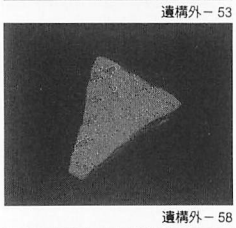

遺構外－53

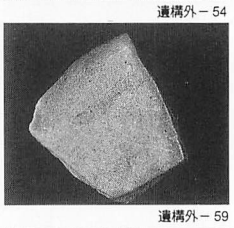

遺構外－54

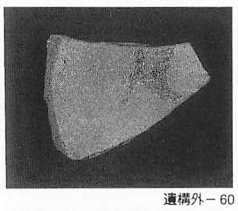

遺構外－55

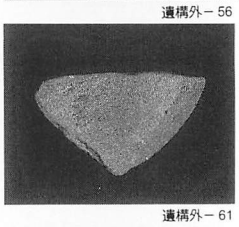

遺構外－56

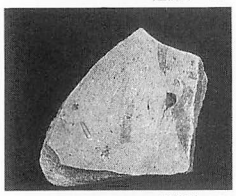
遺構外－57

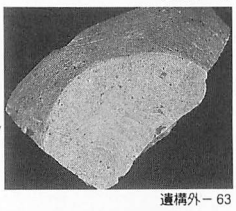

遺構外－58

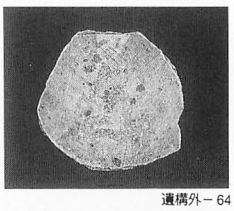

遺構外－59

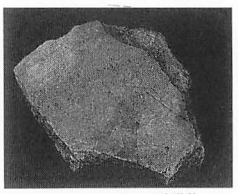

遺構外－60

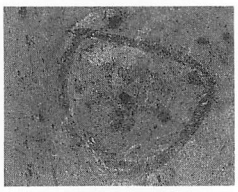

遺構外－61

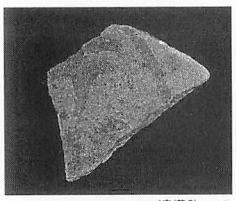

遺構外－62

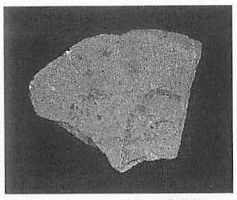

遺構外－63

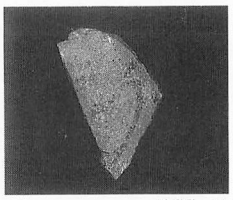

遺構外－64

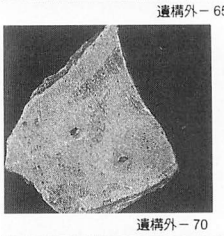

遺構外－65

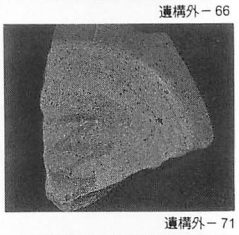

遺構外－66

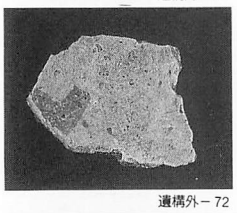

遺構外－67

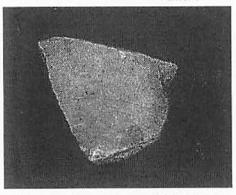

遺構外－68

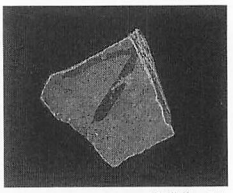

遺構外－69

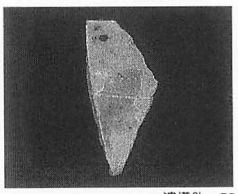

遺構外－70

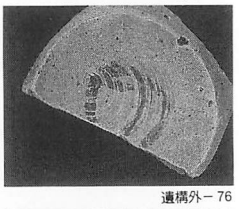

遺構外－71

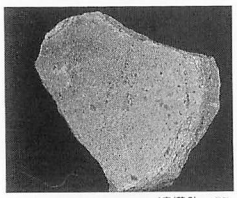

遺構外－72

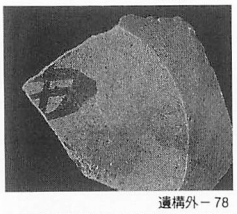

遺構外－73


遺構外－74

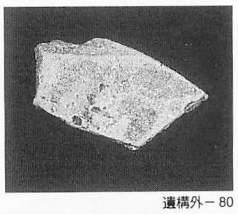

遺構外－75

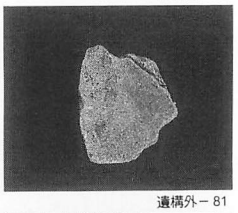

遺構外－76

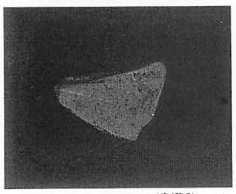

遺構外－77


遺構外－78

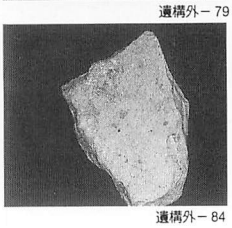
遺構外－79


遺構外－80

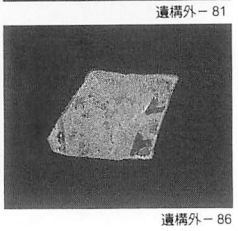

遺構外－81

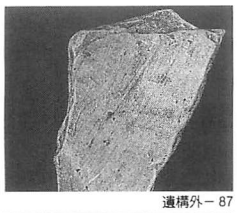

遺構外－82

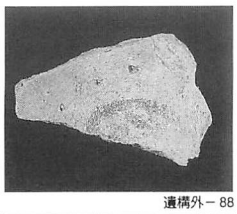
遺構外－83


遺構外－84

遺構外－85

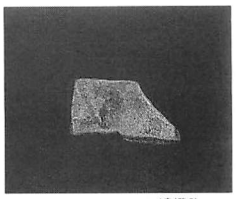

遺構外－86

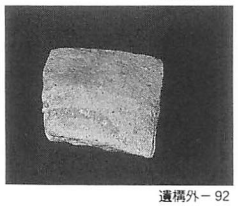

遺構外－87

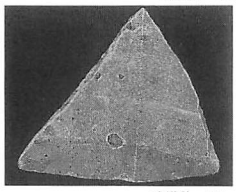

遺構外－88

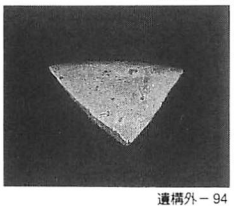
遺構外－89

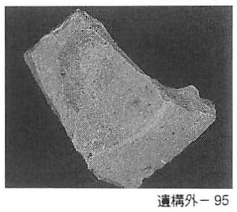
遺構外－90

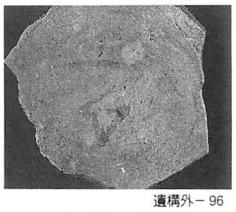

遺構外－91


遺構外－92


遺構外－93


遺構外－94

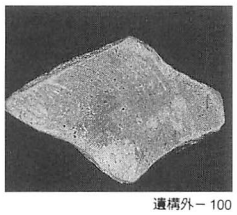

遺構外－95

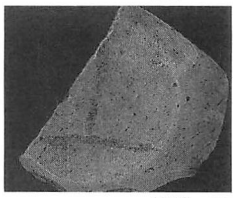

遺構外－96

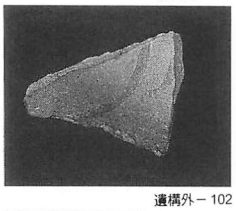
遺構外－97

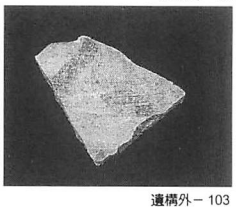
遺構外－98

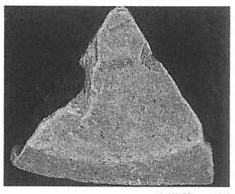
遺構外－99

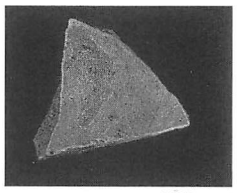

遺構外－100

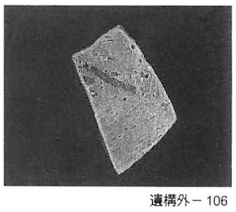

遺構外－101

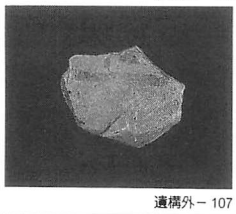

遺構外－102

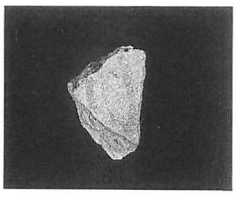

遺構外－103

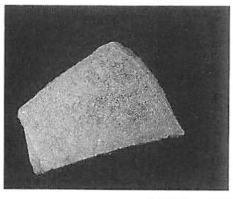

遺構外－104

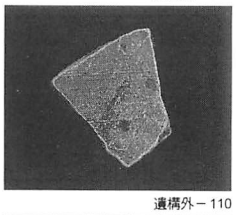

遺構外－105

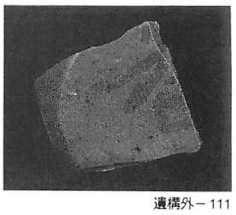

遺構外－106


遺構外－107

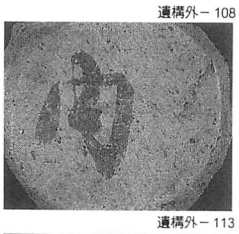

遺構外－108

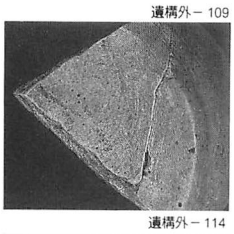

遺構外－109

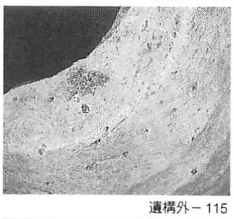

遺構外－110

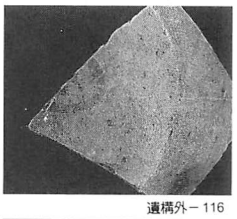

遺構外－111

遺構外－112

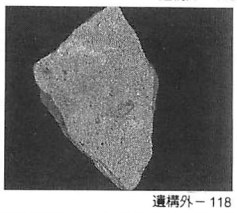

遺構外－113

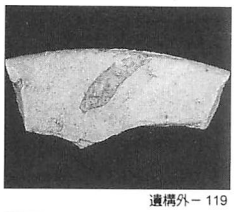

遺構外－114

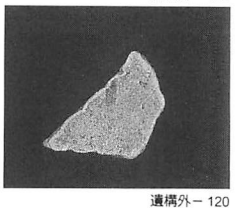

遺構外－115


遺構外－116

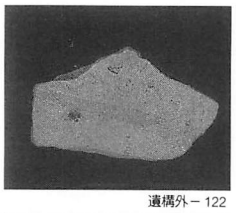
遺構外－117

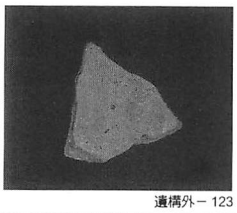

遺構外－118

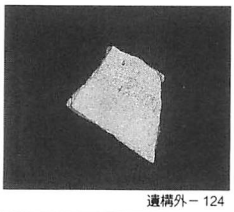

遺構外－119


遺構外－120

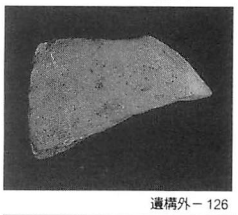
遺構外－121


遺構外－122


遺構外－123


遺構外－124

遺構外－125


遺構外－126

遺構外－127

遺構外－128

遺構外－129

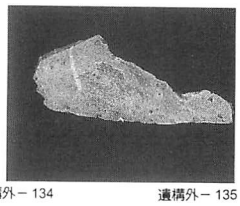
遺構外－130

遺構外－131

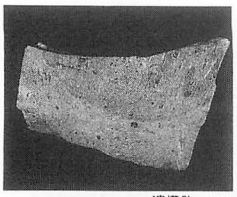
遺構外－132

遺構外－133

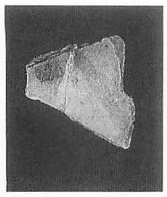
遺構外－134

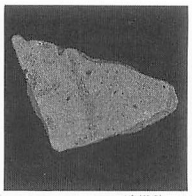

遺構外－135

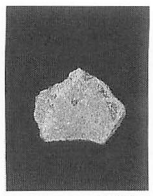
遺構外－136


遺構外－137

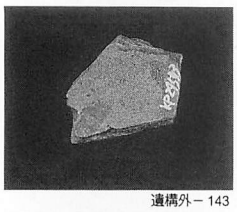
遺構外－138

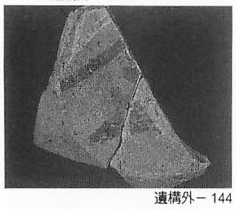

遺構外－139

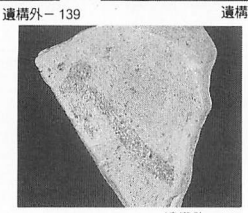

遺構外－140

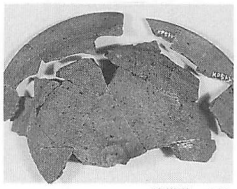

遺構外－141

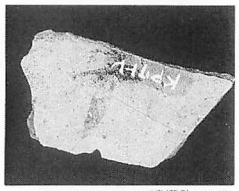
遺構外－142

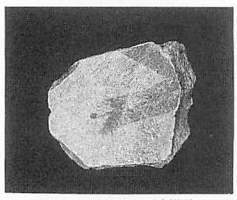

遺構外－143

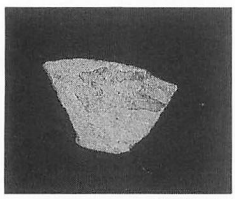

遺構外－144

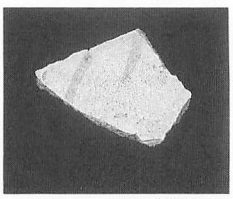

遺構外－145

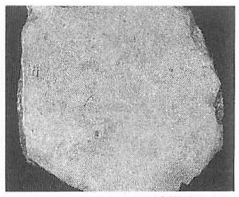

遺構外－146

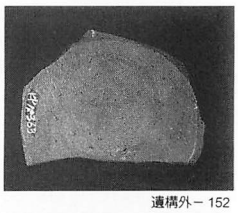

遺構外－147

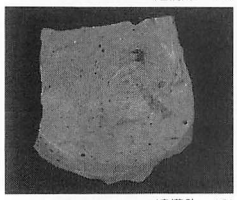

遺構外－148

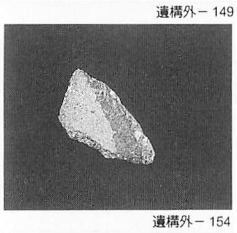

遺構外－149

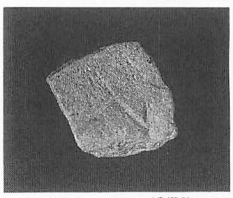

遺構外－150

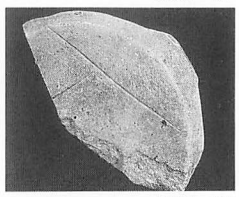

遺構外－151

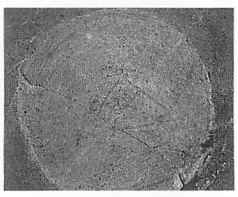

遺構外－152

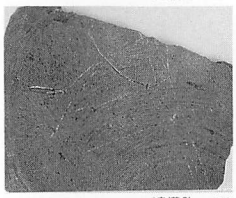

遺構外－153

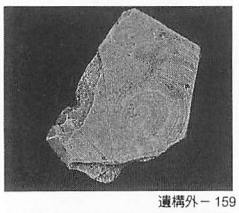

遺構外－154

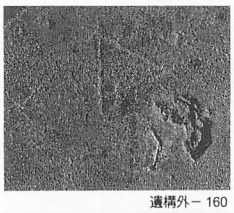

遺構外－155

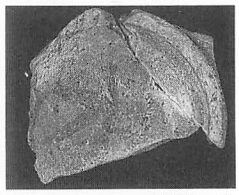

遺構外－156

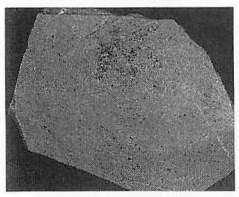

遺構外－157

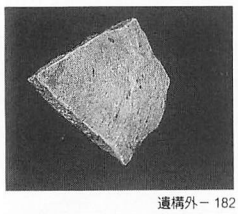

遺構外－158

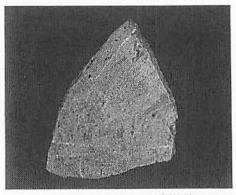

遺構外－159


遺構外－160

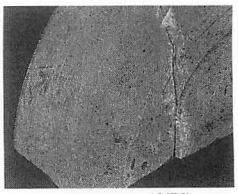

遺構外－164

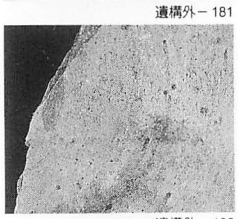

遺構外－181


遺構外－182

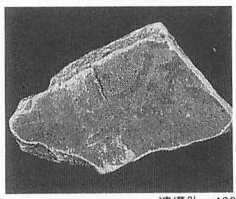

遺構外－183

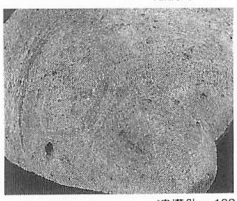
遺構外－184


遺構外－185

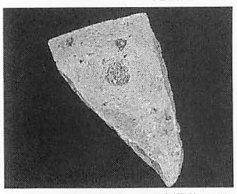

遺構外－186

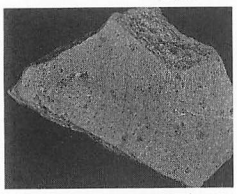
遺構外－187

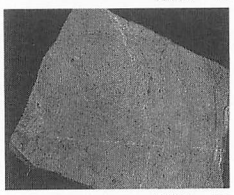

遺構外－188


遺構外－189

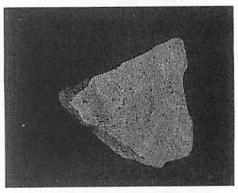
遺構外－190

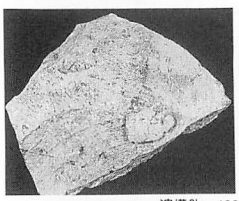

遺構外－191

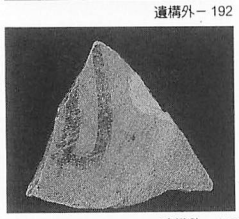

遺構外－192

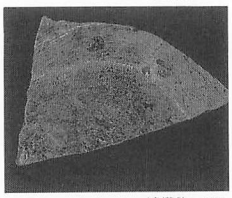

遺構外－193

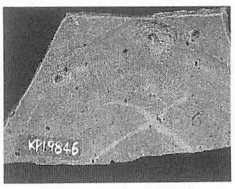
遺構外－194

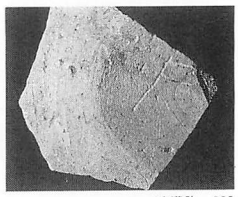

遺構外－195

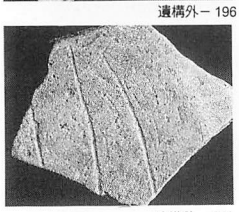

遺構外－196

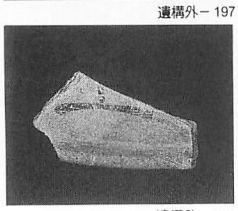

遺構外－197

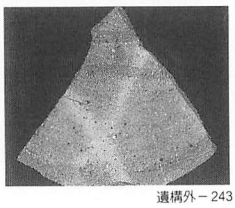

遺構外－198


遺構外－199


遺構外－200


遺構外－201


遺構外－204


遺構外－243

狐原遺跡 調査前の風景(東→)【調査区全域が果樹園】

試掘調査の風景【1994年2月】(北→)

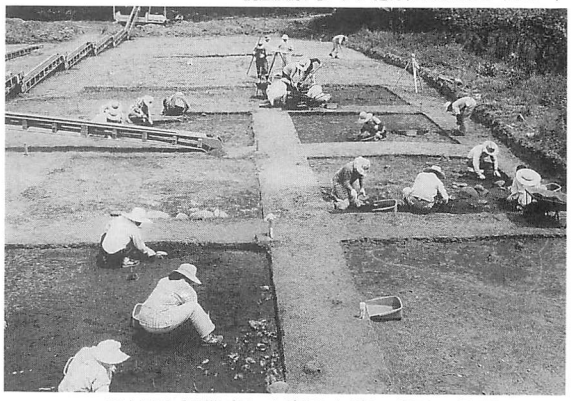
試掘調査の風景【1994年2月】(南西→)

試掘調査の風景【第16号トレンチ】(西→)

調査風景【重機による表土除去】(東→)

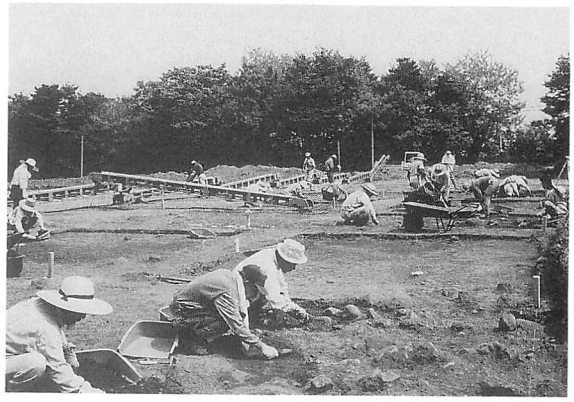
調査風景【プラン確認作業の風景】(南東→)

調査風景【Grid設定の状況】(北→)

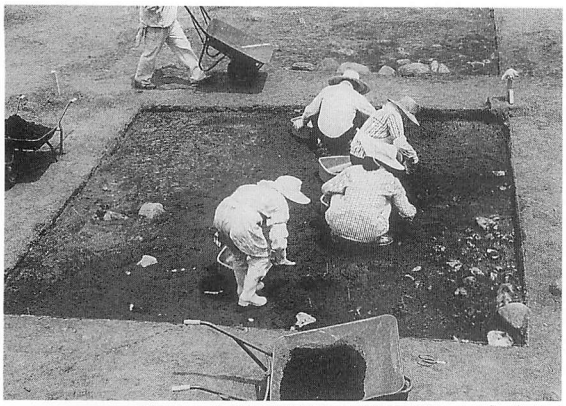


調査風景【遺構プランを確認しながらの掘り下げ作業】(南→)

調査風景【廃土の運搬にはベルトコンベア等も使用した】(南→)



調査風景【砂礫層の掘り下げ作業】(南東→)



調査風景【掘り下げ作業はGrid単位を基本とした】(南東→)

調査風景【出土遺物は個別ナンバーを付して記録後、取り上げた】(北西→)

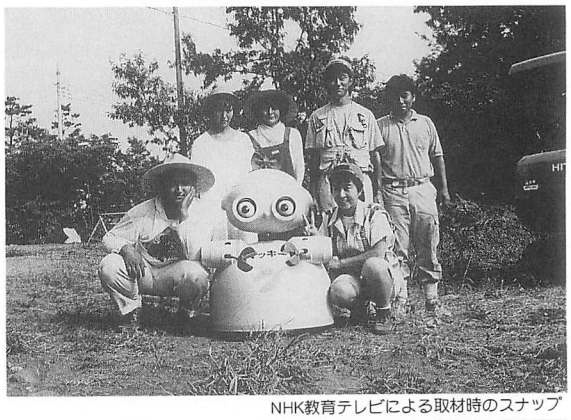
調査風景【第13号竪穴住居址の測量記録風景】(北東→)

調査風景【雨天に備え、遺構をシートで保護】(北東→)

狐原遺跡 調査終了後 全景【礫層中に遺構が点在する風景】(北西→)

作業説明の風景【調査方法等についてのミーティングを実施】

親子発掘教室の風景【山梨県考古学協会に会場を提供した】(東→)



NHK教育テレビによる取材時のスナップ

調査用施設【調査事務・器材収納・休憩用のプレハブを設置】(北東→)

狐原遺跡 発掘調査参加メンバー【調査終了日】

報 告 書 抄 録

報告書概要	
書　　名	狐原遺跡（きつねっぱら　いせき）
副　　題	山梨県森林公園　金川の森建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書
シリーズ・番号	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第120集
編著者名	森原明廣・宮里学
執筆者名	森原明廣・宮里学・河西学・茂原信生
発行機関	山梨県教育委員会・山梨県林務部
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
編集機関連絡先	〒400-15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　電話. 0552-66-3016
印刷所	（有）新星堂印刷
印刷・発行年月日	印刷　1996年３月20日　　発行　1996年３月31日
遺跡概要	
遺跡名	狐原遺跡（きつねっぱら　いせき）
遺跡所在地	山梨県東八代郡一宮町字竹原田1070番地他
地形図名	国土地理院　1/200,000地形図　甲府（N1-54-31） 国土地理院　1/50,000地形図　甲府（N1-54-31-7 国土地理院　1/25,000　石和（N1-54-31-7-1）
緯度・経度	北緯35°38’20”　東経138°40’20”
主な時代	平安時代
主な遺構	竪穴住居址15軒、土坑25基、墓壙２基、溝１条、炭化物集中１箇所、 単独出土の壷１箇所
主な遺物	土師器（139,235ｇ）・須恵器（9,950ｇ）・灰釉陶器（1,112ｇ）・ 鉄器（408ｇ）・その他（5,715ｇ）【総量　156,420ｇ】
特記される事項	９世紀半ばを中心とした時期の竪穴住居址群 人骨を伴う墓壙 「墓誌状鉄製品」の類似品を伴う炭化物集中 墨書・線刻土器の出土量（222点） 「玉井」（甲斐国の古代郷名）の墨書土器

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第120集

狐 原 遺 跡

―山梨県森林公園　金川の森建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書―

印刷日　1996年３月20日

発行日　1996年３月31日

編　集　山梨県埋蔵文化財センター

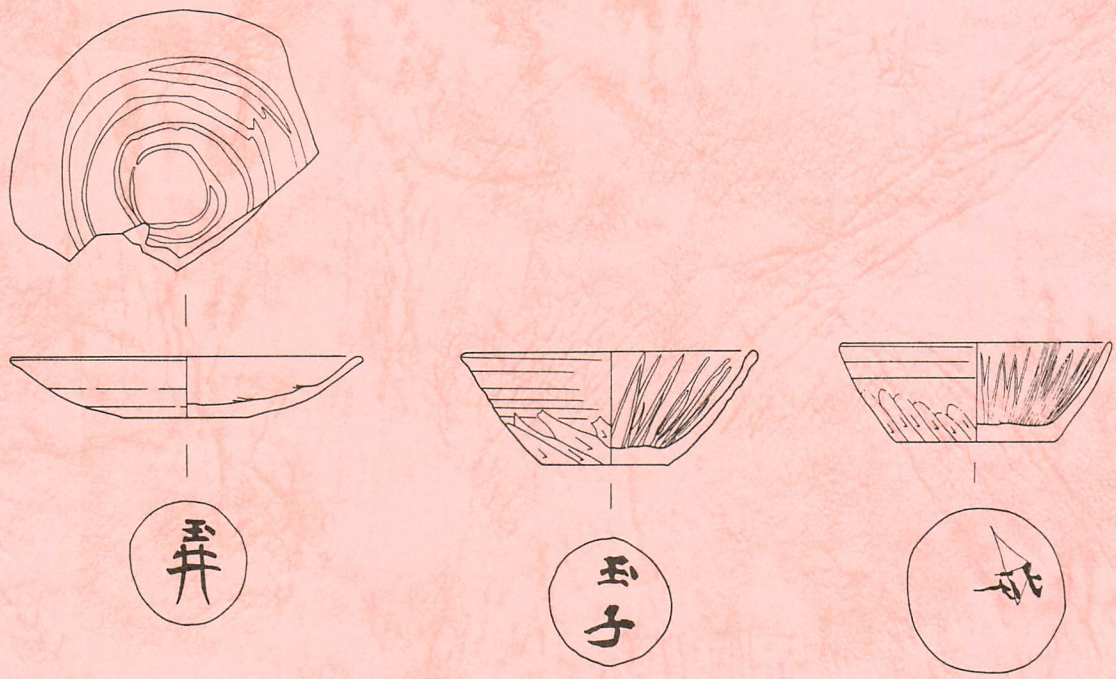
発　行　山梨県教育委員会・山梨県林務部

印　刷　（有）新星堂印刷所

ARCHAEOLOGICAL CENTER OF YAMANASHI PREFECTURE
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH PAPERS NO.120

KITSUNEPPARA -SITE

－Results of an Excavation
for Conducted of Yamanashi Prefectural Forest Park [Kanegawa-No-Mori] －



Pottery with inscriptions in black ink
unearthed from the Pit Dwellings, Kitsuneppara -Site
[Made in Heian Period, 9th Century]

March 1996

Yamanashi Prefectural Board of Education
Yamanashi Prefectural Forestry Department